HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究
Author(s)	CESPA, Marianna
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11630号
Issue Date	2015-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11630
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58743
Type	doctoral thesis
File Information	Cespa_Marianna.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位論文

イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究

北海道大学文学研究科
チェスパ・マリアンナ

目次

序論 i

第一章 イタリア語における過去時制について – 近過去形を中心に – 1

1.1 イタリア語の時制 2
1.2 現在形・近過去形・遠過去形における一般的な用法 4
1.3 近過去形に関する先行研究について 6
1.4 近過去形の用法について 8
1.4.1 近過去形における直示的用法 9
1.4.2 近過去形における非直示的用法 10
1.5 近過去形の由来と現代イタリア語の近過去形について 12
1.6 近過去形と遠過去形の相関関係とその「置き換え」について 13
1.7 近過去形と時間を表す副詞の関係について 20
1.7.1 瞬間副詞 20
1.7.2 持続副詞 22
1.8 イタリア語における時制の一致について 24
1.9 主節における過去時制について 28
1.10 まとめ 32

第二章 現在形の機能と近過去形の間の中立化について 33

2.1 現在形における用法 33
2.2 未来と過去を表す現在形 37
2.2.1 未来を表す現在形 37
2.2.2 現在形と過去時制における相関関係について 38
2.3 過去を表す現在形について 42
2.3.1 イタリア語における歴史的現在形の用法について 42
2.3.2 動詞の分類による中立化 45
2.4 まとめ 51

第三章 日本語の過去を表す時制について – 「タ形」を中心に 52

3.1 先行研究 53
3.2 動詞の分類 54
3.3 「タ形」における二重性と「テイル形」との関係について 56
3.4 「タ形」における二重性を表す否定文と肯定文について 59
3.5 「予期区間」 62
3.6 「タ形」における完了性について – イタリア語との比較 – 65
3.7 まとめ 70

第四章　日本語の過去を表す時制について － 「テイル形」を中心に.....72

4.1 「テイ」の意味 72
4.2 「テイル形」の分類 75
4.3 パーフェクトに関する先行研究 76
4.3.1 パーフェクト相について.....77
4.3.2 「効力持続」について.....82
4.4 「テイル形」における完了性.....85
4.5 日本語における過去を表す時制について.....87
4.5.1 歴史的現在形における一般的な用法と先行研究について.....88
4.5.2 分析に関する問題点.....90
4.6 日本語における歴史的現在形について.....92
4.7 まとめ.....100

第五章　過去を表す時制と副詞の共起について-日本語における「もう・すでに」の対立とイタリア語における「già・ormai」の対立を中心に － 101

5.1 副詞「もう」の用法とその意味について.....101
5.2 「（もう）～タ形」と「（もう）～テイル形」について.....102
5.2.1 「（もう）～タ形」について.....103
5.2.2 「（もう）～テイル形」について.....105
5.3 副詞「もう」における用法とその解釈について.....106
5.4 副詞と動詞の共起における制約について.....110
5.4.1 動詞の性質により制約があるか否か.....110
5.4.2 過去時を指示する副詞の解釈について.....111
5.4.3 動詞の「反復性」と「前提」における制約.....112
5.5 「もう」と「すでに」の適用について.....115
5.6 「タ形」との共起についてのまとめ.....117
5.7 まとめ.....118
5.8 イタリア語の「già」と「ormai」における対立について.....119
5.8.1「già」の用法とその解釈について.....119
5.8.2「ormai」の用法とその解釈について.....123
5.9 副詞の位置について.....125
5.10 まとめ.....128
5.11 イタリア語と日本語における時間を表す副詞の比較について.....128
5.11.1「già／もう」における比較について.....129
5.11.2「ormai／すでに」における比較について.....134
5.12 まとめ.....136

第六章 イタリア語における大過去形について.....138

6.1 大過去形の基本的な用法と先行研究について.....138
6.2 「時間的位置づけ要素」「時間的投錨」「設定時点」における区別ついて.....141
6.3 大過去形におけるテンス的特徴とアスペクト的特徴について.....145
6.4 間接話法における大過去形の用法について.....146
6.5 時制と副詞の共起について.....151
6.6 主節の時制の影響について.....152

6.7　大過去形における完了性 156
6.8　まとめ 156

第七章 イタリア語における半過去形について 158

7.1　半過去形における基本的な用法について 158
7.2　完成時制と未完成時制の対立について 161
7.3　未完成性におけるアスペクトの分類について 164
　7.3.1　進行的アスペクト 164
　7.3.2　習慣的アスペクト 166
　7.3.3　継続的アスペクト 167
7.4　半過去形の未完成性について 168
7.5　半過去形における時間的特性 172
7.6　複文における半過去形の用法について – 補足節と関係節を中心に – 174
　7.6.1　補足節 175
　7.6.2　関係節 177
7.7　DAR (Double Access Reading) 179
7.8　まとめ 184

第八章　日本語の「テイタ形」について 186

8.1「テイタ形」に関する先行研究とその用法について 186
8.2「テイタ形」における用法 190
　8.2.1「タ形」と「テイタ形」の区別について 190
　8.2.2「完了」を表す「テイタ形」と「進行」を表す「テイタ形」における区別 193
8.3　従属節における時制について 196
　8.3.1　日本語における従属節の時制について – イタリア語との比較 – 197
　8.3.2　従属節の種類と時制形式の関係について 199
8.4　補足節 201
8.5　名詞修飾節 206
8.6　まとめ 209

結論 211

今後の課題 215

参考文献 216

序論

本論はイタリア語と日本語における過去を表す時制を比較するものであるが、単なる比較ではなくこの比較をもとにして新しい視点または新しい情報を得ることが本論の目的である。そのため、最初にすべての過去を表す時制における伝統的な用法を挙げ、それに関する問題点について述べていく。最初にイタリア語の過去時制、つまり近過去形と遠過去形の相関関係について述べていくが、本論は過去時制ではなく過去を表すことのできる時制を対象としているため、過去において実現した出来事を描写できる現在形についても論じていく。具体的に、どのような場面において現在形が用いられるのか、また用法において制約があるか否かという点も扱っていく。この点に関してはイタリア語と日本語のあいだに相違点が現れ、イタリア語と比べると日本語では現在形の用法が限られているようである。なぜこの相違が存在しているのか、なぜ日本語は非過去形の適用を幅広く認める言語であるのに場合によりその適用が不可能であるのかなどという疑問が生じるが、この点に関しては第四章において詳しく述べていく。言うまでもなく、過去における出来事を表す現在形について論じる前に、過去における出来事を表す過去時制についても論じる必要があるが、それはイタリア語（第一章と第二章）と日本語（第三章と第四章）に分けて論じていく。

日本語に関して、本論は従来問題とされてきた過去時制の本質または用法とそれに関する概念について説明することも目的とし、その過去を表す時制として「タ形」と「テイル形」を取り上げ、時制形式のそれぞれの意味・機能とその用法について論じていく。また、「テイル形」に関して述べる際に、その形式の多様性と用法を中心とするが、本論が対象としているのは継続を表す「テイル形」ではなく、過去の出来事を描写する「テイル形」である。日本語における過去時制に関して論じる際は要点を三つに絞ることとする。それは、まず過去の出来事を表す時制形式としてなぜ二つの形式が可能であるかということと、そのうちの一つの時制形式は二重性をもつ形式であること、さらに、その二つの時制形式における相関関係という三点である。それに加えて、その時制形式と時間を表す副詞との共起に関して論じることも本論の一つの目的である。この点について論じる際に、その副詞と時制形式の共起は規則に従うものであるのか、あるいは自由に選択できる共起であるのかという疑問点に関して説明していく。また、過去における出来事を表すのに二つの言語的手段の適用が可能であるということについて論じ、その形式は「タ形」といわゆる経験・記録用法の「テイル形」であるが、前者は第三章において述べられるのに対して後者は第四章において述べられている。前者の場合、中心となっているのはその「タ形」における二重性の有無であり、それに対しては様々な議論があるが、本論は「タ形」における二重性を認めるという視点から論じていく。過去時制における二重性については第一章と第二章においても述べるが、それはイタリア語の近過去形に関するものであり、本論は近過去形の二重性も認めることとする。また、一般的に日本語の「タ形」における二重性の証拠とされるのは応答文における「タ―ナカッタ」と「タ―テイナイ」の否定形式であるが、この点に関しても様々な議論がある。この点を説明するために例文を肯定文と否定に分け、それに対応する例文をいくつか挙げていく。それに加えて、その時制は時間を表す副詞とともに用いられるとどのような用法を可能とするか、また時制によりどのような解釈を可能とするかという点にも着目していく。第五章は、日本語の「もう」・「すでに」の対立とそれに対応するイタリア語の「già」と「ormai」の対立を中心としている章であるが、この章では様々な例文を介して、この二つの副詞が類義語ではないことを指摘していく。特に、日本語の「もう」が「タ形」とともに用いられた場合、その「タ形」は必ず完了的であるとは限らない。

このように、まとめると第一章から第四章まではイタリア語と日本語における完成相を表す時制における用法とその解釈に関して述べられており、第五章では副詞との共起に関して述べられている。

本論は完成相を表す時制に限らず未完成相と過去完了を表す時制も対象とすることとし、この場合においてもイタリア語と日本語の順番に沿って論じていく。イタリア語の未完成相を表す時制として半過去形（第六章）が挙げられているのに対して、過去完了を表す時制として大過去形が挙げられている。次に、それに相当するとされている日本語の「テイタ形」における用法、特に複文における用法とその解釈に関して第八章において論じていくが、その際、イタリア語を基準として半過去形と大過去形の比較も行っていくこととする。その比較に基づくといくつかの現象が現れるが、第四章と第八章からわかるように、これは大過去形・半過去形と「テイタ形」の対立のみによるものではなく過去形と現在形の対立によるものでもある。

上記のことからわかるように、本論は過去において起こった事象を表すいくつかの時制を取り上げ、その性質・用法・解釈などを明確にすることを目的としているが、過去時制の分析の場合、またイタリア語と日本語における時制の比較をする場合、要点として特に考察しなくてはならないのは、その時制が表す「完了性」であることを本論では主張していく。

第一章

イタリア語における過去時制について
– 近過去形を中心に –

本章は、イタリア語における過去を表す時制[1]について論じることを目的としている。過去には五つの時制（半過去形、遠過去形、近過去形、大過去形、先立過去形）が存在しているが、本章では近過去形と遠過去形をあげることとする。以下の節では、最初に近過去形と遠過去形における伝統的な用法に関して述べていく。次に、近過去形と遠過去形の相関関係に着目し、その時制のあいだにどのような相違点または共通点が存在しているかを明らかにしていく。この点を明らかにすると、どの場面において近過去形の代わりに遠過去形が用いられるのか、どの場面においてその置き換えが不可能であるのかということも明らかになる。さらに、本論では過去を表す時制として現在形も扱うこととし、実際にどのような場面において現在形が過去時制の代わりに用いられるのかなどという点に関しても論じていく。現在形に関しては具体的に第二章において述べるが、本章においてもその定義と伝統的な用法に関して簡潔に言及する。

本章では、主に次の点に触れていく。まず、近過去形における性質とその「二重性」の有無及び近過去形と遠過去形における「置き換え」という二つの点に関して論じていき、最後に、複文における時制の一致のルールに関して論じる。その際この最後の点については近過去形による二重性を基準にして論じることとする。

本章では、まず過去時制における伝統的な説明が不十分であるという視点から論じていく。なぜなら、伝統的な文法は「未完成相」を表す時制（tempi imperfettivi）と「完成相」を表す時制（tempi perfettivi）[2]における対立を中心としているが、後者の枠に属している近過去形と遠過去形におけるアスペクト的な対立については言及していないからである。伝統的な説明では、近過去形が単なる過去を表す時制として説明されているため、遠過去形との相違点が捉えられず、近過去形と遠過去形の「置き換え」が常に可能であるとされている。また、相違点として言及されているのは、「心理的な距離」のみである。つまり、その「心理的な距離」に基づいて話し手はどの時制を用いればよいかを決めるという説明がなされているが、この点に関しても説明が不十分である。実際に用いられている時制を分析すると置き換えられない場合もあるため、近過去形と遠過去形における共通点と相違点を明らかにする必要がある。また、伝統的な説明では、過去時制に属する近過去形と遠過去形は現在時制と無関係であるとされ、「過去」と「現在」のあいだには明確な分割があるという印象を与える。しかし、現在形も過去に起こった出来事を表すことができるため、過去時制との相関関係も明らかにするべきである。

上記のように、本章での主な論点は二つ、つまり 過去形と遠過去形の相関関係及び過去形と現在形の相関関係であるが、この点に関して説明するためには近過去形における「二重性」を確認しなくてはならない。「二重性」とは、過去形が時制として「完了的」用法も「アオリスト的」用法も認めるものであることをいう。伝統的な文法はアスペクトの視点からではなく、テンスの視点からのみ説明しているため不完全な説明であると言える。このようにアスペクトの区別をもとにすると近過去形を二種類に分けることになり、複文における時制の一致のルールにも再考が必要となる。ただし、本章は複文における一般的な時制の一致のルールを対象としているが、第

[1] 本論では直説法のみを扱うこととする。
[2] 図 1 を参照。

六章と第七章において論じられているように、複文の種類（補足節、名詞修飾節など）により時制の一致のルールが変わることに注意すべきである。

まとめると、本章の構成は以下の通りである。まず、イタリア語における一般的な時制[3]の説明とその定義を挙げ、様々な例文を挙げながらどのような用法が可能であるかという点に着目していく。次に、近過去形と遠過去形を取り上げ、なぜ場合によりその置き換えが不可能であるかという点に関して論じていく。そのために様々な例文を挙げていくこととする。最後に、すでに言及したように、近過去形は二重性を持つ時制であるため、二つの用法が可能となり、その用法に合わせて時制の一致のルールを再考していくが、本章ではその分析を補足節に留めることとする。

1.1 イタリア語の時制

イタリア語においてはいくつかの「法[4]」が存在しているが、本論では「直説法」のみを扱うこととする。坂本（1979:215）によれば直説法とは、話者の主観を交えずに＜客観的な事実判断＞を表す叙法である。もちろん、動詞自体の意味であれば話者の感情・主観を表すこともあるが、この場合も話者の感情・主観の現実に存在することを示しているにすぎないと考えればよい。こうした視点からすれば、直説法は、典型的な主観的叙法である接続法と対立する叙法であると言える」。直説法は「現在形」「半過去形」「遠過去形」「単純未来形」の四つの単純時制と「近過去形」「大過去形」「先立未来形」「先立過去形」の四つの複合時制を持つ。単純時制というのは動詞の語尾を変化させることで時制を表す形式である。それに対して、複合時制は助動詞である essere（〜です）または avere（〜持つ）と過去分詞を組み合わせることで時制を表す形式である。

以下の図 1 を考察すると次のことがわかる。まず、「未完成相」を表す時制として挙げられているのは「半過去形」のみであるのに対して「完成相」を表す時制として挙げられているのは「近過去形」と「遠過去形」の二つである。これらの二つの時制は、前者が「複合完成時制（perfetto composto）」と呼ばれているのに対して後者は「単純完成時制（perfetto semplice）」[5]と呼ばれている。この区別により近過去形と遠過去形における相違点と共通点の説明ができるため、本論はこの区別をもとにして論じていくこととする。また、「未完成相」と「完成相」以外にもう一つの区別があり、それは「過去完了時制（piucheperfetti）」と呼ばれている。これに属している時制として挙げられているのは、「大過去形」と「先立過去形」[6]であるが、本論では前者のみを検討することとする。以下の図においてすべての時制が現れているが、本章において取り上げるのは「現在形」「近過去形」「遠過去形」のみであり、「半過去形」と「大過去形」は以降の章で取り上げることとする。

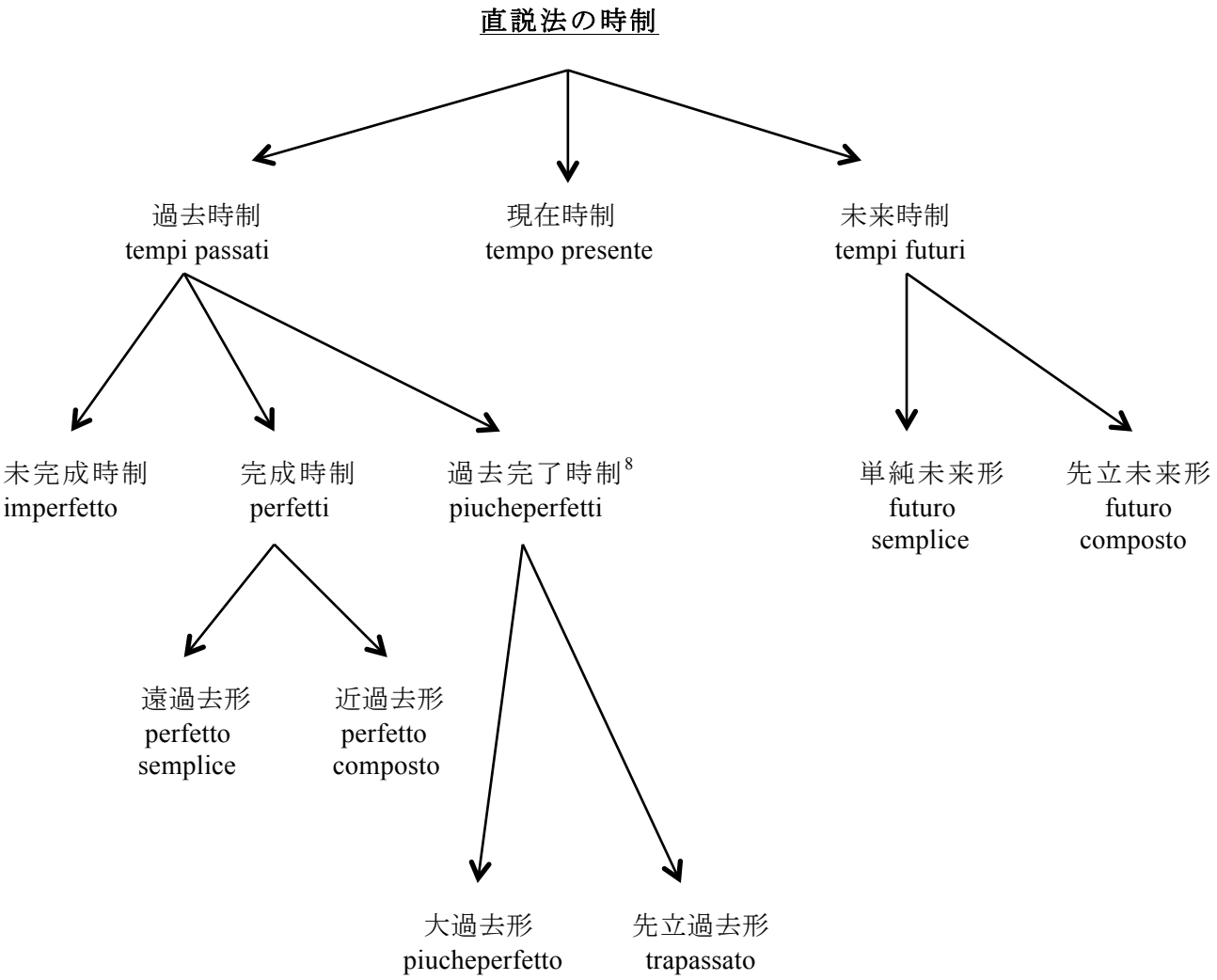
[3] 本章では、近過去形・遠過去形・現在形のみを分析対象としている。

[4] 「法」とは、言語表現の内容に対する話し手の態度が反映された動詞の形態のことである。事態の成立が可能であることを表すための一連の語形変化を「接続法」と呼び、事態が完全に事実であるかまたは完全に虚偽であることを表すための一連の語形変化を「直説法」と呼ぶ。

[5] イタリア語では「perfetto」と呼ばれているため、日本語に訳すと「完了」のほうが適切だが、複合時制が表す完了と区別するために「完成時制」にすることとした。完了を表さない遠過去形もこの枠に属しているからである。

[6] 先立過去形は会話において用いられていない時制であるため本論では扱わない。

図 1. イタリア語の時制[7]



すでに述べたように、本章で取りあげるのは「現在形」と「過去形（近過去形、遠過去形）」のみとし、以下ではこれらの時制の時間的な関係に関しても述べることとする。まず、イタリア語文法の教科書におけるこれらの時制の定義[9]を述べていく。

【現在形】

'Il presente indica simultaneità rispetto al momento dell'enunciazione, in genere con verbi durativi: il presente esprime un evento che dura per un lasso di tempo più o meno che include il momento dell'enunciazione'.
現在時制は動作が発話時と同時に行なわれているということを表す。多くは、継続動詞とともに用いられる。現在形で表現される事象はおよそ発話時を含む事象である。

[7] Bertinetto（1986：19）から引用したものである。
[8] 日本語においては「未完成」と「完成」時制しか存在していないが、イタリア語においては「過去完了時制」という時制も存在している。主にギリシア語、ラテン語文法に習い、イタリア語では「大過去形」と「先立過去形」を用いる。
[9] Salvi&Vanelli (2004).

【近過去形】

‘Il perfetto composto indica un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto compiuto. L’importante non è tanto la distanza temporale dell’evento rispetto al momento dell’enunciazione, quanto che gli effetti dell’evento persistano ancora, o siano in qualche modo rilevanti per il parlante al momento dell’enunciazione’.
近過去形は完了的アスペクトの視点で発話時点より前に起こった事象を表す。重要なのは発話時とその事象の間の時間的な距離よりはむしろ話し手にとって心理的にその事象の効果が発話時まで持続しているということである。

【遠過去形】

‘Il perfetto semplice indica un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto perfettivo aoristico, senza alcun legame con il momento dell’enunciazione’.
遠過去形はアオリスト的アスペクトの視点で発話時点より以前に起こった事象のことを表す。遠過去形で描写された事象は発話時と無関係である。

上記の定義からわかるように、現在形と近過去形・遠過去形のあいだの相違点は、その事象と発話時点との相関関係（同時であるか以前であるか）に関するものである。しかし、近過去形も遠過去形も発話時点より前に行なわれた事象を表す時制であるため、同じ用法を可能とすると考えられるが、これらの時制は完全に同じ働きをしているとは言えない。定義にも述べられているように、主な相違として考えられるのは前者が「完了的アスペクト」の視点で事象を描写するのに対し、後者が「アオリスト的アスペクト」の視点で事象を描写するということである。この点について述べる前に現在形、近過去形及び遠過去形の一般的な用法を見てみよう。

1.2 現在形・近過去形・遠過去形における一般的な用法[10]

前節において時制における定義を述べたが、実際どのように用いられているか、どのような用法が可能であるかまたは不可能であるか、という疑問が生じるため、以下では現在形・近過去形・遠過去形の一般的な用法をまとめていく。

【現在形】

現在形は、本来は話者の目の前で繰り広げられる行為・状態を表すものであるが、現実には＜現在＞とは一時点のものではなく、現在を中心として・未来に繋がるある程度広い時間帯を表すものである。

a. 話者の目の前で行なわれている現在の動作・状態
Il treno passa davanti a noi
（列車が私達の前を通っていく）

b. 現在の習慣的動作・状態または恒久的・普遍的と考えられる動作・状態を示す。
Ogni giorno mi alzo alle sei e vado a letto alle nove
（毎日私は 6 時に起きて 9 時に寝ます）

[10] 節 1.2 における全ての例文は坂本（2009）から引用したものである。

La Terra gira intorno al Sole
（地球は太陽のまわりを回る）

c. 過去に始まって現在もなお続いている動作・状態を示す。
Egli abita a Roma da cinque anni
（彼は 5 年前からローマに住んでいる）

d. 昔の作家・哲学者などの考え方や文章を引用するとき、その考え方などが現在でも通用することを表す。
Cicerone scrive che la storia è maestra della vita
（キケロは歴史は人生の師であると書いている）

e. 文学作品などで、過去の出来事を現在形を使って描写し、眼前に思い浮かばせる文体的効果を狙うことがある。これは歴史的現在と呼ばれる。
In un salotto si parlava della resurrezione di Lazzaro. ‘Cose antiche!’esclama uno scettico.
‘Ai tempi nostri non capita davvero di vedere un morto uscire dalla tomba’.
（あるサロンでラザロの復活について話していた。「昔のことさ！今の世の中では死人が墓から出てくるのを見るなんてことは起こらないよ」と懐疑論者が叫んだ）

f. 近い未来のこと、未来の確実なことを示す。
Domani partiamo per Napoli
（私達は明日ナポリに出発します）

【近過去形】

近過去形は、過去時制の中でもっとも多く用いられる形であり、現在と何らかの関係のある過去を示すのが本来の働きだと言える。図 1 からわかるように、この時制は「完成時制」の一つであるが、現在と何らかの関わりのある「完了」という点がこの時制の最大の特徴である。日常会話や口語的文体の文章で広く用いられ、話し手や聞き手の、その出来事への主観的関心や参加意識を伴うことが多い。近過去形の用法は様々であり、以下に代表的な用法を紹介していく[11]。

a. 過去に始まって現在まだ完全に終わっていない周期（例：questa settimana「今週」, questo anno「今年」など）のうちに起こった動作•状態を示す。
Questo anno ho già visitato tre volte la Galleria degli Uffizi.
（今年になって私はすでに 3 度ウフィーツィ美術館を訪れた）

b. 現在までの経験を示す。
Ho mangiato molte volte la bistecca fiorentina.
（私は何度もフィレンツェ風ビフテキを食べたことがある）

c. 最近起こった動作・状態を示す。
Due anni fa sono andato a Kobe.
（2 年前に私は神戸に行きました）

d. 過去に完了した動作・状態ではあるが、その結果が現在もなお残っているものを示す。
Anna è nata nel 1960.
（アンナは 1960 年に生まれた）

[11] 坂本（2009:219）

【遠過去形】

遠過去形は、現在とは全く関係のないある過去の一時点に起こったか、または一定期間続いたような動作・状態を表すことを特徴とする時制である。近過去形と並ぶ、完結した動作・状態を表す「完成時制」の一つであるが、物理的にも心理的にも現在とは切り離された過去で、その時間の長短にかかわらず、動作・状態は厳密にまとまった「形」として捉えられる。遠過去の用法も様々であり、以下に代表的な用法を紹介していく[12]。

a. 過去の特定の一時点において起こった動作を示す。
Cristoforo Colombo scoprì l'America nel 1492.
(コロンブスは 1492 年にアメリカを発見した)

b. その始まりから終わりまでが明白であるような過去の一定期間続いた動作・状態を示す。
Quell'estate, rimasi per un mese alla villa del nonno.
(私はその年の夏、祖父の別荘に一ヶ月滞在した)

c. 小説・物語の中で登場人物の動作、事件の推移、持続する事実などを描写する。
Un giorno il filosofo Anacarsi vide Solone, suo maestro, che preparava nuove leggi per Atene. Lo guardò e, con un tono un po'ironico, gli disse: -Le leggi somigliano alle ragnatele: cattureranno le mosche piccole, ma saranno lacerate da quelle grosse.
(ある日、哲人アナカルスィスは師ソローンがアテネのために新しい法律を用意しているのを見た。彼は師を眺め、少し皮肉をこめて言った。「法律とはクモの巣に似ていますね。小さなハエは捕らえても大きなやつには破られてしまいますから。」)

以上に述べた近過去形と遠過去形の用法における区別は簡単なものに見えるのだが、詳しく分析してみるとこれらの時制の関係は先行研究で述べられているほど近くはないことがわかる。その二つの時制のあいだに存在している共通点と相違点を明らかにするために、次節ではまず近過去形における用法を検討し、加えてその性質と二重性の有無に関して述べていく。

1.3 近過去形に関する先行研究について

イタリア語の近過去形は、伝統文法において「現在と何らかの関わりをもった過去の事象を表す」とされている。本章では Salvi&Vanelli（2004）の提案した定義を述べたが、研究者の多くは現代の Vanelli の定義ではなく、Fornaciari（1974）や Dardano（1985）、Leone（1986）などの定義をもとにしている。もちろん、全ての定義は共通点を持っているが、本章で主に参考にするのは Vanelli と Leone の定義である。参考のためにここで Fornaciari（1974:172）の定義を挙げる。

'Il passato prossimo è il passato del presente, ossia indica un'azione, stato o modo di essere già compiuto, ma considerato in relazione con il presente' .
近過去形とは現在の過去である。すなわち、過去に行なわれてすでに完了した動作と状態を表すが、それは現在と関わっている動作または状態である。

Fornaciari は近過去形が「現在の過去」であると言う。この定義によると、以上に述べたように、近過去形は過去においてすでに完了した動作または状態を表す現在と何らかの関わりをもった過去とされている。ここまで見てきたように、この点は近過去形と遠過去形の主な相違であり、重要な点であるため繰り返し触れる必要がある。また、重要なのは単純時制と複合時制の特性であるため、この点に関しても繰り返し触れる必要がある。

[12] 坂本（2009:225）

次に、Leone の説明について簡潔に述べることとする。Leone（1986:105）は近過去形を時制の範疇に組み入れないことを提案している。この時制の取り扱いの説明は以下の通りである。

'Rileviamo tuttavia che quando si parla di passato prossimo (come pure di trapassato prossimo, di futuro anteriore e degli altri cosiddetti tempi composti fuori dell'indicativo) si poggia su un concetto errato della grammatica tradizionale, la quale inquadra appunto le forme suddette nella categoria temporale. E invece esse sono forme perifrastiche a pari di altre (per es. sto per leggere, mi metto a leggere, etc.), le quali colgono un particolare aspetto (imminente, ingressivo, progressivo) del verbo, e sono suscettibili a loro volta di coniugazione attraverso i soliti tempi e modi (sto/stavo per leggere, etc.). Anche dunque le forme perifrastiche col participio passato colgono un aspetto particolare del verbo (quello del fatto interamente compiuto) e si coniugano nei vari tempi e modi'.

近過去形（または大過去形、先立未来形と直説法以外の複合時制）に関して述べる際には伝統文法は正確でない概念に基づいているようである。なぜなら、伝統文法は複合時制を時制範疇に組み入れているからである。しかし、これらはその動詞の独特なアスペクト（近接、始動的、進行的）を捉える迂言的表現（読もうとしている、読み始めるなど）であり、普通の時制と法（読もうとしている／していた）で活用することもできる。従って、過去分詞をもった迂言的表現もその動詞の独特なアスペクト（完了的）を捉え、様々な時制と法で活用できる。

以上の定義からわかるように、Leone によると近過去形は時制ではなく、単なる迂言的表現であるとされている。ただし、他の迂言的表現とは異なり、近過去形の特徴は過去分詞であり、この過去分詞はすでに完了した事象の局面を示す役割を果たしている。つまり、過去分詞を含む時制はどれも完全に完了した事象の局面を示すことが述べられている。これに対し、遠過去形は「aspetto aoristico」（アオリスト的アスペクト）を示す。

以下では、近過去形における用法をより詳しくみていく。Fornaciari と Vanelli は近過去形に関してそれぞれ「現在の過去」と「話者にとっての現在における重要性を表す過去」と述べているが、こういった「現在との関係」はどのようなものであるかを以下で考えていく。恐らく、Bertinetto（1986）が述べるように、この関連は三つの要因に従うものであると言えるだろう。

（a）発話時点と事象時点の間の短い経過
（b）事象の発話時点までの持続
（c）事象の効果の持続

まず、（a）について述べる。伝統的な文法では、近過去形で描写された出来事が時間的には発話時点に近いとされている。つまり、発話時点の前日の出来事の場合に用いるべき時制は近過去形であるのに対し、発話時点よりかなり以前の出来事の場合に用いるべき時制は遠過去形であるとされているが、次節で述べるように、この説は完全に正しいとは言えない。なぜなら、前日の出来事の場合でも遠過去形で描写することも可能であるからである。また、この時制の選択は話者が決めるものではあるが、話者の地方の影響[13]も大きいためより複雑な現象である。

続いて、（b）に関しては次の説明ができる。一般に、複合時制により描写された出来事は設定時点までに完了しているはずであるが、設定時点が含まれる場合もある。この場合、設定時点まで持続するのはその過去における出来事の効果ではなく、出来事自体である。この特殊な近過去形の用法は 'uso inclusivo'と呼ばれている。つまり、他の複合時制と異なり、この場合には「設定時点」も含まれていることになる。ここで疑問となるのは出来事の持続であり、すなわちその出来事は設定時点以降も持続するか否かという疑問である。この場合、その持続は事実ではなく、可能性として捉えるべきである。次の例文を見てみよう。

（1a）Oggi Luca ha lavorato tutto il giorno: pensi che voglia ancora continuare?
（今日ルカは一日中働いていた。君は彼がこれからも働き続けたがっていると思う？）

[13] 南部では遠過去形の適用が一般的であり、発話時の前日に起こった出来事の場合においても遠過去形が用いられる。それに対して、中部・北部では遠過去形の適用が少なく、近過去形の適用が一般的である。

（1b）Oggi Luca ha lavorato tutto il giorno, e sembra intenzionato a continuare: cosa gli sarà successo?
（今日ルカは一日中働いていて、これからも働き続けそう。何があったのかな？）

以上の例文を考察すると、例（1a）と（1b）は設定時点以降に出来事が持続しているか否かという点で異なる。前者においてはその持続は可能性に過ぎないが、後者においては事実である。

最後に（c）について説明しよう。近過去形も遠過去形も適用ができる場合で、近過去形の時制が用いられるのは、話者にとってその出来事の効果が発話時まで持続するときであると言うことができる。つまり、この場合において発話時まで持続するのは出来事自体ではなく、話者のその出来事に関する関心である。発話の際には時制を決めるのが常に話者であるため、聞き手は話者の選択した時制を話者の視点から理解すればよい。以下の例文を参考にしよう。

（2a） Einstein ha visitato Princeton （近過去形）
（2b） Einstein visitò Princeton （遠過去形）
（アインシュタインはプリンストンを訪問した）

例（2a）と（2b）における相違は単なる話者の心理的な判断であるため、アインシュタインは現在生きていないにも関わらず近過去形が用いられる。その理由は、話者はその出来事に対して関心を持っているからである。もし単なる過去における出来事として聞き手に説明するつもりでいるなら遠過去形で描写することが一般的である。また、近過去形の本質に関する興味深い説があり、それは Weinrich（1964）の提案である。Weinrich（1964）では、近過去形は話者のかかわり合いの「表示器」であり、「mondo commentato」（「コメントのレベル」）に属するものであるとされている。それに対して、遠過去形は 「mondo della narrazione」 （物語のレベル）に属するものであるとされている。つまり、Weinrich はコメントのレベルと物語のレベルを分け、それぞれのレベルに適切な時制が用いられることを述べている。また、語り手が読者と直接話しているように、親しい関係を作ることを目的としているという説明も挙げられている。このような効果をもたらすのは近過去形のみである。従って、遠過去形で描写すると読者はその内容と距離感を感じるということとなる。この点に関しては後述するため、ここではこれ以上述べないこととする。

以上のことからわかるように、近過去形は様々な面から分析すべき時制であり、他の時制との相関関係も複雑である。また、常に発話時より以前の出来事を表す遠過去形とは異なり、近過去形は発話時以後の出来事を表すこともできる時制である。なぜなら近過去形は、複合時制であるため必ず設定時点を必要とし、その時点の位置に合わせて時間軸に位置づけられる時制であるからである。以降の章においても説明するように、これは全ての複合時制が持っている特徴である。

1.4 近過去形の用法について

前節ではすでに近過去形における用法に関して述べたが、直示的用法と照応的な用法の区別に関しては言及していないため、以下ではそれに関して説明していく。遠過去形とは異なり、近過去形は直示的な用法と照応的な用法を両方可能とし、これは恐らく複合時制であるためである。まず、まとめとして複合時制はどのような形式であるのか、どのような特徴を持っているのかということを簡潔に見てみよう。複合時制というのは助動詞 「essere（です）」または 「avere（持つ）」と動詞の過去分詞で成り立つ時制である。近過去形は助動詞の現在形と動詞の過去分詞で成り立っている時制であり、近過去形以外に大過去形と先立過去形と先立未来形も複合時制であり、それぞれの助動詞は半過去形・遠過去形・未来形である。単純時制とは異なり、次節で説明するように、複合時制は必ず「設定時点」を必要とする時制である。以上の特徴は副詞とも関連していることにも注意すべきである。

1.4.1　近過去形における直示的用法

以下では近過去形における直示的な用法に関して説明する。説明するのは三つの代表的な用法とそれに関する概念であり、それらは（a）新情報（b）経験（c）発話時の包含の三つに即した用法である。

まず、（a）から説明をしていく。ここで「新情報」というのは「最近の情報」のことである。この名称からもわかるように、最近の情報を伝える際に用いられる時制は近過去形である。次の例文を見てみよう。

（3）Sai cos'è successo? E' caduto il governo　　（近過去形）
（何が起こったか知っている？政府が倒れた）

実際に、ニュースや新聞記事でよく用いられ、過去における出来事を描写する際には近過去形以外の時制が用いられることはないようである。こういった用法は本章が対象としている用法ではないが、これから述べる重要な概念に関連しているため、参考のために取り上げることとした。以下で詳しく説明すべきなのは「効果の持続」という概念であり、すでに言及したようにこれは複合時制の特徴である。参考のために次の例文を見てみよう。

（4）Ho comprato questa macchina 50 anni fa
（この車を購入したのは 50 年前です）

（5）Sono nato il 10 gennaio 1981
（私は 1981 年 1 月 10 日に生まれた）

以上の例（4）からもわかるように、出来事と発話時の間の距離は無関係であり、重要なのは話者にとっての発話時点における重要性のみである。これは出来事が実際に発話時点まで持続しているという意味ではなく、話者の「coinvolgimento psicologico」（心理的な関与）が発話時点において重要であるか否かということによるものである。ただし、例（4）の場合、話者がその車を発話時においてもう持っていなくてもその発言が可能であるということにも注意すべきである。

続いて（b）の説明に進んでいく。「経験的な用法」というのは過去において少なくとも 1 回行なわれた経験[14]のことを表す用法である。一般的に以下のような例文で説明される。

（6）　Sei mai stato in Francia?
（フランスに行ったことがある？）

（7a）Claudio ha letto la 'Divina Commedia' almeno 5 volte
（クラウディオはダンテの神曲を少なくとも 5 回は読んだ）

上記の例文からわかるように、この用法は時間的な幅が広く、ある人またはその文の主語の人生を発話時点から振り返るものである。この場合、論理的に考えてみると遠過去の適用も可能であるが、その場合現れてくる意味がかなり異なる。

（7b）Claudio lesse la 'Divina Commedia' almeno 5 volte　　（遠過去）
（クラウディオはダンテの神曲を少なくとも 5 回は読んだ）

例（7b）の意味に従うと二つの解釈が可能となる。一つ目はクラウディオがもう亡くなっているという意味であり、二つ目はクラウディオがそれをもう読めないという意味である。いずれにしても、設定されている時間区間がもう終結しているということが前提となっている。つまり、その本を読んだ時間区間が限定され、その動作は限定された時間区間の境界を超えないと解釈す

[14] いつ行なわれたかという情報は重要ではなく、重要なのはその事象の完了のみである。このため、経験を尋ねる質問においては「不定時間」を表す近過去形が用いられる。

ればよい。それと異なり、近過去形を用いた例文の解釈によるとその限定された時間区間以降においてもその出来事がまた行なわれる可能性があるということになる。言い換えると、経験の継続または反復が可能であると言えるが、この点に関しては後述する。

最後に（c）の説明をしていく。すでに言及したように特別な近過去形の用法が存在しており、それは「uso inclusivo」である。この用法の特徴は出来事の持続に関するものである。通常出来事は設定時点までに完了するが発話時まで持続するときもあり、これは「uso inclusivo」の特徴である。つまり、出来事のその効力ではなく出来事自体が設定時点まで持続するということである。しかし、この適用においては様々な制限があり、全ての動詞には適用ができないと言える。簡潔に言うと、継続動詞にしか適用ができない。次の例文を参考にしよう。

（8） Dall'ultima volta che ci siamo visti, ho continuato a lavorare ininterrottamente al mio libro
（私達がこの前会ってから私は間断なく私の本を書き続けた）

上記の例からわかるように「本を書く」という出来事の効力ではなく設定時点まで持続するのはその出来事である言える。要するに、この近過去形は Bertinetto（1986）が述べているように、現在の範疇において完了した過程を表す近過去形である。厳密に言うと、その出来事がすでに完了しているか否かという情報が文脈からわかるものであるということも言える。

1.4.2 近過去形における非直示的用法

ここまで述べてきたのは近過去形の直示的な用法であり、出来事が行なわれたのは発話時点以前という場合である。以下で分析していく用法はそれとは異なる用法であり、設定時点が発話時点と直接繋がっていない場合であり、この近過去形は文脈により明白にされた出来事に対する先行関係を表す近過去形となる。以下の例文を参考にしよう。

（9）Quando vedrai Giovanni, digli che sei venuto per prendere la tua roba （未来形＋近過去形）
（あなたがジョヴァンニに会った時に、あなたはあなたの物を取りに来たと言ってください）

上記の例文は未来形に支配された近過去形を用いる例文である。この用法からわかるように、近過去形は過去を表す時制であるとは言えない。この場合、発話時点より前に起こった出来事ではないため、例文に現れている他の出来事との相関関係を観察しなくてはならない。この例文においては未来形[15]が用いられているが、未来を表す時制でなくても近過去形が先行関係を表すことができる。以下の例文[16]を見てみよう。

（10）Ti avevo detto che è finito il latte; perché non mi ascolti? （大過去形＋近過去形）
（牛乳がなくなったと言ったのに。どうして聞いてくれないの？）

上記の例（10）において用いられている時制は「大過去形（avevo detto）」と「近過去形（è finito）」である。本章では、大過去形に関して述べないが、この例文を説明するために以下で大過去形はどのような時制であるのか、またどのような機能を果たしているのかということに関して簡潔に説明していく。

まず、例（10）に関して言えるのは、時制の一致のルールを考えてみると上記の例文が非文になるはずだということである。なぜなら、「大過去形」[17]というのは、過去のある時点より前に起こったことを表す時制形式であるからである。当該例文においては大過去形が用いられているが、「過去の過去」である大過去形の特徴が例（10）においてはなくなっているため、この二つの動詞の時間的な相関関係がわかりにくくなる。例文（10）における時制を考えてみると「言

[15] 未来の意味を持つ現在形も可能である。
[16] 第六章を参照。
[17] 大過去形については第六章を参照。

う」が大過去形となり、「なくなる」が近過去形となっているため、「言う」と「なくなる」という順番のように見える。しかし、「なくなる」と「言う」のような順番が論理的であろう。そのため、例文（10）は非文であるように見えるが、実際はそうではない。二つの解決が可能であり、一つ目は大過去形に関する説明であるのに対して、二つ目は近過去形に関する説明である。大過去形に関する説明は、同じ例文を取り上げながら第六章においてなされるためここでは説明しないこととし、以下では本章の主題に即して近過去形に関する説明を取り上げることとする。例（10）の近過去形は大過去形と同じ働きを果たしているという提案ができるだろう。つまり、近過去形は大過去形に置き換えることができるという提案である。この流れで進むと、近過去形は他の時制の働きを果たすことができるということになるが、それが実際に可能であるか否かを以下で見ていく。

（11）Quel mattino Giovanni non si sente bene.La sera prima ha bevuto troppo　　（現在形＋近過去）
（その朝ジョヴァンニはあまり元気じゃない。前日の夜飲み過ぎたから）

例（11）においては、過去において起こった出来事が現在形により表現されているため、非文であると予想されるが、そうではなく、この場合においても近過去形と現在形の先行関係が現れている。このように、近過去形と大過去形が置き換えられることが可能であると言える。

現在形の本質に関しては第二章で述べるため、ここでは省略するが、今のところで注目すべきであるのは近過去形におけるある働き、つまり現在形の働きと同じようなその働きである。恐らく、この点には助動詞の現在形も影響を与えていると考えられる。全ての複合時制は助動詞と過去分詞で成り立ち、助動詞の時制は時間軸における位置を決めるため、過去分詞の働きはどのような働きであるかという疑問が生じる。本章では近過去形における過去分詞が中心となっているが、一般的には、近過去形に限らず過去分詞自体はその事象の完了性のみを表す形式であると言ってよい。

最後に、参考のために次のことを考えてみよう。子供の過去形の習得においてよく見られる現象があり、それは子供が最初に表現するのは複合時制の完成した形ではなく、過去分詞のみであるという現象である。

（12a）Io ho rotto la bambola
（私は人形を壊した）

ではなく、

（12b）Io rotto bambola
（私は人形を壊した）

という現象がよくある。つまり、子供の複合時制の習得においては助動詞の活用が避けられ、過去分詞のみにより表現される傾向があるようである。このことから「完了性」の概念は「時間軸の位置づけ」より強いということがわかる。最後に、次の例文も参考にしよう。

（13）Riempite adesso le borracce, perché domattina l’acqua è gelata　　（現在形）
（明日の朝は水が凍っているから水筒に今水を入れてください）

上記の例文は「essere＋形容詞」という表現を用いる表現であるが、もう一つの解釈が可能であり、それは近過去形であるということである。近過去形はその出来事の完了性のみを強調するということとなり、この場合は「si è già ghiacciata（「凍る」の近過去）」と同じ意味となる。こういった二通りの解釈（近過去形あるいは essere＋形容詞）はラテン語の近過去形と関係があると考えられる。なぜなら、以下で説明するように、ラテン語においては近過去形を表す形式が二つ存在していたためである。

1.5 近過去形の由来と現代イタリア語の近過去形について

イタリア語はロマンス諸語に属している言語であり、ラテン語に起源を有する言語である。本章では時制の一致のルールに関して述べられているが、イタリア語のそのルールはラテン語のルールに従うものである。よって、過去時制の近過去形と遠過去形の用法やその区別などもラテン語の用法に従うはずであるが、実際は異なっている。実際、古典ラテン語においては近過去形に当てはまる時制がなく、イタリア語の遠過去形に当てはまる完了時制のみ存在していたが、ラテン語の末期の頃には近過去形が発生していたようである。その前に、ラテン語においては「Perfetto」（完了）という過去時制形式が存在しており、イタリア語の近過去形も遠過去形もその形式により表現された。以下で簡潔にラテン語の時制に関して述べていく。

ラテン語においても直説法が存在しており、それに属している時制形式[18]が「現在形」「論理的過去形」「歴史的過去形」「半過去形」「大過去形」「第一未来形」「第二未来形」である。順番に進むと、「現在形」は進行中の動作または完了した動作、「論理的過去形」は現在において反映される過去に行なわれた動作の効果[19]、「歴史的過去形」は過去において完全に終了した動作のことを表す。以上の説明からわかるように、「論理的過去形」がイタリア語の近過去形、「歴史的過去形」が遠過去形に当てはまる形式であると予想ができる。しかし、イタリア語と異なり、ラテン語のこれらの二つの時制の形は同じであった。以下の例文が挙げられる。

lēgi → ho letto（近過去形） → （読んだ）
lēgi → lessi （遠過去形） → （読んだ）
} 「Perfetto」（完成時制）

以上の例からわかるように、形は同じであるが、ニュアンスは異なっている。前者は「今まで」というニュアンスを伝えようとするのに対し、後者は「今はそうでない」というニュアンスを伝えようとしているが、ラテン語の末期頃に近過去形に当てはまる独立した時制が発生したようである。こういった変化は形容詞の機能を果たしている過去分詞によるもののようである。すなわち、「habeo litteram scriptam」[20]（直訳：書いた手紙を持っている）のような文で考えてみると、「scriptam」という過去分詞が形容詞のような働きをしていることがわかるが、このような構造が徐々に言語変化のため、真の過去時制形式となった。恐らく、イタリア語においてもいくつかの動詞の近過去形の形と形容詞の形が同じであるのはこのためであると想像しうる。

また、以上のことからわかるように、ラテン語においては近過去形を表す形式が二通りとなった。元々存在していなかった時制の適用範疇が徐々に広がり、すでに存在していた単純時制である遠過去形の用法にも接しつつ、現在ではより幅の広い時制となった。すでに説明したように、この二つの時制の間には相違点が多いため、用法範疇が完全に一致していないことが言える。主な相違として、近過去形は「完了的アスペクト」の視点で描写するのに対して、遠過去形は「アオリスト的アスペクト」のみの視点で描写することが挙げられるが、しかしこの区別においては実際には変化が起こっているようである。この変化は現代イタリア語の近過去形の用法における変化であり、これを「aoristicizzazione」（アオリスト化）と呼ぶこととする。この現象は、近過去形もアオリスト的な用法を可能とすることを表している。要するに、近過去形は過去時制としての価値は失わないが、遠過去形の用法範疇を侵害するため、アスペクト的な価値は失っていると言える。その上に、遠過去形においてはこのような現象が起きていないため、これが一方的な現象であることも言える。従って、このことからわかるように、近過去形は二つのアスペクト的な価値を持つ時制であるため、複文の場合には主節における近過去形の区別が重要であると言えるが、この点に関しては後述する。その前に、次節では近過去形と遠過去形のあいだに存在している共通点と相違点を明らかにし、どのような場面において近過去形により描写された事象が遠過去形により描写されてもよいか、またどのような場面においてその置き換えが不可能であるかという点に関して論じていく。

---

[18] Monaco, De Bernarsis, Sorci（1993）から引用したものである。
[19] Monaco, De Bernardis, Sorci（1993）では「現在の価値」を持っているとされている。
[20] 「Habeo」（持つ）は現在形であり、「scriptam」は名詞である「letteram」（手紙）に合わせた形容詞である。

1.6 近過去形と遠過去形の相関関係とその「置き換え」について

節 1.1 と 1.2 における定義からわかるように、遠過去形と近過去形は共に過去において完成した動作・状態を表す時制であり、そのため、いずれも「完成時制」の枠に属している時制である[21]。しかし、共通点はその過去において完了した事象を表すという点のみであり、分析してみると完全には同じ働きをしていないということが明らかになる。なぜ異なっているかを以下で説明していく。

最初に伝統的な説明を見てみよう。伝統的な説明によると近過去形と遠過去形における相違は、まず発話時とその事象の距離、そして話者の心理的な判断によるものであるとされている。すなわち、一つ目の相違として近過去形は現在から近い過去の事象を描写するのに対し、遠過去形は現在から遠い過去の事象を描写することが挙げられている。しかし、この説明は不適切であり、その距離はそれほど関係がないと言える。そして、二つ目の相違として、話者の心理的な判断が挙げられているが、この説明も不完全であると言える。以下ではこの二つの点をもとにして説明していくが、その前に以下の例文も参考にすべきである。

（14a）Ho comprato questa macchina venti anni fa　（近過去形）
（この車を 20 年前に買った）

（14b）Comprai questa macchina venti anni fa　（遠過去形）
（この車を 20 年前に買った）

以上の例（14a）が発言できるのは、Vanelli&Salvi(2004:115)では、話し手がその車をまだ持っている場合のみとされている。つまり、遠過去形が用いられると、話し手はその車をもう持っていないという意味になるとされているが、その説明は不完全であると本章で主張していく。まず、本章は（14a）の文がその車を発話時において持っていなくても可能であるという立場から述べていく。なぜなら、もう持っていない車の写真を誰かに見せながらその発言をしても不自然ではないからである。

このように、近過去形の用法は遠過去形の使用領域に近いものであるようだが、これはおそらく現代イタリア語の近過去形における**「アオリスト化（aoristicizzazione）」**によるものである。すでに言及したように、この現象により近過去形は過去時制としての機能は失わないが、遠過去形の用法範疇を侵害するため、完了的アスペクトの機能は失うということになる。このように、近過去形と遠過去形の使用領域が接近していると言える。また、近過去形と遠過去形の使い分けは話し手による選択であるが、分析してみると、置き換えられない場合もある。このため、話し手の意図に基づいた使い分けではすべての用法の説明はできず、ある制限があるように感じられる。まず、話し手はなぜ事象を描写するのに近過去形を選択するのかという疑問が生じる。また、同様に、遠過去を用いた場合、どのような情報を与えようとするのかという疑問も生じる。

すでに前節において言及したように、近過去形も遠過去形もテンスの視点から見ると、過去において完成した動作・状態を表す時制であるが、発話時と関わりがあるか否かという点では異なっているということも言わなくてはならない。この点に関する結論を先に述べると伝統的な説明とは異なり、近過去形は過去における事象のみではなく、現在における事象も表すことができると言える。すなわち、近過去形は現在と繋がっている時制であるのに対し、遠過去形は現在と繋がっていない時制であるが、これはおそらく発話時とその事象の間の時間的な距離に関するものではなく、話者の関与に関するものであろう。話者にとってある事象の効果が心理的に発話時まで持続しているなら話者はその事象を近過去形で描写し、発話時とは無関係であるなら話者はその事象を遠過去形で描写するということである。しかし、現代イタリア語においては遠過去形の使用が徐々に減少している[22]上に、過去時制の選択においては個人差もあり、この二つの時制の使

[21] イタリア語では近過去形と遠過去形が「tempi perfettivi」（完成時制）と呼ばれている。
[22] 歴史の教科書における使用はまだ残っているが、口語における使用は徐々に減少しているようである。また、遠過去形は南部においてよく用いられるが、中部と北部ではその適用が少ないようである。

い分けに関する説明をすることは複雑なものとなる。なぜなら、上に言及した「アオリスト化」も関係しているからである。

伝統的な文法においては、同じ事象を両方の時制により描写することが可能であるとされているが、それは常に可能であるというわけではなく、どちらかが不可能である場合もあるということに注意すべきである。そのため、本章では、伝統的な文法の説明が不適切であるという立場から説明していく。以下では最初に両方の形式の適用を可能とする例文[23]を挙げる。

【置き換えが可能である例文】

（15a）Cristoforo Colombo ha scoperto l'America nel 1492　　（近過去形）
（15b）Cristoforo Colombo scoprì l'America nel 1492　　（遠過去形）
（コロンブスは 1492 年にアメリカを発見した）

例（15a）と（15b）は共に「発見した」を意味するが、坂本も説明しているように、遠過去形を用いた例（15b）は、発見の事実を過去の一時点に起こった客観的史実として述べているのに対して、例（15a）は、発見の事実がすでに話者にとって認識され、その発見によりその後の歴史が続いていることも言おうとする主観的ニュアンスが含まれている。近過去形も遠過去形も用いることが可能であり、文法的な観点からどちらかを選ぶ必要はなく、これは話者による選択である。つまり、話者が伝えようとするニュアンスによる用法である。伝統的な説明では、この二つの時制を使い分けるには発話時とその出来事の間の距離を観察しなくてはならないとされているが、すでに述べたように、本論ではこの説明を採用しないこととする。なぜなら、距離に関する選択ではなく、いくつかの要因を観察すべきであると考えられるからである。まず、距離の問題ではないことを示す事実として以下の例が挙げられる。

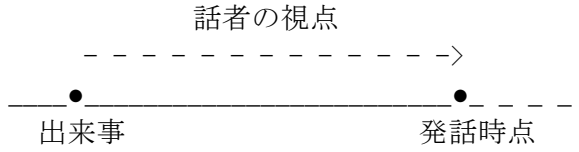
（16a）Ieri ho incontrato tuo padre　　（近過去形）
（16b）Ieri incontrai tuo padre　　（遠過去形）
（昨日君のお父さんに会った）

以上の例（16a）も（16b）も文法的に正しく、「昨日」の事象を表していても遠過去形も用いることが可能である。従って、発話時とその出来事の間の距離が長ければ遠過去形で描写し、短ければ近過去形で描写するという説明が不適切であることが明らかとなる。

例（15a）と（15b）と同様に、例（16a）と（16b）の場合においても、以上の例文は共に「会った」を意味するが、話者が伝えようとするニュアンスは同じではない。例（16a）は最近の出来事として述べているが、例（16b）は現在と関係のない過去の事実として述べている。近過去形を用いた例（15a）・（16a）と遠過去形を用いた例（15b）・（16b）の相違を図で説明してみよう。

図 2a. 近過去形と遠過去形の相違

例（15a）・（16a）　→　近過去形



[23] 坂本（2009：226）

すでに述べたように、話者にとって心理的にその事象の効果が発話時まで持続しているということを表す時制は近過去形である。図の矢印の方向からもわかるように、過去における出来事は過去に終了するものではなく、発話時、つまり現在まで持続しているものである。これは事象自体が持続するという意味ではなく、持続するのはその効果であり、話者にとっては過去から現在までの過程が重要であるからである。結局、近過去形の場合は発話時も含まれると言える。そのため、「現在形」に近い時制であると推測ができるだろう。このような関わりが存在しているため、本章では近過去形を「現在と切り離されていない」時制と呼ぶこととし、そしてこの概念に合わせて伝統的な時制の一致のルールを見直すこととする。続いて、以下では遠過去形を説明する図を見てみよう。

図 2b. 近過去形と遠過去形の相違

例（15b）・（16b）　→　遠過去形

以上の図からもわかるように、遠過去形と近過去形は同じ働きをしている時制ではなく、それぞれはあるニュアンスを伝えようとする時制である。近過去形とは異なり、遠過去形により描写された出来事は発話時まで持続せず、過去におけるある一時点として描写される。すなわち、遠過去形は発話時を含まずその過去の視点から描写する時制である。このため、本章では遠過去形を「現在と切り離されている」時制と呼ぶこととする。このことから、伝統的な説明による互換性は常に可能であるとは限らないという点について述べていく。しかし、場合により遠過去形も現在と関わりのある用法を可能とし、それは以降の節において論じるように、時間を表す副詞「fa（前に）」との組み合わせによる用法である。

ここまで見てきたように、近過去形と遠過去形の用法には共通点があり、互換も可能であるが不可能な場合も多いため、明確に区別をすべきである。また、時制の選択は発話時とその出来事の関係のみではなく、話者の視点、つまり話者自体の位置と話者の伝えたい情報によっても決定される。

続いて、以下では互換が不可能である場合を表す例文を挙げ、その後になぜ不可能であるかに関して述べていく。最初に、副詞の制限のある例文を挙げる。

【置き換えが不可能である例文】

（17a）Marco è arrivato da 2 ore　　（近過去形）
（17b）*Marco arrivò da 2 ore　　（遠過去形）
　　（マルコは 2 時間前から着いている）

例（17b）が非文として感じられるのは、遠過去形は時間を表す副詞「da」（〜から）と対立するからである。なぜなら、「da」は現在と何らかの関わりを持っている副詞であるため、現在と絶対的に関わりを持っていない時制である遠過去形とは対立するからである。また、近過去形とは異なり、遠過去形は複合時制ではなく、単純時制であることもこの用法に対して影響を与えていると考えられる。

Bertinetto（1986）では「da+副詞」を可能とするのは複合時制のみであり、これは「設定時点[24]」が存在しているからであると述べられている。要するに、複合時制を用いた例（17a）の場合、副詞は設定時点とその過程の終了の間の経過した時間を推断するのに対し、単純時制を用いた例（17b）の場合、その設定時点がないため描写された事象の結果の残存もないと Bertinetto(1986)は述べている。近過去形及び遠過去形と時間副詞の関係や制限などに関して節 1.7 において検討するため、ここではこれ以上述べないこととする。次に、近過去形と遠過去形の置き替えを可能としない例文として以下の例文[25]も挙げられる。

【置き換えが不可能である例文】

（18a）Un altro esame ancora e hai finito il corso　　（近過去形）
（18b）*Un altro esame ancora e finisti il corso　　（遠過去形）
（試験をもう一つ受ければ課程を終了する）

例（18b）は遠過去形を可能としない例文である。それは、この例文における事象は過去のことを表すのではなく、未来のことを表す例文であるため、必ず発話時以前の事象を描写する遠過去形にとっては不可能な用法であるからである。すなわち、遠過去形は過去における事象のみを描写することができるのに対し、近過去形は未来における事象の描写もできるという相違点がこの例文において明らかになる。近過去形も遠過去形もすでに起こった事象を表し、発話時以前に位置づけることが一般的な用法であるが、以上の例文からわかるように近過去形の用法は時間的に幅が広く、遠過去形が可能としない用法も可能とする。ここで図 2a をもう一度参考にしてみると、次の説明もできる。近過去形における図の場合、点線が発話時までではなく、その以後も続くことが可能であるということが理解でき、これは遠過去形との主な相違であると言える。すなわち、近過去形における図を遠過去形における図を比較してみると遠過去形は過去における事象のみを表すことができるのに対し、近過去形はより幅の広い用法を可能とすることが明らかとなる。

この用法における相違は近過去形と遠過去形の本質によるものであり、一方の「単純時制」である遠過去形は必ず過去において終了した事態を描写する時制である。それとは異なり、他方の「複合時制」[26]である近過去形の適用の幅はより広く、過去に限らず未来的な用法も可能とする時制である。過去時制に限らず、一般的に「単純時制」と「複合時制」における相違として挙げられるのは「設定時点」の有無であり、その存在を認めるのは、すでに述べたように、「複合時制」のみである。ここで、この「設定時点」はどのようなものであるのかという疑問が生じるため、簡潔に説明していく。以下では Bertinetto（1986:173)による「Momento di Riferimento（設定時点）」の定義を紹介する。

"Per MR (Momento di Riferimento) si intende un intervallo di tempo in cui il risultato di un evento viene valutato nella sua compiutezza (si tratta di una nozione squisitamente aspettuale)"
「設定時点」とは、時間区間のことである。その区間においてある事象の結果が完了したものとして解釈される（これはもっぱらアスペクト的な概念である）

以下ではこういった近過去形が可能とする発話時点以降の持続のことに関して説明していくが、その前に近過去形と遠過去形はなぜアスペクトの視点から異なっているかという簡潔な説明も必要である。Bertinetto（1986）においては「完成時制（Perfetti）」の枠に属している近過去形

[24] Bertinetto（1986）では「momento di riferimento (MR)」と呼ばれている。MR とはある事象における完了の局面を示す時間区間のことを表す。完了性を表すため、複合時制のみに関する概念であると述べられている。
[25] Giorgi&Pianesi（2002:51）
[26] 本章では「複合時制」として取り上げるのは近過去形のみである。同じく複合時制である「大過去形」は第六章において分析される。

と遠過去形はアスペクト的な視点で異なり、前者が「compiutezza（完了）」、後者が「conclusione（終結）」を表す時制であるとされている。

L'aspetto compiuto è quella particolare valenza aspettuale che esprime il perdurare nel momento di riferimento dato, del risultato conseguente ad un evento compiutosi in precedenza.[27]
完了的アスペクトとは、設定時点において以前に生起した事象の結果が持続していることを表すアスペクトの一種である。

L'aspetto aoristico è quella particolare valenza aspettuale che designa un processo interamente concluso, di cui viene visualizzato esclusivamente l'istante terminale, senza che tuttavia le conseguenze derivanti dal medesimo vengano considerate attuali dal parante.[28]
アオリスト的アスペクトとは、完全に終了した事象の終了の局面のみを描写するアスペクトの異種である。この場合、発話時点においてその事象の結果は話者にとっては無関係である。

以上のように、アスペクトの視点から考察すると近過去形と遠過去形における相違点が明らかになるが、その相違は上記の例（18a）と（18b）のような例文でより明らかになると言える。
以上の議論に基づいて近過去形により描写された事態に対して**「完了」**、遠過去形により描写された事象に対して**「終結」**という異なる表現を用いることとする。本章もこの区別に基づいて述べていくが、近過去形における「完了」に関してはもう一つの区別をする必要があると提案する。まず、近過去形により描写される事象における「完了」を単なる「compiutezza」（完了）ではなく、「compiutezza provvisoria」（一時的な完了）と呼ぶこととする。それに対して、遠過去形により描写される事象における「終結」を「conclusione definitiva」（最終的な終了）と呼ぶこととする。前者の場合、発話時より前に完了した事象が描写されるが、その完了は発話時においては不定であり、反復の推測もされ得る。それとは異なり、後者の場合、発話時より前に終了した事象が描写されるが反復の推測はされ得ないと言えるだろう。説明として、以下の例文が挙げられる。

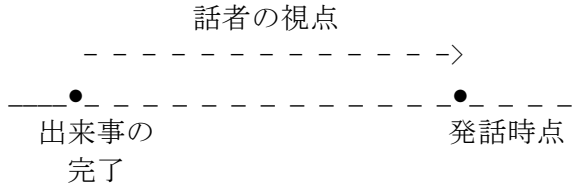
（19a） Lui ha letto la Divina Commedia （近過去形） 「一時的な完了」
（19b） Lui lesse la Divina Commedia （遠過去形） 「最終的な終了」
（彼は神曲を読んだことがある／読んだ）

例（19a）と（19b）を図 2a・2b に沿って説明すると近過去形を用いた例（19a）は過去における事象を表しているが、特徴としてその事象の反復が可能であり、つまりその持続が不明であるという推測ができると言える。故に、「神曲を読む」動作は未来においても可能であるのに対して、遠過去形を用いた例（19b）は過去における事象を表すことしかできず、その事象の反復は不可能であると推測できる。故に、「神曲を読む」動作は未来においても行なわれることがなく、過去の動作の描写にとどまる。このため、前者を「一時的な完了」、後者を「最終的な終了」と呼ぶこととする。このように考えると、例（18a）と（18b）の相違も明らかになってくる。例（18a）が非文となっていないのは、近過去形により描写された事象が反復可能であり、未来における成立を可能とするからである。これを本章では「compiutezza immaginaria」（想像上の完了）と呼ぶこととする。これは「compiutezza provvisoria」（一時的な完了）とは異なり、その事象が必ずしも過去と現在において完了した事象ではなく、話者による想像上の完了を表しているものであるため未来における成立も可能となる。すなわち、例（19a）と例（18a）を以下のような図で説明することができる。

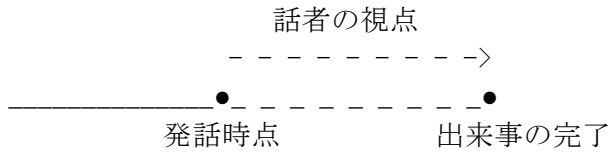
[27] Bertinetto（1986：199）
[28] Bertinetto（1986：429）

図 3. 近過去形における完了性

例（19a）Compiutezza provvisoria　→　発話時における完了



例（18a）Compiutezza immaginaria　→　未来における完了



以上の図で説明できるのは近過去形のみである。遠過去形が不可能であるのは、遠過去形が「完了」ではなく、過去における「終結」の概念を前提とする時制であるからである。

これらをまとめると、Bertinetto と Vanelli が述べているように、近過去形と遠過去形の重要な相違はアスペクトの視点によるものであり、前者は「完了的アスペクト」の視点で事象を描写するのに対し、後者は「アオリスト的アスペクト」の視点で事象を描写する。このことからわかるのは、その事象の反復が可能であるか否かということと、近過去形においては二つの「完了性」が考えられるということである。

最後に、なぜ以上の近過去形における「完了」と遠過去形における「終結」の区別が重要な点であるかについて説明すると、その用法により複文の解釈がかなり異なるからである。すでに述べたように、近過去形における「完了」の特徴は発話時においてその過程の効果残存を表すことであるのに対し、遠過去形における「終結」の特徴はその過程の終了局面のみを表すことである。詳細に述べると、前者の場合、その過程の効果が発話時まで持続しているという話者による心理的な判断が必要であるが、後者の場合、その発話時点までの持続は無関係であり、重要なのはその事象の過去における終了局面のみであると言える。このため、遠過去形は近過去形とは異なり、現在と未来における用法を可能としない。以下に「終結」と「完了」の概念における相違を明らかにする例文[29]を挙げていく。前者は例（20a）の「perse」、後者は例（20b）の「ha perso」に対応する。

【置き換えが可能である例文】

（20a）Per consolarmi, cercai di pensare ad una madre che perse il proprio figlio
（20b）Per consolarmi, cercai di pensare ad una madre che ha perso il proprio figlio
（安堵するために、自分の息子を失ったお母さんのことを考えるようにした）

[29] Bertinetto（1986：430）を参照。

上記の例（20a）と（20b）においては、近過去形の適用も遠過去形の適用も可能とする例文であるが、これまで見てきた例文とは異なり、例（20a）に対する意味と例（20b）に対する意味が同じものではないことに注意すべきである。このように、その「置き換え」が可能であるとしても近過去形を用いた文と遠過去形を用いた文は同じ情報を伝えるとは限らないことが言える。

（20a）遠過去形　→　息子を失ったお母さんが特定できる人であり、その事象は過去においてすでに起こった事象である。

（20b）近過去形　→　息子を失ったお母さんが架空のお母さんであり、その事象の時間的な位置づけは不明である。

より詳しく説明すると、遠過去により描写された例（20a）における「息子を失ったお母さん」が「特定のできる人」であると言えるのは、「すでに起こった事象」であるからである。それとは異なり、近過去形により描写された例（20b）において「架空のお母さん」であると言えるのは、「事象の時間的な位置が不明」であるからである。すなわち、すでに述べたように、近過去形が「完了的アスペクト」を表す時制であるため、その事象の生起が必ずしも過去に限られず、設定時点の位置によって時間が設定できるという説明ができる。設定時点の位置により解釈が変わり、発話時以降に位置づけられているならその事象がまだ生起していない解釈になるのに対して、設定時点の位置が発話時に位置づけられているならその事象が発話時以前に生起した解釈になる。よって、「息子を失う」出来事が起こっていないという解釈も可能であることがそれを認めない例（20a）との重要な相違である。以上のことからわかるように、近過去形と遠過去形の置き換えが常に可能であるという伝統的な説明は不適切である。さらに、その置き換えが可能であるとしてもその時制による解釈が同じではないことも明らかになった。この相違はその時制の本質によるものであると考えられる。

以上のこと、つまり近過去形と遠過去形の相違を以下のようにまとめることができる。

【アスペクトの視点による相違】

・遠過去形は「アオリスト的アスペクト」の視点で事象を表す。
「アオリスト的アスペクト」は過去において完全に終結した事象の最終の局面のみを描写する。
・近過去形は「完了的アスペクト」の視点で事象を表す。
「完了的アスペクト」は過去に限らず設定時点におけるそれ以前に起こる事象の結果の持続を表す。

例（20a）と（20b）においては両方の時制が可能であるが、その時制による解釈が同じではないため、注目すべきである。近過去形（ha perso）を用いた例文においては息子を失ったお母さんが架空のお母さんである上に、その事象の時間的な位置づけが不明であると言える。それに対し、遠過去形（perse）を用いた例文においては息子を失ったお母さんが確認のできる人であるため、その事象が過去においてすでに行なわれた事象であるということがわかる。要するに、ここまで見てきた全ての例文からわかるように近過去形は「不定の時間」を表すが、遠過去形は「確定の時間」を表す時制であると言えるだろう。

また、近過去形と遠過去形の置き替えが常にできるという伝統的な説明が不適切であることが改めて明らかになった。その置き替えが可能である場合においては、話者の心理的な判断が決定的であると言えるが、時制の用法は様々な要因によるものでもあるため、一定の用法を見つけるのが難しい。以下ではここまで見てきた近過去形と遠過去形の共通点と相違点をまとめ、その置き替えが可能であるか否かという点をもとにし、複文における時制の一致のルールに適用していく。これらを整理すると、近過去形と遠過去形の特徴は以下の三つであると言える。

表 1. 近過去形と遠過去形における相違点のまとめ

近過去形	遠過去形
「完了的アスペクト」 事象の完了の局面のみを表す	「アオリスト的アスペクト」 事象の終結の局面のみを表す
「時間的な位置づけの自由さ」 発話時以前ではなく、未来における事象を表すことも可能である	「時間的な位置の確定さ」 必ず発話時以前の事象を表す
「過程の完了の不定さ」 事象の発話時以後の持続または反復が可能である	「時間的な設定の確定さ」 反復や習慣などの解釈が不可能である

以上の表は近過去形と遠過去形における主な相違点をまとめたものであり、これらの相違点があるため、置き換えが可能である場合と不可能である場合がある。また、すでに述べたように、近過去形は複合時制であるのに対して遠過去形は単純時制であるという相違が非常に重要な点であるため、本論はこの区別を基準にして時制に関して論じていく。

1.7 近過去形と時間を表す副詞の関係について

イタリア語の時制に関して述べる際には時制形式の相違についてのみではなく、もう一つの重要な文法カテゴリーについて述べる必要がある。それはいわゆる「時間副詞」である。言うまでもなく、時間副詞と時制形式の組み合わせは自由なものではなく、あるルールに従うものである。従って、ある副詞と時制の組み合わせが決まっており、それ以外の組み合わせは不可能であると言える。しかし、場合により例外が見られることもあるため、注意が必要である。

本章は近過去形と遠過去形の関係を明らかにすることを目的としているため、本節の主題もそれに合わせて近過去形と遠過去形を用いた例文のみを挙げることとする。そうすることにより、改めてそれらの時制における相違点が明らかとなってくる。

1.7.1 瞬間副詞

本章で取りあげるのは avverbiali puntuali（瞬間副詞）である「a/in」（〜に）「fa」（〜前）と avverbiali durativi（継続副詞）である「da」（〜から）である。結論を先に述べると、その相違をよりはっきりと示すのは副詞「da」と「fa」であり、それはさきの節で述べた「完了的アスペクト」と「アオリスト的アスペクト」によるものである。すでに述べたように、それらの時制は同じ枠である「tempi perfettivi」に属しているが、完全に同じ働きをしている時制であるとは言えない。従って、上記のアスペクトによる区別が決定的な区別である。順番として最初に avverbiali puntuali である「a/in」（〜に）と「fa」（〜前に）の説明をし、その後に avverbiali durativi である「da」（〜から）の説明をしていく。

一般的に、avverbiali puntuali（瞬間副詞）は二種類に分けられ、それらは「直接副詞」と「関係副詞」である。前者は特定の時点に事象を位置づける「alle 5」（5 時に）のような副詞を含む組

であるのに対し、後者は二つの時点の相関関係を表す「fa」のような副詞を含む組である。以下では「a/in」（〜に）を用いた例文を参考にしよう。

（21a）Gianni partì alle 5　　（遠過去形）
（21b）Gianni è partito alle 5　　（近過去形）
（ジャンニは５時に出発した）

特定の時点
↓
_____●_____●
５時に　　今

例（21a）と（21b）は「出発する」という事象を過去における特定の時点（５時）に位置づけており、解釈に関する問題は生じない。このことから「完成時制（tempi perfettivi）」である近過去形と遠過去形はこの副詞との組み合わせを可能にするということが言える。しかし、関係副詞である「fa」の用法においては問題が生じる。一般的に、この副詞は近過去形のみを許すとされているが、本章では遠過去形の適用も可能であると考える。まず、なぜ一般的に遠過去形の適用が不可能であるとされているかを説明していく。すでに述べたように、「関係副詞」とは二つの時点の間の時間区間を表す副詞であり、可能性としては発話時点と過去における時点の区間または過去における時点とその他の過去における時点の区間が挙げられる[30]。「fa」は過去における事象と発話時点の区間を表す副詞である。説明として以下の例文が挙げられる。

（22a）Gianni partì due ore fa　　（遠過去形）
（22b）Gianni è partito due ore fa　　（近過去形）
（ジャンニは 2 時間前に出発した）

Bertinetto（1986）では例（22b）とは異なり、例（22a）が非文として扱われ、それは「fa」が「〜前に」という意味であり、発話時点を基準としているため、現在と関わりのない遠過去形とは対立するからであると説明されている。そして、非文であるのは遠過去形が「アオリスト的」時制であり、この時制により描写された事象は終了の局面のみを表すことも関係している。従って、事象の終了から発話時までの過程とその効果が無関係である。以下では一般的な「fa」の用法を図で説明する。

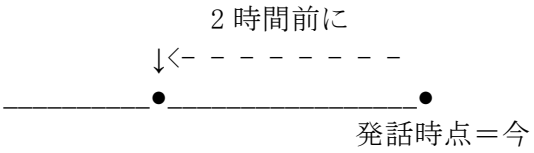
図 4.　「fa」 →　発話時と関係がある時点　→「以前」

｜<ーーーーーーーーー
_____●_____●
2 時間前に　　発話時点＝今

図 4 からわかるように、基準となる時点は「今」であるため、論理的には遠過去形との組み合わせが不可能であるはずであるが、必ずしもそうではないという点を以下で述べていく。その場合二つの可能性がある。一つは遠過去形の本質を考え直すこと、つまり現在と繋がっているということであり、もう一つは副詞の解釈を変えることである。本章で主張するのは後者である。すなわち、「fa」を「以前」のこととしてではなく、「そのとき」の意味としても考えればよいと提案する。

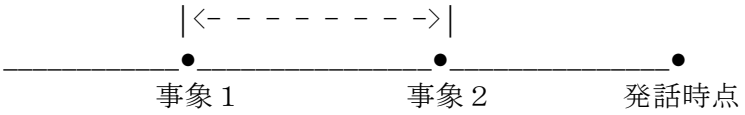
[30] 未来における時点も可能であるが、本論では扱わないこととする。

図 5.「fa」 →　発話時と関係がない時点　→　「そのとき」



結局、「fa」は必ずしも発話時点と直接的関係があるのではなく、過去における事象の終了の局面のみを表すこともできると言える。その際には遠過去形と共に用いることが可能となり、ここで遠過去形の「特定の一時点」を表す特徴が改めて明らかとなってくる。参考のため、過去における時点とその他の過去における時点の区間を表す相関副詞の説明も簡潔に行なっていく。このような場合を表す副詞は「prima」（〜前に）であり、以下の図でその用法を見てみよう。

図 6.「prima」の用法　→　発話時を基準としない用法



「fa」と異なり、この場合においては発話時点が無関係であり、過去における二つの時点の間の区間のみを表す副詞であることがわかる。

最後に、例（21a）・（21b）と（22a）・(22b）からわかるように、時制の本質、つまり発話時との関係または事象の完了・終結に対する態度は副詞の用法にも影響を受けるため、近過去形と遠過去形の区別が非常に重要な点であると言える。

1.7.2　持続副詞

本節では、持続副詞の近過去形・遠過去形における用法に関して述べていく。瞬間副詞と同様に持続副詞も二種類に分けられ、それは「da」（〜から）に関する分類である。一つ目は「da due ore」（2 時間前から）のような意味を含む用法であり、二つ目は「dalle 2」（2 時から）のような意味を含む用法である。瞬間副詞とは異なり、この副詞は二つの時点の相関関係のみを示す副詞であるため、ある時点との直接関係を表す副詞ではない。言うまでもなく、この副詞と共に適用ができるのは持続動詞のみであるため、以下の例文においては持続動詞のみを取りあげることとする。

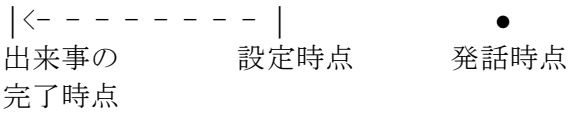
（23a）Gianni ha dipinto la parete da due ore　　（近過去形）
（23b）*Gianni dipinse la parete da due ore　　（遠過去形）
　　（ジャンニは 2 時間前壁に色を塗った）

（24a）Gianni ha dipinto la parete dalle due　　（近過去形）
（24b）*Gianni dipinse la parete dalle due　　（遠過去形）
　　（ジャンニは 2 時から壁に色を塗った）

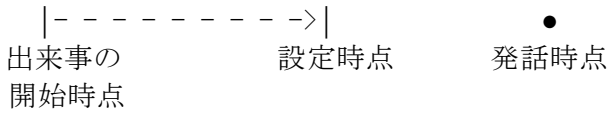
副詞「da」が関係副詞であるため、遠過去形の適用が不可能であるのは当然である。そこで、問題なく適用ができるはずの近過去形の用法を詳しく分析する必要があるが、その副詞の適用をした場合に生じる近過去形を用いた例（23a）と（24a）の相違に関して説明すべきである。いずれの例文の場合も、二つの時点の間の時間区間が定められるが、完全に同じ解釈が出来るとは言えない。Bertinetto&Bianchi(1996)は以下の通り説明している。

図 7. 「da」に関する解釈

（23a）



（24a）



上記の図は設定時点[31]と発話時点が一致していない場合を表しているが、一致する場合もあるため、参考のためにまとめて以下の図によりその場合も表す。

図 8. 「da」に関する解釈

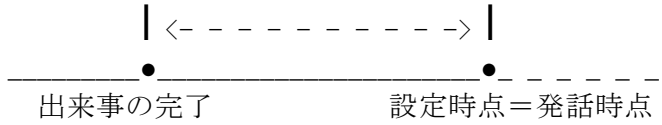


図 7 からわかるように、矢印の方向が同じではないが、これは何を表しているかを以下で説明していく。「da」により描写された事象はある区間を表すが、例（23a）の場合はその出来事の完了から設定時点（または発話時点）までの区間を表すのに対し、（24a）の場合はその出来事の開始からの区間を表す。要するに、例（23a）における解釈はジャンニが壁に色を塗り終わったのは 2 時間前のことであり、例（24a）における解釈はジャンニは 2 時から壁に色を塗り始めたということである。このため、Bertinetto&Bianchi（2001）はそれらの用法をそれぞれ「backward-oriented」と「forward-oriented」と呼ぶこととしている。上記の図においては「設定時点」という名称が現れ、それはすでに言及したように、複合時制の特徴であり、単純時制である遠過去形には存在していない概念である。以上に述べたように、「da」を可能とするのは複合時制のみであるが、必ずしも可能であるとは限らず、動詞の意味の制限の影響も大きい。参考のために、以下の例文が挙げられる。

（25a）*Gianni ha lavorato qui da due anni
（ジャンニは 2 年前からここで働いていた）

[31] Bertinetto は複合時制の説明をする際には必ず「設定時点」を導入する。

（25b） Gianni ha lavorato dalle due
（ジャンニは 2 時から働いた）

例（25a）においても例（25b）においても近過去形、つまり複合時制が適用されているのに正しい文として感じられるのは例（25b）のみである。例（23a）と同じ構造であるため、例文（25a）においてもジャンニの「仕事する」という事象が 2 年前に終わったという解釈となるはずであるが、これが正しい文として認められない。ここで説明として考えられるのは動詞の意味または性質の制限のことである。すなわち、「dipingere」と「lavorare」の動詞の性質が異なるため、当然、副詞との適合性も異なるということである。すでに述べたように、例文（25a）と（25b）は同じ動詞を用いた例文であるが、正しい文として認められているのは例文（25b）のみである。そこで、次の説明が考えられるが、再び図 7 を参考にする必要がある。図 7 からわかるように、「da due ore/anni」は「back-oriented」であるため、現在から離れていく出来事を表す。それに対し、「dalle due」は「forward-oriented」であるため、現在、つまり発話時に近づいていく出来事を表す。従って、話者は例（25b）における「da」が発話時点に近づいているように感じるが、例（25a）における「da」が発話時点から離れていくように感じると言える。そのため、現在とは関わりのないように感じられるため、この近過去形の用法が認められていない。そこで、この例文を正しくさせるためには二つの手段が可能である。まず、ジャンニはまだ仕事しているか否かのことを述べることである。もし仕事をしていないなら「da」の代わりに「per」の適用が正しい手段であり、そうすると過去における区間を表すこととなる。それに対し、まだ仕事をしているなら副詞を換えるのではなく、時制を換えるのがより正確な手段であろう。この場合、近過去形の代わりに現在形を用いるのはより自然な選択となる。

結論として言えるのは遠過去形と近過去形の相違点が副詞の適用によっても明らかとなり、これはそもそも単純時制と複合時制の違いに関するものである。さらに言えるのは近過去形と現在形の共通点も明らかであるということであるが、この点に関しては後ほど述べるため、ここでは省略する。

1.8 イタリア語における時制の一致について

「時制の一致」とは、主節と従属節双方の動詞の時間的相関関係を捉えた概念であり、イタリア語や英語のような言語では、その相関関係が固定されている。イタリア語においては強制的であると思われているが、本章では必ずしも強制的であるとは限らないという視点から議論する。この点に関しては第六章においてより詳しく説明するが、本章は一般的なルールを対象とする。Vanelli&Salvi（2004）では、「牽引ルール（Regola di attrazione）」によって主節の時制が過去時制である場合、従属節の時制もその影響を受け過去形になるとされている。説明として以下の例文が挙げられている。

（26）Gli dissi/ho detto che partivi[32]
（私は彼にあなたが出発すると言った）

上記の例文の主節において遠過去形と近過去形が両方とも可能であるが、これはテンスの視点からの説明である。本論では、近過去形の二重性を認めるため、主節において用いられた近過去形が「完了的」用法であるのか、「アオリスト的」用法であるのかということにより従属節の時制が変わると主張する。近過去形が「完了的」用法の場合と「アオリスト的」用法の場合とで、従属節においてどの時制が認められるかという疑問が生じるが、この点に関して論じる前に、一般的にどのような時制の組み合わせが可能であるかを見ていく。まず、主節の時制が現在形の場合から例文を挙げる。

[32] 従属節における半過去形の適用については Giorgi（2002，2010）と本論の第七章を参照。

【主節の時制が現在形】

（27a）Gli dico che parti　　現在形＋現在形　→　同時性
（私は彼にあなたが出発すると言う）

（27b）Gli dico che sei partito　　現在形＋近過去形　→　先行関係
（私は彼にあなたが出発したと言う）

（27c）Gli dico che partirai　　現在形＋未来形　→　後続関係
（私は彼にあなたが出発すると言う）

定義から見たように、現在形は同時性の視点から動作を位置づける時制であり、その動作と発話時が一致するという特徴を持っている。そして、上記の例文からわかるように、主節が現在形により描写された事態との同時性を表すのは現在形、先行関係を表すのは過去時制、後続関係を表すのは未来時制である。次に、主節が未来形の場合を見てみよう。

【主節の時制が未来形】[33]

（28a）Gli dirò che parti　　未来形＋現在形　→　同時性
（私は彼にあなたが出発すると言う）

（28b）Gli dirò che partirai　　未来形＋未来形　→ *同時性
（私は彼にあなたが出発すると言う）

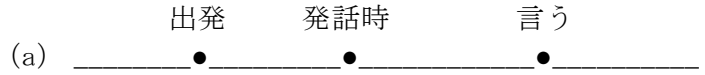
上記の例文からわかるように、通常同時性が現在形で表現される。従属節の現在形は直示的な時制として解釈するのではなく、同時性を表す時制として考えるべきである。次に、先行関係と後続関係を表す時制の組み合わせを見てみよう。

（29a）Gli dirò che ieri sei partito　　未来形＋近過去形　→　先行関係

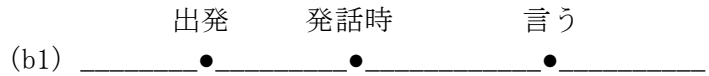
（29b）Gli dirò che sei partito　　未来形＋近過去形　→　後続関係

（a）の場合、主節と従属節の時間枠が異なっている[34]（直示的な未来形と過去形）ため、時制の一致が実施されない例文である。すなわち、近過去形により描写された事象は、必ず過去における事象として解釈される。それとは異なり、（b）の場合、主節との関係が現れ、従属節において用いられる近過去形と例（29a）の近過去形の本質が異なる。なぜなら、近過去形は従属節において用いられると直示的な意味を失うため、後続関係を表すことも可能となるからである。ただし、この場合、発話時との関係が曖昧となり、文脈の役割が大きいと言える。例文（29a）と（29b）の相違を次の図で説明する。

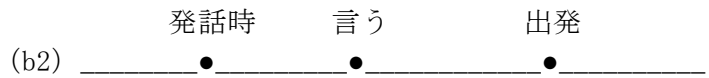
[33] 本論では主節が未来形の場合に関してはこれ以上述べないこととする。
[34] 副詞「ieri」の追加によりその時制の直示的な用法が明らかとなる。



(a) _____●_____●_____●_____



(b1) _____●_____●_____●_____



(b2) _____●_____●_____●_____

続いて、後続関係を表す例文を見てみよう。

(30) Domani gli dirò che partirai/parti　　未来形＋未来形／現在形　→　後続関係
(私は彼にあなたが出発すると言う)

以上の例文からわかるように、後続関係を表すのに現在形も未来形も可能となる。最後に、以下では本論の中心となっている時制の組み合わせに関して述べていく。

【主節の時制が過去形（近過去形／遠過去形）】

(31) Gli ho detto/dissi che partivi　　近過去形／遠過去形＋半過去形　→　同時性
(私は彼にあなたが出発すると言った)

主節の時制が過去形の場合、様々な問題が生じてくるため、主節の時制が現在形の場合よりも複雑であると思われる。以下では、まず同時関係がどのように表現されるかを説明し、次に先行関係、最後に後続関係の順番で述べていく。

以上の例（31）からわかるように、通常、主節の過去時制との同時性を表す時制は半過去形である[35]。当該の例文は補足節であるため半過去形の適用は強制的であり、このルールは「牽引ルール」と呼ばれるが、節の種類により時制の適用[36]が変わる場合もあることに注意すべきである。次に、先行関係がどのように表現されるかを見ていく。

(31a) Gli ho detto che sei partito　　近過去形＋近過去形　→　先行関係
(私は彼にあなたが出発したと言った)

(31b) Gli ho detto che eri partito　　近過去形＋大過去形[37]　→　先行関係
(私は彼にあなたが出発していたと言った)

(31c) Gli ho detto che partivi　　近過去形＋半過去形　→　先行関係
(私は彼にあなたが出発したと言った)

---

[35] 主節の動詞により接続法が用いられる場合もある。
[36] 第七章を参照。
[37] 本章では大過去に関しては述べないが、参考のために例文に適用することにした。

それぞれの例文からわかるように、主節の過去時制との先行関係を表すには従属節においては近過去形、大過去形、半過去形（反復と習慣的な動作のみ）が用いられる。さらに言えるのは過去時制の中で主節の過去時制に対する先行関係を表す時制は大過去形[38]のみである。それに対して、近過去形と半過去形は本質的に発話時との先行関係しか表さないが、文脈により主節との先行関係を表すことも可能となる。ただし、従属節の時制が半過去形である場合、解釈に曖昧さが生じるため、非常に複雑である。具体的には二つの解釈が考えられ、それらは「主節の時制より前」と「主節の時制と同時」のいずれかである。このような場合には文脈の影響が大きく、それにより判断が可能である。そして、遠過去形の適用には制限があるということに注目すべきである。この制限は従属節の適用におけるものである。すでに述べたように、遠過去形は厳密に直示的な時制であるため、発話時に後続する関係の解釈を認めない。次の例文で説明してみよう。

（32）*Gli dicevo che tu partisti[39]　　*半過去形＋遠過去形
（私は彼にあなたが出発したと言っていた）

最後に、後続関係を表す例文を見てみよう。

（33a） Gli ho detto che partirai/parti　　近過去形＋未来形／現在形 → 後続関係
（私は彼にあなたが出発すると言った）

（33b） Gli ho detto che saresti partito/partivi　近過去形＋条件法過去形／半過去形 → 後続関係
（私は彼にあなたが出発すると言った）

例文（33a）と（33b）では、過去時制で表現されている出来事以後の出来事が発話時の前と発話時の後に位置づけられている。前者の場合、二つの出来事が異なる時制枠に属するため時制の一致が実施されず、直示的な未来形か現在形が適用される。後者の場合、主節の時制との後続関係を表す例文であり、この場合は発話時との位置は無関係である。これは時制の一致のルールに従うため、従属節には条件法か半過去形が必要とされる。半過去形は過去における同時性を表す時制であるため、主節の過去時制以後のことを表すこともできる。ここまで見てきたように、例（26）～（33）の時制の組み合わせを以下の図でまとめることができる。

図 9. 伝統的な時制の一致[40]

現在形	↗ 未来形／現在形			
	→ 現在形			
	↘ 近過去形／半過去形			
未来形	↗ 未来形／現在形	（後続関係）		
	→ 現在形	（同時関係）		
	↘ 近過去形	（先行関係）		

過去形（近過去形、半過去形、遠過去形、大過去形）	↗ 条件法過去形／半過去形／未来形	（後続関係）
	→ 半過去形	（同時関係）
	↘ 近過去形／遠過去形／大過去形／半過去形	（先行関係）

[38] 大過去形は複合時制であるため、「設定時点」を必要とする時制である。
[39] ただし、主節に近過去形が現れた場合、従属節において遠過去形を用いることが出来る。なぜなら、簡潔に言うと、近過去形により描写された出来事の影響は発話時まで持続するからである。
[40] Vanelli（2004）

ここまで述べて来たように、イタリア語の時制は強制的であり、文法ルールにより決定された組み合わせ以外の組み合わせは不可能である。しかし、発話の際に複数の時制から選択するのは話者であり、その話者は相手に伝えようとする内容を自分の視点から伝えるため、当然、時制の選択などには個人差もある。

1.9 主節における過去時制について

以上に触れたように、イタリア語や英語のような言語では、主節と従属節の相関関係が日本語と異なり、固定している。すなわち、従属節の時制が主節の時制により決定される。これができるのは一致のルールが存在しているからである。しかし、その時制の一致のルールが実際にどのように適用されているかという疑問が生じる。また、イタリア語の場合、過去時制に属する時制の数が多いため、どの時制を選択すればよいかという疑問もしばしば生じる。

前節において述べたように、伝統的な文法では主節の時制が過去時制である場合、従属節の時制もその影響を受け過去形となるとされている。しかし、そうでない場合、つまり過去形でなくても適用が可能である場合もあると考えられる。例（31）などでも見たように、主節においては可能な時制が二つであり、それらは近過去形と遠過去形である。すでに 1.1 節で説明したように、この二つの時制の関係が曖昧であり、その使い分けは話者の視点によるものであると一般的に説明されている。しかし、この場合、話者の視点のみではなく、様々な制限が存在しているため、常に置き換えることが可能であるとは言えない。さらに、主節の時制をどちらにするかにより従属節の時制もその影響を受けるということにも注目すべきである。近過去形と遠過去形は発話時より前に行なわれた事象のことを表すという共通点を持っているが、現在との関係の点に関しては異なっているという説明ができる。これはどういうことであるのかを以下で説明していく。まず、一般的な用法をもう一度述べる。

「近過去形」は、過去時制の中で一番よく用いられる時制であり、現在と何らかの関係のある過去を示すのが本来の働きである。そして、話者や聞き手のその出来事への主観的関心や参加意識を伴うことが多い。ただし、発話時との距離はあまり関係がなく、昔の出来事でも近過去形で描写することが可能である点を見てきた[41]。すなわち、以下の場合で用いられる。

a. 現在と関係のある出来事
b. 話者が関心を持っている過去の出来事

これに対し、「遠過去形」は現在とは全く関係のない過去の一時点に起こったかまたは一定期間続いたような動作・状態を表すことを特徴とする時制である。物理的にも心理的にも現在とは切り離された過去で、その時間の長短にかかわらず、動作•状態は厳密にまとまった「形」として捉えられる。すなわち、以下の場合で用いられる。

a. 現在と関係のない出来事
b. 話者が関心を持っていない過去の出来事

要するに、すでに述べたように、遠過去形と近過去形は共に過去において終了した動作または状態を表す時制であるが、現在との関わりはその二つの時制の主な相違である。その上、両方の時制の適用が可能である場合には、時制を決定するのは話者の伝えようとする情報であるということが言える。すでに見たように、遠過去形により描写された出来事は過去の一時点に起こった客観的史実として述べているのに対し、近過去形により描写された出来事は話者にとって事実として認識され、その出来事の後の歴史が続いていることも伝えようとする主観的なニュアンスが含まれている。そこで、そのどちらにするかを決定するのは話者である。しかし、話者の判断にも制限があり、動詞の意味や副詞との組み合わせなどにより、その置き替えが常に可能であると

[41] ただし、話者によっては昔の事象なら発話時における効果と関係なく、遠過去形で描写する傾向もあるようである。

は限らないということも明らかとなった。参考のため、以下の例文が挙げられる。誰かが友達のお茶に毒を入れたとして、お茶を飲んだ人が以下の発言をする。

（34a）Mi hai ucciso　　（近過去形）
（34b）*Mi uccidesti　　（遠過去形）
（あなたは私を殺す）

この場合、有毒なお茶を飲んだ人による可能な発言は（34a）のみである。この例文からわかるように、話者の関与または関心のみではなく、語用論的な制限も時制に影響を与えると言える。その上、すでに分析したように時間副詞の影響も大きいということもわかった。ここまでは近過去形と遠過去形の相違を説明するために単文のみを参考にしたが、以下では複文を参考にしていく。まず、もう一度例文（31）を参考にしよう。

（31）Gli dissi/ho detto che partivi　　（遠過去形／近過去形＋半過去形）
（私は彼にあなたが出発すると言った）

すでに述べたように、上記の例（31）の主節において遠過去形と近過去形が両方とも可能であるが、これはテンスの視点からの説明である。本論では、近過去形の二重性を認めるため、主節において用いられた近過去形が「完了的」用法であるか、「アオリスト的」用法であるかにより従属節の時制が変わると以下で論じていく。近過去形が「完了的」用法の場合、従属節において現在形の適用も可能となる。説明として以下の例文が挙げられる。近過去形も遠過去形も可能とする例（31）を以下の例（35）と比べてみよう。

（35）Gli *dissi/ho detto che parti（oggi）　　（遠過去形／近過去形 ＋ 現在形）
（私は彼にあなたが今日出発すると言った）

以上の例文をより分かりやすく説明するために、以下のような二つの文に分けることとする。

（35a）*Gli dissi che parti　　（遠過去形 ＋ 現在形）
（私は彼にあなたが出発すると言った）

（35b）Gli ho detto che parti　　（近過去形 ＋ 現在形）
（私は彼にあなたが出発すると言った）

例（35a）においては遠過去形の適用は不可能である。上記の定義によると遠過去形は現在形と関係のない時制であるため、当然例（35a）の主節における遠過去は従属節の現在形と対立する。そして、図 9 からもわかるように、主節の時制が過去形の場合、従属節においても過去時制が必要となり、これは時制の一致のルールに従うものである。ここで疑問に思われるのは近過去形の適用である。つまり、近過去形は遠過去形と同様に過去時制であるのになぜ同時性において従属節の現在形と対立せず、例（35）においては適用が可能であるかという疑問が生じてくる。

このように、従属節の時制が過去時制ではないため、例（35b）は非文であるように感じられる。よって、正しい例文として認められるために、過去形を適用しなくてはならない。若しくは、従属節の時制を変えるのではなく、主節の時制を変えてもよいと考えられる。それにより、従属節の現在形との対立がなくなる。しかし本章では例（35）が実際は時制の一致のルール違反ではないと考えられる点について、以下のように説明する。例（35）は同じ時間枠に属していない時制から成り立っているため、直示的な時制として解釈すべきであり、時制の一致のルールに従っていないようであるが、近過去形の特性とその機能をより詳しく分析すると時制の一致のルールに従っていると言える。例文（35b）と以下の例文（36）を比較してみると、次のことが言える。

（36）Gli ho detto che parti oggi　　（今日）　　（近過去形＋現在形）
（37）*Gli ho detto che parti quel giorno　（その日）　　（近過去形＋現在形）

以上の二つの例文は同じ時制を適用しているのに例（37）は非文であるのに対し、例（36）は正しい文である。ここで相違として考えられるのは副詞である。言うまでもなく、時間副詞の影響が大きいが、ここで注目すべきなのは近過去形の本質である。すでに述べたように、近過去形は現在と何らの関係を持つ時制であるため「oggi」（今日）という副詞とは対立するはずはないが、それに対して「quel giorno」（その日）という副詞とは対立する。なぜなら、恐らくその副詞は現在とは無関係であるためであると考えられる。そこで、二つの種類の近過去形が存在しているという提案ができるだろう。一つ目は現在と関係のある近過去形であり、従属節においては現在形を可能とする。それとは異なり、二つ目は現在と関係のない近過去形であり、従属節においては過去時制のみを可能とする。まとめとして、以下のように説明ができる。

表 2. 近過去形における二重性

・現在と切り離されている近過去形　→　遠過去形と同じ扱い
・現在と切り離されていない近過去形　→　現在形と同じ扱い

よって、以下の例文からわかるように、近過去形の代わりに現在形を適用すると同じルールに従うこととなる。

（38）Gli dico che parti　→「ho detto」=「dico」
（現在形＋現在形）→（近過去形）=（現在形）

以上のことから、主節の時制が近過去形の場合、その近過去形の用法により時制の一致のルールが異なってくることがわかった。まとめると、本論は主節における過去時制を以下のように分けることができると提案する。

表 3. 主節における過去形の対立

主節	アスペクト			
・遠過去形	アオリスト的	→	現在と関係なし	
・近過去形（I）	アオリスト的	→	現在と関係なし	（遠過去形と同じ機能）
・近過去形（II）	完了的	→	現在と関係あり	（現在形と同じ機能）

上記の例文と表３により、次のように時制の一致のルールをまとめることができる。主節において遠過去形が用いられた場合、「牽引ルール」に従って従属節において用いられるのは過去時制であるが、主節において近過去形が用いられた場合、二つの可能性がある。近過去形が「アオリスト的」（すなわち近過去形 I）であるなら、従属節において過去時制の適用が適切であるのに対して近過去形が「完了的」（すなわち近過去形 II）であるなら、従属節において現在形の適用が可能であるということになる。

まとめとして、近過去形の本質に合わせた主節と従属節の時制の組み合わせがどうなるかを以下の図で説明してみよう。以下の図の左側は主節の時制が現在形または現在から切り離されていない近過去形の場合の組み合わせであり、右側は主節の時制が現在と切り離されている過去時制の場合の組み合わせである。

図 10. 近過去形の本質に合わせた時制の一致のルール[42]

現在形	↗	未来形／現在形
＋	→	現在形
近過去形（II）	↘	近過去形

過去形	↗	未来形／現在形／条件法過去形
（近過去形（I）／遠過去形）	→	半過去形
	↘	近過去形／遠過去形[43]

上記の図からわかるように、主節の過去時制が現在と切り離されているか否かにより、ルールが異なってくるということが言える。最後に、この図の時制を適用すると以下のような例文が可能となる。ただし、ここでは近過去形と遠過去形の置き替えとそれらの時制と現在形の関係が中心であるため、以下では全ての組み合わせを用いた例文は扱わないこととする。

a. 主節の時制＝現在形または現在と切り離されていない過去形（近過去形のみ）

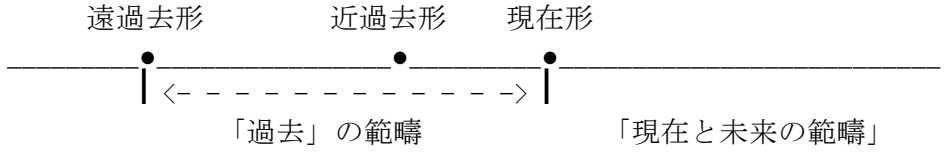
Gli dico/ho detto che	partirai/parti	（後続関係）
Gli dico/ho detto che	parti	（同時関係）
Gli dico/ho detto che	sei partito	（先行関係）

b. 主節の時制＝遠過去形または現在と切り離されている近過去形

Gli ho detto/dissi che	partirai/parti	（後続関係）
Gli ho detto/dissi che	partivi	（同時関係）
Gli ho detto/dissi che	sei partito/partisti	（先行関係）

以上は過去時制である近過去形と遠過去形の本質の相違に合わせた時制の一致のルールである。伝統的な文法においては過去時制である近過去形と遠過去形は過去に行なわれた事象を表し、相違としては話者の心理的な判断のみとされていた。その上、現在形とは全く関係のない時制として解釈されていたが、これは正確ではない。以下のような図で説明ができる。

図 11. 時制に関する伝統的な説明



[42] 主節の時制が未来形の場合に関しては述べないこととする。
[43] 従属節における遠過去形の適用は主節の時制が近過去形の場合のみとなる。

しかし、ここまで見てきたように、近過去形も現在と関係のある時制であり、発話時以降の事象を描写することも可能とするため、近過去形は必ずしも「過去範疇」に入るとは限らないと言える。この近過去形の多様さは複合時制であることに関係するものである。何度も述べたように、近過去形と遠過去形により描写される事象はすでに完了しており、相違として考えられるのは「完了的アスペクト」と「アオリスト的アスペクト」による相違である。近過去形により描写される事象はすでに完了しているため、現在とは無関係であると思われるが実際にはそうではない。要するに、その事象は発話時まで持続する可能性もあり、それ以後にも持続する可能性もあるのである。それと異なり、必ず発話時より前に起こった事象を表すのは遠過去形である。この近過去形の多様さは現在形との共通点の一つであり、近過去形を「現在の過去」と呼ぶにふさわしい理由でもある。現時点で焦点となるのは、発話時との距離ではなく話者の視点であるとすでに述べてきた。これは話者にとってその事象の結果または状態が発話時においては重要であるか否かということであり、そこから「過程の現在における重要性」（rilevanza attuale del processo）という心理的な概念が重要となる。複合時制の一つの特徴として事象を時間軸において位置づけることより重要なのは、その事象の終了局面を表すことである。従って、複合時制である近過去形も時間的な特性を失い、その事象の結果のみを強調することとなる。

1.10 まとめ

本章の目的は、イタリア語の現在形、近過去形と遠過去形の相関関係を明らかにすることであるため、例文を挙げながらこれらの時制の本質やその機能について説明した。まず、伝統的な説明による近過去形と遠過去形の置き替えが常に可能ではないということが明らかになった。その置き替えが可能である場合、話者はその事象に対する関与により時制（近過去形か遠過去形か）を決めるということが言えるが、話者はその事象に対する関与に基づいて時制を決めることができない場合も多い。これはこの二つの時制の本質の制限に関するものである。伝統的には近過去形と遠過去形が両方とも過去時制であるためその間には相違点がない（話者の視点のみ）とされているが、実際はそうではない。様々な例文を挙げながら考察し、遠過去形における用法は幅が狭いのに対して近過去形における用法は非常に幅が広いということがわかった。また、説明したように、この二つの時制の区別が重要な点であり、これに基づいて時制の一致のルールを見直すことができる。本章で中心となったのは主節の近過去形における区別であり、それは「現在と切り離されている近過去形」と「現在と切り離されていない近過去形」という区別である。前者は遠過去形と同じ働きを果たす近過去形の場合であるのに対し、後者は現在形と同じ働きを果たす近過去形の場合であるとした。この主節の時制の区別に合わせて従属節の時制が決まると言えるため、非常に重要な区別である。こういった区別は近過去形と遠過去形の本質によるものであり、説明としてこの二つの時制は同じ事象を異なるアスペクト的な視点から描写するということが挙げられる。要するに、遠過去形の場合、事象がアオリスト的な視点のみから描写されるのに対し、近過去形の場合はその事象が二つの視点から描写されるということが考えられる。一つ目は遠過去形と同様にアオリスト的視点であり、この場合は遠過去形との置き替えが可能であるが、二つ目は完了的視点であり、この場合は遠過去形との置き替えは不可能であるが、現在形との置き替えは可能であると提案できる。

第二章

現在形の機能と近過去形の間の中立化について

伝統的な説明において直説法現在形の本質的機能は、現在時、すなわち発話行為の瞬間に起こっている出来事を表現することであるとされている。Fornaciari(1881)は以下の定義を述べているが、Bertinetto(1986)と Vanelli(2002)はその定義が不完全であるとし、それに対して問題点を指摘している。

'Il presente è il Tempo indicante propriamente un processo che accade o esiste nel momento in cui parliamo, sia che cominci o duri o finisca'
現在形は発話時の瞬間に起こっている過程または存在している過程を表す時制である。その過程の開始、継続または終了は無関係である。

言うまでもなく、Bertinetto と Vanelli が述べているように、上記の定義は不完全なものであり、より詳細な説明が必要である。実際、現在形は現在時に関わる出来事のみではなく、未来や過去の出来事を表現することもできる[44]。説明として以下のような例文が挙げられる。

(39) Parti per Roma domani?
(明日ローマへ経つ？)

(40) Il 2 giugno 1948 gli italiani votano a favore della Repubblica.
(1948 年 6 月 2 日イタリア国民は共和国に賛成投票する)

例(39)における現在形は翌日の出来事、つまり未来を表す文脈において用いられている現在形であるのに対し、例(40)における現在形は 1948 年、つまり過去に属する出来事を描写する「歴史的現在」である。例(39)も例(40)も伝統的な定義に従わず、現実の時間として「現在」に対応している現在形を用いる例文ではないことが明らかである。この現象の説明として、例(39)に関しては、発話時点において「明日ローマへ経つ」という状態にあるか否かが問われていると解釈可能であるということ、例(40)に関しては、話者が 1948 年当時に視点を移し、発話時点での出来事のように描写されているということが言える。従って、直説法現在形の用法は発話時を内包するものにとどまらず、過去や未来の表現にも及ぶ。伝統的定義においてはそれらを説明することができず、例外的なものとして説明されていた。以下では現在形における様々な用法に関して述べていく。

2.1 現在形における用法

上記のように、現在形の用法は幅が広く、以下でそれらの用法をまとめていく[45]。「現在形」には、過去と未来を表す用法が多いが、当然伝統的な説明に従う用法も存在している。この直示的用法は動詞の性質と副詞の組み合わせによるものであるため、常に可能であるとは限らない。例

[44] ただし、過去の出来事の表現においてはある制限があり、必ずしも現在形が可能であるとは限らない。
[45] 本節における全ての例文は Bertinetto(1986)から引用したものである。

を挙げると、「in questo momento（ちょうど今）」のような副詞を用いる場合、現在形は継続動詞を必要とするが、継続でない動詞を用いることも可能である。しかし、そうすると現在形の伝える意味が変わってくる。以下の例文を参考にしよう。

（41）In questo momento Carlo dorme
（カルロはちょうど今寝ている）

（42）In questo momento Carlo esce
（カルロはちょうど今出かける）

例（41）と（42）の相違として、非継続動詞を用いる後者は「presente riportivo」[46]の用法となり、第三人称の適用のみ許容されると言える。また、非継続動詞を適用する際には、現在形は「subito, adesso（すぐ、今）」のような副詞を必要とすることにも注目すべきである。

（43）Vengo subito
（すぐ行く）

（44）Adesso parto, guarda!
（今出発する、見て！）

（45）Arrivo adesso da casa
（家から今来ている）

以上の例文からわかるように、現在形により描写された出来事は間近の出来事または最近起こった出来事であり、現在形の本質的な直示的特徴がなくなる[47]。従って、このことから言えるのは発話時という概念を見直すべきであることである。すなわち、時間的により広い意味を認める必要があると考えられる。なぜなら、こういった拡大した時間を表す現在形の適用がかなり多いからである。「現在形」には、特定の時間を表さない用法があり、時間の制約なしに一般的に成り立つ命題を表す現在形も存在している。この現在形により描写された出来事が一般的に成立するものであるため、当然現在時でも成立する。以下の例を参考にしよう。

（46）La fortuna è cieca
（運命は気まぐれです）

以上のような例に関しては様々な説明があり、Borgato et al.（1976）は現在形がそれ自身としてはいかなる時制的価値も持っていないと述べている。また、Bertinetto（1986）は現在形が時間的価値を持っているか否かという問題に関しては触れず、客観的な断定、つまり否定のできない事実（科学的定義や道徳観念など）を表す時制であると説明している。いずれの説明においても時間との関わりはほとんど感じられないという結果が生じるため、現在形が時制ではないと考える研究者が多い。

次に、現在形と発話時の相関関係に関する用法を見ていく。これは三つの枠に分けることができる。それらは「同時性」「先行関係」「後続関係」であり、この順番で説明していく。

【同時性】

同時性を表す代表的な用法は四つであり、それらは（a）継続的現在（b）瞬間的現在（c）即時現在（d）習慣的現在という用法である。

[46] 試合の生中継などでよく用いられる用法である。
[47] Bertinetto（1986）における説明である。

（a）の現在形により描写された事象は発話時まで持続する事象であるが、その以降の持続に関する情報は述べていないため、その事象はどこまで持続するかという点は不明である。この場合、継続を表す副詞「attualmente, in questo periodo（今のところ、この時期）」のような副詞の適用が可能であるが、強制的ではない。

（47）Clara (in questo momento) è malata/Clara (in questo momento) prepara un esame
（クラーラは病気です／クラーラは（ちょうど今）試験のために勉強している）

（b）の現在形は一瞬の事象を表す現在形である。つまり、発話行為の瞬間において展開される事象が表現されている。この場合においては、三人称のみの適用が可能である。

（48）Brambilla dribla sulla destra, crossa al centro.
（ブランビッラ選手はドリブルし、クロスパスを送り。。。）

（c）の現在形は即時効果を表す現在形である。この場合においては制限があり、「accettare, ringraziare（受け取る、感謝する）」のような遂行動詞のみの適用ができる。その上、人称代名詞の制限もあり、用いることができるのは一人称のみである。

（49）Accetto di cuore e ti ringrazio
（喜んで受け取ります。感謝しています）

（d）の現在形は習慣を表す現在形である。習慣のことであるため、その事象が発話時において展開しなくてもよいが、この場合においても制限がある。それは、主語が必ず実在するものである必要条件である[48]。表される事象が必ずしも発話時において実現する必要がないため、その事象が発話時から切り離されていることとなる。従って、この用法が非常に幅が広いことを改めて示している。

（50）In montagna mi sento un altro
（山を登る度に私は別人のように感じる）

【先行関係】

先行関係を表す代表的な用法は二つである。それらは（a）歴史的現在と（b）最近の過去の現在という用法である。ちなみに、Bertinetto（1986）は（a）を以下の通りに二つの用法に分けている。

（a1）は過去における事象の連続の間に現在形が突然挿入されることを表す。
（a2）は過去における物語の事象が観念的に現時点に移されることを表す。つまり、話者によりその事象が現前化される。

本節では（a1）と（a2）を分けず、同じ枠に属することを考え、その用法を「歴史的現在」と呼ぶこととする。この用法に関して、Bertinetto（1997）では‘metafora temporale’（時間的隠喩）という概念が導入され、これは話者が発話している出来事が現前化されることを表している。従って、現在形の適用を決めるのは話者であることがわかる。これは口語においてよく用いられる用法である。

（51）In quel periodo Luigi pranza ogni giorno alla mensa e rientra a casa verso le 19.
（その時期、ルイージは毎日食堂でご飯を食べ、19 頃に帰宅する）

[48] Bertinetto（1986）を参照。

（b）の現在形は発話時に非常に近い事象のことを表す現在形である。言い換えると、過去の事象が発話時において心理的に現実性を持ち、その効果が重要なものとして認められる場合の現在形である。この場合においても話者の判断が決定的である。

（52）Arrivo proprio ora.Cosa è successo?[49]
（ちょうど今着いた。どうしたんですか？）

【後続関係】

後続関係を表す代表的な用法は二つである。それらは（a）未来的現在（b）間近の現在という用法である。

（a）の現在形は口語でよく用いられる未来のことを表す現在形であるが、その時間が文脈からわかるものではないため、明瞭に明示する必要がある。つまり、「domani, stasera（明日、今夜）」などのような副詞の追加を必要とする用法である。ただし、この用法には制限があり、それは遠い未来のことを表す場合における制限である。現在形は時間的に遠い出来事を表すことができない時制であり、その場合においては未来形の適用のほうが適切であると言える。また、遠い未来における出来事を現在形で描写できるか否かを区別するのは話者の確信である。すなわち、話者にとってその未来における出来事が起こる可能性が高ければ現在形の適用が可能となるのに対して、その可能性が低ければ現在形の適用が不可能となる。Barense（1980）と Leech（1971）もこの点について述べており、話者の関与が決定的であるとしている。[50]

（53）Domani dormo da mia sorella
（明日妹のところに泊まる）

（54）？Nel 2150 gli uomini vanno[51] sulla Luna a passare il week-end
（2150 年に人は月で週末を過しに行く）

（b）の現在形は間近に行なわれる事象のことを表す現在形である。この場合には事象の行なう時間が文脈からわかるため、「adesso, subito（今、すぐ）」のような副詞の追加が強制的ではない。この用法は理論的に「最近の過去の現在形」の用法に近く、異なっているのは事象の時間軸における位置（発話時以前か以後か）の点のみであると考えられるが、そうではない。実際、副詞の適用には制限があり、その副詞には発話時を含むか否かという相違が生じる。

（55）Esco fra un minuto
（1 分後に出かける）

（56）*Esco un minuto fa
（1 分前に出かける）

例（56）は完全に非文であるが、以下の例（56a）からわかるように、副詞「fa」の位置とイントネーションを変えてみると、可能となりそうな例文となる。しかし、それにはまた制限がある。

[49]「sono arrivato」（近過去形）も可能である。
[50] Klum（1961）は「未来的現在形」において受け身形の適用には制限があると証明し、未来形の適用のほうが適切であると述べている。なぜなら、現在形は過程性を失い、静的な価値を得るからである。従って、形容詞のような働きとなり、過去に行なわれた事象の過程ではなく、結果を表すこととなる。それに対し、未来形はその過程性を維持すると述べている。
[51] 特定された状況においてはある話者によりこれは正しい例文として感じられることもある。

（56a）? Un minuto fa esco

この点に関しては後ほど説明するのでここでは述べないこととする。

2.2 未来と過去を表す現在形

現在形は現在に関わる出来事のみでなく、過去や未来の出来事も表現することができるとすでに述べたが、過去を表す現在形においては様々な問題が生じ、常に現在形が許されるとは言えない。現在形の用法に関して述べると、二つの疑問について考えなくてはならない。それらは時制的価値と発話行為との関係である。一つ目の疑問に対しては、大きく分けて二つの態度があり、それらは「現在」という時制の存在を認める立場と「現在」という時制の存在を認めない立場である。そして、二つ目の疑問は一つ目の疑問と密接な関係があり、発話行為がどのような時間的過程を含むかという疑問である。

2.2.1 未来を表す現在形

未来に起こる出来事は、比較的近い未来であっても遠い未来であっても不確実なことであり、現在形は時間的に幅の広い時制であるため、不確実な出来事を表現することができるという説がある。しかし、すでに例文（53）と（54）で見たように、遠い未来の場合においては制限があり、それは話者の確信度に関するものである。つまり、話者はその不確実な出来事を確実なものとして述べているか、あるいは不確実なものとして述べているかという問題となる。

上記の例文に戻ると、次の説明ができる。例（53）は話者により確実なものとして呈示されているため、現在形で描写すると矛盾が生じないが、それとは異なり、例（54）は不確実なものとして呈示されるため、未来形の適用が正しいと言えるだろう。従って、現在形と単純未来形の使い分けは時間的な遠さのみではなく、確信度の高低により決まるものでもあると考えられる。このことから近い未来の場合、現在形（または未来形）の適用が可能であるのに対して、遠い未来の場合、現在形ではなく未来形のほうが正確であるということがわかる。しかし、近い未来においても制限があり、それは副詞に関する制限である。近い未来なら現在形でも未来形でも可能であるとされているが、副詞の意味によりその置き替えが不可能となる。説明として、「in questo momento（ちょうど今）」を用いた例文が挙げられる。

（57a） Lei parte in questo momento[52]
（57b）*Lei partirà in questo momento
（彼女はちょうど今出発する）

上記の例文のうち可能となるのは現在形のみであり、それに対して未来形を用いた例文（57b）が非文となる。以上の副詞を用いた近い未来は発話行為の瞬間との近接性が非常に高いため、話者の確信度も高くなり、現在形が用いられることとなる。面白いことに、この例（57a）は現在または近い未来のことを表す例文であるのにも関わらず、過去形にすることも可能である。

（57c）Lei è partita in questo momento
（彼女はちょうど今出発した）

「In questo momento」という副詞は時間的な幅が広く、発話時の瞬間と近い未来のことの描写ができるはずであるが、実際は近い未来における描写が不可能である。その代わり、過去における出来事の描写が可能となるが、これは意外な結果である。これは現在形と過去時制の密接な相関関係を証明するものであろうと考えられるが、全ての過去形の適用が許容されるわけではなく、近過去形のみである。例（57c）においては遠過去形または大過去形を用いると非文となる。なぜ

[52] 進行形の「sta partendo」も可能である。

なら、遠過去形も大過去形も発話時とは無関係の時制であり、発話の瞬間を含む副詞とは対立するからである。

2.2.2 現在形と過去時制における相関関係について

現在形の用法のうち、より問題点が多いと思われるのは過去における出来事を表現する用法である。節 2.1 で既にみたように、三つの用法が提案されているが、二つの用法に絞ることもできる。以下で参考とするのは「歴史的現在」と「最近の過去の現在」である。

前者における動作の現前化、いわゆる‘drammatizzazione’という効果についてはBertinetto(1986:334)が動画のズームのような働きを持つものであるとしている。フランス語においても「歴史的現在」が存在しており、それについてはMellet(1980)が述べている。Mellet では、‘drammatizzazione’は過去時制の連続の中に現在形が出現することによってのみではなく、現在形の連続の中に過去形が現れることによっても引き起こされるとされている。このように、読み手の注意を引き付けるのはそのような変化であり、動詞形態そのものではないということとなる。Bertinetto（1986:334）でも文体的効果がその用法の目標として説明されている。

‘E’ come se il locutore volesse trasporre l’evento (o la serie di eventi) ormai trascorso, sul piano dell’attualità, per darne un resoconto più vivo’.
話者はすでに行なわれた事象（あるいは事象の連鎖）を現在次元に移させるかのようである。なぜなら、話者はその過去における出来事の語りをより生き生きとした語りにさせようとするからである。

以上のようなことは Weinrich(1973)も述べているが、Weinrich は物語を中心としている。以下では Weinrich(1973)による提案を紹介しながらイタリア語の時制の使い分けに関して考察していく。つまり、以下では話者は近過去形を用いた場合、または遠過去形を用いた場合にはどのような情報を伝えようとするか、そして過去のことを表すのに現在形を用いた場合にもどのような情報を伝えようとするかということに関して論じていく。物語などを観察すると時制は一般的には過去時制のみ用いられ、近過去形と遠過去形の使い分けは話し手による選択である。以下では、現在形の適用も可能であるか、そしてどのような場合において可能であるかを検討していく。参考のため、Weinrich(1973)の近過去形と遠過去形に関する提案を次のようにまとめることができる。まず、時制の使用は①「コメントのレベル」と②「物語のレベル」によるものであると主張し、それぞれのレベルに属している時制は①現在形、近過去形、未来形と②遠過去形、半過去形、大過去形であるとしている。すなわち、「コメントのレベル」であるか、「物語のレベル」であるかにより可能となる時制が変わるということである。この使い分けは話し手（または語り手）がどの情報を伝えたいかを明らかにする手段であり、聞き手（または読み手）はその影響を受けると言える。近過去形は「コメントのレベル」に属しているため、「話し手・語り手の関与」を表す機能を果たしているとされている。例えば、物語の結末においてよく用いられている時制が近過去形であるのは、その時制を介して語り手は読み手に直接話しているような雰囲気をつくることができるからである。それとは異なり、遠過去形を用いるとそのような親しい関係をつくることが不可能となる。

また、遠過去形は「物語のレベル」に属しているため、近過去形とはレベルが異なり、半過去形との対立のみに Weinrich は言及している。なぜなら、この提案によると時制の選択はアスペクトによるものではなく、もっぱら文脈における位置づけによるものだからである。しかし、本論は近過去形の二重性の存在を認める立場から論じているため、以上の説明を適切なものとして認めないこととする。そこで、「完了的」近過去形と「アオリスト的」近過去形の区別をする必要があり、それらはどちらのレベルに属するか、という疑問が生じる。

以上のことからわかるように、四つの時制の区別をしなくてはならない。それは遠過去形、現在形と近過去形 I と近過去形 II[53]である。過去の文脈において現在形の適用も可能であるか、可

[53] 第一章を参照。

能であるならなぜ可能であるのか、そしてその場合、現在形と過去時制はどのような関係にあるのかについても説明しなくてはならない。以下の例文[54]において遠過去形、近過去形と現在形が用いられているため、これらの時制の相関関係とその用法における相違が明らかになる。

（58）Stavamo aspettando il treno. All'improvviso giunge trafelato Enrico. Ha appena parlato al capostazione e dice che il rapido arriverà con molto ritardo. Fu così che decidemmo di prendere l'espresso.
（私達は電車を待っていた。突然、エンリコが走ってくる。駅長と話したところ、特急が遅れるそうだということだ。そこで、急行に乗ることにした）

上記の例（58）は現在形と過去形（近過去形と遠過去形）の両方を用いる過去の事象を描写する文章である。これは、現在形が近過去形（ha parlato）と遠過去形（fu, decidemmo）と対立する時制であるため、文体的効果が現れる文章である。また、現在形が用いられることにより、話し手の意図も明らかになると言える。これについて説明する前に、例（58）における近過去形の用法について説明すべきである。まず、近過去形「ha parlato」は「アオリスト的」用法ではなく「完了的」用法であり、遠過去形との置き換えが不可能である。もし「アオリスト的」用法として解釈すると、先行している現在形（giunge）とその後にある現在形（dice）と対立するために非文となる。次に、遠過去形「fu」と「decidemmo」は「アオリスト的」近過去形に置き換えが可能であるが、これは話し手（または語り手）による選択である。一般的には、背景を描写するためのより適切な時制は遠過去形であるが、話し手の伝えたい情報により近過去形の適用も可能である。最後に、現在形「giunge」と「dice」は「完了的」近過去形に置き換えが可能であるが、この場合においても話し手の伝えたい情報により時制が選択される。現在形を用いると話し手の過去における出来事に対する関与が表されるのに対し、近過去形の使用では主観的な背景の描写にとどまる。

以上のように、例（58）において四つの時制が用いられるため、Weinrich の提案を完全に適用することができない。ここで問題となるのは近過去形（I）と（II）の位置づけと過去時制を用いた文章における現在形の働きである。まず、本章においても「コメントのレベル」と「物語のレベル」の区別を認めるが、以上の提案とは異なり、「物語のレベル」に属している時制は四つであると提案する。つまり、遠過去形、半過去形と大過去形以外に近過去形 I もそのレベルに属する時制であるとする。よって、近過去形は両方のレベルに属する時制になるが、これは言うまでもなく二重性をもつ時制であるからである。また、問題となってくるのは遠過去形と近過去形 II による相違であるが、この点もアスペクトに基づく相違であると言える。なぜなら、前者は「語りの現在（または発話時点）」との関係を表さない時制であるため、客観的な背景を描写するのに適切な時制であるからである。つまり、遠過去形の使用により話し手（または語り手）の視点が現れないこととなる。それとは異なり、近過去形がアオリスト的であるとしても複合時制であるため、必ずある時点が設定され、その時点を選択するのは話し手（または語り手）である。

まとめると、書き手（または話し手）は時制の使い分けにより、その事象に対する客観性と主観性を示すことができ、以下のような区別が考えられる。

図 12. 主観性と客観性

【コメントのレベル】（主観性）
現在形（話し手・語り手の関与）
近過去形 II（完了的）

- -

【物語のレベル】（客観性）
近過去形 I （アオリスト的）（設定時点あり）
遠過去形

---

[54] Bertinetto（1986：335）から引用したものである。

最後に、もう一つの過去を表す現在形の用法を見ていく。すでに見たように、現在形は発話時より非常に近い過去の事象のことを表すこともできる。例（59a)と(59b)を参考にしよう。

（59a）Arrivo proprio ora. Cosa è successo?
（ちょうど今着いた。何が起きたんですか？）
（59b）Sono arrivato proprio ora. Cosa è successo?
（ちょうど今着いた。何が起きたんですか？）

例（59a）における現在形は発話時より直前の出来事を表し、非常に自然な例文である。「proprio ora」という副詞は発話時の瞬間を含むため、例（57）で見たように、この場合においては未来形の適用が不可能である。また、同じく、過去形の適用が可能ではあるが、現在形を選ぶ話者のほうが多いかもしれない。恐らく、「ora（今）」副詞が現れているからである。この場合においても、過去形を適用するなら遠過去形ではなく、発話時と関係のある近過去形のみとなる。なぜ過去の事象であるのに現在形で描写ができるかというと、発話時において心理的に現実性を持つ事象であり、その効果が重要なものであるからである。遠過去形と近過去形の区別と同様に、この場合においても話者の判断が決定的であると言える。図で表してみると、以下のようになる。

（59a）

（59b）

要するに、（59a）における現在形は発話行為の瞬間における出来事を表すのに対し、近過去形は過去における出来事の結果が発話時まで持続しているということを表す。言うまでもなく、この時制の選択は話者によるものである。

これまでは過去を表す現在形（歴史的現在と近い過去の現在）を見てきたが、これらの用法においても制限があることに注目すべきである。現在という時制の存在を認めない立場から考察すると、現在形は問題なく過去のことと未来のことを描写することができるということが言える。しかし、過去の出来事を表現する現在形には、何らかの制限があると考えられる。以下の例文を参考にしよう。

（60a） Oggi vado al cinema　（今日映画館に行く）
（60b） Domani vado al cinema （明日映画館に行く）
（60c）*Ieri vado al cinema　（昨日映画館に行く）

例（60a）（60b）（60c）においてはそれぞれ現在、未来、過去を表す現在形を用いる例文であるが、過去における出来事を表す現在形を用いた例（60c）は明らかに非文である。ここで対立するのは過去の出来事を表す副詞「ieri」（昨日）と現在時制である。歴史的現在と近い過去の現在とは異なり、なぜ不可能であるのかという疑問が生じる。以下の例文を参考にしよう。

（61）Ieri vado al cinema e chi ci trovo?　→ **「物語化」**
（昨日映画館に行って、誰がいたと思う？）

例（61）における副詞「ieri」と現在形「vado」の組み合わせは例（60c）と異なり、可能であると認められる。しかし、副詞の位置を変えてみると、つまり文の真ん中「Vado ieri al cinema」あ

るいは文の最後「Vado al cinema ieri」のところに置くと非文となる[55]。当然、なぜ例（61）は非文として認められないかという疑問が生じてくる。

ここで考えられるのは過去を表す時の時間が文頭に置かれるのが決定的であるということであるが、それを採用するなら例（62c）も正しい例文のはずであるが、そうではない。例（60c）を例（61）と比較してみると、ある点で異なっていることがわかる。それは話者の伝えたい情報である。前者は単なる肯定文であるため、副詞と時制の対立が明らかであるが、後者は単なる肯定文ではなく、「物語化」された文であると考えてよい。これは、話者による用法であり、どのような情報、またどのようにそれを伝えようとするかということによるものである。例（61）の場合、話者は過去における出来事を「語り」として伝えようとし、その場合には現在形の適用が可能である。この用法を「物語化」と本論で呼ぶこととする。

また、客観的な視点から考察すると出来事の連続の場合のほうが物語化されやすいが、短い例（61）でも物語化となった例文であるため、出来事の数を物語化の因子として扱わないこととする。ここで因子として扱うのは時を表す表現の位置（文頭）と話者の物語化に関する意図である。これらの因子が結合されることにより、過去を表現する発話における現在形出現の許容性が決まってくる。要するに、これらの因子を多く持っているほど現在形が問題なく用いられるのである。従って、例（60c）が非文であるのは話者がそれに対して物語として述べていないからであり、例（61）が正しい文であるのは話者により物語化されることとテーマとなる時の副詞が文頭に置かれているためである。すなわち、両方の因子を持っているため、副詞と時制の対立がなくなる。

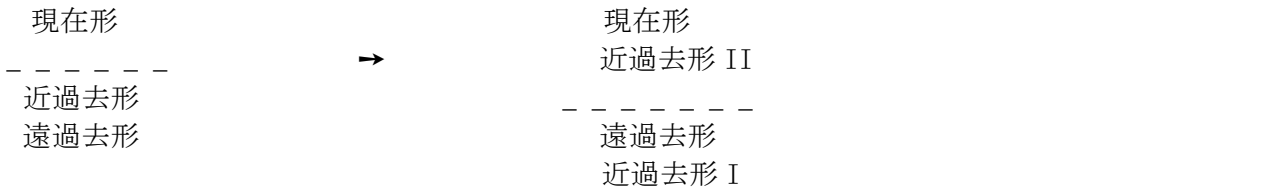
結局、ある文における現在形の適用が文法的であるか否かという判断をするには話者のその発話に対する態度も大きく関わっていると言えるだろう。ちなみに、例（61）においては近過去形の適用も可能である。参考のために以下で挙げる。

（62）Ieri sono andato al cinema e chi ci ho trovato?
（昨日映画館に行ったが、誰がいたと思う？）

例（61）と比べると、近過去形を用いた文のほうが自然な文として感じられる。このように、話者には二つの選択があり、どちらかにすることにより話者のその事態に対する視点と話者の伝えたい情報が分けられる。つまり、次のように説明ができる。近過去形を用いることにより、その出来事は単なる過去における出来事として描写され、話者の視点は現在に置かれるのに対し、現在形を用いることにより、話者の関与が伝わり、話者の視点は過去の中に置かれるということである。

これまで説明してきた時制の用法や本質を観察すると伝統的な説明においては不完全な点が多いと言える。よって、遠過去形と近過去形を同じ過去時制の枠に組み入れることも正確ではない。本論で提案するのは近過去形を遠過去形から離し、現在形に組み入れることである。要するに、以下のようになる。

図 13. 現在形と過去時制の相関関係について



[55] イントネーションの影響も大きいと考えられる。

以上のように、現在形と過去時制に属している近過去形と遠過去形を分析すると、現在形と過去時制のあいだに切れ目があるとは言えない。なぜなら、場合により近過去形も現在形と同じような機能をもっている時制であるからである。よって、その切れ目は現在形とそれと同じような機能をしている近過去形と、遠過去形とそれと同じような働きをしている近過去形のあいだにあると提案ができる。

最後に、上記のすべてのことを以下のようにまとめることができる。図 13 からわかるように、現在形と過去時制のあいだではなく、過去時制の間に、つまり近過去形と遠過去形の間に切れ目があると考えられるため、近過去形は現在形に近い時制であるということを言ってもよい。このことを説明するために近過去形における本質についても述べ、前章と本章は近過去形における多様さと現在形との共通点または相違点を中心として論じた。前章においては主に近過去形と遠過去形のあいだにある相違点に関して述べ、重要な点として明らかになったのは、遠過去形と異なって近過去形は過去における事象の描写も未来における描写も可能とする時制であるということである。こういった多様さは現在形においても見られ、これらの二つの時制の間にいくつかの共通点があることもわかった。そこで、近過去形と現在形の置き替えが可能であるか否かという疑問も生じた。本論ではその置き替えが可能であると考えるが、文法的な制限の影響（例えば副詞）があるため必ずしも常に可能であるとは限らないことに注意すべきである。その置き替えが不可能であるように思われるときにおいても可能となるときがあることも主張した。これも話者による現象である。すなわち、近過去形と遠過去形の選択におけるプロセスと同様に、この場合においても時制を選択するには話者の視点または話者の関与が重要な点である。一般的には、過去における事象を現在形で描写することは不可能であるが、実際には現在形で描写することも可能であり、それを可能とするのは話者による「物語化」である。説明として次のことが言える。まず、近過去形も可能であるが、近過去形を用いることによりその事象が単なる過去における事象として描写されるのに対し、現在形を用いることにより、話者の関与が伝わってくるという相違点があると言える。結論として、文における現在形が文法的であるか否かという判断をするには話者のその発話に対する態度も大きく関わっているということが言えるだろう。ただし、この近過去形と現在形における置き換えをもう一つの視点から説明することができると次節において論じていく。以下ではその置き換えのことを「中立化」と呼ぶこととする。

2.3 過去を表す現在形について

本節は、イタリア語における現在形と近過去形における「中立化」に関して述べることを目的としている。これまでみてきたように、場合により完了的近過去形と現在形は置き換えられる時制であるが、本節ではその置き換えが動詞の性質によるものであるか否かという点に関して述べていく。そのため、動詞を「継続動詞」「非継続動詞」に分けて分析していくが、その前に過去において起こった事態を表す歴史的現在形に関して述べていく。

2.3.1 イタリア語における歴史的現在形の用法について

本章においてすでに論じたように、伝統的な説明[56]によると、直説法現在形における本質的機能は発話行為の瞬間に起こっている出来事を表現することであるとされているが、Bertinetto（1986）と Vanelli（2002）が指摘しているように、その定義は不完全である。なぜなら、周知のように、現在形は現在時に関わる出来事のみではなく、未来や過去における出来事を表現することも可能とする時制だからである。このように、本論もその視点に基づいて論じていくこととする。まず、再び以下の例文を挙げる。

（63）Parti per Roma domani?
（明日ローマへ発つ？）

[56] Fornaciari（1881）を参照。

（64）Il 2 giugno 1948 gli italiani votano a favore della Repubblica
（1948 年 6 月 2 日イタリア国民は共和国に賛成投票する）

上記の例（63）は明日の出来事、つまり未来を表す文脈において用いられている現在形であるため、未来的な用法を示す現在形である。それに対し、例（64）は過去における出来事を描写する「歴史的現在」であり、この場合には話し手は 1948 年に視点を移し、発話時点における出来事のように描写していると簡潔に説明ができる。

本節は現在形における未来的な用法ではなく、過去的な用法を対象としているため、以下ではなぜ過去における出来事を表すのに現在形の適用が可能であるのか、また現在形を用いるとどのような解釈になるのかという点について論じていく。まず、歴史的現在を詳しく説明すべきである。歴史的現在に関して Bertinetto（1986）も述べ、それを二種類に分ける必要があると主張している。一つ目は「presente drammatico（劇的現在形）」、二つ目は「presente narrativo（語り的現在形）」であるとし、前者と後者のあいだの相違点として挙げているのは後者が生じさせる「現前化」である。つまり、後者の場合、話し手はすでに起こった事象を現在次元に移させるかのようである。この現象を「現前化」と呼び、現在形の適用により生き生きとした語りになるという効果が現れるとされている。この説明に従うと、この効果を可能とするのは現在形のみであるため、この効果は現在形における本質によるものであるということになるが、本論はその説明を完全には受け入れない立場から述べていく。なぜなら、その説明通り、それは現在形の本質によるものではあるが、それ以外に他の要因もあると考えられるからである。言うまでもなく、現在形は基本的に発話時を基準とする時制であるため、その時制の適用により現前化という効果が生じるのは当然であるが、ある条件が必要であることも考えられる。さらに、本論は現在形と「完了的」近過去形のあいだの置き換えが可能であるということを前提としているため、現在形のみではなく近過去形もその現前化を可能とするはずである。実際、それは可能であるか否か、また可能である場合、制約があるか否かという疑問が生じてくる。

以下では、まず上記の「現前化」は現在形の適用のみによる現象であるか否かという点に関して簡潔に触れていく。過去の出来事を表す現在形に対する伝統的な説明を見直す必要があると主張している Wolfson（1979）[57]による提案を参考にしよう。

“The conversational historical present tense occurs only in a specific type of narrative, here labeled as ‘Performed Story’. In contrast to previous analyses of this feature, it is the thesis of this paper that conversational historical present in itself has no significance. Rather, it is the switching between conversational historical present and the past tenses which is the relevant feature. Two important constraints - that of sequence of tenses in coordinated sentences, and that of non-occurrence of conversational historical present in subordinated clauses beginning with *when* - support the theory that conversational historical present alternation operates to separate events from one another. The fact that alternation is, in itself, an expressive feature, leads to speculation about the nature of other types of linguistic variation.

上記のことからわかるように、Wolfson（1979）[58]は「歴史的現在」の適用がすべての説話体において現れる適用ではなく、「Performed Story」にしか現れない適用であると述べている。また、現在形そのものよりも、歴史的現在と過去時制のあいだの転換にこそ意味があるということも述べている。つまり、現在形は語りにおける重要な分岐点において出現すると同様に、もとの過去時制への転換も重要な分岐点において出現するため、現在形のみに限られている現象ではないと指

[57] Wolfson（1979）の“The conversational historical present alternation”の要旨から引用したものである。
[58] Bertinetto（1986：335）では以下のように Wolfson（1979）の提案が説明されている。
“Wolfson osserva che occorre rivedere la spiegazione tradizionale, secondo cui questo particolare impiego del PRE (presente) serve a render più vivace la narrazione. In base alle sue osservazioni si ricava che il PRE storico interviene spesso in snodi narrativi particolarmente significativi; ma si ricava anche che il ritorno ai Tempi Passati coincide, altrettanto spesso, con momenti strettamente analoghi. Quindi, l’elemento caratterizzante non sarebbe costituito, di per sé, dall’irruzione del PRE in un contesto passato, quanto piuttosto dalla brusca variazione dei piani temporali, qualunque sia la direzione in cui essa si esplica”.（Wolfson は、いきいきとした物語をつくるために現在形が用いられるという伝統的な説明を見直すべきであると指摘している。歴史的現在がより重要な分岐点においてよく出現するとされているが、それに加えて過去時制への変換も同じような分岐点において出現するとされている。よって、効果的であるのは過去の文脈における現在形の挿入ではなく、突然の時間のレベルの変換であるという結論に至る）

摘している。言い換えると、効果的であるのは過去の文脈における現在形の挿入ではなく、時間のレベルの転換であると主張している。このように、Wolfson は「現前化」は現在形自体に存在している特徴による現象ではないという結論に至る。また、上記の説明からわかるように、「歴史的現在」の機能については、Wolfson は主に会話において起こる数々の出来事の中で、話者が主観的に物語の展開上重要と思われる場面と場面を区切るために用いるとしたのである。

本論もそれは現在形のみによる現象ではないということを認めるが、Wolfson は現在形から過去時制に再び転換する際にもその効果が生まれると述べている。この点に関しては疑問が生じ、それは過去時制に関する疑問である。なぜなら、その過去時制における区別が曖昧であるからである。Wolfson は過去時制を区別せず一つのカテゴリーとして扱っているが、すでに説明したように、イタリア語の場合、そのような一般化は不適切である。なぜなら、全ての過去時制が同じ機能を果たしている時制ではないからである。そのため、以下ではその機能と可能な用法により過去時制をはっきり区別しなくてはならないという視点から論じていく。このことから、なぜ現在形と完了的近過去形の置き換えが可能であるかがわかる。以下の例文を再び参考にしよう。

（65） Ieri vado al cinema e chi ci trovo? （現在形）
（*昨日映画館に行って誰がいると思う？）

（65a）Ieri sono andato al cinema e chi ci ho trovato? （近過去形）
（昨日映画館に行って、誰がいたと思う？）

（65b）*Ieri andai al cinema e chi ci trovai? （遠過去形）
（昨日映画館に行って、誰がいたと思う？）

すでに述べたように、Bertinetto（1986）は「歴史的現在」を二種類に分け、そのうちの一つは会話的な現在形（presente narrativo）[59]であるとし、それを表すのは上記の例（65）である。それに対し、例（65a）も例（65b）も過去形を用いる例文であり、その中で正しい例文として認められるのは前者のみである[60]。言うまでもなく、例（65a）において用いられている近過去形は「完了的」であるため、時制の置き換えが可能である。証拠として（65b）における遠過去形との置き換えが不可能であるという制約が挙げられる。ここで、なぜ近過去形の適用が許されるかという疑問が生じるが、それはおそらく複合時制であるからである。複合時制であるため、ある設定時点が常に存在し、時制によりその設定時点の位置づけが決まっている。すでに述べたように、近過去形の場合にはその設定時点は発話時において位置づけられているため、その時制の適用により話し手は現在との繋がりを表そうとする。このように、その設定時点は客観的な時点ではなく話し手の選択した時点であることが明らかになる。[61]

以上のことから、近過去形は複合時制であることにより、その時制は常に話し手の主観性を表す時制であることが改めてわかった。つまり、近過去形も現在形と同様に話し手または語り手の意図、そして主観的な情報を表す時制であると言える。このため、例（65）と（65b）においても置き換えが可能である。ここで、単純時制である現在形と複合時制である近過去形の適用における相違に関する疑問が生じる。それは、現在形の適用により、また近過去形の適用によりどのような違いが出てくるかという疑問である。こういった相関関係はこれまで提案したアスペクトの視点から検討すればよいのか、あるいは他の視点を基準にして検討すればよいのかという疑問も生まれる。Bertinetto（1986：270）も簡潔に現在形と近過去形の相関関係とその「中立化」に関して

[59] 歴史的現在に関しては Serianni（2010）も述べているが、Bertinetto の説明とはそれほど変わらないものである。Serianni は例として半過去形と遠過去形と現在形を用いた文章を挙げ、それらの時制の転換で現在形のもたらす文体的な効果を説明している。Serianni も Wolfson と同様に、現在形の適用は物語における重要な分岐点のときにしか現れないと説明している。しかし、Serianni は過去時制がもたらす文体的効果に関しては言及せず現在形を中心にしているため、その効果を可能とするのは現在形のみであるという結論に至るようである。さらに、Serianni が挙げている例文の中で近過去形を用いた例文がなく、過去時制として挙げられているのは遠過去形のみである。これは、おそらく、古代イタリア語を代表している文章のみを挙げているからである。

[60] 南部イタリアでは後者も非文として感じられない可能性が高い。

[61] 話者の主観性を表す「設定時点」は単純時制である遠過去形が求める概念ではない。このため、遠過去形は当該出来事を主観的に描写することができず、客観的な視点のみから描写することができる時制であると言える。

言及しているが、その中立化を可能とするのはある動詞の分類[62]に限られているとしている[63]。以下のように述べている。

“Nei trasformativi[64] si osserva, in determinati contesti, una tendenziale neutralizzazione fra Tempi Semplici e Tempi Composti, almeno per ciò che riguarda le seguenti coppie di Tempi: Presente/Perfetto Composto, Imperfetto/Piuccheperfetto”
文脈により、「変化動詞」の場合、単純時制と複合時制のあいだには中立化という現象があるようである。これは、「現在形・近過去形」と「半過去形・大過去形」の時制のペアのあいだに起こる現象である。

このように、動詞における性質に基づいてその中立化の説明ができると予想されるが、以下ではその立場からの説明が有効であるか否かまた適用に対して制限があるか否かという疑問点に関して論じていく。

2.3.2 動詞の分類による中立化

前節に述べたことに関して二点を明確にしなくてはならない。一つ目は、現在形の適用によるニュアンスと近過去形の適用によるニュアンスが中立化の場合においても完全に同じものではないということである。二つ目は、全ての変化動詞においてその現象が見られるわけではないということである。なぜなら、その現象はおそらく単なる傾向であるからである。また、Bertinetto(1986)が主張しているように、その現象は動詞のみではなく文脈も限られているということにも注意すべきである。このように、文脈により現在形と近過去形のあいだにおける相違が弱まり、場合により完全になくなるときもある。その相違の説明として Bertinetto（1986）では以下の例文が挙げられている。例（66a）と（66b）は「変化動詞」における単純時制と複合時制の中立化を示す例文であるのに対して例（67a）と（67b）は「結果動詞」における単純時制と複合時制の中立化の不可を示す例文である。例文からわかるように、前者において対立しているのは現在形（66a）と近過去形（66b）であるのに対して後者において対立しているのは半過去形（67）と大過去形（67b）である。

【変化動詞】

（66a） Oh, ti svegli, alla buon’ora!
（66b） Oh, ti sei svegliato, alla buon’ora!
（やっと起きたね！）

【結果動詞】

（67a）Antonio costruiva un perfetto modellino di aeroplano; lo si vedeva esposto sullo scaffale
（67b）Antonio aveva costruito un perfetto modellino di aeroplano; lo si vedeva esposto sullo scaffale
（アントニオは完璧な飛行機の模型を組み立てていた。それは棚に置いてあった）

---

[62] Bertinetto(1986:271)を参照。
[63] Trasformativi と Risultativi の対立のみが対象となり、それ以外の分類に関しては言及されていない。Trasformativi は中立化を可能とする分類であるというのは risultativi との対立のみに対する提案であるのか、また全ての分類の分析結果に対する提案であるのかということが明らかになっていない。
[64] Verbi trasformativi とは “verbi indicanti un mutamento di stato”（状態の変化を表す動詞）である。変化動詞として、partire（出発する）, svegliarsi（目覚める）, decidersi（決心する）, morire（亡くなる）, scoprire（発見する）, giungere（着く・来る）, ritornare（戻る・帰る）などが挙げられる。変化動詞には reversibili（復帰可）と non-reversibili（復帰不可）の二種類があり、後者に属しているのは morire（亡くなる）, nascere（生まれる）, scoprire（発見する）である。

すでに述べたように、動詞が変化動詞であるとしても同じ現象を可能とするとは限らないため、どの動詞がそれを可能とするか、またどの場面においてそれを可能とするかという疑問が生じてくる。まず、参考のため、例（66a）と異なる「変化動詞」を用いた例文を挙げる。

（68a）Lui ritorna da un lungo viaggio　　（現在形）
（彼は長旅から帰ってきた）

（68b）Lui è ritornato da un lungo viaggio　（近過去形）
（彼は長旅から帰ってきた）

上記の例文は変化動詞である「ritornare」を用いている例文であるため、これまでの提案に従うと特定の場面において中立化が可能であるはずである。この場合においても、例（66a）と同様に例（68a）においても現在形が用いられても近過去形が用いられても意味に対する変化がなく、両者の場合における「帰る」事態が発話時以前に起こった事態であると解釈することができると言える。つまり、現在形は近過去形と同じ機能を果たしていることになる。言うまでもなく、文脈の影響も大きいため、「domani（明日）」[65]のように発話時以降の事態を表す副詞が用いられると現在形は過去における出来事を表すことができなくなる。このことより、例（68a）は未来としての解釈と過去としての解釈を可能とする例文であり、その区別は文脈と副詞によるものであるとわかった。

また、Bertinetto（1986）では動詞分類が限られ、全ての動詞分類がその中立化を可能とするわけではないと指摘している。例文として挙げられているのは “verbi risultativi”（結果動詞）に属している “costruire”（組み立てる）を用いた例文[66]であり、その事態が半過去形と大過去形の順番で挙げられている。この例文からわかるように、この場合においては単純時制である半過去形と複合時制である大過去形の適用における相違が残り、中立化が不可能である。つまり、以下でも説明するように、半過去形と大過去形[67]はそれぞれ本来の意味とその機能を保つ時制であると言える。

【結果動詞】
（69a）Antonio costruiva un perfetto modellino di aeroplano; lo si vedeva esposto sullo scaffale.
（69b）Antonio aveva costruito un perfetto modellino di aeroplano; lo si vedeva esposto sullo scaffale.
（アントニオは飛行機の模型を組み立てていた。それは棚に置いてあった）

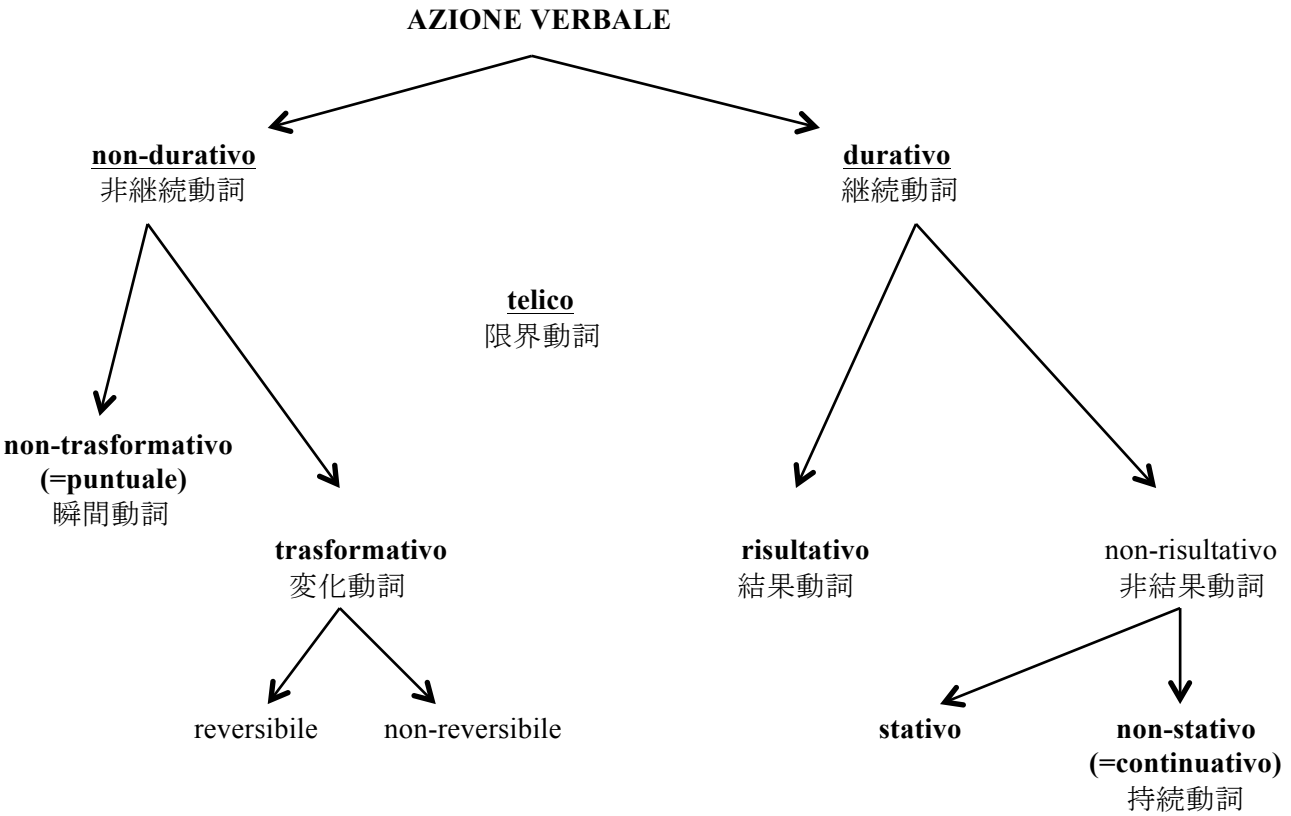
上記の例文は（66a）と（66b）と（68a）と（68b）とは異なるものであり、半過去形を用いた（69a）と大過去形を用いた（69b）は別の解釈を求める例文である。それは、半過去形が「未完成相」を表す時制であるのに対して大過去形は「完成相」を表す時制であるからである。従って、前者の場合、その飛行機の模型がまだ完成していないのに対して後者の場合、その飛行機の模型が完成しているという解釈に対する相違が生じる。このことを基準にして Bertinetto は「結果動詞」の場合、単純時制と複合時制において中立化が不可能であると指摘しているが、これは「costruire」が「限界性」であるからという説明ができる。なぜなら、「限界性」動詞は未完成相を表す時制により描写されるとその動作の終了に関する情報が得られないからである。従って、中立化が本質的に不可能である。また、すでに以上に言及したように、当該時制は「完成相」あるいは「未完成相」を表す時制であるという相違により出来事に対する解釈が異なり、その相違により中立化が起こるか否かという視点も考察すべきである。

以上のことをまとめると、次のことが言える。まず、単純時制と複合時制のあいだの相違は動詞の属している分類によるものであり、「変化動詞」の場合には単純時制と複合時制の相違は弱まるのに対して「結果動詞」の場合にはその相違は無くならないということがわかった。しかし、Bertinetto（1986）は全ての動詞分類に関して言及せず、その分析は「変化動詞」と「結果動詞」にとどまっているため、以上の例（65）と（65a）の相関関係を説明することができない分析

[65]「Lui ritorna domani da un lungo viaggio」の場合には可能となる解釈は未来形としての解釈のみである。
[66] Bertinetto（1986：271）を参照。
[67] 大過去形と半過去形については第六章と第七章を参照。

であると言える。つまり、例（65）における動詞は「持続動詞」であるため、以上の説明から外れる動詞であり、中立化が可能であるか否かという疑問が生じるわけである。
これまで挙げてきた三つの分類（変化動詞・結果動詞・持続動詞）以外には他の分類も存在しているため、それぞれの分類に属している動詞の単純時制と複合時制[68]は中立化を可能とするか否かという疑問も生じてくる。そのために、以下では全ての動詞分類を対象とし、それぞれの分類に属している動詞を用いた例文を挙げていく。周知のように、動詞は基本的に二つの分類に分けられ、一つ目は「継続動詞（durativi）」であるのに対して、二つ目は「非継続動詞(non-durativi)」である。以上に挙げた「持続動詞(continuativi)」は「結果動詞(risultativi)」と同様に「継続動詞(durativi)」の分類に属していることより、中立化に関しては「変化動詞(trasformativi)」と「結果動詞(risultativi)」の対立ではなく、「継続動詞(durativi)」と「非継続動詞（non-durativi）」の対立の視点から説明すればよいと考えられるが、もう一つの視点からの考察が考えられる。
以下の図 14 からわかるように、「変化動詞(trasformativi)」と「結果動詞(risultativi)」は同じ分類には属していないが、telicità（限界性）の点では共通している動詞である。そのため、動詞が継続動詞であるか否かではなく、動詞の「telicità（限界性）」による区別を基準とすることも考えられる。ただし、文脈などの影響も観察しなくてはならないため、より詳しい分析が必要である。そのために、以下では全ての分類をまとめた図[69]を挙げ、それに属する動詞を適用した例文[70]を挙げながら現在形と近過去形における中立化が動詞の分類によるものであるか否かまたどの条件を満たせばよいかを見ていく。

図 14. 動詞の分類[71]



[68] 本論は現在形と近過去形のみを対象とする。
[69] Bertinetto(1986:98)から引用したものである。
[70] Reversibile/non-reversibile と permanente/non-permanente の分類を対象としない。
[71] Bertinetto（1986:98)から引用したものである。

上記の図からわかるように、動詞がまず「non-durativi（非継続動詞）」と「durativi（継続動詞）」の二種類に分けられ、またぞれぞれの分類に下位分類があるが、それ以外に「telico（限界性）」という分類も存在している。この分類に属している動詞は「trasformativo（変化動詞）」と「risultativo（結果動詞）」のみである[72]。上記の図を以下のようにまとめることもできる。

	「継続性」	「限界性」
瞬間動詞	−	−
変化動詞	−	＋
結果動詞	＋	＋
持続動詞	＋	−

以下ではこれらの分類における定義[73]を挙げながら共通点と相違点またその特徴に関して簡潔に説明していく。「非継続動詞」とは展開のはやい過程、つまりその事態の開始点と終了点が観念的に一致することを表す動詞であるのに対して、「継続動詞」とは持続する過程を表す動詞である。ただし、この区別は常に明らかであるとは限らず、判断できない[74]場合もあり、文脈の影響が決定的であると言える。最初に、non-durativi に属している trasformativi（変化動詞）と puntuali（瞬間動詞）から分析していく。前者に属している動詞は状態の変化を表す動詞であり、例として挙げられるのは svegliarsi（目覚める），ritornare（戻る・帰る），giungere（着く），fermarsi（止まる）などのような動詞である。それに対して、後者に属しているのは incontrare（会う），dire（言う），vedere（見る），stupirsi（驚く）などのような動詞が挙げられる。

以上の二つの分類は事態の持続の点で共通しているため同じ分類に属しているが、図 14 からもわかるように、変化動詞は継続動詞に属している結果動詞とも共通している。Bertinetto（1986）では、trasformativi（変化動詞）と risultativi（結果動詞）の対立が中心となっており、前者のみにおいて中立化が可能であるとされているが、すでに指摘したように、本節では中立化という現象が trasformativi に限っている現象ではないと指摘する。以下の様々な例文からもわかるように、特定の場面において他の分類もその現象を可能とするからである。以下の例文を参考にしよう。

【non-durativi】

変化動詞（trasformativi）

（70a） Oh, ti svegli, alla buon’ora![75]
（やっと起きたね！）
（70b） Oh, ti sei svegliato, alla buon’ora!
（やっと起きたね！）

[72] 本節では、trasformativi と risultativi は telicità の点で共通していることから Bertinetto（1986）はその二種類における対立のみを分析していると考えられる。

[73] Renzi L., Salvi G., Cardinaletti A.（1991：27）では次のように定義されている。I verbi non-durativi riguardano processi caratterizzati da uno svolgimento rapido, in cui il punto d’inizio dell’evento coincide idealmente col punto finale. I verbi durativi riguardano invece processi che si prolungano nel tempo.（非継続動詞は、展開のはやい過程、つまりその事態の開始点と終了点が概念的に一致することを表す動詞である。それとは異なり、継続動詞は時間において持続する過程のことを表している）

[74] Renzi L., Salvi G., Cardinaletti A.（1991）を参照。

[75] Bertinetto（1986：271）から引用したものである。ただし、現在形を用いた文は自然な表現として認めない話者もいるようである。

（71a） Lui ritorna da un lungo viaggio, ecco perché è stanco[76]
（彼は長旅から帰ってきた。だから疲れている）
（71b） Lui è ritornato da un lungo viaggio, ecco perché è stanco
（彼は長旅から帰ってきた。だから疲れている

瞬間動詞（puntuali）

（72a）Ieri esco e chi incontro?
（昨日出かけたら誰に会ったと思う？）
（72b）Ieri sono uscito e chi ho incontrato?
（昨日出かけたら誰に会ったと思う？）

（73a）Mario dice che io ho la testa dura[77]
（マリオは私が頑固であると言った）
（73b）Mario ha detto che io ho la testa dura
（マリオは私が頑固であると言った）

以上の全ての例文における現在形は発話時または発話時以降における事態を表すのではなく過去における事態を表す現在形である。上記の svegliarsi（起きる）, ritornare（帰る）, incontrare（会う）, dire（言う）という動作は発話時以前に完了した動作であるため過去形で表現するほうが自然に感じられるが、これらの動詞の場合には現在形と近過去形のあいだに差がないと言える。そのため、過去における動作であるにも関わらず現在形により表現することも可能であり、単純時制と複合時制が置き換えられる。しかし、上記の例文からわかるように、trasformativi のみではなく puntuali 動詞においても中立化が起こるということが明らかになった。つまり、例（70a）と（70b）と（71a）と（71b）と同様に、例（72a）と（72b）と（73a）と（73b）においても単純時制（現在形）を用いるとその事態における終了局面が提示される。ただし、Bertinetto が指摘するように、動詞のみではなく場面の影響も大きいと言える。さらに、次のことも参考にしなくてはならない。まず、例（70a）と（71a）においては相違点があることに注意すべきである。Bertinetto は現在形と近過去形における中立化を発話時直前に起こった事態またはそのときに目撃した事態を表す例文[78]に限って考察しているが、例（71a）からわかるように、発話時直前に起こった事態のみではなく発話時から時間的に離れている事態の場合においてもその中立化が起こり得る。このように、現在形と近過去形のあいだには解釈に対する相違がないとは言えるが、現在形は常に同じ機能を果たしていることは言えない。つまり、例（70a）と（71a）から、現在形は二つの機能を果たしていることがわかる。一つ目は、発話時直前に起こった事態を表すという機能（例 70a）であり、二つ目は過去における語りの形として経験を描写するという機能（例 71a）である。次に、例（72a）と（72b）と（73a）と（73b）についても説明していく。これらの例文においても中立化が可能であり、現在形を用いた例文と近過去形を用いた例文のあいだには相違がなく、両方の時制の適用が認められる。この点では例（72a）と（72b）と（73a）と（73b）は共通しているが、詳しく分析すると相違点も現れてくる。前者は後者とは異なり、描写されている事態が過去において一回のみ起こった事態にとどまっていることに対して、後者は現在形により描写されていても、一回のみの事態としての解釈以外に、過去において複数回起こった事態として解釈することができるという相違点がわかる。

続いて、durativi の分類に属している risultativi（結果動詞）と stativi（静態動詞）と continuativi（持続動詞）を用いた例文を参考にしよう。Risultativi として挙げられるのは imparare（習う）, costruire qualcosa（何かを組み立てる）, mangiare qualcosa（何かを食べる）などのような動詞であ

[76]例（68b）と同じ例文であるが、例（71b）においては一部が追加された。例（68a）においても同じ追加をしても意味が変わらない。
[77] 当該例文は補足節であり、それに適用される時制の一致のルールについて第一章と第八章を参照。
[78] Bertinetto（1986：271）を参照。

り、stativi として挙げられるのは credere（信じる）, assomigliare（似る）, aver fame（空腹である）などであり、continuativi として挙げられるのは andare（行く）, mangiare（食べる）, lavorare（働く）, abitare（住む）などのような動詞である。すでに述べたように、結果動詞の場合には単純時制と複合時制における本来の機能がそのまま残るとされているが、それは正しいか否かまた持続動詞においても同じ現象が現れるか否かという疑問が生じる。

【durativi】

結果動詞（risultativi）

（74a）Antonio costruisce un perfetto modellino di aeroplano.
（アントニオは完璧な飛行機の模型を作る）
（74b）Antonio ha costruito un perfetto modellino di aeroplano.
（アントニオは完璧な飛行機の模型作った）

（75a）Oh,finalmente anche lei impara a suonare il pianoforte.
（ほら、彼女もやっとピアノを弾くの習っている）
（75b）Oh, finalmente anche lei ha imparato a suonare il pianoforte.
（ほら、彼女もやっとピアノを弾くの習った）

持続動詞（continuativi）

（76a）Ieri vado al cinema e chi ci trovo?
（昨日映画館に行ったら誰がいたと思う？）
（76b）Ieri sono andato al cinema e chi ci ho trovato?
（昨日映画館に行ったら誰がいたと思う？）

上記の例（74a）と（74b）と（75a）と（75b）からわかるように、Bertinetto の説明が正しく、結果動詞の場合には現在形により描写された事態と近過去形により描写された事態のあいだには差があり、中立化が不可能である。例（74a）における動作がまだ最中であるのに対して、例（74b）における動作は完了している動作として解釈される。同様に、例（75a）における動作も完了した動作として解釈することができず、発話時においてもまだ持続していると言える。ただし、例（75a）の finalmente impara は「習うこと」を決心したことに焦点を当てるなら近過去形との差が弱まるということも言える。また、例（76a）における現在形と例（76b）における近過去形のあいだには差がなく、現在形により描写された事態が過去に起こって完了したことを表す現在形である。ただし、すでに述べたように、文脈の影響も大きく、例（76a）が文法的なのは物語[79]として描写されているときに限っている。

まとめると、上記のことから次のことが明らかになった。まず、上記の例（70a）と（70b）～（76a）と（76b）からわかるように、中立化の点に関しては、non-durativi 動詞と durativi 動詞の区別をしなくてはならないが、限界性の影響も大きいと考えられる。前者の場合、現在形で描写された事態が近過去形で描写されても意味に対する差がそれほど大きくないことがわかるが、それに反して後者の場合、現在形で描写された事態が近過去形で描写されるとその事態の時間軸における位置づけが変わることが明らかになった。また、以下のことも言える。まず、trasformativi のみではなく他の分類に属する動詞も単純時制と複合時制の中立化を可能とするが、文脈によるものでもあるため、必ずその現象が可能であるとは限らない。また、non-durativi の分類に属する動詞は現在形で表現されても過去における事態を表すことができる。なぜなら、その動詞は性質

[79] 節 2.2.2 を参照。

的に持続を求めない動詞であるため、単純時制により描写されてもその事態の終了局面を表すことができるからである。

2.4 まとめ

本章では、イタリア語における様々な用法とそれに関する制約に関して述べてきた。現在形の用法は発話時を内包するものにとどまらず、過去や未来の表現も及ぶことについて述べたが、主に過去に起こった事態を表す用法を検討した。その代表として「歴史的現在形」を取り上げ、またその用法から生じる「現前化」とそれに関わっている問題点に関して論じた。「現前化」というのは、話し手は過去における出来事の語りをより生き生きとした語りにさせようとするという用法であるが、この説明に従うと過去に起こったその事態を現在形で描写するかあるいは過去形で描写するかという選択は話し手による判断であるようであるが、過去の出来事を表現する現在形には何らかの制限があるため、常にそうであるとは限らないことに着目した。さらに、現在形の用法が不可能である場合、話し手はどのような情報を伝えようとするかまたどのようにそれを伝えようとするかにより現在形の用法が可能となると述べた。その理由として、つまりなぜ不可能であるはずなのに現在形の適用が可能であるという理由として「物語化」を提案した。つまり、話し手は過去における出来事を「語り」として伝えようとするため、現在形の適用が可能となると説明した。このように、話し手には二つの選択肢があり、一つ目は過去形であるのに対して、二つ目は現在形であり、この使い分けにより話し手のその出来事に対する関与が現れる。

また、本章では現在形と過去形のあいだの置き換えに関しても述べたが、いくつかの例文を挙げながらその置き換えを可能とするのは「アオリスト的近過去形」ではなく「完了的近過去形」のみであると明らかになった。この置き換えはなぜ可能であるのかという疑問に対して、二つの説明を挙げた。一つ目は、これまで述べてきたように、話し手の選択による選択であるという説明であるのに対して、二つ目は動詞の性質による説明である。後者の場合、動詞の性質により単純時制と複合時制のあいだに「中立化」が起こるか否かという視点からの説明である。この際、各分類に属しているいくつかの動詞を用いた例文を挙げ、どのような制限があるかに関して検討した。その結果、継続動詞と非継続動詞の区別をしなくてはならないと明らかになったが、telicityも影響を与えており、またそれより細かい動詞の分類（結果動詞、変化動詞など）により中立化が不可能となる場合（結果動詞）と可能となる場合があることもわかった。先行研究では、「変化動詞」のみその中立化を可能とすると述べられているが、本章では他の動詞の分類（瞬間動詞、持続動詞）もそれを可能とすることを明らかにした。

第三章

日本語の過去を表す時制について
—「タ形」を中心に—

本章は、日本語における過去を表す形式について論じることを目的としている。過去を表す時制として取り上げるのは「タ形」と「テイル形」である。

我々がいる現在から、過去に起こった出来事を考える時、その捉え方はいくつかある。それを現在とは関係なく、単なる過去の出来事として切り離して考えることもできれば、何らかの形で現在と結びつけて考えることもできる。そうしたものの見方を言語で表現するとき、時間関係を表す一連の副詞表現の選択という問題が生じる。物事を見る基準点を「現在」に置き、出来事を現在と切り離してみれば、動詞表現は過去時制となり、その時間関係は「昨日」「二年前に」などの表現により示される。これらは出来事を過去の特定時に限定する副詞句である。それとは異なり、基準となる時間を「過去の一時点」に置き、それ以前の出来事を見た場合、その時間関係は「その二日前に」「その二年前に」などの表現[80]により示される。本章で対象となっているのは前者のみであり、それを表す形式として取り上げるのは「タ形」と「テイル形」である。以下ではこれらの時制形式の意味・機能とその用法または副詞との組み合わせに関して述べていく。

先行研究において問題とされているのは、まず、日本語には過去の出来事を述べるのに二つの言語的手段があるということであり、その一つは「タ形」であり、もう一つはいわゆる経験・記録用法の「テイル形」である[81]。特に、問題とされているのは、「タ形」における二重性の有無と「テイル形」における過去を表す用法、またその二つの時制形式における相関関係という三点である。最初の点に関しては、次のことが言える。周知のように、「タ形」は発話時以前における出来事の実現を表すが、その時制においては二つのバリアントが認められ、一つ目は「完成相過去」であり、二つ目は「パーフェクト相現在」[82]である。この二つのバリアントがあるため「タ形」が二重性をもつ形式であると認められているが、その「タ形」の表す意味に関しては議論がある。なぜなら、「タ形」がテンス的な意味のみを表す形式であるという立場と「タ形」が完了的な意味のみを表す形式であるという立場があるからである。本論はその二重性を認める視点から述べていく。一般的に、この「タ形」の二重性の根拠とされるのは「タ形 − ナカッタ形」、「タ形 − テイナイ形」という対応する否定形式であるとされているが、この点については節 3.4 で述べることにする。また、「テイル形」に関しては次のことが問題とされている。継続相はなぜ現在を表すことができるのか、またなぜ過去において行なわれた出来事の描写ができるのかという疑問である。この点に関しては須田(2010)と井上（2001）が述べている。須田（2010）では、継続相の表す継続的な動作は、始まりの部分はすでに実現し、過去になったものであるとされている。確認は、もはや部分的には過去のものであるが、その確認がまだ終了していないという説明がされている。つまり、現在に動作として位置づけられているということとなるため、直接的な知覚があると言ってもよいだろう。しかし、過去において行なわれた動作であるため、現在としてつかみがたいということも言えなくはない。この点については次章で述べることとする。まず、本章においては「タ形」の二重性とそれに関わる概念について論じていく。本章は

[80] 基準となる時間が「過去の一時点」である場合については以後の章において述べている。
[81] 工藤（1995）における用語である。
[82] 鈴木（1979）による用語である。

「タ形」を対象とするが、「テイル形」との相関関係に関しても言及するため、以下では両者における先行研究をまとめていく。

3.1 先行研究

以下では、これまでの「テイル形」と「タ形」についての研究を簡単にまとめていく。なお、研究によって「ている」「た」の表記は「シテイル」・シテイル・「ている」・「〜ている」・「タ」・タ・「〜た」などまちまちである。原則として引用部分では筆者の記述に従うことにするが、本論では基本的には「ル形」「タ形」「テイル形」「テイタ形」という表記を用いることとする。

金田一（1950）は、動詞を状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞の四つに分類することを提案し、それらの分類と「ている」がつくか否か、つくとしたらどのような意味になるかを論じ、「アスペクトの観点から見た国語動詞の分類」（1950:7）を行なった。さらに、金田一（1955）は、「〜る」「〜た」「〜ている」「〜ところだ」などを取り上げ、どの種の動詞のどの形式がテンスを表し、どれがアスペクトを表現するかを論じ、テンスは「ある動詞その他用言の意味する状態・動作・作用が、ある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるか、同時であるか、以後であるかを示す形態のちがい」であり、アスペクトは「動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態のちがい」（1955:60）と定義した。

その後、藤井（1966）は、金田一（1955）が「あの人はたくさんの小説を書いている」を「書く」という継続動詞が臨時的に瞬間動詞として用いられたものとし、「書いている」を「結果の残存」に位置づけていることを批判した。これは「過去において行なわれた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるものである」（1966:105）としてこの用法を「経験」と名付けた。また、動詞は「動詞＋ている」ではなくそのものの意味で分類しなくてはならないとし、動詞の分類において「結果動詞」「非結果動詞」という分類を示した。

奥田（1977）で、より重要な成果の一つとされているのは、「ている形」を表す「動作の継続」と「変化の結果の継続」に共通する意味として、継続性というアスペクト的な意味を引き出したことと、「る形」のアスペクト的な意味を「ひとまとまり性」「非分割性」と規定したことである。奥田は、アスペクト研究は「する」と「している」の対立を見なくてはならないと指摘し、「する」と「している」は「一方がなければ、他方もありえないという、切りはなすことのできない、有機的な関係の中にある」（1977:34）と批判している。さらに、奥田は動詞を「主体の動作」と「主体の変化」に分類する。この基準を用いれば自動詞と他動詞の関係や受動態とアスペクトの関係も説明が可能であるとしている。

町田（1989）は、日本語では「ル・タ」という限られた形式が多様な意味をもつことから、時制とアスペクトの意味を規定する条件を明確化する必要があるとして、時制とアスペクトが日本語で「どのような形式に対応しているかを具体的かつ体系的に」（1989:17）記述している。町田は、アスペクトは「発話者の事象の時間的性質に対する見方を伝える形式」とし、動詞の性質のみではなく動詞句のタイプ・主語・目的語・副詞句・動詞など様々な要素によって決定されるため、それらを十分考察する必要があると述べている。

工藤（1995）は、文単位の文法を脱却し、テクストの中でテンスとアスペクトを位置づける。話し言葉と書き言葉両者を対象とし、文脈の中での文法現象を捉えた点が従来の研究と異なる点であろう。テクストの多様性も特色の一つである。話し言葉では小説の会話の文、書き言葉は小説の地の文・体験的ノンフィクション・非体験的ノンフィクションをそれぞれ観察する。また、テンスとアスペクトの捉え方も、形式・意味・機能の三つの視点から行なっており、テクストの中でのアスペクトの機能を述べている点が注目される。工藤は、テンスとアスペクトの形式と機能が、話し言葉・小説・ノンフィクションで異なるが、それは文単位で文法表現を見ていたのでは理解できないということを明らかにした。さらに、工藤は「パーフェクト」を大きく取り上げ、「現代日本語のパーフェクト性をめぐっては、従来、完了という用語のもとに、タ形式における場合のみを取り上げて、問題とされてきた。が、むしろ、テイル（テイタ）形式の場合のほうが、テンスから相対的に自立した形で、パーフェクトというアスペクト的意味を表していると思われる。タ形は、＜現在パーフェクト＞しか表せないのである」としている。このパーフェク

トに関しては様々な意見があり、反論の中でより有力であるのは岩崎（2000）と庵（2001）によるものである。この点に関しては後述するため、ここでは述べないこととする。

以上のように、「テイル形」の研究は「動詞＋テイル」の形を研究テーマとするところから始まり、完成相と継続相の対立を取り入れ、文中の他の要素との関係を取り上げ、テクスト全体でのアスペクト形式の機能を視野に入れる研究まで進んできた。

また、従来日本語の「タ形」は二重性をもつ形式であるとされ、「完成相過去」を表す場合と「パーフェクト相現在」を表す場合があると言われている。その際、「タ － ナカッタ」、「タ － テイナイ」という対応する否定形式の違いが根拠とされるが、この見方に対しては様々な意見があり、本論で取り上げるのは鈴木（1979）、寺村（1984）、工藤（1995）、井上（2011）、山村（2012）である。

鈴木（1979）は、「完了」というアスペクト的な意味と、「過去」というテンス的な意味を表すとされてきた「タ形」の二つの意味を、いずれも、過去というテンス的な意味を表すものとして、テンスという形態論的なカテゴリーの面から統一した。鈴木は、1 回的な過去の出来事を叙述する動的述語の「タ形」の用法を＜現在と結びついた過去＞と＜現在から切り離された過去＞という二種類に分類している。それに対し、寺村（1984）は、後者は出来事を「現在から切り離された、過ぎ去った点」として表し、前者は「ある時点において、ある事態がすでに実現した」（1984:119）ことを表すとしている。また、工藤（1995）は、後者は完成相過去、前者はパーフェクト相現在、すなわち過去の出来事の結果・効力が現在存在することを表すとしている。工藤（1995）は基本的な意味として、「ル形」・「タ形」は完成性を表し、「テイル形」・「テイタ形」は継続性を表すとしているが、それ以外に、派生的な意味として、「テイル形（テイタ形）」が＜パーフェクト性＞＜反復性＞＜単なる状態＞、「ル形」が＜反復性＞＜恒常的特性＞、「タ形」が＜パーフェクト性＞＜反復性＞の意味を表すとしている。

井上（2011）では、「タ形」は発話時以前における出来事の実現を表し、「タ形」の二重性とされているものは、出来事実現の有無を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかという文レベルの意味の違いであるとされている。

以上のように、「タ形」の研究はその形式の二重性と機能を中心とする研究であり、現在は「テイル形」との対立を中心としている研究が多い。

3.2 動詞の分類

アスペクト研究において、動詞分類が重要な意味をもつのは、文法的アスペクト対立が抽象的なものであるがゆえに、語彙的意味のタイプに応じて具体化されるからである。従って、動詞分類にあたっては、文法的なものとの相関性のもとで、語彙的意味の一般化が行なわれなくてはならない。テンス・アスペクトの研究と動詞の分類は大きな関係をもつ。以下ではこれまでの主な分類法を概観していく。

一般的に、述語には大きくわけて「動態述語」「状態述語」という二つのタイプがある。一つ目は、基本形が発話時以後における出来事の実現を叙述するタイプであるのに対し、二つ目は、基本形が現在（発話時）における継続的な状態の存在を叙述するタイプである。日本語の動詞の多くは動態述語である。状態述語に属するのは、動詞の一部（存在動詞、知覚動詞、動詞の可能形など）、形容詞・形容動詞、「名詞＋ダ」である。そして、文末の「タ形」は「発話時以前の出来事または状態である」というテンス的な意味を表すとされている。動態述語の「タ形」は発話現場とは別の過去の場面で実現された出来事、あるいは発話現場において発話時直前に実現された出来事を表すのに対し、状態述語の「タ形」は過去において存在した状態を表すとされている。出来事の叙述か、状態の叙述かということは、様々な局面で問題となる重要な区別である。井上（2001）の説明に従うと、動態述語「ル」「タ」は、「テイル」「テイタ」の形式にすることにより状態述語化され、現在／過去における＜動作の継続＞、＜変化の結果状態の持続・残存＞、＜複数の出来事の反復的実現＞、＜具体的な変化過程が想定しにくい「単なる状態」の存在＞といった意味を表す。

ただし、動詞の分類に関しては様々な用語などがあり、以下で先行研究に触れながら動詞の分類について詳しく見ていく。

金田一（1950）は動詞を、状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞と四分類した。瞬間動詞は瞬間に終わってしまう動作・作用を表し、「現在〜ている最中だ」ということができない動詞であるとしている。

その後、高橋（1969）は状態動詞以外の動詞を次のように説明している。「進行の状態」になるのは継続動詞であり、「結果の状態」になるのは主体に変化を生ずる動詞であるとしている。こういった分類により「動詞＋テイル」の意味が矛盾なく説明されるようになった。

表 4. 高橋による継続動詞・瞬間動詞の分類 (1969:126)

	継続動詞	瞬間動詞
主体に変化を生ずる動詞	のびる・着る	パンクする・死ぬ
主体に変化を生じない動詞	走る・みる	ぶつかる・目撃する

寺村（1984）は金田一の四分類の第四類の動詞を形容詞的動詞と名付け、「形容詞的動詞＋テイル」は時間的な変化の中で物事を捉えるのではなく、他の物との比較の中での状態を捉えると述べている。

町田（1989）は状態動詞の状態性の強弱を取り上げ、存在を表す動詞、関係性を表す動詞などについて述べている。また、「思う・信じる」などの思考の動詞を状態動詞に含め、これらの動詞のテンス・アスペクトを検討している。瞬間動詞は事象が偽である状態から真である状態への瞬間的な変化を意味すると述べ、徐々に進んでも結論が出るときは瞬間であるとし、「瞬間動詞」という語を使っている。

工藤（1995）はアスペクト対立の有無と動詞の関係で、まず動詞を＜外的運動動詞＞（例えば「食べる」「死ぬ」「開ける」「結婚する」など）、＜内的運動動詞＞（例えば「思う」「考える」「感動する」など）、＜静態動詞＞（例えば「ある」「異なる」など）に分類している。そして、＜外的運動動詞＞をさらに以下のように三分類し、主体の動作・変化と能動・受動の関係を整理し、これらに「テイル」がついた場合は次のようになると述べている。

【外的運動動詞】

主体動作・客体変化動詞	動作継続（能動）／結果継続（受動）
主体変化動詞	結果継続
主体動作動詞	動作継続（能動・受動）

（工藤 1995:72）

すなわち、工藤が説明しているように、「主体動作・客体変化動詞は、主体の観点からは動作をとらえていて、全て他動詞である。この動詞グループの特徴は、他動詞であるがゆえに、能動と受動の対立があって、能動では＜動作継続＞を表すが、受動では＜結果継続＞を表す点にある。それとは違い、主体変化動詞は基本的に自動詞であり、＜結果継続＞を表す」。また、主体動作動詞には、他動詞も自動詞も所属しているが、動作のみを捉えているものであるとされている。工藤の主体動詞・客体変化動詞、主体動作動詞、主体変化動詞という考え方は、受動・能動の場合も視野に入れた分類法であると言える。

3.3「タ形」における二重性と「テイル形」との関係について

先行研究においても問題とされているのは、日本語には過去の出来事を述べるのに二つの言語的手段があるということである。それらは「タ形」と「テイル形」である。ただし、「タ形」は二つの用法を可能とするため、それに関する問題も生じてくる。

本章のはじめにおいても述べたように、「タ形」は発話時以前における出来事の実現を表す形式であるが、その時制においては二つの用法が認められ、一つ目は鈴木（1979）の用語で言うと「完成相過去」であり、二つ目は「パーフェクト相現在」である。鈴木（1979）では、その二つの意味を、いずれも過去というテンス的な意味を表すものとし、テンスという形態論的なカテゴリーの面から統一していた。鈴木（1979）は、1 回的な過去の出来事を叙述する動的述語の「タ形」の用法を次のように分類している。

（77）**I. 現在と結びついた過去（パーフェクト的）**＝（完了的）

a. 発言の直前の動きや変化

a1. あ、電気が消えた！

a2. あ、ランナー走りました！

b. 現在の状態に結果が残っている過去の変化

大きくなったね。外であってもちょっと解らないくらいだ。

c. 現在既に実現済みであること

「朝ご飯は？」「（もう）食べました」

（78）**II. 現在から切り離された過去（アオリスト的）**

父はこの間の伊豆の地震で死にました

以上のように、「タ形」の用法が大きく「タ I」と「タ II」[83]に分かれることは、研究者の共通認識となっていると言ってもよい。しかし、その意味については二つの異なる見方がある。一つ目の見方は、「タ形」には二重性がないとする見方であり、その代表として鈴木が挙げられる。鈴木（1979:41）は、「タ形」は「過去の特定の一つの時間にその動きや変化がまるごと現実の時間に関係付けられる」ことを表す完成相過去の形式であり、「タ I」と「タ II」の相違は共起要素や文脈により生ずるニュアンスの相違にすぎないとしている。それに対し、二つ目の見方の代表として挙げられるのは寺村（1984）である。この見方によると「タ形」には二重性があり、寺村（1984:119）は、「タ II」は出来事を「現在から切り離された、過ぎ去った点」として表すのに対し、「タ I」は「ある時点において、ある事態がすでに実現した」ことを表すとしている。また、工藤（1995）は、「タ II」は完成相過去、「タ I」はパーフェクト相現在、すなわち過去の出来事の結果・効力が現在存在することを表すとしている。

上記の「タ I」における「タ形」の用法はアオリスト的ではなく、完了的（パーフェクト的）用法であるが、そのニュアンスとアオリスト的なニュアンスは簡単に区別できるものでなはく、文脈、場面、話し手の予期などのような視点からも考えなくてはならない。しかし、ある例文が完了的であると認められるとしても文脈などが大きな影響を与えているため、例文を一々観察しなくてはならないということに注目すべきである[84]。

上記のパーフェクト的用法（タ I）を表す例文においては一般的に「テイル形」の適用も可能であるとされているが、それに対して「タ II」により描写された出来事は「テイル形」により描写されることができないとされる。このように、制限もあるとわかるが、以下では「テイル形」の適用を可能とする例文を挙げていく。

[83] 本章は時間を表す副詞「もう・すでに」に関しても述べるため、関係する「タ形」の(1c)を中心に論じる。
[84] 次節における例（83a）と（83b）を参照。

まず、日本語において、過去の出来事を「タ形」と「テイル形」により描写することができるというのはどのようなことであるかを説明すべきである。以前の章において述べたように、イタリア語の場合、過去における出来事を表す時制として用いられるのは近過去形・遠過去形と、場合により現在形である。ただし、現在形の適用が可能であるとしても制限があるため認められない場合が多い。よって、過去時制の適用がより適切であると言える。それとは異なり、日本語の場合、過去の出来事であるにも関わらず、その出来事を非過去形で表現することが可能である。ただし、日本語においても制限がある。まず、非過去形の適用を可能とする例文として以下の単文[85]が挙げられる。

【タ形】
（79a）モーツァルトは 1788 年の夏に３つの交響曲を作曲した。

【テイル形】
（79b）モーツァルトは 1788 年の夏に３つの交響曲を作曲している。

このように、同じ例文において「タ形」も「テイル形」も用いられ、どちらかの適用が不可能であるということにはならず、いずれも正しい例文である。ただし、二つの時制の適用が可能であるということによりその時制形式が完全に同じ機能をもっているか否かという疑問が生じる。要するに、同じ出来事を描写する際には、「タ形」を用いた場合と「テイル形」を用いた場合、どのような相違点が現れるか、この区別によりどのようなニュアンスが伝わるか、また置き換えが可能であるか、可能である場合、どのような条件を満たさなくてはならないかという様々な疑問が生じるわけである。この現象については工藤（1982）と井上（2001）が述べている。

工藤（1982）は「置き換え」が可能であるか否かという点に関しては以下のように述べている。まず、経験・記録用法の「テイル形」の用法を「タ形」に置き換えられない「記録用法」と、「タ形」に置き換えられる「過去的用法」とに分類している。すなわち、「テイル形」を二つのタイプに分け、一つ目は「記録用法」を表す「テイル形」であるのに対して二つ目は「過去的用法」を表す「テイル形」であると提案している。前者は「タ形」に置き換えられないタイプであるのに対し、後者は「タ形」に置き換えられるタイプであるとしている。以下のようにまとめることができる。

【経験・記録用法の「テイル形」】
↗ ①　記録用法　（「タ形」に置き換えられない）
↘ ②　過去的用法（「タ形」に置き換えられる）

このように、以上の例文における「作曲している」の「テイル形」は経験・記録用法を表す形式であるが、それをさらに二つの用法に分けており、「タ形」に置き換えられるためその「テイル形」は以上の②に当てはまると言える。説明として以下の例文[86]も挙げられる。

【記録用法】の「テイル形」　①　→　「タ形」に置き換えられない

（80a）中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています。
（80b）*中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会いました。

[85] 井上（2001）から引用したものである。
[86] 工藤（1982:78）から引用したものである。

【過去的用法】の「テイル形」②　→　「タ形」に置き換えられる

（81a）しかし君はおととしも出席が悪くて落ちてるぞ。
（81b）しかし君はおととしも出席が悪くて落ちたぞ。

しかし、この点に関して井上（2001）は前者においても「タ形」の適用が可能であると指摘している。ただし、その場合、意味のニュアンスが異なってくると主張している。

（80c）中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています／会いました。

井上（2011）では、記録用法の「テイル形」は、「当該の出来事を現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能な出来事として述べる」際に使う表現であるとされている。そのため、出来事が実現されたときの経過が把握できていないという場合、「タ形」は使えず、その代わりに「テイル形」が用いられるということである。この提案を上記の「記録用法」を表す例文に適用すると以下の考察ができる。話し手は、手紙に「種が人物 X に会った」という記述があるのをみただけで、「種が人物 X に会った」という出来事が実現されたときの経過を把握しているわけではない。従って、この例文を「タ形」にすると、「種が人物 X に会う」という出来事が実現された経過を話し手が把握しているというニュアンスを表す。そして、井上（2001）は過去的用法の「テイル形」に関しては、工藤の説明に同意し、過去的用法の「テイル形」は「タ形」に置き換えられるとしている。この場合、出来事が実現されたときの経過が把握できているにもかかわらず「テイル形」が用いられるわけであるが、これには過去の出来事を、現在も有効なある状態に従属する一局面として捉えるという側面があると説明している。ただし、この時制形式の置き換えにおいては文脈（先行文脈があるか否か、一事列として述べているか否かなど）の影響も大きいため、以上のような簡単な説明では不十分であることに注意すべきである。

以上のことを次のようにまとめることができる。日本語において過去に起こった出来事を表す時制形式は二つ存在しており、場合によりその置き換えが可能であると見てきた。ただし、置き換えが可能であるか否かという点についてのみではなく、その時制が個々にどのような機能を果たしているかという点に関しても述べなくてはならない。なぜなら、「タ形」には二つの用法があるからである。ただし、すでに述べたように、それを認める立場とそれを認めない立場がある。さらに、過去の出来事を表す時制形式が二つであることに加えて、「タ形」の意味とその用法に関しては別の問題も生じる。それは、「タ形」における「二重性」である。その二つの用法とは、単純に「過去にこのような出来事があった」ということのみを述べる用法と「現在（発話時）までに出来事が実現済み」という現在完了的な意味を伴う用法である。それぞれを「アオリスト的用法」と「完了的用法」と本論で呼ぶこととする。

次に、この二重性の有無に関してより詳しく述べていく。この二重性は一般的に応答文において明らかになるとされているため、以下の会話文を例として挙げることとする[87]。

（81a）（昨日はレポートの提出日であった）　「過去の出来事」
A さん：昨日、レポートを出した？
B さん：うん、（ちゃんと）昨日出したよ。
いや、（昨日は結局）出さなかった。

（81b）（A さんと B さんはレポートの提出期限を翌日にひかえている）　「現在実現済み」
A さん：（もう）レポートを出した？
B さん：うん、（もう）出したよ。
いや、（まだ）出していない。

[87] 井上（2001）から引用したものである。

上記の例文はそれぞれ「過去の出来事（アオリスト的）」と「現在実現済み（完了的）」というニュアンスを伝える例文であると一般的にされている。寺村（1971）は「タ形」における二重性を認め、対応する否定形式がそれぞれ「（結局）ナカッタ」、「（まだ）テイナイ」となることも、「タ形」に二つの用法があることの反映であると述べている。

以上のように、「過去の出来事」の意味を伴う「タ形」と「実現済み」の意味を伴う「タ形」が用いられることがわかるが、後者に対しては次の疑問も生じてくる。「実現済み」の意味を伴う「（もう）～タ形」は、経験・記録用法の「テイル形」とともに、過去の出来事を現在と関連づけて述べる完了の形式として位置づけられることがあるが、「テイル形」と「（もう）～タ形」はそれぞれどのような形で過去の出来事を現在と関係付けているかという疑問である。「テイル形」における用法に関しては第四章において述べるため、ここでは例文のみを挙げる。

（81c）（A さんと B さんはレポートの提出期限を翌日にひかえている）
A さん：レポートを出した？
B さん：うん、出し<u>ている</u>よ。

これまで見てきたように、パーフェクト的用法を表す例文においては一般的に「テイル形」の適用も可能であるとされている。井上（2001）もこの二重性を認める立場から説明し、現代日本語の動詞述語形式「タ形」における二重性は以下に示す質問文における<u>否定応答</u>の形式において明らかになるとしている[88]。

（82a）<u>先月</u>、中国に行きました<u>か</u>？／いいえ、<u>行きませんでした</u>。
（82b）<u>もう</u>、中国へ行きました<u>か</u>？／いいえ、まだ<u>行っていません</u>。

このことに関しては工藤（1995）が、例（82a）の「タ形」は、アスペクト的意味ぬきに裸で過去を表しているのではなく、「完成相過去」というアスペクト・テンス的意味を統合的に表しており、例（82b）の「タ形」も、テンス的意味ぬきに裸で完了を表しているのではなく、「パーフェクト相現在」というアスペクト・テンス的意味を、統合的に表しているのであると述べている。それゆえ、同じく過去の出来事を表していても、「先月の今頃は、中国に行っていました」とは言えても、「先月の今頃は、中国に行きました」とは言えない。このように、工藤（1995）も「タ形」がテンスあるいはアスペクトのみを表す形式ではないと述べている。工藤はこの点に関して詳しい分析を行い、「パーフェクト相」という相のバリアントを導入するが、そのパーフェクト相に関しては次章において述べるため、ここではこれ以上述べないこととする。

まとめると、上記の例文における質問文はどちらも「タ形」で表出されているが、その否定の応答文には、過去の否定形である「ナカッタ形」と完了の否定である「テイナイ形」の異なる形式が現れていることにより、日本語の「タ形」は過去のテンスと完了のアスペクトという二つの異なるカテゴリーを兼ね備えたものであることが明らかである[89]。本論では日本語の「タ形」においては二つの機能があるという立場から述べていく。

3.4 「タ形」における二重性を表す否定文と肯定文について

以前の節において述べられていることからわかるように、日本語の「タ形」は過去のテンスと完了のアスペクトという二つの異なるカテゴリーを兼ね備えたものであるため応答文においては二つの可能性が存在する。すなわち、疑問文における「タ形」に対しては否定文の際、「ナカッタ」または「テイナイ」と答えることが可能である。しかし、その対立は常に文脈上の対応に反映されるわけではない。文脈上はむしろ「タ−テイナイ」という対応が成立する方が多いと言える。先行研究では、節 3.3 における「タ Ic−テイナイ」という対応は「タ Ic」のパーフェクト性を反映したものとされる。例えば、工藤（1996:90）は通時的に考えた場合は、「テイル形式のみ

[88] 井上（2001）は工藤（1995:129）を引用している。
[89] このような「タ形」によって表出された質問文の否定応答文に「タ形」と「テイナイ形」の二つの形式が存在するという事実は、日本語を学習する者にとっては、理解し難い文法項目の一つとなっている。

ならずタ形式が『したり』に連続する歴史的残存物としての＜現在パーフェクト＞用法を保持している」と述べている。しかし、井上（2011）が述べているように、共時的に考えた場合、「タIc-テイナイ」という文脈上の対応が成立する原因は、「ナカッタ」が発話時以前には出来事が実現されずに終わったことを表すためと考えるのが自然である。すなわち、「タ形」は出来事が実現されれば使えるのに対し、「ナカッタ」は出来事が実現されずに終わったことが確定しないと使えないということである。さらに、井上は「ナカッタ」が「発話時以前の出来事が実現されずに終わった」という意味を表す背景には、日本語の「タ形」の意味的性質が密接に関係していると述べている。なぜなら、日本語の「タ形」は出来事全体をその前後を含む時間の流れの中で位置づけるからであると述べている。

また、こういった問題は、副詞の使用という別の観点から考察することもできる。すでに言及したように、「タ形」では単なる過去の出来事を表すか、その出来事が現在実現済みであるか、という区別が複雑である場合もあるが、文脈または副詞の適用によりその区別がわかりやすくなるとも言える。前章に挙げた例文（82a）（82b）をみると以下のことがわかる。まず、例（82a）においては「先月」のように明確に過去時を指示する副詞が適用されており、そのため「タ形」により描写された質問文の否定応答文に対して適用が可能となるのは「ナカッタ」のみであるということである。そして、それとは異なり、例（82b）においては「もう」と「まだ」のような完了解釈を求める副詞が適用されているため、否定文では「テイナイ」が用いられることが一般的であるということも言える。以下にこの点に関する先行研究を簡潔に述べていく。まず、否定文に関してはどのような説明がより有効であるかを見てみよう。以下に紹介するのは山村（2013）と庵（2001）における説明である。

山村（2012）では「タ形」と「テイナイ形」の使い分けは、「タ形」により表出された質問文によって表される事態の実現可能な生起時とそれに対する応答文の発話時の近接性の違いに従うという説明がされている。以下の例文が挙げられている[90]。

（83a） A：（午後６時頃に）昼ご飯を食べましたか？
B1：はい、*もう食べました[91]
B2：いいえ、食べませんでした／*まだ食べていません

（83b） A：（午後１時頃に）昼ご飯を食べましたか？
B1：はい、もう食べました
B2：いいえ、*食べませんでした／まだ食べていません

また、庵（2001）では、（83a）の応答文において「ナカッタ形」が出現するのは、疑問文の事態「昼ご飯を食べる」が実現可能な生起時とその質問に対する応答時が遠くかけ離れているからであるとされている。一方、（83b）の応答文で「テイナイ形」が出現したのは、疑問文の事態の実現可能な生起時とその質問文に対する応答時が時間的に近接しているためであるとされている。すなわち、庵によると「時間的な距離」による使い分けである。しかし、本論ではこのような説明は正確ではないと考える。つまり、時間的な距離は無関係であるという立場から説明していく。なぜなら、以下の例（84）からわかるように、それを認めるとまた他の疑問点が生じてくるからである。

（84） A：昨日あの番組を見ましたか？
B1：いいえ、昨日は見ていないですけど。
B2：いいえ、見なかった。

[90] 山村は庵（2001:145）を引用している。
[91] 場面によりその用法が認められる場合もある。ただし、話者と相手のあいだの情報が共通であるという条件が必要である。例えば、仕事の関係で昼ご飯を夕方に食べる場合が多いなら、午後６時であるとしても「もう食べた」という答えが可能である。

上記の例（83a）と（83b）の説明に従うと例（84）においても可能である応答文は「ナカッタ形」を用いた文のみであるはずだが、「テイナイ形」も可能となる形式であるということが上記の会話文からわかる。当該例文においては「昨日」という明確な過去時を示す副詞を伴った「タ形」の質問文に対する否定応答として「テイナイ形」が出現しているのみならず、その否定応答文においても同じ「昨日」が出現している。よって、明らかにこの使い分けが時間的な距離によるものではないことから庵（2001）の説明は不適当であると言える。そこで、どのような説明ができるかという疑問に答える必要がある。一つの提案として、次の 10 種類の異なる動詞を採用したアッタニーポン・馬（2002）の研究が挙げられる。この研究は過去の「タ形」によって表された質問文に対する否定応答には必ずしも「ナカッタ」が出現しないことに関して説明している研究であり、時制の選択は「昨日」などのような時間を表す副詞によるものではなく動詞の性質によるものであるとされている。この研究が興味深いのは、過去の「タ形」を用いた質問文として 10 種類の異なる動詞を採用したことで、その結果、否定応答に出現する「ナカッタ形」と「テイナイ形」の選択には質問文に出現する動詞の種類が関与するということが明らかになった点である。表中の【 】内の数字は当該形式を最も自然だとした者の数を示す。

表 5. 動詞別過去の「タ」形に対する否定応答の形式

質問文過去の「タ」	否定応答「ナカッタ」	否定応答「テイナイ」
勉強会に行った？	行かなかったです【18】	行っていないです【12】
お酒を飲みましたか？	飲まなかったです【11】	飲んでいないです【19】
フランス大会を見ましたか？	見なかったです【12】	見ていないです【18】
またインドに行ったの？	行かなかったです【25】	行っていないです【5】
～の家でも聞こえましたか？	聞こえなかったです【27】	聞こえていないです【3】
今年も行きましたか？	行かなかったです【19】	行っていないです【11】
富士山、見えましたか？	見えなかったです【27】	見えていないです【3】
ワールドカップの試合、見ましたか？	見なかったです【15】	見ていないです【15】
山田先生の授業、わかった？	わからなかったです【29】	わかっていないです【1】
小さい時に水泳できたんですか？	できなかったです【28】	できていないです【2】

上記の表において注目すべきであるのは以下のことである。同じ過去の「行った？」という質問文であっても、「またインドに行ったの？」のように「また」という副詞、「今年も行きましたか」のように「も」といった係助詞が共起すると、その否定応答文には「ナカッタ」の形式が出現しやすいという結果が出た。ただし、この研究に対してもいくつかの問題があると考えられる。例えば、対象となっている動詞の選択である。なぜなら、その半分は「聞こえる」「見える」「わかる」「できる」のような動詞であり、これらの動詞における「テイル形」の適用が特別であるからである。

続いて、否定文について述べた後に肯定文に関してもどのような説明がより有効であるかを見てみよう。以下に井上（2001）における説明を紹介していく。井上（2001）では節 3.3 の「タ I」の ＜現在既に実現済み＞の「ター テイナイ」という対応における「テイナイ」は、パーフェクト相現在の「テイル形」の否定形式であり、「タ I」はパーフェクト相現在の「テイル形」と同様にパーフェクト相現在を表すという説明が不適切であるとされている。井上によると「タ形」は発

話時以前における出来事の実現を表し、「タ形」の二重性とされるものは、出来事実現の有無を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかという文レベルの意味の違いである。これはどのようなことであるかを以下に説明していく[92]。

(85) 朝食は（もう）食べている。　（パーフェクト相現在のテイル形）
(86)「朝食は（もう）食べた？」「うん、（もう）食べた」　（「タ Ic」）
(87)「昨日は朝食を食べた？」「うん、（昨日は）食べた」　（「タ II」）

以上の例文において、パーフェクト相現在の「テイル形」を用いた（85）が表すのは「現在は出来事が実現済みの状態にある」ということである。一方、「タ Ic」を用いた（86）と「タ II」を用いた（87）が表すのは、いずれも実現済みの状態の存在というよりは、発話時以前における出来事の実現である。例（86）の「もう食べた」と例（87）の「昨日は食べた」の意味は異なるが、その相違は、前者が「（発話時以後ではなく）発話時以前に出来事が実現された」という出来事実現のタイミングのずれを述べる文であるのに対し、後者は「発話時以前に（出来事が実現されずに終わったのではなく）出来事が実現された」という発話時以前における出来事実現の有無を述べる文であるという相違である。すなわち、出来事実現を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかということは、出来事時が特定されているかどうかとは別レベルの問題である。井上（2011:24）は以下の例文を挙げている。この例文では出来事時を表す要素の有無に関係なく、出来事実現の有無を述べる文と出来事実現のタイミングを述べる文の両方になりうる。

（88）朝食は食べた。
a. 朝食は（発話時以前に食べたか食べなかったかというと）（ある時に）食べた。
b. 朝食は（発話時以後ではなく発話時以前のある時に）（もう）食べた。

（89）朝食は５時に食べた。
a. 朝食は（発話時以前に食べたか食べなかったかというと）５時に食べた。
b. 朝食は（発話時以後ではなく発話時以前の）５時に（もう）食べた。

結局、例（88a）（88b）と（89a)(89b)の相違は、出来事時が不定か、特定されているかという相違である。また、それぞれにおける（a）と（b）の相違は、出来事実現の有無を述べるか（88a,89a）、出来事のタイミングを述べるか（88b,89b）という相違である。いずれの場合も、「食べた」という述語自体は、発話時以後ではなく発話時以前における出来事の実現のみを表すと考えるのが自然である。

3.5 「予期区間」

以下に再び例文（83a）と（83b）を参考にし、「タ形」とそれに対する応答文の形式に関して説明していく。「タ形」と「テイナイ形」の使い分けは近接性とは無関係であるものという視点から以下で論じていくが、まず応答文の形式について説明するために、肯定文と否定文を分けてその順を追って進めていく。以下は肯定文の例である。

【肯定文】

（90a）＝（83a）A:（午後 6 時頃に）昼ご飯を食べた？
　　B1:はい、*もう食べた。

（90b）＝（83b）A:（午後 1 時頃に）昼ご飯を食べた？
　　B1:はい、もう食べた。

---

[92] 井上（2011:24）から引用した例文である。

当該例文からわかるように、両方の例文は発話時以前における出来事の実現を表す例文であるが、応答文において「もう＋タ形」を可能とするのは後者のみである。なぜ前者においては不可能であるかまたどのような相違があるかという疑問が生じる。それは、結論を先に述べると、後者における発話時が前者と違って当該出来事の「予期区間内」にあるからである。言うまでもなく、時制形式を選択するのは話者であり、話者はどのような出来事に対してもある条件に従って判断してからそれに合わせて時制形式を選択するのが一般的である。ただし、出来事に対する判断は心理的な概念であるため全ての話者においてその判断が同じであるとは限らず、個人差がある場合が多い。**「予期区間」**[93]というのは話者の設定した時間的な幅または区間のことを意味している。そのため、これは一般的な設定時点とは別のものである。「予期区間」は話者の自分が設定した実現時間帯であり、その区間内に出来事が実現されれば過去形を用いることが可能となるということである。上記の例文からもわかるように、当該出来事がその予期区間内に実現すれば「もう＋タ形」の用法は可能であるが、予期区間外なら「もう＋タ形」の用法は不可能となる。

まとめると、話者は自分が設定した実現区間内に出来事が実現されれば過去形を用いることが可能になるということである。従って、上記の「予期区間」という概念は主観的な概念であると言ってもよい。また、この場合においては副詞の制限もあり、「もう」の意味を考えてみると、それは「ある時間区間までのこと」を表す副詞であり、その区間は話者の予期区間であると考えればよい。すなわち、「過去における時間設定」が必要であるという単純な結論に至る。

ただし、後述するように、「もう」は想定よりはやいという解釈以外にもう一つの解釈を可能とする。それは単なる「完了」、つまり「発話時以前に完結した出来事」という意味である。このように、本章では「もう」の解釈を「完了」と「予期区間内」に分けるべきであると主張する。なぜなら、「もう」は「予期区間」と関係のない用法も可能とするからである。例えば、以上の例（83c）は井上では非文として扱われているが、「もう」の解釈によりその適用が認められる場合もあると考えられる。つまり、「食べる」動作が「予期区間内」でなくても「もう」を用いることが可能であるということになる。

（90c）＝（83c）A:（午後 6 時頃に）昼ご飯を食べた？[94]
B: はい、もう食べた。

以上の例文は非文ではないという立場から以下で説明していく。つまり、例（90c）における「もう」の適用は可能であるということを認める。この場合、「もう」における解釈が変わり、「完了」という解釈になる。よって、「はい、もう食べた」と答える人は相手に「食べた」という事実のみを伝えようとし、それは話し手が設定した時間区間とは無関係なものである。また、例（90c）が認められる場面がもう一つ考えられる。それは、例えば、仕事の関係で常にお昼ご飯を遅くに食べている人を質問の対象とする場合である。つまり、質問相手は毎日その時間帯にお昼を食べる習慣があれば例（90c）のようなやりとりが可能である。その場合、「予期区間」につながっている用法になる。

まとめると、次のことが言える。本論は、井上とは異なり、「もう」の適用を常に「想定よりはやく」という解釈に基づく用法として扱わないこととする。なぜなら、単なる完了を表す用法もあり、その用法は話者が決めた設定時間とは無関係であるからである。従って、「予期区間外」の場合でも「もう」の適用を認めてよい。

次に、否定文に関する説明をしていく。出来事の実現をもとにする肯定文に比べると、否定文のほうが複雑であると思われる。予期区間の概念をこの場合においても適用すると、「タ形」は出来事が実現すれば用いることができるが、「ナカッタ形」は予期区間を過ぎなければ使えないということとなる。

[93] 井上（2001）においては「実現想定区間」と呼ばれている。
[94] イタリア語の場合、「già」の適用が「予期区間外」の場合でも可能である。

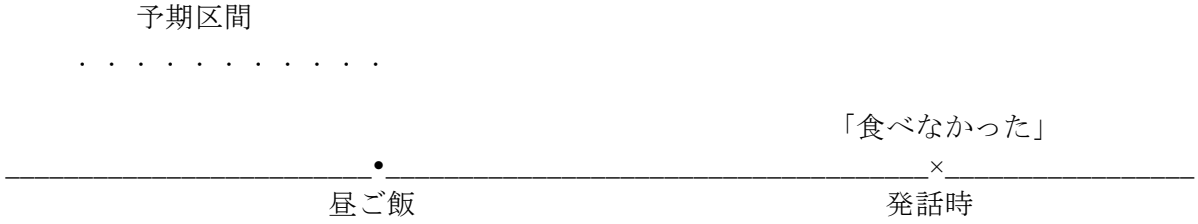
【否定文】

(91a) A:(午後 6 時頃に) 昼ご飯を食べましたか?
B2:いいえ、食べませんでした/*まだ食べていません

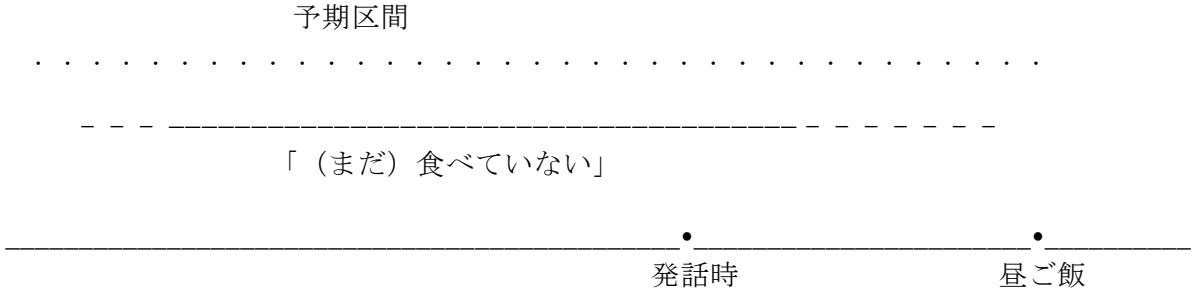
(91b) A:(午後 1 時頃に) 昼ご飯を食べましたか?
B2:いいえ、*食べませんでした/まだ食べていません

例 (91a) と (91b) からわかるように、「タ形」を可能とするのは前者のみである。なぜなら、「ナカッタ形」は予期区間に当該の出来事が実現されないまま終わったということを表すからである。一方、発話時が当該の出来事の予期区間内にあり、出来事の非実現が最終的に確定されないうちは、「(まだ) テイナイ形」が用いられる。以上のことを図で説明すると、以下のとおりとなる。

(91a) A:(午後 6 時頃に) 昼ご飯を食べましたか?
B2: いいえ、食べませんでした/*まだ食べていません



(91b) A:(午後 1 時頃に) 昼ご飯を食べましたか?
B2: いいえ、*食べませんでした/まだ食べていません



上記の図からわかるように、「ナカッタ」は予期区間内に当該の出来事が実現されないまま終わったということを表し、発話時が当該の出来事の予期区間内にあり、出来事の非実現が最終的に確定されないうちは「テイナイ」が用いられるということが明らかとなった。しかし、日常会話においてはこの使い分けがはっきりしているか、またはどのように適用されているかという疑問が生じてくる。再び例 (84) を参考にしよう。

（92）＝（84） A：昨日「○○番組」を見ましたか？
B1：いいえ、昨日は見ていないですけど。
B2：いいえ、見なかった。

例（84）においては「テイナイ形」も「タ形」も用いることが可能であることにより、例（83a）と（83b）における説明が不完全であるということとなる。以下にこの点に関する先行研究について少し触れる必要がある。

ザトラウスキー（1983）は否定応答文に出現する動詞形式の実態を電話調査という方法で明らかにし、その結果を語用論的視点から分析した。この調査とは次のようなものである。まず、500名に電話をかけ、「何々は過去に見たか」と「何々はもう読んだか」という質問をし、その否定応答文の形式を調査した。もし電話の相手から否定応答が得られない場合には、否定応答が得られるまで次々と別の質問を行なっていった。一方、電話の相手から否定の応答が得られた場合には、その「見た番組や読んだ本」などに対する関心度を測る質問をした。例えば、「○○という番組があることはご存知でしたか。よくご覧になりますか」のような質問である。そして、ザトラウスキーは「タ形」を用いた質問文に対する否定応答に出現した各形式の機能を、質問文が言及した番組や本に対する関心の度合いから分析した。例（84）に合わせると以下の結果が出たようである。

まず、「見なかった」という否定応答は、「昨日見ようと思っていたけど、見なかった」あるいは「他の日は見たけど、昨日は見なかった」といった特定の心理の下に出現した形式である。続いて、「見ていない」という否定応答は、「昨日見ないで、その状態が続いている」、「昨日も他の日も見ないで、その状態が続いている」という非完成の継続を表したものである。厳密に言うと、この調査においては他の動詞形式も分析されている。それは「ル形」と「ナイ形」[95]であるが、「ル形」と「ナイ形」は過去に限る解釈を求める形式ではないため、本論ではそれについては述べないこととする。上記の例文において「見ない」という応答文の場合、「今までだけではなく、これからも見ない」あるいは「ずっと見ない」という意味が含まれる。過去に限って描写する形式ではなく、「属性」というニュアンスが含まれるため、本論の対象である形式から外れる。また、ザトラウスキー（1983）では「見ていない」または「読んでいない」が「見なかった」または「読まなかった」よりも多く出現したのは、一種の待遇表現的効果のためであるとされている。つまり、「テイル形」の存在により、当該出来事の非生起を会話の「今」と結びつけることが可能であるため、それは会話に対する協力的な態度の表明に繋がるとされている。

以上の研究においてはいくつかの問題点があると考えられ、その一つは二つの動詞（「見る」と「読む」）しか扱われていないことである。実際には動詞の種類によってその形式が異なることも考えられ、動作動詞のみではなく、「聞こえる」のような知覚動詞や「できる」のような能力を表す動詞を用いた文を分析すると同じ結果が出ない可能性も十分にあり得る。

3.6 「タ形」における完了性について－イタリア語との比較－

本章において見たように、イタリア語の近過去形と同様に日本語の「タ形」にも二つの用法がある。よって、この点に関しては「近過去形」と「タ形」が似ていると言えるが、相違点も存在している。本節では日本語の「タ形」における完了性はイタリア語の「近過去形」における完了性と同じものであるか否か、また解釈に関してはどのような相違点と共通点が存在しているかということに関して論じていく。

まず、第二章で説明したように、イタリア語の近過去形はアオリスト的な用法と完了的な用法を認める時制であるが、本章では後者のみを対象とする。様々な例文からわかったように、「近過去形」における完了性はたった一つのものではない。そのため、その完了性を二種類に分けるべきであると提案した。一つ目は「compiutezza provvisoria（一時的な完了）」であるのに対して、二つ目は「compiutezza immaginaria（想像上の完了）」と呼ぶことにした。この二つの完了性

[95] 「いいえ、見ない」という応答文も分析されている。

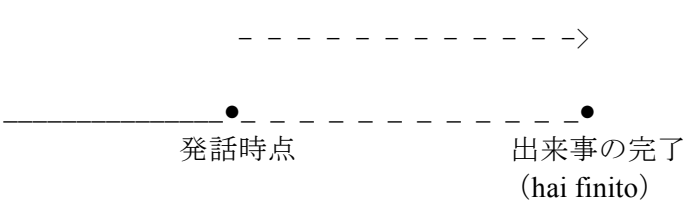
のあいだに存在している相違点として挙げられるのは、出来事における完了の時間的な位置とその出来事の実現の有無である。また、この相違により、遠過去形との置き換えが可能であるか否かという判断もできるため、この区別が重要な点であると言える。これまでの例文を挙げた結果、近過去形と遠過去形の置き換えを可能とするのは「compiutezza provvisoria（一時的な完了）」のみである。なぜなら、遠過去形は発話時以前に起こった出来事のみを描写することができる時制であると同様に「compiutezza provvisoria」を表す近過去形も発話時以前に起こった出来事を表すものであるからである。この場合、当然設定時点は発話時において位置づけられている。それに反して、「compiutezza immaginaria」は発話時以前に起こった出来事ではなくその以降、つまりまだ実現していない出来事のことを表すものであるため、遠過去形とは対立する。この場合、設定時点は発話時以降に位置づけられている。参考のため、再びその相違を表す例文を挙げていく。最初に、イタリア語の場合を見ていく。

（93）＝（18a）Un altro esame ancora e hai finito il corso　（近過去形）
*Un altro esame ancora e finisti il corso　（遠過去形）
（試験をもう一つ受ければ課程を終了する）

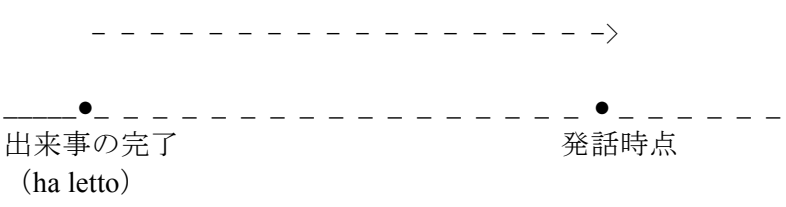
（94）＝（18b）Lui ha letto la Divina Commedia　（近過去形）
Lui lesse la Divina Commedia　（遠過去形）
（彼は神曲を読んだ）

以上の例文における解釈を図で表すと以下のようになる。

例（93）＝（18a）Compiutezza immaginaria



例（94）＝（18b）Compiutezza provvisoria



以上の例文からわかるように、前者の場合、遠過去形との置き換えが不可能であるのに対して後者の場合、遠過去形の適用が可能である。なぜこの相違があるかというと、近過去形は複合時制であるため、必ず設定時点を求める時制であり、当該出来事はその設定時点以前に実現するからである。ただし、上記の例文からわかったように、その設定時点の位置によりどの完了であるかが決まる。また、第一章において言及したように、これは近過去形の幅の広い用法によるものでもある。なぜなら、遠過去形とは異なり、近過去形は未来的な用法も可能とする時制であるからである。このため、「compiutezza immaginaria」が可能となる。このように、近過去形は二つの

用法を可能とする時制であると明らかになるが、日本語における「タ形」は同じ働きをしうるかという疑問が生じてくる。
以下では日本語は例（93a）と（94a）における完了性を表すのにどの時制形式を用いるかを見ていく。

（93a） 試験をもう一つ受ければ課程を終了する。
（94a） 彼は神曲を読んだ。

上記の（93a）と（94a）からわかるように、日本語は両者の例文を過去時制にすることを可能とせず、過去時制の適用を可能とするのは後者の場合のみである。それに反して、前者は非過去形により描写されている。この相違を以下の図で表すことができる。

（93a）→ ＊「タ形」

－ － － － － －×－ － － － －>

＿＿＿

「タ形」

↗ 一時的な完了（発話時における完了）

↘ *想像上の完了（発話時以後における完了）

このように、日本語の「タ形」に関しては次のことが言える。「アオリスト的」用法も「完了的」用法も可能であるが、「完了的」用法の場合、認められているのは発話時において完了した出来事のみである。発話時以降における完了を表す時制は「タ形」ではなく、非過去形である。ただし、以上の例文とそれに対応する図は全ての用法を対象としているとは言えない。これまで見てきた例文からわかるように、「タ形」は発話時以降における完了を表せない形式であるが、常にその用法は不可能であるとは限らず、未来的な用法が認められる場合もある。以下の例文を参考にしよう。

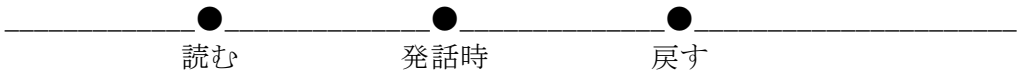
（95）読んだ本を戻しておいてください。
（96）その本を読んだら戻しておいてください。

以上の例文の場合、「読んだ」と「読んだら」における「タ形」はまだ実現していない事象の描写を可能とする形式であると言える。なぜこの用法が可能であるかに関して以下で論じていくが、「タ形」の一般的な用法とその解釈、つまり発話時以前に実現した事態を表す用法に関しても言及していく。例（95）と例（96）はいずれも複文であるが、前者は名詞修飾節であるのに対して、後者は条件節であるという点で異なる例文である。それにも関わらず、「タ形」は同じ機能を果たしていると言えるが、以下でより詳しく見ていく。最初に例（95）について説明していく。

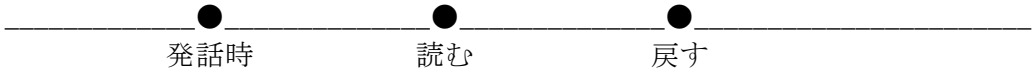
（95a）読んだ本を戻しておいてください。　　（過去）
（95b）読んだ本を戻しておいてください。　　（未来）

上記の区別からわかるように、例（95）における「タ形」は二つの解釈を可能とする形式であり、以下の図は例（95a）と（95b）の事態の時間軸における位置の相違を表すものである。

（95a）読んだ本【過去】



（95b）読んだ本【未来】

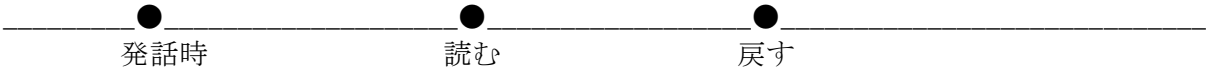


このように、前者はすでに読んだ本を戻すという意味を伝える「タ形」であるのに対して、後者はその本はまだ読んでいないが、読み終えたらすぐに戻すという意味を伝える「タ形」である。なぜ「タ形」は単文の場合にはその解釈を可能としないのに上記の例（95b）の場合にはその解釈

を可能とするかという疑問が当然生じてくるが、上記の例（95）は、すでに言及したように、名詞修飾節であり、これは解釈に対して影響を果たしていると言える。文中の名詞の指示対象を限定したり情報を付け加えたりするために名詞の前に置かれた節は名詞修飾節-と呼ばれる。このことから、「読んだ本」の「読んだ」はテンス的な機能をもっているものではないことがわかる。本論では、その「タ形」は形容詞のような役割のみを果たしていると主張する。つまり、名詞修飾節における「タ形」は事態を時間軸に位置付けるのではなく、形容詞のような機能を果たしているものである。そのため、過去においても現在においても未来においてもその実現が可能である。ただし、形容詞のような役割を果たしていると述べたが、この点に関してはより詳しく説明すべきであろう。なぜなら、一般的な形容詞ではなく、完了の局面を表す形容詞の機能をもっているものであるからである。イタリア語との比較をすると、これは「過去分詞」に対応する形式であると言える。なぜなら、イタリア語では、場合により形容詞と過去分詞は同形であり、過去分詞は形容詞の機能を果たすこともできるからである。例（95b）もその場合であり、「i libri letti（読んだ本）」という形になると「letti（読んだ）」は形容詞のような役割を果たしているが、その形は過去分詞の形である。この場合の「letti」は過去における実現を表す形式であるか、あるいは未来における実現を表す形式であるかが曖昧である。よって、この点に関しては日本語の用法と同様であると言える。なぜこのような用法が可能であるかというと、それは日本語における「読んだ」の「タ形」もイタリア語における「過去分詞」も「完了」を表す形式であるからである。つまり、名詞修飾節における「タ形」は単文の「タ形」とは異なり、「完了」の意味のみを伝える形式であると言える。これまで見てきた例文から明らかになったように、完了というのは過去に限られているものではなく、発話時における完了に加えて想像上の完了も表すことができるものである。従って、名詞修飾節における「タ形」も過去に限られている完了ではなく、未来における完了を表すことも可能とする形式であるということとなる。このため、例（95）は未来的な用法を可能とすると言える。

次に、例（96）における「タ形」に関しても述べていく。すでに言及したように、この場合、「タ形」は条件節において用いられている形式である。条件節-は、その節で表す事態が主節で表す事態と因果関係をもつものであり、条件節には順接条件節、原因・理由節、逆接条件節の三つの下位類がある。上記の例（96）は「〜たら」を用いている節であるため、その一つ目、つまり順接条件節に対応する例文であり、この場合には基本的にテンスが存在しない。なぜなら、従属節の事態の真真偽が未定である場合に、その事態の成立を仮定し、その仮定のもとで主節の事態が成立することを述べる形式であるからである。従って、この場合の「タ形」も時間軸における位置という情報を伝えるのではなく、その事態の実現を仮定する、つまりその完了を仮定するため未来的な用法を可能とする形式であると言える。以下のような図で例（96）が表される。

（96）その本を読んだら戻しておいてください。



このように、例（96）における「タ形」も発話時以前に実現した事態を表すのではなくその後に実現する事態を表す「タ形」である。なぜなら、話者は当該事態の完了を仮定してそれに合わせて発言するからである。このため、条件節における「タ形」も未来的な用法を可能とすることが明らかになった。

上記をまとめると、次のことが言える。まず、「タ形」における用法に関して述べる際に、単文と複文の区別をすべきであり、なぜならその相違により「タ形」が表す完了性は異なるからである。単文の場合、以上に挙げた表6からわかるように、「タ形」は「一時的な完了」のみを可能とするが、より詳しく分析すると複文の場合には「想像上の完了」も可能となる。ただし、それはおそらくすべての複文における用法ではなく、名詞修飾節と条件節に限られているものである。

本節は名詞修飾節と条件節に例文を絞っていたが、第八章では補足節における用法に関しても述べられ、その場合における「タ形」の用法は異なるということに着目している。なぜなら、補足節の場合、基準となる時点は主節の事態であるからである。そのため、従属節における「タ形」は主節における事態との先行性を表していることとなる。言うまでもなく、その場合には未来的な解釈は不可能であり、その解釈をもたらすのは「ル形」である。

以上のことがらに基づいて「タ形」における「完了性」を以下のようにまとめることができる。

表7.「タ形」における完了性

- 「タ形」
  - ➚ 一時的な完了（発話時における完了）
  - ➘ 想像上の完了（発話時以後における完了）
    - ➚ *単文
    - ➘ 複文（名詞修飾節・条件節）

以上、条件節の場合、当該事態の完了が仮定されるため未来的な用法が可能であり、名詞修飾節の場合、当該事態における「タ形」は形容詞のような働きをしているため未来的な完了も可能であるということが明らかになったが、発話時以後に完了した出来事を表す時制形式がもう一つ存在している。これまで見てきた例文からわかるように、認められるものとして挙げられるのは「非過去形」である。ただし、この用法に関しても疑問が生じる。その疑問は、この用法においても単文と複文の区別が必要であるのか、また複文の場合、節によってその用法が異なるのかなどという疑問である。非過去形に関しては次章において述べていく。

3.7 まとめ

本章では、日本語の「タ形」に関して論じたが、過去を表す「テイル形」との相関関係に関しても論じた。この際、なぜ非過去形は過去において起こった出来事を描写することができるのか、またその二つの形式が常に置き換えられるか否かなどの点に関して言及したが、「テイル形」は次節で対象とする形式であるため、本章では主に「タ形」の用法を対象とした。この形式に関する主な論点として取り上げたのはその形式における二重性の有無であり、本論はそれを認める。こういった二重性、つまり「タ形」は単なる過去の出来事を表すか、またはその出来事が現在実現済みであることを表すか、という区別が複雑である場合もあるが、文脈または副詞の適用によりその区別がわかりやすくなるということも言える。

また、応答文においてその区別がはっきり現れていると述べたが、常にそうであるとは限らないことにも着目した。例えば、一般的に「先月」のように明確に過去時を指示する副詞が適用された場合、その「タ形」により描写された質問文の否定応答文に対して適用が可能となるのは「ナカッタ」のみであるが、「もう」のような完了解釈を求める副詞が適用された場合、否定文において用いられるのは「テイナイ」である。この用法を説明するためにいくつかの例文を挙げた。結論として以下のことが言える。まず、その使い分けは「タ形」により描写された質問文によって表される事態の実現可能な生起時とそれに対する対応文の発話時の近接性の違いに従うものではないということが明らかになった。次に、「もう」と「タ形」の共起に関して、次のことがわかった。まず、その用法が可能となるのは、当該事態の実現が話者の設定した時間区間を意味とする「予期区間内」に起こる場合のみである。つまり、当該出来事がその区間内に実現すれば「もう＋タ形」の用法が可能であるのに対して、その区間外なら「もう＋タ形」の用法は不可

能であると述べたが、しかしこの説明に従わない用法もある。本論では、「もう」は「想定よりはやい」という解釈以外にもう一つの解釈を可能とすると提案したが、それは「完了」と規定される解釈である。つまり、第五章において詳しく説明するように、「発話時以前に完結した出来事」を表す用法である。このように、本章では、「もう」の解釈を「予期区間内」と「完了」に分けるべきであると主張した。なぜなら、「もう」は必ずしも話者が設定した時間の幅と関係がある用法を求める副詞ではないからである。

最後に、「タ形」もイタリア語の「近過去形」と同様に二重性を持つ時制であると認めたため、その二つの形式を完了性の点に基づいて比較した。結論として、前者は基本的に発話時以前に起こった出来事を表す機能をもっている時制であると言えるが、この点に関しては複文の区別をする必要がある。なぜなら、複文において用いられた場合、「タ形」は未来的な用法も可能とするからである。つまり、単文において用いられた場合、「タ形」は発話時以前の完了のみを表すのに対して、複文において用いられた場合、発話時以後の完了を表すこともできる。本章は複文として名詞修飾節と条件節を取り上げた。この場合にはなぜ未来における完了を表すことが可能であるのかという疑問に対して、まず名詞修飾節では、その「タ形」は事態を時間軸に位置付けるという機能を果たす形式ではなく、形容詞のような機能を果たしている「タ形」であると主張した。以前の章においても説明したように、完了というのは過去に限られているものではなく、発話時における完了も未来における完了も表すことができるため、名詞修飾節における「タ形」もその解釈を可能とする。また、条件節の場合においても「タ形」は時間軸にその事態を位置付ける形式ではない。なぜなら、その事態の成立を仮定するからである。このため、未来的な用法も可能となると言える。

第四章

日本語の過去を表す時制について
—「テイル形」を中心に —

第三章で述べたように、従来、日本語において問題とされてきたのは、「タ形」と「テイル形」の本質・機能とその用法である。本章で取り上げるのは、「テイル形」の性質・機能とその用法であるが、対象とするのは継続を表す「テイル形」ではなく、「パーフェクト」を表す「テイル形」のみである。この形式の表すパーフェクトに関する基本的な問題は、工藤（1989、1995）がすでに明らかにしていると言ってよい。

日本語の本格的なパーフェクト研究は、完了を表すとされる「タ形」ではなく、動詞の「テイル形」をその中心に据えることによって、始まり、発展してきたと言える。よって、「テイル形」の表すパーフェクトに関する先行研究を追いながら、そのパーフェクト的な意味の分類を中心に検討する。まず、一般的な用法とその分類をまとめていく前に、「テイ」の意味に関しても述べる必要がある。

4.1 「テイ」の意味

以下では「テイル形」ではなく、「テイ」の複数の用法をまとめ、それらを統合的に記述するにはどのような意味を設定する必要があるかについて説明していく。これに関する先行研究は多いが、本章では主に庵（2001）の提案に従うこととする。

庵（2001）によると「テイル形」と「テイタ形」はアスペクト的には共通の意味をもっており、それは形態素「テイ」により表されることになる。基本的には、「テイ」の意味として「継続」と「以前」が挙げられ、前者には以下の a.b.c.d.e.が含まれているのに対し、後者には f.g.が含まれている。庵（2001:79）は「テイ」において以下のような用法があると述べている。以下では、例文を挙げた後にそれに対する用法について簡潔に説明していくが、「結果残存」「効力持続」「完了」についてはより詳しく説明すべきであり、それを以降の節において述べることとする。

a. 進行中
・田中さんは部屋で本を読んでいる
・外では雨が降っていた
b. 結果残存
・窓ガラスが割れている
c. 繰り返し
・田中さんは毎日ジョッギングをしている
・地球上では多くの子供が栄養不良で死んでいる
d. 効力持続
・この橋は 5 年前に壊れている
e. 記録
・ 犯人は 3 日前にこの店でうどんを食べている

f. 完了
・彼からこの手紙を受け取った時、彼は既に死んでいた
g. 反事実
・彼が助けてくれなかったら、私は死んでいた

本章の対象としているのは「タ形」と「テイル形」であるため、「テイタ形」[96]を含む例文を扱わないこととするが、必要に応じて「テイタ形」を含む例文を挙げることもある。

まず、**「継続」**である「進行中」と「結果残存」における用法を見てみよう。簡潔に説明すると、動詞が非状態動詞で、主体変化を表さない動詞であれば「進行中」の意味になるのに対し、主体変化を表す動詞（変化動詞）であれば「結果残存」の意味になるということが言える。このうち、「進行中」というのはある観察時[97]において動作または出来事が続いているということを表す。周知のように、「テイル形」と「テイタ形」の相違は観察時が「テイル形」の場合は非過去であるのに対し、「テイタ形」の場合は過去である点にある。一方、「結果残存」は観察時以前に起こった出来事の結果が観察時にも存在していることを表す。すなわち、b. の場合、「テイル形」は現在における結果残存を表していると言える。

次に、「繰り返し」について説明する。以上の c. からもわかるように、「繰り返し」には同一主体による動作・出来事が複数回存在する場合と、複数の主体による動作・出来事が存在する場合がある。このように、「繰り返し」は「ジョギングをする」のような非変化動詞でも「死ぬ[98]」のような変化動詞でも可能であるということがわかる。

続いて、**「以前」**を表す「テイ」に関して説明していく。庵によると、この意味の例として「完了」と「反事実」が挙げられる。周知のように、「完了」というのは基準時[99]以前に動作や出来事が完結しているという意味である。工藤（1982, 1995）が主張するように、完了は基準時の違いに応じて「未来完了」「現在完了」「過去完了」の三つの位置を可能とする。第三章においても述べたように、「タ形」に「完了」の意味を認めるか否かという問題もある。一般的には否定形における二つの可能な応答文の存在で「タ形」には二つの意味があると説明されている。そして、工藤（1995）はその問題に対して「タ形」は現在を設定時とするパーフェクトを表すということでこの問題を解決しようとしている。

なお、なぜ庵（2001）は「テイ」の意味として「継続」の他に「以前」を立てる必要があるかという疑問点が生じる。それは、「完了」と「効力持続」を区別するためである。再びそれを表す例文を挙げる。

【効力持続】
d. この橋は 5 年前に壊れている

【完了】
f. 彼からこの手紙を受け取った時、彼は既に死んでいた

庵（2001）によると、以上の例（d）と（f）における「テイ」は同じ機能を表しているわけではないため、区別をすべきであるとしており、前者を「効力持続」、後者を「完了」と呼ぶこととしている。なぜなら、後述のように、庵はすべての例に「効力持続」が現れるわけではないと考えるからである。そのため、例（f）のような例を「完了」であると主張している。また、「効力持続」の場合、「テイ」は観察時以前の動作・出来事の効力が観察時において認められることに焦点があるのに対し、「完了」の場合は動作・出来事が基準時以前であることに焦点があると

[96] 「テイタ形」に関しては第八章において述べる。
[97] 庵（2001）の用語である。動作・出来事・状態が観察される時点が観察時と呼ばれ、これは完了の場合の基準時とは異なる概念であるとされている。
[98] 複数の主語であるため「繰り返し」の枠に入っている。
[99] 庵（2001）では「基準時」とされているが、これは本論で採用した 「設定時点」のことを表している。

説明している。つまり、後者においては出来事の効力が存在していないということになる[100]。この区別を以下のようにまとめることができる。

庵（2001）による「完了」と「効力持続」の解体

「テイ形」
- ↗ 基準時以前 → 完了 （テイタ形）
- ↘ 観察時における効力 → 効力持続 （テイル形）

最後に、「反事実」について簡潔に述べていく。反事実用法とは、事実とは反対の内容を述べる場合であり、可能性としては過去における反事実と現在における反事実がある。この用法に関してより重要なのは反事実用法が現実の内容を述べているのではないということである。

以上のように、「テイ」の用法は二つの用法に分ける必要があり、その下位のいくつかの用法について説明したが、以下には本章において中心となる用法について詳しく説明していく。その前に、工藤（1995）と庵（2001）の主張における相違点について言及すべきである。

すでに言及したように、庵は工藤のパーフェクトに対して問題点を挙げている。それは、工藤のパーフェクトは「先行性」と「効力持続」を共に含んでいることである。庵によるとそれらを「パーフェクト」という語の下に統合することは不適切である。なぜなら、統合すると同じものとして捉えられるからである。庵は工藤の「パーフェクト」に対し、「効力をもつこと」はすべての例には当てはまらないと主張している。そこで、その「効力持続」を持たないものを「完了」と呼ぶこととした。このように、主な相違点として挙げられるのは、庵は工藤の言う「パーフェクト」から「完了」を除くことである。上記の相違点は以下の図でまとめることができる。

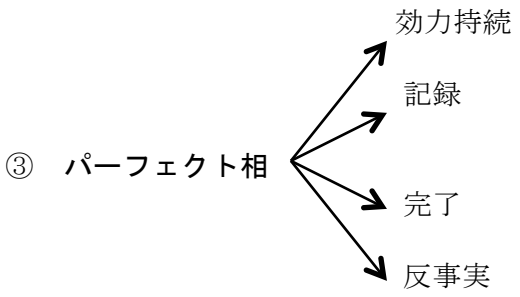
図 15. 工藤（1995）と庵（2001）[101]における「テイ」[102]の用法

【工藤】

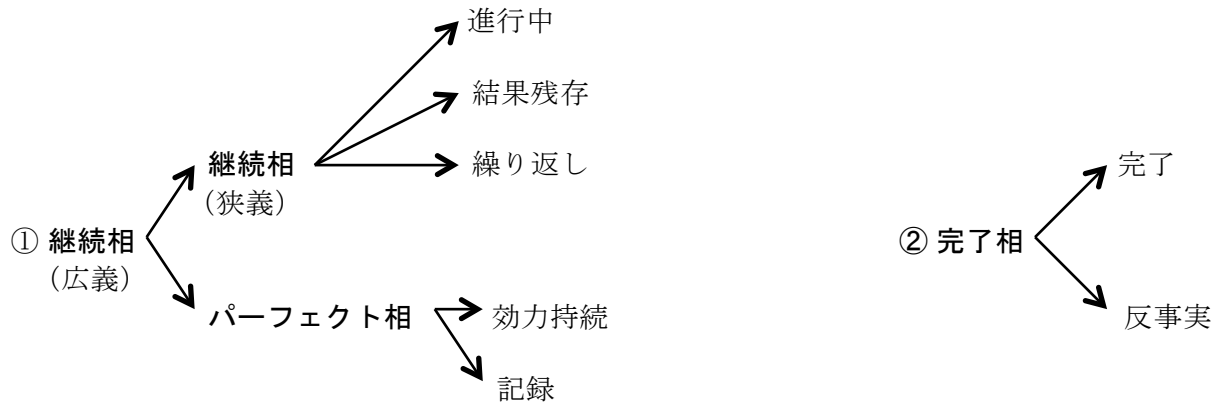
[100] 庵（2001:77）は「効力」を持たない例として次のような例文も挙げている。
・（テレビのニュース）俳優の A さんが一週間前に亡くなっていたことがわかりました。
このような例文は「効力」を持たない例文であり、基準時以前に動作・出来事が完結したことだけを述べている。このような例文を「完了」とし、未来完了は「〜テイル形」、過去完了は「〜テイタ形」、現在完了として「タ形」を認めている。

[101] 庵（2001:92）を参照。

[102] 「テイ」の用法であるため、「テイル形」と「テイタ形」の両者の用法を含む図である。



【庵】



以上の図からわかるように、工藤の言う「パーフェクト相」は四つの用法を含んでいるが、庵はすべての例が効力を持つとは限らないと主張しているため、庵では「パーフェクト相」は二つの用法のみを含んでいるとされている。その二つの用法は「効力持続」と「記録」である。それに対し、「完了相」は「完了」と「反事実」のみを含んでいるとされている。このことからわかるように、もう一つの相違が挙げられ、それは工藤の言う「パーフェクト」が、庵では「効力持続」と「記録」として捉えられているという相違である。

4.2 「テイル形」の分類

従来の研究は、一般的に「テイル形」を「動作の継続」「変化結果の継続」「パーフェクトあるいは経験」「反復」「単なる状態」に分類し、本論も基本的にその分類に従うが、以下ではこれまでの研究について簡潔に述べる必要がある。

金田一（1950）は、「テイル形」の意味を「既然態」「進行態」「将然態」「単純状態態」の四つに分類した。進行態の中に反復進行態が含まれる。

藤井（1966）は、金田一（1955）が「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」は継続動詞が一時的に瞬間動詞として使われている、と述べているのを「経験」として独立させた上で、「動作の進行」「持続」「結果の残存」「経験」「単純状態」「反復」「存在」の

七つに分類した。「経験」の用法はすべての動作動詞によってつくることが可能だとしている。藤井（1966）の研究以後、「経験」の用法が認識されるようになった。

吉川（1973）はそれまでの研究史をまとめて「動詞＋テイル」の意味を「動作継続」「結果継続」「習慣」「経験」「状態」と五つに分類し、「経験」の用法は結果継続からの派生であると説明している。

寺村（1984）は「テイル形」の用法を大きく五つに分類しており、それは「動作や現象が継続していること」「結果の状態」「現在の習慣」「現在に意義を持つ過去の事象」「性状規定」である。そして、「現在に意義を持つ過去の事象」について、「過去の事実を、今改めて確認し、ある現実の文脈の中でその意義を吟味しようとする心理を反映している」（1984:133）と述べている。

工藤（1995:38）は「テイル形」の基本的な意味は「継続性」であるとしているが、派生的意味ももっているとしている。「「テイル形（テイタ形）」というアスペクト形式の基本的意味は、「動作の継続」であれ「変化結果の継続」であれ、〈継続性〉であるが、派生的意味をもっている」と述べている。つまり、基本的な意味は継続であるとし、その用法を大きく二つに分類している。

1）基本的意味　（1）動きの継続
　　（2）変化の結果の継続
2）派生的意味[103]　（1）パーフェクト性
　　（2）反復性
　　（3）単なる状態

この派生的意味は次のように定義されている。〈パーフェクト性〉は、〈継続性〉とは異なり、〈後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存〉を表すものである。次に、〈反復性〉は、個別・具体的な時間における運動の現象化をとらえる〈継続性〉と異なり、幅広い期間において繰り返し起こる、ポテンシャルな運動をとらえるものである。最後に、〈単なる状態〉は、もはや時間のなかでの展開性を問題にしなくなって、ものの性質や、空間的配置関係をとらえるものである。

工藤により「パーフェクト」の定義が明確になったとは言え、後ほどにも説明するが、ここで言及するのは日本語のパーフェクトは過去の事実が現在に影響をもつことと定義され、その意味用法としては、経験・記録があるとされたということである。

三原（1997）は英語と日本語のアスペクトを対照することにより「テイル形」の意味を「動作持続」「結果持続」「効力持続」と分類している。

最後に、江田（2013）は「テイル形」の用法を「運動短期」「運動長期」「結果状態」「繰り返し」「効力持続」「性状」という六つの用法に分類している。

本章では「パーフェクト」「完了」「効力」などの用語を適用するため、以下でその用語に関する説明をしていく。

4.3　パーフェクトに関する先行研究

アスペクトは日本語文法研究の中で研究が進んでいる分野である。特に、「テイル形」の意味については金田一（1950）以来の研究が奥田（1979）で一つの節目を迎え、工藤（1989, 1995）が

[103] 工藤（1995:38）は次の例文を挙げている。
・その本なら、一度読んでるよ。（パーフェクト性）
・病院にかけつけた時、父は既に 30 分前に死んでいた。（パーフェクト性）
・あの子は、マンガばかり読んでいる。（反復性）
・あの頃は、よく、人が結核で死んでいた。（反復性）
・この道は曲がっている。（単なる状態）
・昔、このあたりには川が流れていた。（単なる状態）

「パーフェクト」という考え方を提示してそれをさらに進めたと言える。これについて述べる前に、それまでの研究について簡潔にまとめておく。

金田一（1955）は、「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書く」という動詞を、「継続動詞が臨時に瞬間動詞として用いられたもの」として、「あの人は現在結婚している」の「結婚している」と同じく、「結果の残存」を表すものとしている。しかし、藤井（1966）は、前者の「書いている」を、「過去において行なわれた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるもの」であるのに対し、後者の「結婚している」を、「過去の動作・作用は問題ではなく、その動作・作用のもたらした結果であるところの現在の状態を表している」ものであるとし、二つを異質なものと見た。そして、前者の「書いている」の表す意味を「経験」と呼んだのである。さらに、「経験」を表す文について、「「現在」という単語をつけることができないことや、瞬間動詞、継続動詞のいかんを問わず、動作・作用を表す動詞からつくられること」などを指摘している。

工藤では、前節において言及したように、「テイル形（テイタ形）」は〈継続性〉という基本的意味と〈パーフェクト性〉〈反復性〉という派生的意味をもっているとされている。工藤が導入した「パーフェクト」はどのようなものであるのかという説明が必要である。次節において述べるように、工藤（1995:97）では「現代日本語のパーフェクト性をめぐっては、従来、完了という用語のもとに、タ形式における場合のみを取り上げて、問題とされてきた。が、むしろ、テイル（テイタ）形式の場合のほうが、テンスから相対的に自立した形で、パーフェクトというアスペクト的意味を表していると思われる。タ形式は、＜現在パーフェクト＞としか表せないのである」と述べられている。つまり、「タ形」は＜過去パーフェクト＞と＜未来パーフェクト＞を表すことができないということである。この＜現在パーフェクト＞＜過去パーフェクト＞＜未来パーフェクト＞については次節で説明する。工藤の「パーフェクト」に関しては様々な意見があり、反論の中でより有力であるのは岩崎（2000）と庵（2001）によるものである。岩崎は「パーフェクト」は結果残存のバリアントにすぎないと主張している。そして、庵は工藤のパーフェクトには本来機能的に異なる「完了」と「効力持続」が混在しており、その結果、かえってその特徴がわかりにくくなっていると述べている。つまり、庵（2001）は工藤のパーフェクトを「完了」と「効力持続」に解体すべきであると主張している。本論においても工藤のパーフェクトは「完了」と「効力持続」が混在しているということを認めるが、庵（2001）の主張に対しても不明なところがあるとも主張する。

4.3.1 パーフェクト相について

周知のように、「ル形」と「テイル形」はアスペクト的に対立している形式であり、前者は〈完成性〉を表しているのに対して、後者は〈継続性〉を表している。工藤（1995）では、「テイル形（テイタ形）」は〈継続性〉という基本的意味のみではなく派生的意味ももっている形式であるとしている。その派生的意味として挙げられているのは〈パーフェクト性〉と〈反復性〉である。前節において述べているように、〈パーフェクト性〉は、〈継続性〉とは異なり、〈後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存〉を表すものである。また、〈反復性〉は、個別・具体的な時間における運動の現象化をとらえる〈継続性〉と異なり、幅広い期間において繰り返し起こる、ポテンシャルな運動をとらえるものであると定義されている。工藤（1995:96）によると、「ル形」と「タ形」の基本的な意味は「完成相」であるのに対し、「テイル形」と「テイタ形」の基本的な意味は「継続性」である。また、派生的意味に関しては、すべての四つの形式[104]は「反復性」と「パーフェクト性」という派生的意味をもっているとしている。本章ではこの「パーフェクト」はどのようなものであるか、どのような特徴を持っているかという点について論じていく。そのため、工藤の提案や説明を基準にしていく。

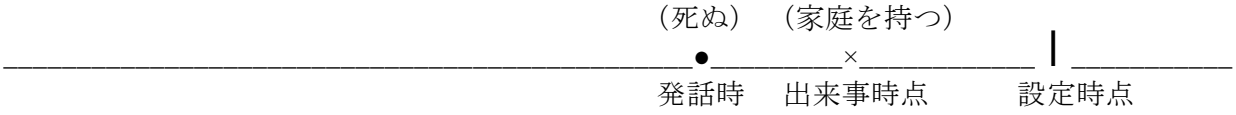
まず、この「パーフェクト」はどのようなものであるかを見ていく。工藤（1995:99）では**「パーフェクト」**は「ある設定された時点において、それより前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」と定義されている。その設定時点の位置に応じて「現在パーフェク

[104] 「ル形」がもっている派生的意味は「反復性」のみである。

ト」「過去パーフェクト」「未来パーフェクト」が可能になる。それぞれを表す例文とそれに対応する図を以下に挙げていく[105]。

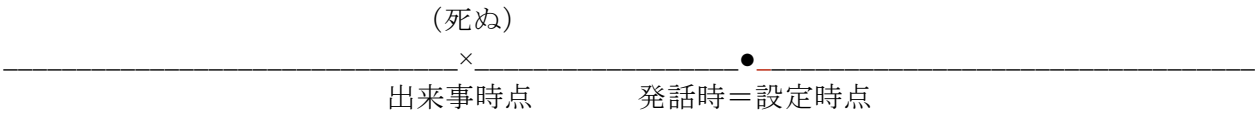
【未来パーフェクト】

（97）あなたが家庭を持つ頃には、私はもうとっくに死んでいるわよ。　　（*もう死んだ）



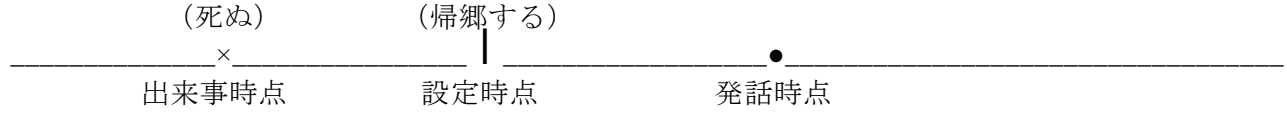
【現在パーフェクト】

（98）私の父は、ガンでもう死んでいる。　　（＝もう死んだ）[106]



【過去パーフェクト】

（99）私が帰郷したときには、父は既に 3 時間前に死んでいた。　　（*既に死んだ）



このパーフェクトの規定に際しては次の三点が重要であるとされる。

a. 発話時点、出来事時点とは異なる＜設定時点＞が常にあること。
b. 設定時点に対して出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての＜先行性＞を含んでいること。

[105] 工藤（1995:97）から引用したものである。
[106] 「タ形」に置き換えられる「テイル形」である。

c. しかし、単なる＜先行性＞ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき＝関連性をもっていると捉えられていること。つまり、運動自体の＜完成性＞とともに、その運動が実現した後の＜効力＞も複合的に捉えるというアスペクト的要素をもっていること。

本章では「現在パーフェクト」を中心とし、以下に工藤（1995）の挙げている例文を参考にしていく。

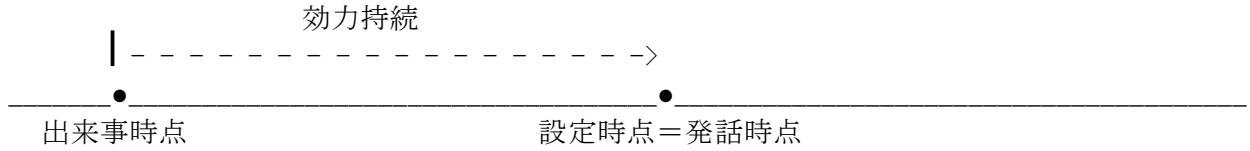
（100）その本なら、一度読んでいるよ。
（101）彼は一年前に中国に行っている。だから中国語がうまいんだよ。

では、以上の例文は a. から c. までのすべての条件を満たしているかをみてみよう。

a1. ＜設定時点＞は発話時である[107]。
b1. 出来事時点は設定時点とされている発話時点以前に実現している。
c1. 出来事が実現した後の効力[108]は設定時点と結びついている。

すなわち、以上の例文（100）と（101）を図で表すと以下のようになる。

図 16. 現在パーフェクトを表す「テイル形」



上記の図からわかるように、両方の例文が同じ図で表されるため、同じ性質をもっているものであるように感じられるが、よく考察すると相違点があると言える。両者は発話時以前、過去の出来事を表している例文ではあるが、その「過去」においては相違点がある。前者は「不特定過去」を表す例文であるのに対し、後者は「特定過去」を表す例文である。

上記の例文の解釈は現代日本語の一つの問題となっている。すなわち、すでに前章において述べたように、例（101）の場合、その出来事は「1 年前」のことであるのになぜ「テイル形」で表現できるかという疑問点である。工藤（1995）が述べているように、「テイル形」は、過去の出来事時点を明示しても、過去のその特定の時点には出来事をくぎづけせず、現在と関係づけるのである。過去の特定の時点へのくぎづけは、「タ形」の持つ機能の一つである。こうして、「テイル形」は一定の条件のもとでパーフェクトというアスペクト的意味を表す。従って、「テイル形」は「継続性」「反復性」「単なる状態性」以外に「パーフェクト性」という意味を表しうると考えられている。しかし、ここで疑問点が生じる。工藤（1995）では「タ形」も「現在完了」であるとされているが、「タ形」の意味として完了を認めてもよいか否かという疑問である。イタリア語などでは現在完了形が話し言葉では「過去」を表す形として使われており、「過去」と「現在完了」が融合することは珍しいことではないため、本章では「タ形」は「現在完了」の用法をもっていると認める。

こういったことをもとにすると、「テイル形」に関する疑問点が再び生じてくる。それは「テイル形」が典型的な現在完了の形式であるか否かという点である。庵（2001:87）によると「テイル形」は現在完了を表す典型的な形式ではない。なぜならば、疑問文において「タ形」にはない

[107] 「現在パーフェクト」の場合においては発話時と設定時点が必ず一致する。
[108] 「効力」というのは心理的なものである。その出来事が実現した後の効力が発話時点まで持続するか否かの問題であり、それは話者による判断である。例（101）においてはその発話時点における効力が明示されている。

制限があるからである。「タ形」とは異なり、「テイル形」は疑問文になりにくい形式である。例えば、特定の文脈なしに（102）を使うことはできないように思われる。

（102）？もうご飯を食べているのですか。

これに対し（103）は自然であり、意味的にも「基準時以前に動作・出来事が終わっているか否かを尋ねることはできないはずである」と考えられることからも「テイル形」は少なくとも現在完了を表す典型的な形式とは言えないように思われる。

（103）もうご飯を食べましたか。

また、問題となってくるのは「完了」と「効力持続」における性質である。なぜなら、すでに述べたように、工藤（1995）ではパーフェクト相の枠に「効力持続」「記録」「完了」「反事実」が含まれているが、庵（2001）ではパーフェクト相の枠に含まれているのは「効力持続」と「記録」のみであるからである。つまり、「完了」と「効力持続」の区別が必要であるとされているのである。なぜなら、以下の例文からわかるように、意味的には「完了」というよりも「効力持続」である場合もあり得るからである。参考のため、以下の例文を考察してみよう。

（104）宿題はもうできているか。

以上の例文の「テイル形」は完了ではなく、効力持続の意味をもたらすと庵（2001）は述べている。従って、「完了」と「効力持続」の区別は必要であるとしている。本章でもその立場から述べていくが、それに加えて「完了」と「効力持続」は別のレベルに属しているものであることを提案する。まず、一般的な定義から説明していく。

- **「完了」**というのは設定時点以前に動作や出来事が完結していることを表す。
- **「効力持続」**というのは過去に起こった動作・出来事の結果から生じた効力が設定時点にも存在することとする。

以上の定義からもわかるように、「完了」と「効力持続」の性質は完全に同じものではないため、区別をする必要があると本論でも考える。この区別に関しては図を介して説明しよう。

図 17.「完了」による焦点

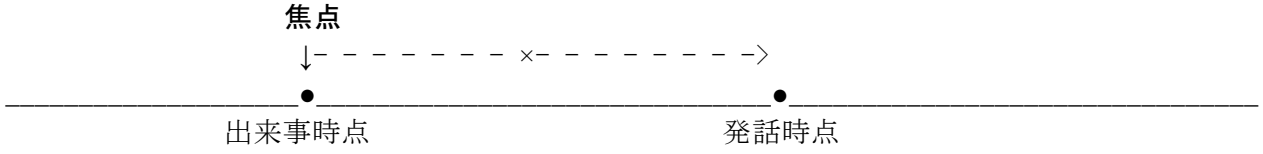
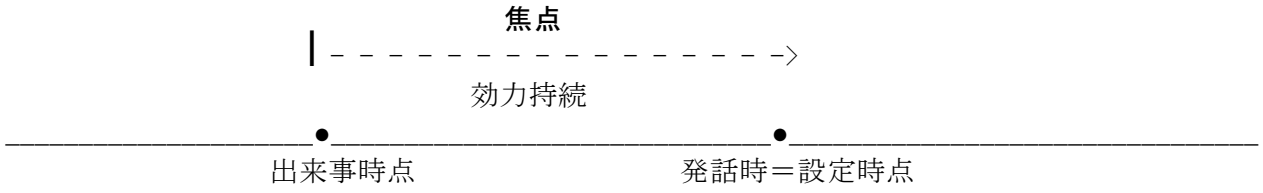


図 18.「効力持続」による焦点



上記の図からわかるように、「完了」は当該の動作や出来事が完結していることを表す。それは「効力持続」とは異なり、その動作の結果から生じた効力持続とは無関係なものである。相違点として挙げられるのは焦点であり、「完了」の場合、その出来事が基準時以前に完結しているということに焦点が当てられているのに対し、「効力持続」の場合、その出来事が完結した結果に焦点が当てられていると言えるだろう。よって、後者の場合、出来事が完結しているというのは前提であり、効力持続は完了の次のプロセスであると本論では考える。言い換えると、「完了」と「効力持続」のレベルは同じレベルではなく、最初に動作が完了し、その後は次のプロセスとして発話時までその動作の効力が持続するか否かという情報が追加される。従って、前者は客観的なレベルであるのに対し、後者は主観的なレベルであると言ってもよい。

なお、この「効力持続」が具体的にどのようなものであるかを説明するために、以下にもう一度例（101）を挙げる。

（105）＝（101）彼は一年前に中国に行っている。（だから中国語がうまいんだよ。）

この場合、「彼は一年前に中国に行った」という動作が完了しており、その事実の効力として「中国語がうまい」という現在観察される事実が存在するという説明ができる。つまり、効力持続が異なる時点における二つの事態を包含して表しているとすれば、「-てい-」はその二つの事態を結びつける働きをしていると考えられる。言い換えると、「効力持続」を表す「-てい-」は当該例文において過去の事態である中国に行くことと現在の状態である中国語が話せることを結びつけているということとなる。この場合、「テイル形」を「タ形」に置き換えることが可能であるが、それは単文のみに限定されていることに注意しなくてはならない。もし、例（101）のように文連続の場合なら「タ形」への置き換えが不可能となるからである。

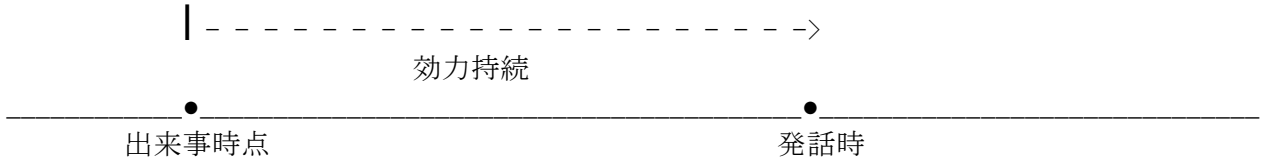
また、「効力持続」は「完了」のみではなく、「結果残存[109]」との区別もすべきである。以下に庵（2001）が挙げている「効力持続」を表す例（106）と「結果残存」を表す例（107）を挙げ、順を追ってその相違について考察していく。

（106）この橋は二年前**に**壊れている。　→　効力持続
（107）この橋は二年前**から**壊れている。　→　結果残存

効力持続と結果残存は本質的に同じものであるが、厳密に言うとその間には共通点も相違点もある。共通点として挙げられるのは出来事と設定時点が結びつけられているという点であるが、相違点として挙げられるのは結果の有無である。それは、庵（2001）によると、結果残存では具体的な結果が存在するのに対し、効力持続では結果が存在しないということである。つまり、例文（106）の場合、その橋は過去に少なくとも 1 回壊れたことがあるが、発話時点においてはその「壊れる」動作の結果がない。つまり、壊れていないという意味であるが、それとは異なり、例文（107）の場合はその結果が発話時において存在している、つまり、その橋は発話時点においてまだ壊れているという相違点で上記の例文が異なっている。しかし、本論ではそれを「効力持続」ではなく、「完了」として扱うこととする。

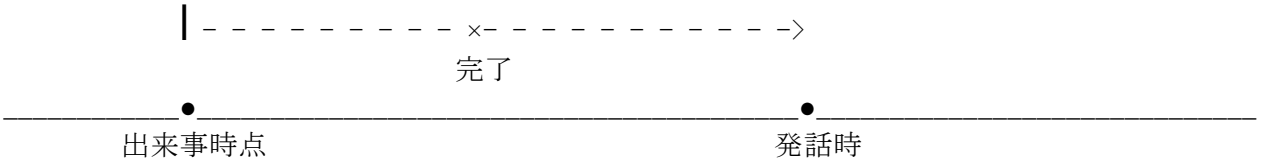
以下では、まず、庵（2001）における「効力持続」と本論における「完了」の相違について説明していく。次の図 19 は庵（2001）による説明を表す図であるが、それに対して図 20 は本章による説明を表す図である。

図 19.「効力持続」（庵）



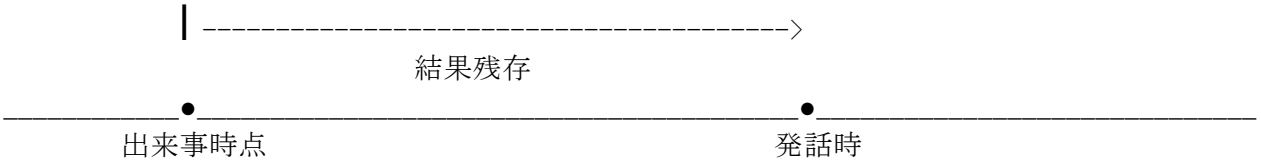
[109] 研究者により「結果持続」という表現も用いられる。

図 20. 「完了」（本論）



例（106）ではその橋は過去に少なくとも 1 回壊れたことがあるが、発話時点においてはその「壊れる」動作の具体的な結果がない、つまり、壊れていないという意味であるため、本論では「効力持続」の意味として扱わないこととする。また、それとは異なり、例（107）の場合、その効果が現在まで持続しているため、以下の図で表すことができる。

図 21.「結果残存」



以上のことからわかるように、この三つの概念は相関関係こそ近いが、性質的には別のレベルに属しているものであると言える。なぜなら、客観的な概念である「完了」と主観的な概念である「効力持続」の相違は「出来事の結果生じた効力の有無」によるものであるのに対し、心理的な判断である「効力持続」と具体的な結果を求める「結果残存」の相違は「具体的な結果の有無」によるものだからである。

また、以上の例文においては「テイル形」のみではなく、「タ形」の適用も可能であるか否かという質問が生じてくる。庵（2001）では、効力持続を表す例文においては「タ形」の使用は可能であるが、「テイル形」を用いた例文と同じニュアンスにはなりえないとされている。

（106’）この橋は二年前に壊れた。

この場合、「タ形」自体の適用は認められるが、庵（2001）では効力持続のニュアンスがなくなり、単なる過去になるとされる。そして、例（106’）と違い、結果残存を表す「テイル形」は「タ形」にはなりにくい。以下の例文を参考にしよう。

（107’）？この橋は二年前から壊れた。

言うまでもなく、以上の例文における助詞「に」「から」も大きな影響を果たしていると言える。助詞「に」は特定時間を表す助詞であるため「タ形」との共起が許されるが、助詞「から」を表すのは特定時間ではないため、継続を表す「テイル形」としか共起できない。

4.3.2 「効力持続」について

「効力持続」は庵（2001）が導入した用語であるが、先行研究において同様のアスペクトについて最初に取り上げたのは藤井（1966）であり、それは「経験」と名付けられている。「経験」は「結果状態」から独立した一つの用法とされた。藤井（1966:105）は、金田一（1950）の「あ

の人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」が「過去において行なわれた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるもの」としている。結果状態が現在の状態を表すため「今・現在」という修飾語をつけ得るのに対して経験は現在の状態を表さないため、以下のように言えないとしている。

（108）*現在たくさんの小説を書いている。

工藤（1982,1995）もこれについて述べ、工藤（1982）によってこの用法の特徴が現在に対する効力をもつものであるという点が明確にされた。工藤はこの用法の特質を「現在有効な過去の運動の実現」とまとめ、「過去に実現した運動が記録として現在に残されていること」と「過去に実現した運動が現在の状態に何らかの関わりをもっていること」を表すとしている。そして工藤（1995）は大きく「パーフェクト」について述べ、それはすでに述べたように、未来・現在・過去に「パーフェクト」の用法があり、それらは発話時とは別に設定時があり、その設定時により以前に起こった出来事が設定時に対して効力をもち影響を与えるとし、設定時点により「未来パーフェクト」「現在パーフェクト」「過去パーフェクト」があるとしている。また、＜ある設定された時点において、それより前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること＞を表すとし、そのパーフェクトの規定として三点を挙げている。再び、重要であるとされる点を以下に挙げる。

a. 発話時点、出来事時点とは異なる＜設定時点＞が常にあること[110]。
b. 設定時点に対して出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての＜先行性＞を含んでいること。
c. しかし、単なる＜先行性＞ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき＝関連性をもっていると捉えられていること。つまり、運動自体の＜完成性＞とともに、その運動が実現した後の＜効力＞も複合的に捉えるというアスペクト的要素をもっていること。

工藤（1995:104,105）は「パーフェクト」がもつ＜設定時点とのむすびつき＝関連性＞は＜設定時点における先行する運動の効力の現存＞であると説明している。そして、「パーフェクト」は＜設定時点に対する出来事時点の先行性＞というテンス的要素と＜運動自体の完成性＋その効力＞というアスペクト的要素を相互前提的に含み込んだ複合的な時間概念であると述べている。

庵（2001）は、工藤（1995）の「効力持続」について、すべての文が効力を示すとは限らないとして、「現在パーフェクト」という用語を使用せず「効力持続」「記録」とすることを提案している。また、「基準時以前に動作・出来事が完結」としたことを表し、効力持続のように動作・出来事の効力が認められないものを「完了」としている。故に、工藤（1995）の「パーフェクト」を「効力持続」と「完了」にわけ、それぞれを区別すべきであると主張している。それは、すでに述べたように、「効力をもつこと」はすべての例には当てはまらないためであると述べている[111]。

また、岩崎（2000）は工藤の見方に対して反論を試みている。岩崎は「述語論における形態素主義」の立場からテンスに関する議論を展開している。その中で重要なのは、工藤の言うパーフェクトを表す「テイ」と「タ形」に関するものである。岩崎は説明として以下の例文を挙げている。

（109） 窓が開いている。　　（結果継続）
（110）ご飯はもう食べている。　（現在パーフェクト）

以上のどちらの場合も「開いてい＋る」「食べてい＋る」であり、ともに「開いてい」「食べてい」で表される「状態」及び「効力」が「る」によって発話時に位置づけられているのであ

[110] 「設定時点」があることによりアオリスト的な用法は不可能である。
[111] 庵（2001）の述べている効力が読み取れない例文のすべてが「テイタ形」で表現されている例文である。

り、両者の間に本質的な差はなく、工藤の言う「パーフェクト」は「結果継続」のバリアントにすぎないと主張している。一方、「タ形」に関しては、工藤のようにこれを「現在パーフェクト」とした場合、「タ形」の基準時は「現在」であるが、「タ形」が現在を表すというのは「形態論的に筋が通らない」としている。

このように、岩崎（2000）は工藤のパーフェクトに対して「パーフェクト」と「結果継続」は、結果継続が結果動詞に限られているという違いはあるものの、本質は同じものであり、パーフェクトは結果継続の一つのバリアントであるとしている。それに対して庵（2001）は理解を示しつつも、工藤の「パーフェクト」を「効力持続」「完了」に分けて分類した。更に、庵（2001）は「効力持続」は「過去に起こった動作・出来事の結果生じた効力が観察時にも存在する」ことであり、「効力」というのは「現在観察される事実／属性が存在すること」であり、効力持続の文では属性が表現されると述べている。

また、庵（2001）では「記録」に関しても述べられ、「記録」は「観察時以前の出来事を何らかの証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる」とされている。まとめると、庵（2001:85）において効力持続と記録の相違点は、効力持続では「述部が主語に対して有意な属性付けになっていなければならないのに対し、記録は証拠に基づいて述べているだけであるためそうした制約はない」ということである。「タ形」が使いにくくなる場合に対して、証拠が存在する場合は観察時を中心に述べることが義務的になり、観察時が発話時である場合は「タ形」との間にニュアンスの違いが存在するという以前に、「タ形」が使いにくくなると説明されている。この置き換えについてはすでに述べたが、以下では井上（2001）の意見を述べながらもう一度まとめていく。井上（2001）は「過去の出来事を表す表現が「タ形」「テイル形」と二つあるのはどうしてか」という問いを発し、「記録用法」の「テイル形」は当該の出来事を「現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能な出来事」として述べる表現であるため、「タ形」で述べることはできないとしている。それは「タ形」がその「出来事が実現された経過が具体的に把握できていなければ」使えない表現であるためだと述べている。一方、「過去的用法」では「出来事が実現された時の経過が把握できている」のに「テイル」形が使えるのはなぜかというと、それは過去の出来事を「現在も有効なある状態に従属する一局面」として捉えるためであるとし、その出来事の背後に、ある統括主題が存在する場合は「テイル形」が使えるとしている（2001:113）。そして、「経験・記録用法のテイル」は過去の出来事を、「発話時において有効なある統括主題に従属する一事例として述べる」のに対し、「タ形」は「実現の経過が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない出来事として述べる」としている（2001:154）。

井上（2001）では「タ形」と「テイル形」の置き換えの問題、「記録用法」の「テイル形」が統括主題のもとで使われることが述べられている。記録の用法が「タ形」に置き換えができないということは庵（2001）も述べている。

まとめると、以上のことから次のことがわかる。まず、本章でも「完了」と「効力持続」を解体すべきであると考える。なぜなら、それは両者が異なるレベルに属している概念であるからである。「完了」は客観的な概念であるのに対し、「効力持続」は話者の判断によるものであるため、主観的な概念であると提案する。本章における議論の最終的な目的は時制形式と「もう＋テイル形／タ形」形の組み合わせを明らかにすることであるため、以下ではこの客観的な「完了」と「もう／すでに」が結びついた例文を挙げる。

（111）A:　もうご飯を食べた？
　　B:　はい、もう食べている。

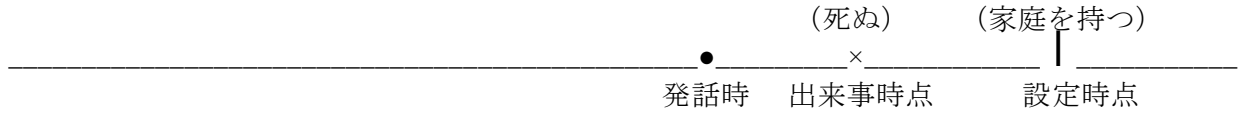
上記の例文はこれまでの理由に従い、「効力持続」を表す例文として扱うのではなく、「完了」を表す例文として扱うこととする。

4.4 「テイル形」における完了性

前章で「タ形」における完了性に関して述べたと同様に、本章では「テイル形」における完了性に関して述べていく。前章では、日本語の「タ形」とイタリア語の「近過去形」を比較し、日本語の「タ形」が可能とする「完了」とイタリア語の「近過去形」が可能とする「完了」は異なることがわかった。なぜなら、「タ形」は「完了的」用法を認めるが、イタリア語とは異なり、過去における完了のみを可能とする形式であるという点で異なるからである。つまり、「タ形」は未来における完了を表すことができないと明らかになった。このように、「タ形」は発話時以前に完了した出来事のみ[112]を描写することができると言える。それとは異なり、イタリア語の近過去形は未来における設定時点以前に完了した出来事を表すことを可能とする形式である。それに対して、例文からわかるように、日本語の場合、未来的な用法を可能とするのは過去時制ではなく、「非過去形」である。本節においても完了性を「一時的な完了」と「想像上の完了」に分け、「テイル形」はどちらを可能とするかを見ていく。そのために再び前節において挙げた例文に基づくこととする。まず、「未来パーフェクト」を表す例文を以下に挙げる。

【未来パーフェクト】

（112）＝（97）あなたが家庭を持つ頃には、私はもうとっくに死んでいるわよ（*もう死んだ）



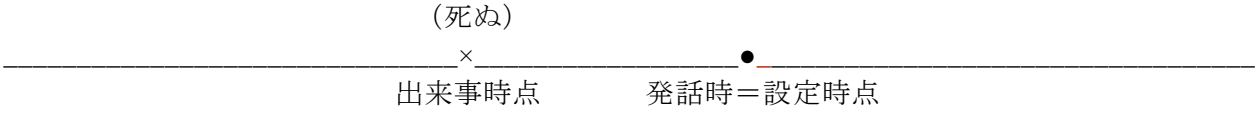
言うまでもなく、この場合において「タ形」の適用は不可能である。なぜなら、すでに述べたように、「タ形」は未来的な用法を可能としない時制であるからである。この場合には「非過去形」の適用が強制的となる。このことから、この例文における「テイル形」は「想像上の完了」を表すとわかる。ただし、次のことにも注意すべきである。例（112）の場合、「テイル形」が用いられているのは、「もう」が現れているからである。つまり、「もう」は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという完了の意味をもつ副詞である。このため、「ル形」ではなく[113]、完了的な用法を可能とする「テイル形」が用いられる。「ル形」も「タ形」もある時点における「先行性」を表すことができない形式であるからである。ただし、未来的な用法を可能とするのは「テイル形」のみであるとは限らない。次章において述べているように、場合により「ル形」もその用法を可能とするが、その相違は「もう」の解釈によるものである。つまり、次章の例（173）[114]における「もう」と例（112）における「もう」の解釈は同じものではないため、形式の適用も異なってくる。

次に、「現在パーフェクト」を表す例文を挙げていく。この場合には「テイル形」の適用も「タ形」の適用も可能である。

[112] 関係節や条件節の場合、「タ形」は未来的な用法も可能とする。節 3.6 を参照。
[113] 「あなたが家庭を持つ頃には、私はもうとっくに死ぬわよ」とは言えない。
[114] 「あなたはもう勝つ（ormai hai vinto）」を参照。未来形としての解釈を認める例文である。

【現在パーフェクト】

（113）＝（98）私の父は、ガンでもう死んでいる。　　（＝もう死んだ）[115]



以上の例文の場合、「テイル形」のみではなく、「タ形」の適用も可能である。なぜなら、「タ形」は発話時以前に完了した出来事を表すことができる形式であるからである。言うまでもなく、この場合には設定時点となっているのは発話時点である。また、以前の例文とは異なり、この「テイル形」は「一時的な完了」を表す「テイル形」であると言える。

以上の二つの例文を比較すると、次のことが言える。まず、「テイル形」は「タ形」とは異なり、「想像上の完了」も「一時的な完了」も両方を表すことを可能とする時制である。従って、この点に関しては、「テイル形」はイタリア語の「近過去形」に似ていると言える。

これまで、発話時において完了した出来事とそれ以後の場合のみを対象にしていたが、前節では庵と工藤の対立などに関して述べた際に、「テイタ形」[116]を用いた例文も参考にしていた。このため、以下では「テイタ形」[117]を用いた例文に関しても述べていくが、詳しくは以降の章において述べることとする。

【過去パーフェクト】

（114）＝（99）私が帰郷したときには、父は既に 3 時間前に死んでいた。　　（*既に死んだ）

このように、ある過去の時点において過去に完了した出来事を表すために用いられる時制は「テイル形」ではなく「テイタ形」である。この場合、「タ形」の適用も不可能である。なぜなら、「タ形」は他の時制との先行性を表す機能をもっている時制ではないからである。また、「テイル形」の適用も不可能であるのは、「テイル形」は発話時と関係付けている時制であるからである。それとは異なり、「テイタ形」は発話時とは無関係である時制である。このため、この場合には「テイタ形」の適用が強制的である。

ここでは、「テイタ形」に関する疑問が生じる。それは「テイタ形」の場合においても「一時的完了」と「想像上の完了」が可能であるか否かという疑問である。例（114）からわかるように、後者の解釈は不可能であるが、前者は可能であるように感じられる。しかし、「テイタ形」は「過去の過去」というニュアンスを伝えようとする形式であるため、前者も当てはまるもので

[115] 「タ形」に置き換えられる「テイル形」である。
[116] 「テイタ形」は場合により、イタリア語において「大過去形」「半過去形」「進行形」により訳されるが、その区別・用法に関して以降の章において論じている。
[117] 日本語の「テイタ形」に関しては第八章において検討する。

あるとは言えない。よって、その完了性を説明するために、「一時的完了」と「想像上の完了」以外に他の分類を導入する必要がある。本論では、それを「compiutezza antecedente（過去完了）」と呼ぶこととする。このニュアンスを描写できる時制は日本語においては「テイタ形」であるが、イタリア語においては「大過去形」である。大過去形に関しては第八章において検討する。

表 9. 日本語の「テイル形」と「テイタ形」における完了性について

「テイル形」	↗	一時的な完了（発話時点における完了）
	↘	想像上の完了（発話時以後における完了）
「テイタ形」	↗	*一時的な完了（発話時における完了）
	→	過去完了（過去における完了）
	↘	*想像上の完了（発話時以後における完了）

4.5 日本語における過去を表す時制について

本節は、過去において起こった出来事を表す時制の用法またその機能に関して論じることを目的としている。以下では、最初に過去を表す時制を取り上げ、どのような機能を持っているか、どのような文脈・場面において適用されるか、また用法に対して制約があるか否かという点に関して述べていく。すでに本章において見たように、過去に起こった出来事を表す時制として非過去形である「テイル形」も用いることができる。本節では、その過去の出来事を描写する「テイル形」を取り上げるが、それに加えて形式上現在時制でありながら意味上現在時を表さない「ル形」も取り上げることとする。このように、以下では二つの形式を対象とする。本節では、過去を表す時制のうちのある部分を場合により「非過去形」と呼ぶこととするが、それは過去を表す時制の領域には「ル形」や「テイル形」という過去形をとらないものが含まれるからである。

第二章では、イタリア語における過去を表す時制に関して述べた際に、現在形は過去における出来事を表すことのできる時制であり、様々な文脈・場面においてその適用が可能である（歴史的現在、物語化）ということが明らかになったが、このような現在形による用法は他の言語においても可能であり、英語においてもよく使用されるようである。日本語も同じような用法を可能とする言語であるか否かという疑問点が生じる。この疑問に答えるために、以下ではいくつかの例文を挙げ、その中ですでに挙げたイタリア語の例文も参考にすることとする。なぜなら、そのイタリア語の例文に対する日本語訳から、同じ文脈においても現在形の用法が異なるということがはっきりわかるからである。このように、比較をすることによって日本語における過去を表す時制の特徴とその用法がより明らかになると言える。その例文を考察すると、イタリア語の場合、現在形により表現された動詞は日本語に訳すといくつかの動詞が「ル形」ではなく、「タ形」により表現されることが明らかになる。つまり、日本語に訳すと現在形の適用が場合により不可能になるという相違が現れる。なぜこのような相違が存在しているかという点に関して説明していく。また、なぜ日本語が歴史的現在形を認める言語であるのにその日本語訳がすべて現在形にならず、場合により過去形になっているのかという疑問点が生じる。さらに、歴史的現在も

過去形も可能である場合にはどのように使い分ければよいのかという疑問も生じてくるが、後述するようにこの点に関しては工藤（1995）と高橋（2003）が述べている。

以上のことから、「ル形」も過去における出来事を表す時制であるとわかるが、当然その適用が常に可能であるとは限らない。まず、認められる用法として挙げられるのは「歴史的現在形」であるが、後述のように、この用法に関しては制約があるため、より詳しい説明が必要である。過去の事態を表す時制について須田（2010）も検討し、「少し古い時代の作品は目撃性を伴う「テイル形」以外は、ほとんど「タ形」と「テイタ形」により書かれているものが比較的多いが、現代の新しい作家による作品では「タ形」と「テイタ形」ではなく、「ル形」と「テイル形」も、盛んに使われている」と指摘している。しかし、須田（2010:202）が指摘しているように、「それをすべて「歴史的現在形」として解釈するのは不適切であり、どのような場合に、「する」または「している」が用いられるのか、それは作家により多少の違いはあるとしても、だいたいの傾向は確認することができる」。

歴史的現在形は他の言語においても存在しているが、各言語における用法が異なることにも注意すべきである。本節は日本語における歴史的現在形に関して述べることを目的としているが、先行研究に触れながら英語とイタリア語における用法に関しても簡潔に言及していく。

4.5.1 歴史的現在形における一般的な用法と先行研究について

「歴史的現在形」とは、形式上は現在時制でありながら意味上は現在時を表わさない形式であると定義できる。過去において起こった出来事を現在時制で表現する用法であるため、描写されている内容が過去のことであることが「二年前」「昨日」などのような副詞において明示される。そのような副詞が現れないと、当該事態が過去における事態として解釈されない。本節に挙げていく例文もそのような副詞や表現などを含んでいるが、第二章で見たように、イタリア語の場合、その表現が現れなくても現在形の適用が可能である。日本語においても可能であるか否かという疑問点が生じてくるため、本節ではそれに関して論じていく。

まず、すでに言及したように、歴史的現在形は他の言語においても存在し、英語の場合、1300年以降に発達した用法と言われている[118]が、現代英語でも頻繁に使用されている時制である。以下では、どのように定義されているかを簡潔にまとめていく。

Quirk（1985）では歴史的現在形は次のように定義されている。また、その用法の目的から「劇的現在（dramatic present）」と呼ばれることもあると述べている。

“The historic present describes the past as if it is happening now, it conveys something of the dramatic immediacy of an eye-witness account”.

Leech（1987）は歴史的現在を「歴史的用法（historic use）」と「虚構的用法（fictional use）」に区分している。Leech(1987)によると、「虚構的用法」とは小説家や物語作家が劇的な高揚をねらう手法として現在時制を使う場合を指しており、これによって読者はそこに描写されている出来事を目撃している立場に置かれる。既にみたように、イタリア語の歴史的現在形についてBertinetto（1986）も検討していた。Bertinetto(1986)も歴史的現在形[119]を二種類に分け、以下の二つの種類が考えられるとしている。

“Il PRE così detto ‘drammatico’, in cui si assiste alla brusca e momentanea inserzione di questo Tempo, in un contesto che enuncia una catena di eventi verificatisi nel passato”
いわゆる「劇的現在形」の場合、現在形は過去において起こった事態の連鎖について述べられた文脈に突然に挿入され、この挿入は一時的なものである。

[118] Curme(1974:355)によるものである。
[119] 第二章を参照。

“Il PRE così detto ‘narrativo’, in cui un’intera narrazione (o frammento organico di narrazione), pur riferendo eventi già trascorsi, viene idealmente trasferita al livello temporale attuale”
いわゆる「語り的現在形」の場合、すでに起こった事態の描写であるにも関わらず、文章全体（またはまとまった部分）が観念的に発話時に移動される。

以上の二種類は、現在時制を用いて過去の出来事を描写する点において共通しているため、「歴史的現在」として扱うことが一般的であるが、次節で述べるように、その二種類の区別をはっきりすべきものであると本論では考える。定義からもわかるように、主な相違として、「劇的現在」において支配的とされている時制は過去形であるのに対して、「語り的現在」において支配的とされている時制は現在形であるということが挙げられる。場合により、後者において用いられる時制は文全体で現在形のみであるため、過去の出来事であるか否かという区別が曖昧となるが、すでに述べたように、適切な表現が現れると過去における事態として解釈される。

このように、二つのパターンが考えられる。一つ目は文章のなかに過去時制と非過去形が交替するというパターンであるのに対して、二つ目は文全体が非過去形であるというパターンである。非過去形と過去時制が混ざっている場合は物語においてよく現れるパターンであり、その交替について曾我（1984）が述べている。

曾我（1984）は時制の交替を主筋的事象と副次的事象の区別により説明している。この提案によると、「タ形」「テイル形」は物語の主筋的事象について使われ、「ル形」は副次的事象について使われる傾向がある。また、過去の事象を目前の事象とするため主筋的事象にも「ル形」「テイル形」が使われ得るということも述べられている。以下のような例文が挙げられている。

（115）かま場から出て来た喜三右衛門は、えん先にこしを下してつかれた体を休めた。日はもう西の山にはいろうとしている。ふと見上げると、庭の柿の木には、すずなりに生きた実が夕日をあびて、赤くかがやいている。喜三右衛門は余りの美しさにうっとりと見とれていたが、やがて「ああきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」と独り言を言いながら、またかま場の方へ引き返した。いつも自然の色にあこがれていた彼は、目の覚めるような柿の色の美しさを見て、もういても立ってもいられなくなったのである。喜三右衛門は、その日から赤色の焼き付けに熱中した。

（長沼直兄『改定標準日本語読本』）

上記の例においては、「休めた」「見とれていた」「引き返した」「熱中した」の「テイタ形・タ形」が主筋的事象であり、「している」「かがやいている」「のである」の「テイル形・ル形」が副次的事象を表していると思われる。この説明に関して松村（1996:29）は、現在形が用いられている「西の山にはいろうとしている」「赤くかがやいている」は、明らかに喜三右衛門の目に映じた背景を「内から」描写したものであり、物語の筋からすると副次的事象となるとしている。一方、過去形の「引き返した」「熱中した」は、筆者が物語全体の筋からみて必要と考え「外から」登場人物の行為を記述したものであり、その意味で主筋的事象・主な出来事であるとされている。

続いて、工藤（1995）による定義も挙げていく。工藤はテンスとテクストの関係も観察しなくてはならないと主張している。工藤（1995:182）は、話し合いでは発話時を基準とし、小説の地の文では「タ形」が出来事の進行を表すとして、テクストによりテンスが異なることを述べている。また、「タ形」はタクシス的な働きであるとしている。そこに、「テイル形」が入ることにより「タ形」により進む物語の中の事象との同時性が示されるとしている。工藤（1995）が行った分析は「話し合い」と「語り」における時制交替現象を対象としているが、「科学的文章」においても同じような現象があると江田（2013）が指摘している。

江田（2013）が指摘しているように、一般的には歴史的現在形により過去において起こった出来事を表現する目的は物語の内容を前面化することであるが、歴史的現在は時に関わらない内容、報告、解説、筆者の判断を述べる用法も多い。以下の例文からわかるように、過去時制と現在時制の交替は物語のみにおける現象ではなく、科学的文章においても存在しているものである。江田（2013）は新書、会話、小説のテンスを同一に考えようとし、それぞれの特色について

論じている。特に、「ル形」と「タ形」のシフトを対象とした分析を行い、説明として以下のような例文[120]を挙げている。

（116）第一次世界大戦のあと、ヨーロッパに嗜眠性脳炎が流行した。俗に「眠り病」と呼ばれるウイルス性の脳炎である。この病気の初期、患者は熱を出し興奮し、不眠になる。やがて、病状は嗜眠、疲労、さらに過度の睡眠へとかわる。死亡した患者の脳炎組織を調べると、間脳の視床や視床下部を中心に病理変化がみつかった。第三脳室の周囲と中脳水道の周囲というように脳脊髄液の通路沿いに局在するものだ。当時、眠り病を研究したオーストリアの神経学者コンスタンチン・フォン・エコノモは、この知識をもとに、この部位に睡眠調節の中枢がある、という説を発表した。

（自然科学）

上記の例文において、状態を表すために「タ形（流行した）」が用いられ、病気の内容の説明をするために「ル形（脳炎である）（不眠になる）（かわる）」が用いられ、検査の結果病理変化が見つかったという事態は「タ形（みつかった）」、その変化の説明は「ル形（ものだ）」、その結果、ある説が発表されたことを「タ形（発表した）」で表現する。このように、内容の説明として述べるか、過去の事態として述べるかという表現の仕方の違いにより「ル形」「タ形」の選択をしている。この例文における現在形はすべて過去形に変化することが可能であるが、ニュアンスが異なってくる。なぜなら、過去形で表現すると当時の発見として述べる立場を取ることになるからである。

以上、歴史的現在形に関していくつかの説が提案されるが、本節の一つの目標はイタリア語と日本語における歴史的現在形の比較であるため、以下では日本語以外にイタリア語に関して触れることもある。なぜなら、時制の交替に関して異なる点が多く、それに触れることで日本語の歴史的現在形における特徴がより明らかになるからである。

4.5.2 分析に関する問題点

本節では、これまで述べてきた先行研究を基準にし、それを参考にしながらどのような問題点が生じるかということに関して説明していく。

これまで述べてきたように、歴史的現在形は二種類に分けられ、一つは過去時制により描写された事態の連鎖の中における突然の歴史的現在形の使用を表す用法であるのに対してもう一つは文全体が歴史的現在形になっているという用法である。このように、どの時制が支配するかによって区別されるが、これ以外に他の条件に従う区別も考えられるか否かという疑問点も生じる。以下では支配時制による区別を基準にして前節に挙げた例文を説明していく。

前節の例分における現在形はどの歴史的現在形であるのか、つまり「劇的現在形」であるのかあるいは「語り的現在形」であるのかという点に関して、Bertinetto(1986)による定義に従い、本節では上記の例文を「劇的現在」として扱うこととする。なぜなら、主導的時制形式が過去形であり、現在形の適用が一時的なものであり、文章全体が現在形により描写されていないからである。この場合、「タ形」「ル形」「テイル形」が混ざっているため、交替が可能であるか否かという疑問も生じるが、この点に関して説明する前に、なぜ歴史的現在が存在しているのかということにも簡潔に言及すべきである。周知のように、その理由は過去の出来事を眼前で起こっているかのように生き生きと描写するためであるとされている。言うまでもなく、歴史的現在形はその目標を達成するために用いられている時制であるが、この説明に関する異論もある。この異論も第二章において述べられたが、それは Wolfson(1979)による異論である。再び説明すると、Wolfson(1979)は話し言葉における歴史的現在形を調査し、歴史的現在形に対する過去の説明に疑問を呈している。Wolfson(1979)の提案によると、物語の重要な点が必ずしも歴史的現在形ではなく、過去時制により描写されていることが多く、過去時制と歴史的現在形の交替は物語の場面の変化に対応しているということである。本節では以上の提案を認めるが、第二章においてすでに

[120] 江田（2013:32）から引用したものである。

述べたように、その提案をイタリア語に適用すると不明な点と不完全な点が現れてくると言える。

このように、問題点として挙げられるのは三つである。一つ目は歴史的現在形における分類の基準であり、次は口語と文語における歴史的現在形の用法と、最後にイタリア語と日本語の用法における相違点である。

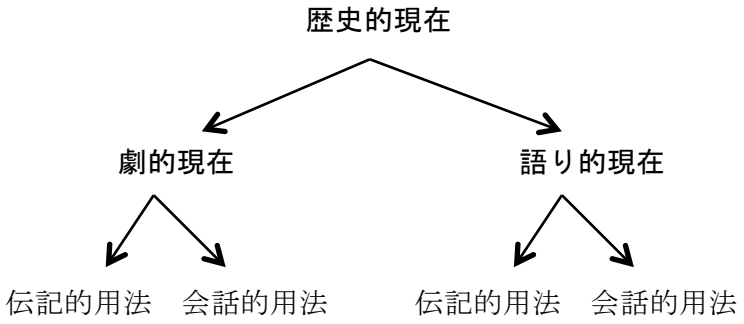
一つ目の点に関しては次のことが言える。第二章と前節において述べられている Bertinetto による定義を再び考察すると、その区別は目的のみによる区別ではないことがわかる。すなわち、目的の基準で使い分けることを認めると全ての例文において歴史的現在形の適用が可能になるはずであるが、常にそうであるとは限らない。また、劇的現在形の場合には過去形が主導的な時制であると述べたが、過去形が使用されていない場合も存在しているため、目的による使い分けが不完全であるという点を本節で論じていく。このように、その目的に合わせる説明は後述の例（117）と（120）のような例文を説明することのできないものであることがわかる。それに対して、語り的現在形の場合には現在形が主導的な時制であるまたは現在形のみ使用されているため、語り的現在形は例（117）と（120）のような例を説明することができるものであると言える。このことより、目的の視点からの分析は全ての例文を説明することができないことが明らかになった。また、不明な点がもう一つあり、それは文章と会話の区別である。上記の定義からわかるように、歴史的現在形の用法を明らかにするために一般的に分析の対象となっているのは物語であるが、歴史的現在形は会話においても頻繁に使用されることにも注目しなくてはならない。つまり、上記の区別は文語のみにおいて適用が可能であるか、あるいは口語においても適用が可能であるかということが明確に説明されていない。この点、つまり会話文との区別が必要であることに関しては Wolfson（1979：168）も述べている。

“The use of the present tense to refer to past events, a usage often referred to as the historical present tense, is found in many languages. In present-day English, this tense occurs in novels and plays, travelogues and book reviews, as well as in the accounts of sporting events, in jokes and conversational narrative. It is interesting, however, how a distinction is nowhere made between the use of the device in literary as opposed to spoken discourse, much less among the many genres within each of these where historical present may be found. Indeed, the implicit assumption upon which all such analysis rests is that the function of this tense, as well, as the rules which condition its use, will be the same regardless of genre”.[121]

本節は、Bertinetto（1986）による定義及び説明に基づいて論じるが、その説明とは異なり「劇的現在形」においても「語り的現在形」においても「伝記的用法」と「会話的用法」という下位用法があると提案していく。なぜなら、これらの用法は例（117）～（120）における相違を明らかにすることができるものであるからである。Bertinetto（1986）においても「伝記的現在形（presente storico biografico）」と「語り的現在形（presente storico colloquiale）」に関して簡潔に言及されているが、その説明は一般的な「歴史的現在形」における区別であるという印象を与える。つまり、「劇的現在形」と「語り的現在形」の区別におけるものではないように述べられている。この区別は本節における主要な論点であり、以下のように表すことができると考える。

[121] Wolfson は次のように詳しく説明している。
“The historical present, the use of the present tense to refer to past events, is a feature of narrative which has long been recognized. The object of this analysis is the use of the historical present tense specifically in narratives which occur in everyday conversational interactions. This usage will be referred to as the conversational hostorical present to distinguish it from the use of this tense in other genres such as travelogues and jokes. In the analysis of the occurrence of the conversational historical present, it was found that features of the relationship between the speaker and the audience had a strong influence. This is true not because the use of the linguistic feature itself is socially stratified, but rather because it functions as one of a set of features which appear in a specific type of narrative and is therefore governed by norms of interaction which constrain the social behavior involved in the recounting of such narratives. The fact that the use of the conversational hostorical present is an interactional variable in this respect has had important theoretical and methodological implications for the analysis which is reported here. The basic theoretical point is that in the study of the converstional historical present one sees a perfect example of the relationship between linguistic structure and language use”.

図 22. 【歴史的現在形】における区分



上記の図からわかるように、本節においても「歴史的現在形」における「劇的現在形」と「語り的現在形」が認められるが、同時に前者においても後者においても「伝記的用法」と「会話的用法」という下位用法が考えられ、この区別は分析のために重要なものであるためはっきりとしなくてはならない。なぜなら、時制の適用の点では、日本語において異なる傾向があるようであるからである。以下では、日本語の歴史的現在形の適用を詳しく見ていく。

4.6 日本語における歴史的現在形について

本節では、歴史的現在形における用法、つまりどのような場面において適用が可能であるか、また制限があった場合、どのような制限であるかという点に関して論じていく。

最初に、第二章において挙げられている例文とそれにつけられた日本語訳を参考にしよう。前節において「劇的現在形」も「語り的現在形」も「伝記的用法」と「会話的用法」に分けるべきであると提案したため、その提案に従って例（117）～（120）に関して論じていく。

（117）1948 年 6 月 2 日イタリア国民は共和国に賛成投票する／賛成投票した
Il 2 giugno 1948 gli italiani votano a favore della Repubblica （現在形）

（118）彼は長旅から帰ってきた／*帰ってくる
Lui torna da un lungo viaggio （現在形）

（119）マリオは私が頑固であると言う／言った
Mario dice che io ho la testa dura （現在形）

（120）昨日映画館に行ったら誰に会った／*会うと思う？[122]
Ieri vado al cinema e chi ci incontro? （現在形）

前節においてすでに観察したように、イタリア語の場合、上記の例文は過去における出来事を表す例文であるが、歴史的現在形を用いても過去形[123]を用いても非文とならない。それが可能で

[122] 第二章においては、「会う（incontrare）」ではなく「いる(trovarci)」が用いられているが、ここでは「いる」動詞の代わりに「会う」動詞を用いることにした。なぜなら、「会う」は「テイル形」の適用を可能とする動詞であるからである。

[123] 過去時制を用いると次のようになる。
（117）Il 2 giugno 1948 gli italiani votarono/hanno votato a favore della Repubblica.
（118）Lui è tornato/*tornò da un lungo viaggio.
（119）Mario ha detto/*disse che io ho la testa dura.
（120）Ieri sono andato al cinema e chi ci ho incontrato/*incontrai?

あるのは、Leech（1987）によると歴史的現在形と過去形の使い分けは目的に合わせるものであるからである。つまり、話者による判断であるため、話者は当該事態を過去の事態として描写するかあるいは目の前に起こっているかのように描写するかという判断によるものである。前者の場合、過去時制を用いるのに対して後者の場合、歴史的現在形を用いることが一般的である。よって、目的に合わせて置き換えが可能であるはずであるが、以下のことからわかるように、常に可能であるとは限らないことに注目すべきである。このため、本節では Leech（1987）の説明に従わず目的以外に他の相違点もあると考える。本節では、「劇的現在形」と「語り的現在形」の区別に基づくこととし、上記の例文（117）～（120）を「劇的現在形」ではなく、「語り的現在形」として扱うこととする。また、すでに述べたように、「語り的現在形」を「伝記的用法」と「会話的用法」に分ける必要もあると本節で主張する。前者と後者における相違は細かいが、相違点として挙げられるのは日付の明示や場面である。例（117）においては日付が明示され、その出来事が記録として残っているため「伝記的用法」として扱うことにし、それに対して、例（118）または例（120）は会話でしか発言できないため「会話的用法」として扱うことにする。例（119）に関しては後述する。この区別をもとにし、以下では（117）と（119）また（118）と（120）の順番で説明していく

まず、例（117）と（119）に関して以下のことが言える。この場合、過去における出来事が現在形により描写され、例（117）は歴史的現在形を表している典型的な例文である。事態を過去に位置づける時間表現があるため、現在形により描写されてもいつの事態であるかがわかる。それとは異なり、例（119）は歴史的現在形を表す典型的な例文ではなく、時間を表す表現が現れていないため、過去における事態として解釈しにくい。つまり、発話時における事態であると解釈されるのが一般的である。例（119）は、後述のように、特別な動詞を用いた例文であり、過去における出来事の描写をしているか、現在における出来事の描写をしているかという区別が文脈によるものであると言える。

次に、例文からわかるように、例（117）と（119）とは異なり、例（118）と（120）は現在形の適用を可能としない例文である。これらの例文は過去に起こった事態を描写している例文であるが、なぜ過去形しか認められていないのかという疑問も生まれる。特に、例（120）は例（117）と同様に事態を過去に位置づける表現を用いているのになぜ現在形の適用が不可能であるかという疑問が生じる。なぜこの疑問が生じるかというと、すでにみたように、イタリア語の場合、上記の例文はすべて現在形により表現されても過去における出来事[124]を描写する例文として認められるからである。つまり、「投票する」「帰ってくる」「言う」「会う」により表現されても意味が変わらないと言えるが、それに対して、日本語の場合、すべての動詞を現在形にできるわけではない。日本語に訳すと非過去形を認めるのは例（117）と（119）のみである。よって、例（118）と（120）は現在形を認めない例文であるため、当然「歴史的現在形」を表す例文として扱うことが不可能である。このことより、日本語の場合、会話において歴史的現在形の使用が不可能であるということになるが、この結論が正確であるか否かについては後述する。

以下では、まずすべての例文に関してより詳しく説明していく。最初に、例（117）は歴史的現在形を表す例文であると認めるが、本節では歴史的現在形に対する区分を想定しているため、例（117）はどちらの区分に属しているかについて言及しなくてはならない。言うまでもなく、日付が明示され、歴史的な出来事を表す例文であるため、例（117）は「伝記的用法」に属していると言える。

次に、例（119）も同じ機能を果たしているか否かを見ていく。例（119）も例（117）と同様に、過去に起こった出来事を表すことができる例文であるが、相違点も存在しているため、それに注意すべきである。まず、例（119）は伝達動詞である「言う」を用いた例文であるため、時制の用法が特別であると言える。なぜなら、発言や執筆などの行為が過去に行われたにもかかわらず、伝達動詞に現在形が用いられることも可能であるからである。これは、伝達された内容が現在にも通用するからであると考えられる。例（119）における現在形は過去の出来事を表すが、その出来事は一回のみに限られているのではなく二回以上起こった出来事であるということであ

例（117）においては遠過去形も近過去形も用いられるが、それ以外の例文においては遠過去形は用いられず近過去形の適用のみが認められる。

[124] 例（118）と（120）の場合には場面が限られているが、日本語とは異なり現在形の適用は可能である。

る。つまり、その「頑固である」という発言は発話時点に限らずその前から頻繁にされていると解釈すればよい。それとは異なり、例（117）は一回のみ起こった出来事を表している。また、この点に関しては、例（118）も（120）も一回のみ起こった出来事を表している例文であると言える。ここで、このような例（117）との相違点が存在しているため、例（119）は「伝記的用法」に相当しない例文であると思われるが、本節では「伝記的用法」を表している例文として認める。なぜなら、当該動作による反復性ではなく、歴史的現在形の使用が可能であるか否かという相違点で区別していくからである[125]。このように、例（117）と例（119）において用いられている非過去形は過去において起こった出来事を描写することができる非過去形であることが明らかになった。それに対して、例（118）と（120）は過去形のみを認める例文であることが明らかである。

イタリア語に対応する例（118）と（120）は例（117）と（119）と同様に、過去において起こった出来事を表している例文であるが、日本語に訳すと非過去形で表現することが不可能となる。つまり、現在形である「帰ってくる」と「会う」に変えると必ず現在または未来に起こる出来事のことを表すこととなり、元の意味が変わってくる。当然、なぜこのような相違が存在しているかという疑問が生じる。つまり、なぜ日本語では、場合により現在形の適用が認められないのか、またどのような視点からこの事実を説明すればよいのかという疑問も生じるわけである。おそらく、動詞の性質[126]も関係しており、その性質により「ル形」に対する解釈が変わってくることも影響を与えていると言える。

これまでのことをまとめると、次のことが言える。これまで観察してきた例文の訳から、「歴史的現在形」を「劇的現在形」と「語り的現在形」に分ける必要があり、さらにそれらをそれぞれ「伝記的用法」と「会話的用法」に分ける必要もあるということが明らかになった。また、イタリア語とは異なり、日本語の場合、過去における事態を描写する歴史的現在の用法が限られ、過去形の適用のみ認められる場合があることも明らかになった。以下の図からわかるように、「会話的用法」の場合、可能となる時制は過去形のみである。

表 10. 歴史的現在形の適用における相違

【イタリア語】

語り的現在形
- ↗ **伝記的用法** → 現在形（過去形も可能） 「例（117）（119）」
- ↘ **会話的用法** → 現在形（過去形も可能） 「例（118）（120）」

【日本語】

語り的現在形
- ↗ **伝記的用法** → 現在形（過去形も可能） 「例（117）（119）」
- ↘ **会話的用法** → *現在形 （過去形のみ） 「例（118）（120）」

---

[125] イタリア語の場合、「dice」における可能な解釈は二つである。一つ目はその動作の反復を認める解釈、つまり過去においてその動作が一回以上起こったという解釈であるのに対して、二つ目はその動作の発話時直前の実現を認める解釈、つまり一回のみ起こったという解釈である。その場合、現在形での描写が可能である。後者の場合、「先程言った」という意味で解釈すればよいが、日本語ではこういった解釈が認められていないようである。この点では日本語とイタリア語がかなり異なっていると言える。おそらく、話し言葉において歴史的現在形の使用が認められるか否か、また認められるとしても制限がある場合もあるか否かという疑問点にも関係しているものであろう。

[126] 「ル形」は未来形としての解釈を求める時制である。

上記の図からわかるように、イタリア語は現在形の適用をすべての例文において可能とするのに対して、日本語はそれを可能とせず「会話的用法」の場合には過去形のみを可能とすることが明らかである。つまり、日本語の「ル形」は「伝記的用法」の場合にしか用いられないということになる。しかし、この用法においても疑問点があり、それは書き言葉にしか適用できないか否かということである。

さらに、もう一つの疑問が生じる。それは、「テイル形」の適用が可能であるか否かということである。なぜなら、周知のように、「テイル形」も過去において起こった出来事を描写する形式であり、歴史的現在形よりその用法に適しているはずだからである。よって、上記の例文（117）～（120）においては「テイル形」の適用が可能であるはずである。以下では、その適用が認められるか否かということを見ていく。

（117a）1948 年 6 月 2 日イタリア国民は共和国に賛成投票している。
（118a）彼は長旅から帰ってきている。
（119a）マリオは私が頑固であると言っている。
（120a）*昨日映画館に行って、誰に会っていると思う？　　（*非文）

上記の例文が非文であるか否か、また非文ではない場合にはどのような情報を伝えようとする例文であるのかという点に関しても考察しなくてはならない。

以上のように、非文として認められるのは例（120a）のみである。それとは異なり、例（117a）～（119a）は「テイル形」の適用を可能とするが、例（117a）～（119a）における「テイル形」はそれぞれ異なる機能をもっている形式である。以下のように簡潔に説明はできる。まず、例（118a）は非文として扱われていないが、例（117a）と（119a）とは異なり、「テイル形」の適用には制限があり、解釈によりその適用が認められない場合もある。このように、例（118a）は必ずしも非文であるとは限らないが、本節で対象となっている用法または解釈からは外れる用法[127]であるため、不可能な用法として扱うことにする。また、解釈に関しては次のことが言える。まず、例（117a）は「ル形」を用いた例文とは異なり、会話においても用いることが可能であるようである。例（119a）も、「ル形」を用いた例文とは異なり、その動作は一回または二回以上起こったという二つの解釈を可能とする例文である。このことから、後述するように「テイル形」は様々な機能を果たしている時制であることが改めて明らかである。これまで見た例文は会話においてよく用いられるものであるが、以下では文語においてよく用いられるものに関して見ていく。

続いて、**「劇的現在形」**についても説明していく。すでに説明したように、「劇的現在」とは「歴史的現在形」の一種類であり、過去形により描写された事態の連鎖の中に突然一時的に現在形が導入されるということを表している。この用法は文語においてよく見られる用法である。以下では、それを表す例文として再び例（115）を挙げる、なぜ「劇的現在形」として認めるかというと、言うまでもなく主導的時制は過去形であるからである。

（121）＝（115)かま場から出て来た喜三右衛門は、えん先にこしを下してつかれた体を休めた。日はもう西の山にはいろうとしている。ふと見上げると、庭の柿の木には、すずなりに生きた実が夕日をあびて、赤くかがやいている。喜三右衛門は余りの美しさにうっとりと見とれていたが、やがて「ああきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」と独り言を言いながら、またかま場の方へ引き返した。いつも自然の色にあこがれていた彼は、目の覚めるような柿の色の美しさを見て、もういても立ってもいられなくなったのである。喜三右衛門は、その日から赤色の焼き付けに熱中した。

上記の例文において「タ形」「テイル形」「ル形」が混ざっているが、非過去形により描写されている出来事は過去形により描写されても非文とならない[128]ようである。当該事態を過去形により描写するか現在形により描写するかの選択は話者によるものであるからである。その選択を

[127] もし発話時において彼が帰ってきた場所にまだ滞在している場合にはその発言が可能である。
[128] ただし、過去形にするとニュアンスが異なってくることに注意すべきである。

決めるのは、その事態に対する話し手の心的態度の違いであるからである。ただし、例（117）～（120）からわかったように、その選択には制限があると認めるべきである。

以上の例文は「劇的現在」を表すものであるが、それは「伝記的用法」であるかあるいは「会話的用法」であるかという疑問が生じてくる。ここでは、日本語における歴史的現在形の範疇用法に関する疑問点について触れなくてはならない。もし、日本語は歴史的現在形の用法を会話において可能としないことを認めるなら、例（121）は当然記録が現れていなくても「伝記的用法」を表す例文であるということになる。ネイティブスピーカーに確認したところ、「ル形」を例（117）～（120）に適用すると違和感があるように感じた人が多かった。口語の場合、過去における出来事を表す時制としてより適切と認められるのは「テイル形」であるようである。しかし、例（117a）～（119a）から見たように、「テイル形」は様々な機能を果たし、常に過去の出来事を表すとは限らないことにも注意しなくてはならない。

以下では、会話において歴史的現在形が用いられるか否か、または用いられることが可能であるなら制約があるか否かという疑問点に対して説明していく。まず、工藤（1995:186）は「歴史的現在形」が完成相非過去形の「ル形」と継続相非過去形の「テイル形」により表現することができるとし、この時制の挿入により発話主体の出来事に対する心的態度そのものが前面化するとしている。以下の例文とその説明を挙げている。

（122）あいつ、ちっとも驚かなかったよ。重体だと言ったら、いつ死ぬかって聞くんだ。あきれたもんだ。

このように、話し手が自ら経験した過去の出来事を、記憶の生々しさから、感情移入的に話すのは、非常に素朴な表現方法である。また、以下の過去を示す時間副詞を用いた例文も挙げられている。この場合、「昨日の午後」が明示されているため例（123）における事態は過去に起こった事態であることが明らかである。そのため、非文であるはず[129]であるが、そうではない。なぜ非文であるかというと、現在形が過去を示す時間副詞と共起するということが認められ、テンス形式と時間副詞の選択制限が破られることになるからである。

（123） A:昨日の午後？もういないのか？
B:ええ、私も驚いたわ。昨日の午後になって急に言い出すんですもの。あんな引越しってないわ。

上記の例（122）と（123）からわかるように、日本語も会話において歴史的現在形を認める場合があると言ってよい。工藤（1995:189）は以下のようにまとめている。

「話し合いの歴史的現在用法は＜話し手の知覚性＞＜話し手の感情・評価的態度の表出性＞＜発話時における過去の出来事の心理的存在性＞という意味で、ムードと相関して成立する転移用法である。話し手の心的態度が、＜客観的＝事実確認的＞であれば、シタ、シテイタである。同じ過去の出来事を提示するにあたって、どちらを選択するかを決めるのは、その出来事に対する、発話主体の心的態度の違いである。従って、過去形―非過去形の対立は、発話時を基準軸とする＜過去―現在・未来＞という出来事の時間指示の相違であるとともに、話し手と対立的出来事との心的距離の相違＝主観的アクチュアル性の有無の相違でもある」

このように、時制の交替は話し手による選択であるとされている。しかし、注意すべきこともあると考えられる。まず、例（122）と（123）のような例文が可能であるので、上記の（118）と（120）も可能であるはずであるが、すでに述べたように、それは不可能である。ここで、なぜ例（118）と（120）において歴史的現在形の適用が不可能であるのに例（122）と（123）においてはその適用が可能であるのかという疑問が生じる。また、例（122）における「聞く」と例（123）における「言い出す」のみではなく、それ以外の動詞、つまり「驚く」も歴史的現在形により表現できるか否かを以下で見てみよう。

[129] 例（120）においても「昨日」が現れ、「会う」との共起は不可能である。

（122a）あいつ、ちっとも驚かないよ。重体だと言ったら、いつ死ぬかって聞くんだよ。呆れたもんだ。

（123a）A：昨日の午後？もういないのか？
B：ええ、私も驚くわ。昨日の午後になって急に言い出すんですもの。あんな引っ越しってないわ。

まず、例（122a）における「驚かない」の適用は不可能ではないが、過去における出来事を表す現在形であるとは言いにくい。過去のことを明示する副詞がないため、過去のことではなく、その人の性格に関する描写のように一般的に解釈される。それとは異なり、例（123a）にいては「昨日の午後」が現れても「驚く」の使用は必ず不可能であるとは限らない。例（123a）を非文として認められないとしたらその発話の瞬間において起こった出来事として解釈されると言える。つまり、例（122a）も例（123a）も過去において起こった出来事の描写をする現在形ではないことが明らかである。このように、「ル形」は「劇的現在」のみを表すことができると明らかになった。また、歴史的現在形を表す形式として「テイル形」も挙げられるが、その二つの形式の用法において相違点が存在しているようである。以下で述べるように、「テイル形」は「語り的現在」として用いられることができると考えられる。

まず、「テイル形」の定義を述べた後に、どのような特徴を持っている時制であるのか、またどの用法を可能とするのかという点について以下で述べていく。工藤（1995）では、「テイル形」が歴史的現在を表す形式として認められている。また、高橋（2003）もその点に関して述べている。高橋（2003）では、「テイル形」は以前に行った動作や以前に起こった出来事が、「歴史」や「記録」として後まで残っていることを表す形式であるとされ、例文[130]として以下のものが挙げられている。

（124） 彼は学生時代にこの論文を書いている。
（125）この子の母親は、この子が 5 歳のときに死んでいる。

高橋（2003:87）では「この用法は、以前にそういう事実があったことと、その後そのことが経歴や記録として特徴になっていることの、二つの時間のことが述べられている。そして、以前の事実はまるごとの姿で差し出され、その結果が特徴になっていることは、持続の姿で差し出されている。そのことから、この用法はパーフェクトの延長にあることがわかる」とされている。上記の例文からわかるように、「テイル形」は過去に起こった事態を表すことができる時制であるが、ある条件を満たさなくてはならない。以下では、まず前節において述べた例文を再び挙げていく。

（117a）1948 年 6 月 2 日イタリア国民は共和国に賛成投票している。
（118a）彼は長旅から帰ってきている。
（119a）マリオは私が頑固であると言っている。
（120a）*昨日映画館に行って、誰に会っていると思う？　　（*非文）

解釈に関しては、例（117a）は「ル形」を用いた例文とは異なり、会話においても用いることが可能であると言える。また、例（119a）も、「ル形」を用いた例文とは異なりその動作は一回または二回以上起こったという二つの解釈を可能とする例文である。歴史的現在形として認めるとしたらどの現在形であるのか、また用法と解釈において制約があるか否かという疑問点に対して考察しなくてはならない。まず、例（117a）における「テイル形」による用法と「ル形」による用法を比較してみよう。前者の場合、会話における適用が認められるのに対して、後者の場合、会話における適用が認められにくいようである。このように、歴史的現在を表す「ル形」と「テイル形」による用法が異なり、さらに「テイル形」における用法が様々であるため、すべての「テイル形」が歴史的現在形を表すわけではないことが改めて明らかになった。もし、歴史的

[130] 高橋（2003）から引用したものである。

現在を表す「テイル形」であれば、それは「ル形」とは異なり、語り的現在の「伝記的用法」も「会話的用法」も可能とするという結論に至る。

これまで挙げてきた例文からわかるように、非過去形（ル形もテイル形も）を認めない例文があり、それは例（120）と（120a）である。それ以外の例文においては非過去形の適用も可能であるが、当該例文は過去形のみを認める例文である。当然、なぜその例文の場合にのみ非過去形の適用が不可能であるのかという疑問が生じてくる。本節において挙げた例文からわかるように、「非過去形」は過去において実現した出来事を表すこともできる形式であるため、例（120）と（120a）においても可能であるはずである。しかし、その適用は不可能である。これまで挙げてきた例文は複文ではなく単文であるため、この違いは影響を与えているか否かという疑問が生じる。つまり、例（120）と（120a）は複文であるため非過去形の適用が不可能であるか否かという疑問である。以下ではこの点に関して述べるが、その前にまず、当該例文はどのような例文であるかを見ていく。

（120） *昨日映画館に行って、誰に会うと思う？
（120a）*昨日映画館に行って、誰に会っていると思う？

言うまでもなく、以上の例文は「〜と」を取る節であるため、引用節として認めなくてはならない。引用節における主節と従属節の時制の一致はどのようなものであるのかを見ていく。そのことにより、当該例文は引用節であるため非文であるか否かということがわかるからである。

第八章において述べるように、基本的に引用節には非過去形と過去形がどちらも現れる。従って、引用節内の非過去形または過去形は主節の事態の成立時を基準として事態を時間軸に位置付けるものであると言える。述語が状態性述語であるかあるいは動作動詞であるかにより従属節における事態と主節における事態の時間的な相関関係が異なるが、詳しくは第八章において述べられているため、以下では「会う」のような動作動詞のみに関して論じていく。一般的に、非過去形は「〜と」節の事態を主節の事態以後に位置付けるが、主節の事態が過去形[131]である場合、すでに起こった事態であるという可能性もある。当該例文の場合、その事態の実現を過去に位置付ける副詞が現れているため、この場合の非過去形は以下の例（126）と同様に、過去を表す時制として扱うべきである。ただし、非過去形は過去的用法を認める形式であるのに、なぜ以上の例（120a）のみは非文であるのか、またなぜ以下の例（126）はそれとは異なり非文ではないのかという疑問も当然生じてくる。

（126）彼は 1 年前にアメリカに行っていると思うよ。

以上の例文は例（120）と（120a）と同様に引用節であるのに正しい文として認められ、従属節において現れている非過去形の適用が不可能ではない。この場合の「テイル形」は過去における経験[132]を描写している形式であると言えるが、それとは異なり、例（120a）における「テイル形」は経験としては解釈しにくい。このように、両者の例文のあいだにある相違点として挙げられるのは、まず「行っている」の「テイル形」は経験を表している用法であるのに対して、「会っている」の「テイル形」は経験を表している用法ではないという相違である。後者は、経験を表す表現に置き換えられず、つまり「会っている」を「会ったことがある」に置き換えられないということである。それに反して、「行っている」は「行ったことがある」に置き換えられるという相違がある。このような相違は解釈に対して影響を与えていると言えるが、もう一つの相違が考えられる。それは話者の意図である。それは、例（126）の場合、話者は現在の視点から過去における情報を単に伝えているのに対して、例（120a）の場合、そうではないという相違である。なぜなら、後者の場合、話者は現在の視点から話しているのではなく相手を過去時に移動させようとしているという場面であるからである。よって、非過去形はそのような用法を可能としないという結論に至るが、この点をより詳しく見ていく。すでに述べたように、工藤（1995）に基づくと「テイル形」は過去の出来事時点を明示しても、過去のその特定の時点には出来事をく

[131] 引用節における時制の適用に関しては第八章を参照。
[132] 経験・記録用法を表す「テイル形」に関しては第三章においても述べられている。

ぎづけず、現在と関係づけるのであり、現在時にその結果・効果が存続すると言える。つまり、現在観察される事実が存在するということである。このことから、例（120a）はその形式の用法を認めないため、現在とのつながりまたはその結果・効力が存続していないということとなるが、次のことも参考にすべきである。ここで、「事実」が存在していると述べたが、これは何を意味しているのかということをはっきりさせるべきである。工藤（1995:142）が述べているように、「テイル形」では、「過去の出来事を現在と関わらせるにあたって、＜論理性＝解説性＞を前面に出すことがあるが、「タ形」はそうはならない。「タ形」は日常会話で使われ、「テイル形」は論述的な会話・文章に現れる」のである。「テイル形」が会話において使われる場面は二つの場面に限られているとされている。一つ目は、「話し手の現在の判断を根拠づける（話し手の判断の理由＝推論の前提となる）過去の出来事を差し出す場合」であり、二つ目は「「なぜか」、「真実かどうか」など、話し手が現在問題とし、聞き手に説明、解答を求めている過去の出来事である場合」である。工藤が挙げている例文[133]を参考にしよう。

（127）「なに？すると、あの頃からお前たちは知っていたのか」
「だって、あなたは一郎と良子にその女を連れているとき出会っているじゃありませんか。良子はあなたが子供を抱いて女と出歩いているのも見かけていますよ」

（128）一昨日、東都デパートで、城崎達也が殺されている。その直後に刑事があなたをお訪ねした。あなたは、城崎氏を知っているかという質問に対して、聞いたことのない名前だと答えている。いまでもそうお考えですか。

上記のように、特定の場面に限って「テイル形」は論述的な会話に現れることが可能である。従って、本節が対象としている例文（120a）においても現れるはずである。なぜなら、話し手は聞き手に解答を求めているという点で例（128）と（120a）は共通しているからである。よって、この説明も不適切である。では、例（120a）と（128）のあいだにどのような相違があるかに関して論じていく。上記の例（127）と（128）からわかるように、描写されている出来事は過去における事実である。つまり、現在観察される事実が存在し、話し手はそれに対して判断をしたり聞き手に解答を求めたりしている。ただし、それとは異なり、「誰に会っていると思う？」の場合、現在観察される事実は存在しているが、話し手は現在からではなく事態が実現した時点での視点から話している。その背景として「昨日映画館に行って」を設定し、その時間区間のあいだに起こった出来事について述べているため、例（120a）は現在時の視点を基準にして発言されているものではない。このことから、なぜ前述したように、その事態が経験として捉えることができないかが明らかになる。当該事態は経験ではなく設定された区間内において実現した事態の描写を表しているものである。このため、「テイル形」の適用が不可能であると考えられる。さらに、質問文であることによりその事実性が低くなることも影響を与えていると言える。

まとめると、これまでの分析から次のことがわかった。日本語においても、非過去形は過去において実現した出来事を描写することができる形式であるが、場合によりその形式の適用が認められない。特に、制限されるのは会話における適用であるようである。いくつかの例文からわかったように、過去のことを非過去形を用いて描写するのは話し手の判断による用法である。話し手自らが直接目撃した具体的な出来事が感情的に表現されていて、会話における記憶の生々しさを伝える用法であるが、この説明に従わないものもある。つまり、話し手のその出来事に対する心理的な判断によりすべての出来事が非過去形で描写されるとは限らず、制限されている場面もある。その制限は、以上に挙げた例文からわかるように、会話における制限である。その制限は単文と複文によるものではなく、動詞の性質によるものでもないと言える。それは、話し手によるものであり、話し手はその出来事を過去のある区間を設定してその中から聞き手に描写しようとすると非過去形の適用が不可能となる。その場合、過去形の適用のみ認められる。なぜ非過去形の適用が不可能となるかというと、「過去の中」の視点からの語りであるため、経験として捉えることができないからである。よって、経験を表す「テイル形」を用いて描写することができないと言える。

[133] 工藤（1995:143）から引用したものである。

4.7 まとめ

本章では、継続を表す「テイル形」ではなく、「パーフェクト」を表す「テイル形」を取り上げた。まず、「テイ」の意味とその用法、つまり「継続」と「以前」について説明したが、前者を表す「効力持続」と後者を表す「完了」における相違点を主に対象とした。本章はその二つの意味を区別すべきであると主張したが、それは両者が別のレベルに属している概念であるからである。なぜなら、「完了」の場合、その出来事が完結していることに焦点が当てられているのに対して、「効力持続」の場合、その出来事が完結した結果に焦点が当てられているからである。そのため、後者の場合、出来事が完結しているのは前提であり、効力持続は完了の次のプロセスである。また、前者は客観的な概念であるのに対して後者は話者の判断によるものであるため主観的な概念であると本論で主張した。

本章では「テイル形」が表す完了に関しても論じた。さきの章においてみたように、二つの種類の完了が存在しているため、当然「テイル形」はどれを可能とするかという疑問が生じた。様々な例文から明らかになったように、「テイル形」は未来的な用法も過去的な用法も可能とする形式であるため、「一時的な完了」も「想像上の完了」も表すことができると言える。ただし、日本語では過去に起こった出来事を表す時制として「テイル形」のみではなく、「ル形」も用いられるが、この用法に関して様々な制約が存在していることも見た。このような制約はイタリア語との比較から判明したものであると言える。なぜなら、いくつかの例文を挙げながら、同じ文脈においてもイタリア語と日本語の現在形の用法が異なると明らかになったからである。イタリア語において現在形により表現された動詞を日本語に訳すと幾つかの動詞が「ル形」ではなく、「タ形」により表現されることがわかった。つまり、日本語に訳すと現在形の適用が場合により不可能になるという相違が現れた。この点を説明するために、歴史的現在形に触れ、一般的にその時制の使用は話者の選択によるものであると一般的にそのされていることを見た。しかし、制約もある。本章では、どのような場面においてその時制が用いられ、どのような場面において用いられないのかという点について論じたが、明らかになったのは次のことである。その時制の用法をまず、先行研究と同様に「劇的現在形」と「語り的現在形」に分けたが、相違点を明らかにするためにはもう一つの区別が必要であると主張した。それは、「伝記的用法」と「会話的用法」という区別である。この区別から、日本語では過去における事態を描写する歴史的現在形の用法が限られている、つまり、過去形のみ認められる場合があるとわかった。挙げた例文から明らかになったように、イタリア語とは異なり、日本語の「会話的用法」は過去形のみの使用を認める。また、「テイル形」も過去において実現した出来事を表す形式であるが、この形式も「会話的用法」における適用を可能としない。なぜ不可能であるかという疑問に対して、本章は次のように提案した。まず、その出来事は「経験」であるか否か、そして話者はその描写に対して背景を与えているか否かという二つの点が挙げられる。一つ目の点に関して、その出来事が経験として捉えられるなら、「テイル形」の適用は認められるが、経験として捉えられない場合、その適用は不可能となると言える。次に、二つ目の点に関して、話し手が過去にある区間を設定してその中から聞き手に向けてその出来事を描写しようとする場合、非過去形の適用が不可能となると言える。このように、イタリア語との比較により、日本語の場合、過去において起こった出来事を表す現在形において制約があるとわかった。この制約は会話的用法に限られるものである。話者が現在からではなく事態が実現した時点での視点から語ると、つまり時間的な区間を設定しその中から語ると「テイル形」の適用が認められない。なぜなら、経験として認めることが困難だからである。

第五章

過去を表す時制と副詞の共起について
―日本語における「もう・すでに」の対立と
イタリア語における「già・ormai」の対立を中心に ―

本章は、時間を表す副詞表現における用法を明らかにすることを目的としている。従来、多くの研究は「もう・すでに」と「まだ」における対立を対象としていたが、本章はそれとは異なり、「もう」と「すでに」のあいだにいくつかの相違点が存在していると主張し、その対立に関して論じていくこととする。

言語の意味機能についての研究を品詞別に見た場合、極端に研究が進んでいない分野の一つが副詞および副詞相当表現の意味機能についてであることは周知のことであり、この現象は日本語に限ったことではなく、多くの言語に見られることもよく知られているところである。その理由は、山本（2007）が言うには、これまでの言語研究が言葉を言語主体のメンタル・プロセスの観点から捉えようとする研究ではなかったことにある。そして、副詞及び副詞相当表現のように明らかに言語主体の認識態度を表す表現に関しては、従来の研究姿勢ではその意味を解明することは困難であり、実際試みたとしても統一的な研究成果は出せず、結果、研究がなかなか進まなかったものと考えられる。現在、いくつかの優れた研究は存在しているが、全体として、副詞的修飾成分への分析・記述は、述語成分などに対する研究に比べて、かなり立ち後れていると言えるだろう。

日本語のみではなく、他の言語においても副詞はよく用いられているものであるが、それは単なる文法形式という独立した抽象的な記号ではなく、発話者の認識していることを明確化する上で中心的な意味をもつことがあるということに注目すべきである。副詞は主観的時間という概念を用いるものであると言え、本章の議論はその主観性を表す副詞の用法とその意味を中心としている。

5.1　副詞「もう」の用法とその意味について

時間を表す副詞には、「今日」、「一週間前」、「二年前」など直接的に時間を明示するものがあるが、「もう・すでに」や「まだ」など直接的に時間を明示しない副詞もある。このような副詞は日常会話においてよく現れる表現であるとともに、話者のもつ時間的な概念を表現するという点で特徴的である。例えば、以下のような例文について考察しよう。

（129）君はディズニーランドに行ったことがあるかい？
　　A1:まだ、ないよ。
　　A2:もう、あるよ。

通常、このような質問において「これまで」行ったことがあるか否かというニュアンスを受けることが多いため、「まだ」と「もう」を使って答える必要はないが、日常会話においてはよくある応答である。また、「まだ」を使うことにより「ない」が時間的な意味として強調されることになり、「もう」を使うと「ある」が強調されることになる。人間は文脈を解釈することで、会話に現れた表現以上の背景を理解することができ、時間副詞はこのような背景にある意味を表

面上に浮かび上がらせる効果をもっているものである。以下では「もう」の意味とその用法に関して述べていく。まず、「もう」の意味は『日本国語大辞典第二版』において次のように記述されている。

【もう】（副）

① 時間的に経過して、すでにその状態になるさまを表す語。
② 限定した数量を示す語を伴って、ある状況をさらにそれだけ続けよう、または、ある数量にさらにそれだけ加えようとする気持ちを表す語。
③ 間違いなくその状態であることを強めていう語。
④（あとに打ち消しの語などを伴って）同じ事をこれ以上繰り返したくないという気持ちを強調する語。

上記の意味記述からは、時間要素の有無、数量の関与、主観的判断の関与などが記述されており、以下では、それぞれに相当する例文を挙げる。

① あ、もうこんな時間だ。帰らなくちゃ。
② 「例の CD、いい加減で返せよ。」「もう一日だけ。」
③ 昨日はそりゃもうものすごい雨でひどかった。
④ 足が痛くてもう歩けません。

本章は主に①における用法を対象とする。話者は例①を発言する際、なぜ「もう」を言う必要があるのだろうか。すなわち、「こんな時間だ」にしても成り立つ発言であるが、話者は「もう」を加え、そのことにより何を伝えようとしているのかという疑問点が生じる。まず、副詞は主観的時間という概念を伴うものであるとすでに言及したが、このことを基準にすると、例文①においては何らかの言語主体の意識が働いていると予想される。

基本的には、日本語の「もう」は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという「完了」の意味をもち、その状態の移行があるのが前提として認められている。本章において説明するように、これは基本的な意味であるが、それ以外に別の意識も働いている。「もう」におけるその「完了」の意味に加えて、状態の変化が起こるのが早いと感じる心理が話し手の中にあるとも言える。この用法を考えると定義①に対する例文もわかりやすくなる。このように、「もう」においては二つの解釈が可能であり、一つ目は「基本的意味」である「完了」という解釈と、その「副次的解釈」である「予期よりはやく」という解釈であるが、以後の節において述べるように、もう一つの副次的解釈が挙げられる。ちなみに、多くの研究は「ル形」を用いた例文を対象としているが、本章は過去を表す形式を用いた例文を対象とすることとする。この場合、その事象は過去において実現した事象であるため、「完了」の意味を基本的な意味として扱うこととする。

5.2 「（もう）～タ形」と「（もう）～テイル形」について

文が「ル形」のときには、「もう」を使う場合、発話時点が状態変化の直前に置かれるのに対し、文が「テイル形」や「タ形」のときは発話時点が状態変化の直前には置かれないという相違がある。後者は以下のような例文により表現される。

（130）**もう**あの映画は見ている。
（131）**もう**手紙は届けた。

前者における「見る」という動作も後者における「届ける」という動作も完了しているため状態が移行する直前という解釈はできない。以下では「もう」と「テイル形・タ形」の共起はどのような解釈を可能とするか、用法によりどのような相違があるか、またどのような制限があるかなどについて考えていく。

すでに述べたように、日本語においては過去の出来事を述べるのに二つの言語的手段があり、一つは「タ形」であり、もう一つはいわゆる経験·記録用法の「テイル形」である。工藤（1995:99）はパーフェクト性を「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っている」と規定し、前述の経験·記録用法の「テイル形」とともに、「発話時までに出来事が実現済み」という意味をともなう「（もう）～タ形」も現在パーフェクトの形式として位置づける。しかし、井上（2001）が指摘するように、同じものであるとは言いにくい。以下ではそれらの形式と副詞との共起について考察していく。

5.2.1 「（もう）～タ形」について

以上の「（もう）～タ形」と「（もう）～テイル形」の用法に関しては説明として以下の例文[134]が挙げられる。まず、「（もう）～タ形」はどのような場面において用いることが可能であるか、またどのような場面において経験・記録用法の「テイル形」と置き換えることができるかという点に関して考察していく。

（132）A さん：B さん、この間『「た」の言語学』を注文されましたよね。
B さん：え？そんな本注文したっけ？
A さん：（注文のハガキを見せて）これ、B さんの字ですよね。
B さん：（a）本当だ。確かに先月注文している（??注文した、??もう注文した）ねえ。
（b）あ！そういえば、何かそんなタイトルの本注文したなあ。

例文からわかるように、可能となる形式が（a）においては「テイル形（注文している）」であるのに対して、（b）においては「タ形（注文した）」である。また、（a）の場合には「もう～タ形（もう注文した）」も「タ形（注文した）」も不可能である。このように、可能となる形式は「テイル形」と「タ形」であるが、その適用は場面により異なることに注意すべきである。ここで、なぜ（a）の場合、置き換えられるはずであるのに「もう～タ形」が認められないのかという疑問点が生じるわけである。

上記の例文からわかるように、記録を見る限りは「タ形」（注文した）の使用が認められるが、自分ではそのような記憶がないという場合には「タ形」は使えず、「テイル形」（注文している）を使わなくてはならないこととなる。この場合、「注文したという状態である」と解釈すればよい。それに対し、（b）からわかるように、「タ形」（注文した）と言えるのは、注文したときのことを思い出した後のみである。なぜ「テイル形」の代わりに「（もう）～タ形」の適用が不可能であるのかという疑問に対して、井上（2001）は次のように説明している。「（もう）～タ形」の適用が不可能であるのは、「実現の経過が把握されていない出来事」であるからと述べている。この説明により、なぜ例（132）においては「確かに注文した・確かにもう注文した」という二つのバリアントが用いられないかがわかる。結局、「実現の経過」が把握されているか否かについての判断があるからである。従って、井上が説明しているように、「（もう）～タ形」における「発話時までに出来事が実現済みである」という意味は、「タ形」という言語形式によって表されるというよりは、当該の出来事が「発話時の前後を含む一定の区間内のどこで実現されてもおかしくない」という属性を有することから生じるものである。この点について鈴木（1979）では「（もう）～タ形」においても、「タ形」が表すのは、あくまで「発話時以前にこのような出来事があった」ということであり、「発話時までに出来事が実現済み」という意味は

[134] 井上（2001）から引用したものである。

別のプロセスによって生ずるとされている。ここでは、前章において挙げた例文[135]を再び挙げることとする。この例文に基づき、副詞「もう」の性質に関して考察していく。

（133） A:（午後 6 時頃に）昼ご飯を食べた？
B1:はい、*もう食べた。

（134）A:（午後 1 時頃に）昼ご飯を食べた？
B1:はい、もう食べた。

上記の両者の例文は発話時以前における出来事の実現を表す例文であるが、基本的には応答文において「もう＋タ形」を可能とするのは後者のみである。なぜなら、後者における発話時は当該出来事の「予期区間内」[136]にあるからである。そうでなければ前者の適用も不自然となる。ここで言う「予期区間」とは、第三章においても述べたように、話者の設定した時間的な幅のことを表す表現である。上記の例文からもわかるように、当該の出来事がその予期区間内に実現すれば「もう＋タ形」の適用は可能であるが、予期区間外なら「もう＋タ形」の適用は不可能となる。詳しく言うと、この場合においては副詞の制限が考えられるため、「もう」の意味を考えなくてはならない。「もう」とは「ある時間区間までのこと」を表す副詞であり、その区間は話者の予期区間であると考えればよい。すなわち、「過去における時間設定」が必要であるという単純な結論に至る。ただし、前章において論じたように、例（133）の場合においても、「もう」の適用が可能であると本論では考える。なぜなら、すべての「もう」が「予期区間」と結びついているわけではなく、その解釈は三つの可能な解釈のうちの一つであるからである。この点に関しては後述するが、以下ではその解釈を明らかにする例文とそれに対応する図を挙げていく。前章において挙げた「予期区間内」と「予期区間外」における相違を表す図を再び以下に挙げている。

（133）

予期区間
－ － － － － － － － － － －
「食べる」
――――――――――――――――――――――――――――――●――――――――――――――――――――
昼間　　午後　　発話時（6 時）

（134）

予期区間
－ － － － － － － － － － － －
「食べる」

――――――――――●――
昼間　発話時　　午後
（1 時）

以上の図からわかるように、例（133）において「もう」が使えないのは、「お昼を食べる」という出来事は予期区間内にないからである。そのような時間帯には昼食をとらないからであり、

[135] 庵（2001:145）から引用したものである。前章では、当該例文は場合により「もう」の適用を可能とする例文であると述べたが、ここではその基本的な適用に従うこととする。つまり、ここでは「予想よりはやく」という解釈を対象としていく。
[136] 節 3.5 を参照。

ご飯を食べるとしても「昼食」ではなく、「夕食」になるからである。それとは異なり、例（134）においては「お昼を食べる」という出来事は予期区間内にあるため、「もう」の適用は可能となる。一般的には、「もう」のみではなく、「すでに」「とっくに」などが共起する場合も同じであるとされている。

以上のことから、「もう」のような副詞は事象時間以外の設定時間を必要とする副詞であると言える。なぜ副詞が重要な役割を果たしているかというと、これらの副詞は話者が持っている主観的な時間感覚を表しているからである。つまり、副詞の適用により、話者の主観的時間が伝わってくるということとなる。そのため、このような時間副詞を表現するためには、これまで見てきたように、二種類の時間概念が必要であると考えられる。その二種類は「事象時間」と「予期区間」であり、前者は時間軸における客観的な出来事の位置であるのに対し、後者は話者の判断によるものである。

【設定時間】

「事象時間」→ **客観的**
「予期区間」→ **主観的**

5.2.2「（もう）～テイル形」について

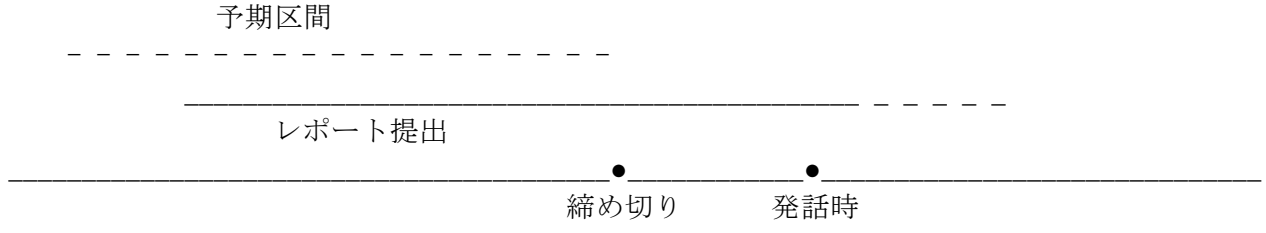
次に、「（もう）～テイル形」に関して説明していく。「（もう）～タ形」が有するパーフェクト性と経験·記録用法の「テイル形」が有するパーフェクト性とは互いに矛盾するものではないと言える。「タ形」に「（もう）～タ形」と「（*もう）～タ形」という二つのタイプがあるのと同様に、経験·記録用法の「テイル形」にも「（もう）～テイル形」と「（*もう）～テイル形」という二つのタイプがある。以下に、「（もう）～テイル形」を適用した例文[137]を挙げ、そのことにより、どのような現象が現れてくるかについて観察していく。

（135）（昨日はレポートの提出日であった）
A さん：昨日、レポートを出した？
B さん：うん、（締め切りまでに）出しているよ。　（*もう）

（136）（A さんと B さんはレポートの提出期限を翌日にひかえている）
A さん：（もう）レポートを出した？
B さん：うん、もう出しているけど。

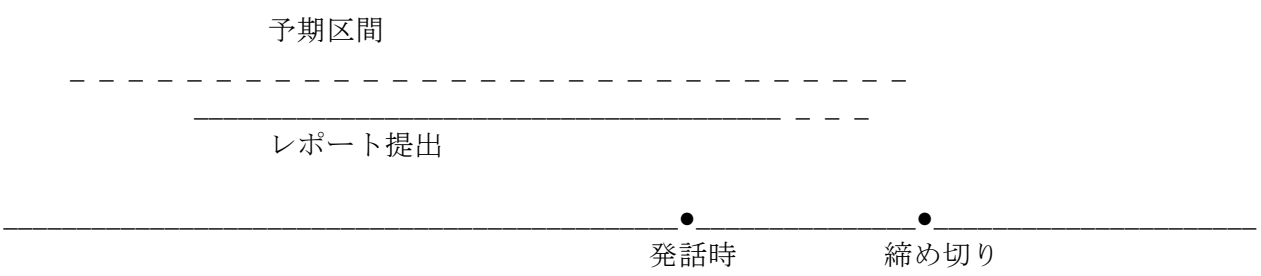
例（135）と例（136）はいずれも「レポートを提出した」という出来事を描写している例文であるが、発話時が「締め切りまでのレポート提出」という出来事の実現が予期区間内にあるか否かという点で異なっている。図で表すと以下の通りとなる。

（135）「（締め切りまでに）出している」　（*もう）



[137] 井上（2001）から引用したものである。

（136）「（もう）出している」



以上のことから、「もう」は完了の意味をもっているが、この例文においてもその意味に加えて、状態の移行が早いと感じる心理を示す解釈が生じるということがわかる。この点について仁田（2002:255）も述べており、「「もう・まだ」は、事態の起動への時間量を表すわけではないが、これらには、想定された事態が存し、その想定事態との関係において当該事態が描き出されている」としている。ただし、すでに述べたように、「もう」における以上の二つの解釈は区別すべきである。なぜなら、その解釈は別のプロセスによるものであるからである。

5.3 副詞「もう」における用法とその解釈について

「もう」が用いられる際に、前節において述べたように、応答文を選択するためには、事象時間以外の設定時間が必要であるとわかった。それは、その時間設定の幅が狭いか広いかに関わらず、当該の事態がその時間設定内に実現するか否かということによるものである。しかし、様々な例文を挙げてみると、この理論が常に適用できるとは限らず、制限もあるようである。説明として以下の例文が挙げられる。

（137）お父さんは**もう**来た。
（138）お父さんは**もう**来ている。

以上の例文では、「もう」が用いられているため、基本的な意味である「完了」以外に「事象が予期よりはやく実現した」という意味も可能であるはずである。ただし、「タ形」の場合、二つの用法があるため、その用法によって「もう」における意味が異なってくることが考えられる。上記の例（137）は、一般的に「単純に過去にこのような出来事があった」ということを述べる「タ形」として解釈されるのではなく、「現在（発話時）までに出来事が実現済み」という意味を伴う「タ形」を表す例文として解釈される。つまり、この場合において、例（137）における「タ形」は「過去」ではなく「完了」を表す形式である。それに対し、例（138）における「テイル形」は結果状態を表す形式であるということが明らかである。例（137）が単なる過去（アオリスト的）ではないことの理由として、発話時と結びついている「もう」が現れる時点で「タ形」が完了を表す形式になるからということが挙げられる。このため、当該例文における「タ形」はアオリスト的な用法を表す「タ形」ではないはずである。ただし、アオリスト的な用法が常に不可能であるとも限らない。なぜなら、「もう」の解釈を変えるとその用法も可能となるからである。その場合には、「もう」の意味が「事象が予期より早く実現した」という意味ではなく、「以前に少なくとも一回〜したことがある」という経験的な解釈となると本論では考える。つまり、以下のようになる。

（137a）お父さんは**もう**来た　→　**過去**　→　「以前に少なくとも一回来たことがある」[138]
（137b）お父さんは**もう**来た　→　**完了**　→　「想定より早く」[139]

[138] 「経験」の意味で用いられることがあるが、動詞の制限もある。この点に関しては後述するため、ここではこれ以上述べないこととする。

以下では例（137a）と（137b）における相違に関して説明していく。まず、さきの章において見たように、「タ形」はいずれも過去において起こった事象を描写しているが、その描写は現在と関係があるか否かという点で異なっている。この場合、前者は「過去」であるため、現在とは関係のない用法であるのに対して、後者は「完了」であるため、現在（発話時点）と関係のある用法である。よって、例（137a）における発話時と繋がっている「もう」が用いられると「タ形」は「アオリスト的」用法として認められないはずである。ただし、常にそうであるとは限らない。なぜなら、すでに言及したように、上記の例文における「もう」の意味が異なっているため、「アオリスト的」用法を表す「タ形」も可能となる。それは、「もう」は二つ以上の意味を可能とする副詞であるからである。もし、たった一つの意味をもつ副詞であるなら、例（137a）が認められないはずであるが、そうではない。このように、「もう」は二つ以上の機能を果たすことができる副詞であり、「過去」の場合には「予期区間」と関係のない解釈となり、その場合の「もう」に対する解釈が変わると言える。ここでは、その解釈を「以前に少なくとも一回〜したことがある」、つまり「経験」として説明するが、この点に関しては後述するため、ここでは詳しく述べないこととする。以下では、「もう」に加えて過去のことを明示的に表す表現も追加するが、その前にこれまで述べた「もう」が可能とする解釈を以下にまとめていく。

表 11.【「もう」における可能な解釈】

「**もう**」	→	「完了」（基本的解釈）	↗「予期よりはやく」（予期）（副次的解釈）
			↘「以前に少なくとも一回〜したことがある」（経験）（副次的解釈）

上記のことからわかるように、「もう」による解釈は二種類に分けられ、一つ目は「基本的解釈」であり、二つ目は「副次的解釈」である。さらに、後者を「予期」と「経験」という種類に分けることとした。このように、「もう＋タ形」により描写された事態がすべて「完了」解釈を求めるが、場合により「予期よりはやく」あるいは「以前に少なくとも一回〜したことがある」という意味での解釈も可能であると提案できる。ここで、「副次的解釈」に属している二つの解釈をどのように区別すればよいかという疑問が生じるが、この点に関しては後述する。

次に、以上の例（137a）と（137b）を基準にし、副詞を変更することや追加をすることによりどのような相違点が生まれるかという点に関して考察していく。まず、以下の例（139）を参考にしよう。この例文は非文として感じられる例文であるが、常にそうであるとは限らないことに注意すべきである。一般的に、例（137）のような例文の場合、「完了」の解釈を求める副詞（もう）が現れていることにより「2 年前に」などのように明確に過去時を表す副詞を追加することができないようである。すなわち、以下の例（139）が非文であるということとなるはずである。

（139）*お父さんは 2 年前に（は）**もう**来た（「*」は「予期」解釈が不可能であることを示す）

この場合、「2 年前に」と「もう」が対立するため、非文として感じられる。それは、言うまでもなく、「もう」が現れているから発話時点と関係のない「2 年前に」のような副詞との共起ができないからである。ただし、次の二点に注意すべきである。それはまず、以下の例（140）と例（137a）は同じ解釈を認める例文であるという点と、「すでに」との置き換えが可能であるという点である。調査してみたところ、「もう」をその類義語である「すでに」に置き換えると当該

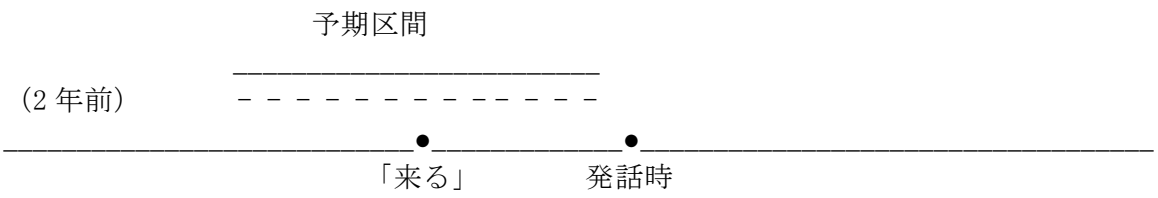
[139] この場合においては当該の事実が予想より早く達成されというニュアンスが含まれている。完成相であるため事象の終了が話者が設定した時点より早かったという解釈が可能になる。未完成の場合、事象の終了ではなく、事象の開始が話者の設定時点より早かったという解釈になる。

例文は非文ではなくなり、正しい文として認められるという結果が出た。つまり、以下の例文は非文として感じられないということである。

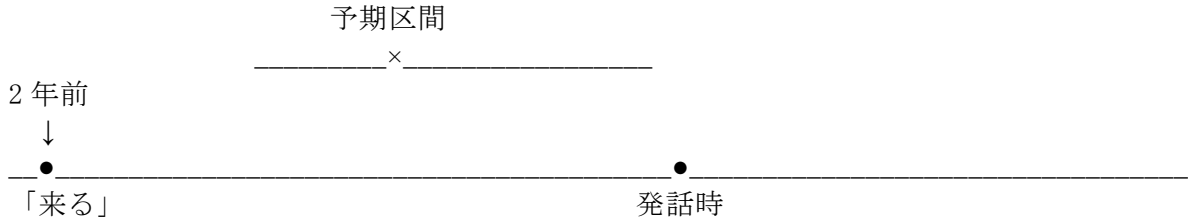
(140) お父さんは 2 年前に**すでに**来た

このことからわかるように、「もう」と「すでに」のあいだには何らかの相違があると言える。そこで、どのような相違があるのか、またはなぜ「すでに」を用いた例文ならばその文が可能となるのかという疑問が生じる。ネイティブスピーカーに尋ねたところ、その相違が「予想」によるものであるという説明が多かった。すなわち、簡潔にいうと、「もう」が用いられると話者が浮べるのは「予想」「想定」または「対比」のことであるようである。それとは異なり「すでに」が用いられると単なる過去の出来事として解釈されるため、「2 年前」との対立がなくなる。つまり、時間のレベルが同じではないということとなる。図で表すと以下のようになる。

【もう】



【すでに】



上記の図からわかるように、「すでに」を用いた場合とは異なり、「もう」[140]を用いた場合、「予期区間」が必要とされる。なぜなら、「それよりも早く」という対比解釈となるようであり、時間の幅の設定が必要となるからである。それに対して、「すでに」を用いた場合、予期区間は無関係となり、過去における出来事や経験のように解釈されるようである。このため、「2 年前」との共起が認められる。簡潔に説明すると、「もう」は現時点で「そうである」ことを表すのに対し、「すでに」はその状態や動きが「以前」であることを表すと言える。すなわち、上記の図からもわかるように、「基準時」が同じではないという相違点が明らかとなる。そして、副詞による制限があり、その副詞が伝える意味に合わせて話者は動詞形式を選択するということも明らかとなった。

また、以上の例文とその意味を表す図からわかるように、「もう」と「すでに」は完全に類義語ではないことを認める必要があり、置き換えられない場合もあるからである。さらに、置き換えることが可能であるとしても、話者はその副詞の意味を同じく解釈するとは限らないときもある。なぜなら、副詞は話者の主観的時間を表すため、個人差が出てくるのはおかしくないからで

[140] 「予期」解釈のみに当てはまる説明である。

ある。それについて述べる前に、どのような相違点が存在しているかを理解するために以下に「もう」と「すでに」の定義[141]を挙げる。

【もう】
（時間・数量を示す語句の前に置いて）何かが成立することが十分に予想される場合に、その成立までに必要な時間や数量の程度が、指摘された量だけ残っている様子。

【すでに】
その時以前に起きたり、済んでしまったりして、かなり時間が経っている様子を表している。

本節では、「もう」を中心としてその副詞における意味を詳しく論じ、「すでに」に関しては節 5.6 において述べることとする。まず、これまで考察してきた例文とそれにおける解釈を簡潔にまとめていく。以下では、「完了」以外の二つの解釈に関してまとめていく。

【もう】
（137b）お父さんはもう来た　→　完了的用法　　→　想定よりはやく来た
（137a）お父さんはもう来た　→　アオリスト的用法　→　以前に少なくとも一回来たことがある

【もう＋2 年前に】
（139a）お父さんは 2 年前にもう来た　→　完了的　　→　*想定よりはやく来た
（139b）お父さんは 2 年前にもう来た　→　アオリスト的　→　2 年前に来たことがある

上記のまとめからわかるように、非文のはずである例（137a）が認められるが、それは「もう」における意味が変わることによるものである。つまり、「もう」は常に発話時に繋がっている副詞であるとは限らず、現在と関係のない文脈においても適用が可能である。このように、「2 年前に」のように過去を表す表現を追加しても非文として感じられないこととなる。それに対して、「来る」ことが想定よりはやく実現したという意味で非文として感じられるのは完了の「タ形」を用いた例文である。言うまでもなく、「2 年前に」とその意味で用いた「もう」が対立するからである。

以上のことから次のことがわかる。まず、「もう」には二つの「副次的意味」があるということであり、それらは「経験」、つまり「以前に少なくとも 1 回は～したことがある」と「出来事の実現が想定より早い」という解釈である。ただし、以下で論じるように、その区別は動詞の性質によるものでもあると言える。なぜなら、上記の例文において用いられているのは「来る」という動詞であり、その場合には「以前に少なくとも 1 回は来たことがある」という解釈と「想定していたより早く来た」という二つの解釈が両方可能であるが、これは「来る」が「反復可能動詞」であるからである。これまで挙げてきた例文において用いられた動詞はすべて「反復可能動詞」であるが、それとは異なり、次節で述べるように、「亡くなる」のような動詞の場合、「もう」は「経験」と「反復」の意味を伴うことがなく[142]、「1 回限りの動作」を表す動詞であるため、可能となる解釈は一つのみである。故に、「もう来た」と「もう亡くなった」における「もう」の意味が同じではないという結論に至る。要するに、

（137a）お父さんはもう来た

の場合、「来たことがある」と「想定より早く来た」の両方の解釈が可能であるが、それに対して、

（141）お父さんはもう亡くなった

[141] 類語大辞典（講談社）から引用したものである。
[142] 「亡くなったことがある」とは言えないため、「経験」という解釈は不可能である。

の場合、「経験」の解釈が不可能であるということとなる。この点に関しては次節において論じていく。

5.4 副詞と動詞の共起における制約について

本節では、日本語における副詞と動詞の係り受けに関する副詞の属性と動詞の属性に着目し、その係り受け制約について観察していく。具体的には、副詞「もう」および「すでに」[143]と動詞の性質および形式との共起に関して説明することを目的とし、「二年前に」などのように明確に過去時を表す副詞を含めるケースも対象としている。本章では副詞「もう」と「すでに」の用法とその解釈に関して、母語話者は何を基準として使い分けているのか、何を基準として解釈しているのか、また用法においてどのような制限があるのかという疑問点に関して以下で論じていくが、本節は主に次の二点を明らかにすることを目的としている。

(a) 動詞の性質により制限があるか否か
(b) 「もう」と「すでに」の用法において相違点があるか否か

これまで見てきた例文に基づくと次のことが言える。まず、(a) と (b) に関しては、動詞の性質が大きな影響を与え、その性質により解釈が変わるとわかった。つまり、当該動詞の「反復性」によって可能となる解釈が異なるが、反復可能な動詞とは異なり、反復不可能な動詞において解釈できるのは「予期」のみである。また、(b) に関しては、「もう」と「すでに」のあいだには相違点があるとわかり、置き換えられる場合と置き換えられない場合もある。この点に関しては節 5.6 において述べられる。以下に、まず (a) について詳しく説明していく。

5.4.1 動詞の性質により制限があるか否か

周知のように、複数の意味を可能とする副詞が多く、本論では「もう」が取り上げられている。「もう」の場合、例えば「もう忘れてしまった」のように、「もはや」「すでに」の意味で使われる場合と、「もう来るでしょう」のように「間もなく」「やがて」の意味で使われる場合がある。このような場合、副詞の意味の相違によって制約条件が異なってくるため、副詞の意味が決まらない場合、どの意味の係受け制約条件を適用するかの判定は困難である。「まだ」「もう・すでに」に関しては仁田 (2002:255) では次のように説明され、以下の例文が挙げられている。

「これらは、事態の起動への時間量を表すわけではないが、これらには、想定された事態が存在し、その想定事態との関係において当該事態が描き出されている」

(142) 陽はもう落ちているが相模湾はまだ明るい。

これには、「まだ」「もう」の両方が用いられ、両者の相違を一例で見ることのできるものであるが、本論で対象となっているのは、「もう」と「まだ」における対立ではなく、「もう」と「すでに」における対立である。このため、「まだ」における用法に関しては述べないこととする。上記の例文において、「もう」は「陽が落ちていない」事態を想定していたのに対し、当該事態はそれを通り越したその後の事態であることを表していると説明されている。すなわち、「もう」は、当該事態を想定事態との関係において、時間の展開の中にあり、その後に出現する事態として捉えている。こういった説明は「もう」の様々な用法において有効であると仁田 (2005) は述べている。ただし、制約があり、「もう」の適用が認められない場合もあり、それ

[143]「すでに」の用法に関しては、第 5.6 を参照。

は「生まれる」のように永遠に変わらないことを表す場合である。説明として以下の例文[144]が挙げられている。

（143）*彼はもう日本生まれだ。

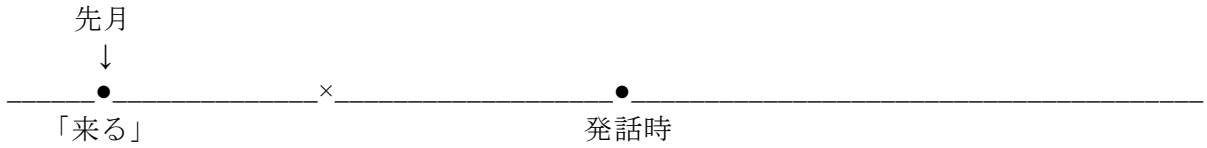
当然のように生まれは、生まれついてしまえば、永遠に変わることがない。よって、「もう」の適用が不可能となる。しかし、本論の目的は過去における事態と副詞の共起について観察することであるため、上記の例文は対象とならない。以下では過去に起こった出来事のみを分析し、その後に動詞の性質による分析に進む。

5.4.2 過去時を指示する副詞の解釈について

すでにこれまでの節において述べたように、「もう」における一つの適用は、質疑応答で用いられる場合、話者は質問に対する応答文を選択するために事実時間以外の設定時間を必要とし、その時間設定の幅が広いか狭いかに関わらず、当該の事態がその時間設定内に実現するか否かということによる適用であるが、以下の例文からもわかるように、その時間的な幅を指示する副詞と指示しない副詞が存在している。

・　明確に過去時を指示する副詞

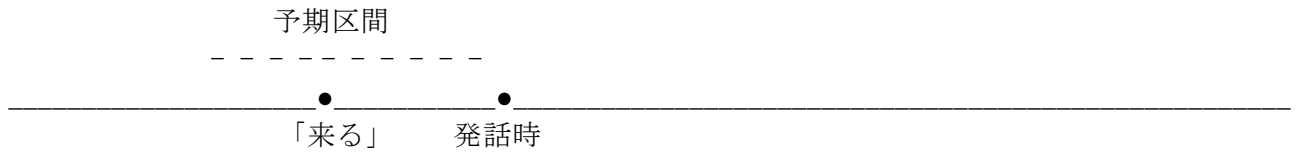
(144a) お父さんは先月来た　→　過去　　（「先月」・「2 年前に」など）



以上の例文において「先月」が用いられ、この副詞は「過去解釈」を求める副詞である。すなわち、「過去にこのような出来事があった」という解釈となり、発話時とは無関係であることを表している。それに対して、以下の例文においては明確に過去時を指示する副詞が用いられず、「完了解釈」を求める副詞が用いられている。

・　明確に過去時を指示しない副詞　（話し手と聞き手のあいだの理解）

(144b)＝（137b） お父さんはもう来た　→　完了



すでに述べたように、以上の例文においては「もう」が用いられ、この副詞は一般的に「完了解釈」を求める副詞であるため、「発話時までに出来事が実現済み」という解釈となる。よって、前者とは異なり、発話時点と関係のある用法であると言える。本論では、話者により設定された時間的な幅を「予期区間」と呼び、この場合には当該事態がその幅内において実現している

[144] 仁田（2005:256）を参照。

ため、「もう」の適用が認められると言える。以上の説明は「予期区間内」の解釈を説明するが、それは一つの解釈にすぎない。なぜなら、すでに言及したように、本論において対象となっている解釈がもう一つあり、それは「経験」と規定した解釈である。

(144c)＝（137a）　お父さんはもう来た　→　過去

上記の例文は「以前に少なくとも 1 回は来たことがある」という解釈となり、過去時に起こった出来事として解釈される。しかし、明確に過去時を指示する副詞が現れていないため、「過去解釈」であるか「完了解釈」であるかという区別が曖昧である場合が多い。その際、話者は何を基準として使い分けているのか、何を基準として解釈しているのかという疑問が生じてくる。また、用法において制限があるのか否か、あった場合、どのような制限があるのかという疑問点も生じてくる。その点に関して述べる前に上記のことを以下のようにまとめることができる。

表 12.【「もう＋タ形」における「副次的」解釈】

「もう＋タ形」
- ↗ 完了的用法　→「予期より早い」（予期）
- ↘ 過去的用法　→「以前に少なくとも 1 回は～したことがある」（経験）[145]

5.4.3 動詞の「反復性」と「前提」における制約

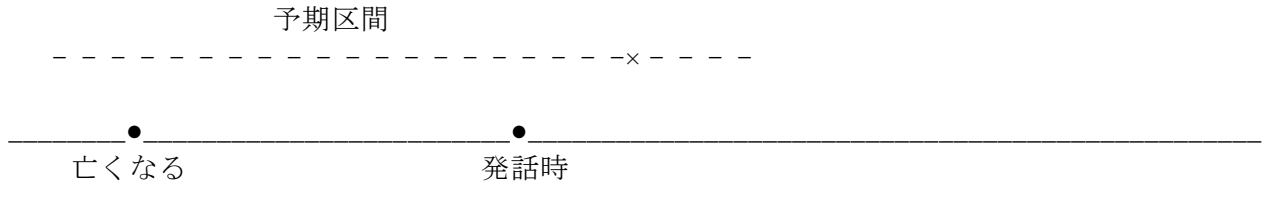
他の言語の場合、時制の適用によって解釈が異なってくるということがあるが、日本語における「タ形」は二重性をもつ時制であるため、その解釈の区別は複雑である。他の言語と同様に、日本語においても時制によって副詞の解釈が異なってくるか否かという点に関して以下に説明していく[146]。最初に、例(137a)と(137b)を再び挙げる。

（145a）／（145b）＝（137a)／(137b)　お父さんはもう来た　→　過去／完了

すでに述べたように、二つの意味的解釈が可能であるが、その解釈に至るメカニズムはどのようなものであるかを以下で観察する。例(145b)における「もう」はなぜ「予期より早く」という意味となるのか、またなぜそれとは異なり例(145a)における「もう」は「以前に少なくとも 1 回は～したことがある」という意味となるのかに対して説明を以前の節においてした。会話や文章の流れによるものではあるが、詳しく分析してみると動詞の性質による客観的な要素と主観的な要素も関係していると言える。ただし、すべての「もう＋過去的用法タ形」は常に「経験」解釈を可能とするとは限らないことに注意すべきである。以下に「来る」の代わりに「亡くなる」と「卒業する」という動詞を適用することとする。この適用により解釈に対してどのような相違が現れるかを見ていく。最初に「反復不可能動詞」を用いた例文を挙げる。

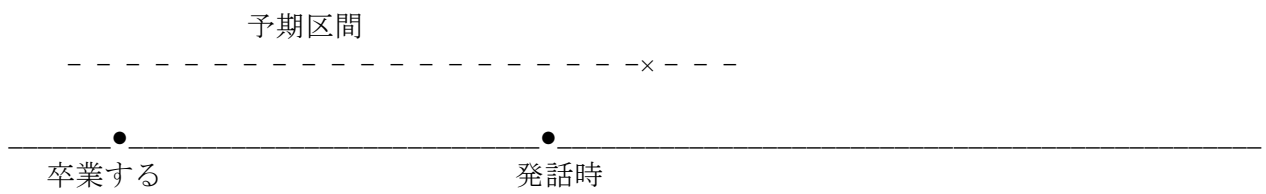
[145] 後述のように、動詞の性質によりその解釈が不可能になる場合がある。
[146] イタリア語においては副詞「già（もう）」の解釈が時制によって変わる。遠過去形が用いられた場合、可能となる解釈は「以前に少なくとも 1 回その出来事があった」のみであり、「想定よりはやく」という解釈は完全に不可能である。なぜなら、完了的な時制ではないからである。それに対して、近過去形を用いた場合、「想定よりはやく」という解釈も可能となる。

（146）＝（141）お父さんはもう亡くなった　→　反復不可[147]



これまでの説明に従うと、例（146）における「もう」は二つの意味を可能とするはずであるが、可能な解釈はただ一つであり、それは「想定よりはやく」という解釈である。なぜなら「以前に少なくとも 1 回〜したことがある」（経験）という解釈をもたらす出来事は「〜したことがある」という意味になるからであるが、「亡くなる」という出来事はその解釈を認める出来事ではないからである。よって、ここでは次のことが言える。解釈を選択するには当該事態の**「反復性」**が大きな役割を果たしているということである。すなわち、その事態は「来る」や「食べる」などのような「反復可能動詞」であれば二つの解釈か可能であるのに対して、その事態は「亡くなる」のような「反復不可能動詞」であれば解釈できるのは「想定よりはやい」のみとなる。しかし、「反復可」「反復不可」という区別にはもうひとつの区別を追加すべきであると本章で提案する。それは両方の解釈を可能とする動詞であり、例として挙げられるのは「卒業する」のような動詞である。これは以上の区別とは異なり、客観的な判断によるものではなく、主観的な判断によるものである。以下の例文を参考にしよう。

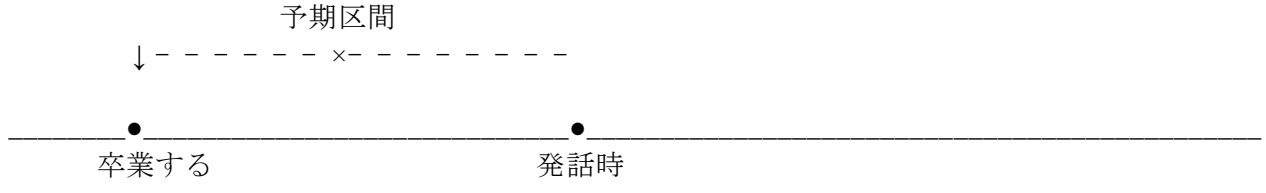
（147a）息子はもう卒業した　→　「反復不可」であるはず



通常、「卒業する」というのは「亡くなる」と同様に 1 回のみの事象として解釈されるため、例（147a）における解釈も「想定よりはやい」のはずであるが、以下で論じるように、必ずしもそうであるとは限らない。例えば、例文（147b）を考察すると、「卒業する」というのは場合に応じて「反復可」の動詞の枠に含まれることも可能であると言える。

（147b）息子はもう卒業した
（これから専攻を変えてまた入学することにした。二年後にまた卒業する）

例（147b）の場合、話者は「もう一度卒業する」という**「前提」**で話しているため、解釈は異なってくる。以下の図で説明ができる。



[147] 本論において「反復」というのは複数の事象の「繰り返し」の意味で用いるのではなく、その動詞によって表される単一の事象の繰り返しが客観的に可能であるか否かという意味で用いることとする。

上記の例文からわかるように、「卒業する」というのは必ず 1 回のみの事態として扱う事態ではないため、「もう」における解釈が一つのみではなく、二つである。「もう」の解釈を選択する、または理解するために、動詞の**「反復性」**が大きな役割を果たしていることは以前にも述べたが、それのみではなく、他にも関係しているものがある。それは話者による**「前提」**である。その前提は解釈の基準点となり、それに合わせて話者は副詞の意味を使い分けているということが言える。

以上のことを基準とし、これまで考察した動詞の代表として「来る」「亡くなる」「卒業する」を取り上げ、どのような解釈が可能となるかをまとめていく。そのため、以下では「もう＋タ形」の共起を表す例文を挙げながらそれに対応する解釈をまとめていく。

【反復可能動詞】
(148) お父さんはもう来た
　　○ 来たことがある
　　○ 想定よりはやく来た

【反復不可能動詞】
(149) お父さんはもう亡くなった
　　× 亡くなったことがある
　　○ 想定よりはやく亡くなった

【前提による反復可能動詞】
(150) 息子はもう卒業した
　　○ 卒業したことがある
　　○ 想定よりはやく卒業した

以上のことからわかるように、「もう」における解釈はその意味と動詞の性質のみによるもののみではなく、話者の前提にもよるものであり、客観的な判断と主観的な判断の区別もしなくてはならない。すなわち、基準となる前提が同じではないため、生じる解釈も同じではない。このように、解釈レベルがずれていると言ってもよい。

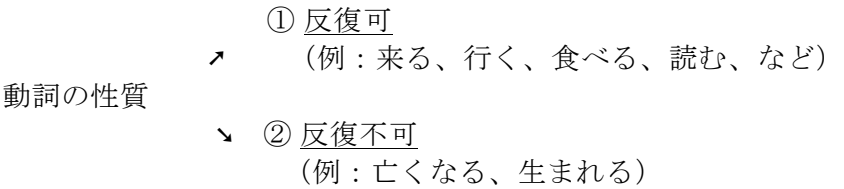
以下では、以上に言及した「反復性」をより詳しく分析し、それに基づいた動詞の分類に関してもより詳しく見ていく。説明として以下の例文が挙げられるが、副次的解釈により分けることとした。

【経験】（以前に少なくとも一回～したことがある）
(151)息子はもうディズニーランドに行った　→　行ったことがある
(152)息子はもう亡くなった　→　*亡くなったことがある

【予期】（予期より早く実現した）
(153)息子はもうディズニーランドに行った　→　思っていたより早く出発した
(154)息子はもう亡くなった　→　思っていたより早く亡くなった

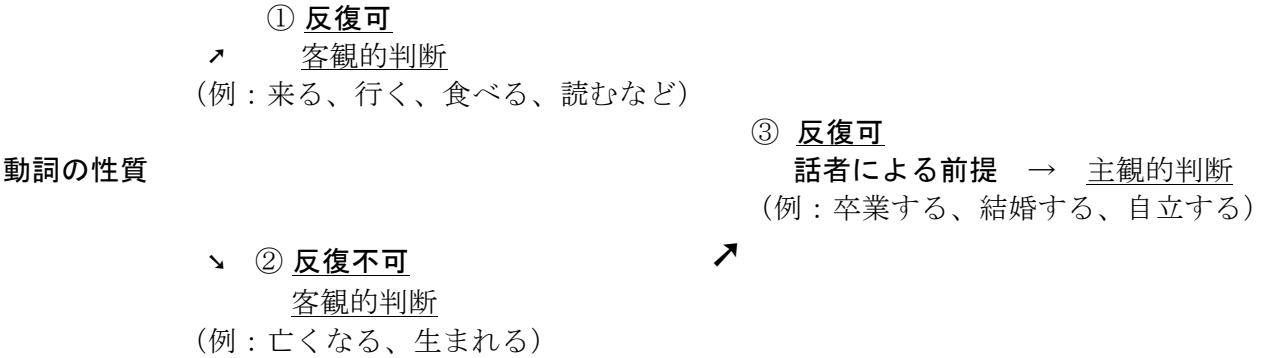
このように、改めて解釈を選択するには当該事態の「反復性」が大きな役割を果たしていることが明らかになる。簡潔にまとめると以下のことが言える。当該事態は「来る」や「行く」や「食べる」などのような「反復可能動詞」である場合、二つの解釈が可能となるが、その事態は「亡くなる」のような「反復不可能動詞」である場合、不可能となる解釈は「想定より早く」のみである。次の図でまとめることができる。

図 23.　「反復性」をもとにした動詞の分類



従って、「もう」の解釈を選択するまたは理解するために、動詞の反復性は大きな役割を果たしていると言えるが、すでに言及したように、それをもとにして全ての動詞に対する解釈を説明することはできない。上記の分類はより客観的な視点から分類されたものであるが、「反復性」以外には、前述のように、他のものも関係している。それは主観的なものである話者による「前提」である。その前提に合わせて話者は副詞の意味を使い分けていると言える。では、以上の図をもとにし、以下に「前提」を基準とする分類を紹介する。

図 24. 話者による前提をもとにした動詞の分類



上記の図からわかるように、「卒業する」のような動詞は、「亡くなる」とは異なり、「1 回のみの事態」として必ず扱われる事態ではないため、「もう」における解釈には二つの可能性がある。このように、二重性を持つ動詞の場合、決定的になるのは話者の前提であると言える。例（147b）の場合、話者は「もう一度卒業する」という前提で話しているため、例（147a）における「もう」の解釈とは異なる。なぜなら、例（147b）の場合、話者は「想定より早く」という前提で話しているからである。このことからわかるように、「前提」は解釈の基準となり、それに合わせて話者は副詞の意味を使い分けているということが言える。よって、基準となる前提が同じではないため、生じる解釈も同じではないという結論になる。

5.5「もう」と「すでに」の適用について

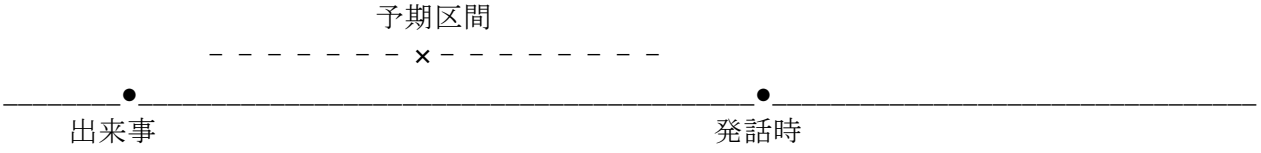
副詞の用法とその解釈に関して、母語話者は何を基準として使い分けているのか、何を基準として解釈しているのか、また用法においてどのような制限があるのかという疑問に対して説明をしてきた。以下では、「もう」と「すでに」の用法において相違点があるか否かという点に関して述べていく。

まず、完全には類義語でない「もう」と「すでに」における意味の相違に関して述べるべきである。前節における定義からわかるように、前者はすでに過ぎてしまった状態である様子を表し、つまり現時点で「そうである」ということを表すのに対し、後者はその時以前に起きたり、済んでしまったりして、かなり時間が経っている様子を表し、つまりその状態や動きが「以前」であることを表していると言ってもよい。このように、意味における相違は細かいが、「基準時」が同じではないという点がより重要である。

これまで、「もう」の適用を中心としてその解釈は動詞における性質と話者による前提から生まれると述べたが、ここでは「すでに」もそれと同様に、「完了」以外の二つの解釈も可能とするか否かという疑問が生じる。前節で述べたように、「もう」が用いられると話者が思い浮かべるのは「予想」「想定」または「対比」のようであるが、それに対して、「すでに」が用いられると単なる過去の出来事として解釈されるようである。よって、再び図で表すと以下のようになる。

「もう」

「すでに」



以上の図からもわかるように、「すでに」を用いた場合とは異なり、「もう」を用いた場合、「予期区間」の概念が必要とされる。なぜなら、「想定より早く」という対比解釈となるため、時間の幅の設定が必要となるからである。それに対し、「すでに」を用いた場合、予期区間が無関係であり、単なる過去における出来事のように解釈されるようである。「すでに」の用法に関して述べるために、参考のため、前節において挙げた例文を基本にし、「もう」の代わりに「すでに」を適用した場合、どんな共通点と相違点があるかについて考察する。

【経験】（以前に少なくとも一回～したことがある）
(155) 息子はすでにディズニーランドに行った　→　行ったことがある
(156) 息子はすでに亡くなった　→　*亡くなったことがある

【予期区間内】（*～想定より早く実現した）
(157) 息子はすでにディズニーランドに行った　→　*思っていたより早く出発した
(158) 息子はすでに亡くなった　→　*思っていたより早く亡くなった

例（155）においては「すでに」の適用が認められるが、以下では例（157）においても認められるか否かを見ていく。これまでの説明通り、「すでに」が用いられる時点で、「想定よりはや

く」という解釈が不可能であるということになる[148]。また、すでにみたように、話者がどの前提で話すかということにより「もう」の意味が異なってくるが、「すでに」の場合においても話者による前提が大きな役割を果たしているかという疑問も生じるが、この点に関しては後述する。

5.6 「タ形」との共起についてのまとめ

本節では、「もう」と「すでに」における用法とその解釈を比較し、「タ形」との共起はどのようなものであるのかに関してまとめていく。すでに述べたように、「タ形」に関しては議論があり、それは「タ形」における二重性を認めるか否かという議論である。寺村（1984）が提案するように、この問題に関しては否定形との関係から「タ形」には二つの意味があることがわかり、その意味は「過去」と「完了」である。しかし、この点に関しても様々な意見があり、それについてはすでに第一章で述べたが、本論は寺村の主張に基づくこととする。

また、副詞に関しては、周知のように、「もう」と「すでに」は複数の解釈[149]を可能とする副詞であるが、さきに述べたように、過去時制との共起の場合、「もう」は「完了」以外に他の二つの解釈も可能とするため、三つの解釈に分ける必要がある。それは、すでに節 5.1 において述べたように、基本的には、日本語の「もう・すでに」は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという「完了」の意味をもち、その状態の移行があるのが前提として認められている。すなわち、「もう」においても「すでに」においても「完了」という解釈が基本的にある。以下に、前述の例文（151）～（154）を基本とし、「もう」の代わりに「すでに」を適用すると、どのような共通点または相違点があるか、またどのような解釈が可能または不可能となるかについて考察する。上記のことをまとめると以下のようになる。

【もう】

・基本的解釈

①「完了」（発話時以前に完結し、発話時と関係性があるた出来事）

（159a）息子はもうディズニーランドに行った　→　発話時以前に完結した出来事

（159b）息子はもう亡くなった　→　発話時以前に完結した出来事

・副次的解釈

②「経験」（以前に少なくとも一回～したことがある）

（160a）＝ 息子はもうディズニーランドに行った　→　行ったことがある

（160b）＝ 息子はもう亡くなった　→　*亡くなったことがある

③「予期区間内」（～想定より早く実現した）

（161a）＝ 息子はもうディズニーランドに行った　→　思っていたより早く出発した

（161b）＝ 息子はもう亡くなった　→　思っていたより早く亡くなった

【すでに】

・基本的解釈

①「完了」（発話時以前に完結し、発話時と関係性がある出来事）

（162a）息子はすでにディズニーランドに行った　→　発話時以前に完結した出来事

（162b）息子はすでに亡くなった　→　発話時以前に完結した出来事

---

[148] 口語文と文語文の区別をする必要もあり、例（126）においては「すでに」が含まれているため、口語文ではあまり用いられない文であるが、用いられたとしても「思っていたより早く出発した」という意味で発言される文ではないと考えてもよいだろう。

[149] 本章の最初のところに挙げた定義とそれに対応する例文を参照。

・副次的解釈

②「経験」（～したことがある）

（163a）息子はすでにディズニーランドに行った　→　行ったことがある

（163b）息子はすでに亡くなった　→　*亡くなったことがある

上記のように、「すでに」を用いたことにより「想定より早く」という解釈が不可能となる。本章のはじめに述べたように、「完了」というのは「基準時以前に動作や出来事が完結している」ということを表し、「すでに」を用いた場合その解釈が強いということが言える。上記のことを次のようにまとめることもできる。

【もう】と【すでに】における可能な解釈

「もう」　→「完了」　↗「予期」／↘「経験」

「すでに」→「完了」　↗＊「予期」／↘　「経験」

5.7 まとめ

本章において中心となったのは、過去を表す時制形式と副詞の共起の問題であるが、先行研究とは異なり、取り上げたのは「もう／すでに・まだ」の対立ではなく、「もう・すでに」の対立である。なぜなら、置き換えられる場合と置き換えられない場合があるからであり、本章ではその区別をすべきであると主張した。

最初に、「もう」に関しては次のことが明らかになったと言える。基本的には、日本語の「もう」は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという完了の意味を持ち、その状態の移行があることが全体として認められているが、それに加えてもう二つの意識も働いているとわかった。それは、まず状態の変化が起こるのが早いと感じる心理である。つまり、「想定より早く」という解釈が可能である。二つ目は「経験」の解釈であり、「以前に少なくとも一回～したことがある」という解釈である。その区別は基本的に、時制形式によるものであるが、「タ形」を「過去」として解釈すると「もう」の意味が変化し、「想定より早く」の解釈がなくなり、「経験」の解釈になるということを述べた。こういった二つの解釈は可能であるが、その解釈に至るメカニズムはどのようなメカニズムであるかということを考察し、結果として次のことがわかった。動詞の「反復性」により「もう」の解釈が変わるため、動詞を「反復可」と「反復不可」の二分類に分ける必要があり、「反復可能動詞」においてはこの二つの解釈が可能になるのに対して、「反復不可能動詞」においては「想定より早く」という解釈しか可能にならない。それに加えて、もう一つの分類を導入すべきであり、それは話者の前提によって「反復性」が変わるという動詞を含む分類である。この分類に属している動詞の解釈は話者の前提によるものであるため、主観的な判断に基づいているものであると言える。

最後に、「もう」と「すでに」の意味と用法に関し次のことが明らかになった。後者は前者とは異なり、話者の設定時間である「予期区間」を必要としないことである。なぜなら、「すでに」が用いられると単なる過去の出来事として解釈される傾向があるからである。そのため、「もう」が可能とする副次的解釈と「すでに」が可能とする副次的解釈が同じではなく、「すでに」は「予期」の解釈を可能としない。そのため二つの解釈しか認めないのである。それに対し、「もう」は三つの解釈を可能とするという相違点があるとわかった。

5.8 イタリア語の「già」と「ormai」における対立について

日本語と同様に、イタリア語においても従来、「già（もう）」と「ancora（まだ）」における対立を中心とした研究が多く、「già」と「ormai」の対立に関する研究は非常に少ない。本節は「già」と「ormai」における共通点と相違点を明らかにすることを目的としている。大まかに言うと、前者と後者はそれぞれ日本語の「もう」と「すでに」に対応する副詞であるが、後述するように、この対応は常に認められるものではない。なぜなら、イタリア語の「ormai」は日本語の「すでに」が認めない用法を可能とするからである。また、イタリア語の「già」と「ormai」にも、日本語の「もう」と「すでに」と同様に、類義語として用いられる場合と用いられない場合があり、その用法とそれに関する制約などを明らかにすることも本節の目的である。本節ではBertinetto（1994）、Ribotta（1998）と Manzotti&Zampese（2010）による先行研究を参考にすることとする。

イタリア語の場合、「già」も「ormai」も存在しているが、両者の存在を認めない言語もある。つまり、「già」に相当する表現のみあるいは「ormai」に相当する表現のみを認める言語があるわけである。両者の表現を認める言語としてイタリア語とフランス語が挙げられ、それに対してどちらかの表現しか認めない言語としてスペイン語、ドイツ語、英語とフィンランド語が挙げられる。特に、「ormai」に相当する表現を認める言語が少ないようである[150]。

以下ではこの二つの副詞における用法と解釈について詳しく述べていくが、次節において説明するように、副詞と時制形式の組み合わせが決まっているため、テンスとアスペクトに関しても言及しなくてはならない。当該副詞の場合、「完成相」を表す時制（tempi perfettivi）と「未完成相」を表す時制（tempi imperfettivi）との共起が認められているが、用いられている時制によりその副詞における意味が異なるということに注意すべきである。さらに、完成相に関しては制約があり、完成相を表す時制の選択によりその解釈が異なる場合もある。そのため、時制形式が表すアスペクトに基づいた分析が必要である。この点に関しては次節において説明するが、最初に「già」における用法について述べ、そして「完成相」と「未完成相」を表す時制を用いた例文を挙げていく。次節では、「大過去形」と「半過去形」を用いた例文も扱うこととするが、この時制の用法との解釈などに関しては第七章と第八章において述べられている。そのため、以降の節では簡潔な説明にとどめることとする。

5.8.1 「già」の用法とその解釈について

最初に、「già」と過去時制の共起に関する相違点について述べる前に、その定義とそれに対応する例文を挙げていく。

“GIA’ indica un evento compiuto, un tempo che ormai è giunto a compimento”[151]
（「già」は完了した事態、すでに完成している時間を表す）

（164）Le decisioni sono già state prese
（もう決心した）
（165）Sono già le 10 e mezzo. A momenti sarà qui il Direttore
（もう 10 時半だ。社長がもう来るでしょう）

上記の例文における解釈は定義に従う解釈であるが、様々な例文を挙げていくとその解釈が複雑になり、ある制約があるとわかる。まず、アスペクトの視点から説明すべきである。すでに述べたように、「già」は完成相と未完成相を表す時制との共起ができる副詞であるため、その用法を表す例文を挙げていく[152]。

[150] Bertinetto（1994）を参照。
[151] Serianni（2010：498）による定義である。
[152] Bertinetto（1994：791）を参照。

【未完成相（半過去形）】

（166）Piero mangiava già da mezzora　　→ aspetto progressivo（進行的アスペクト）[153]
（ピエロは三十分前からもう食べていた）

【完成相（大過去形・近過去形）】

（167）Piero aveva mangiato già da mezzora[154]　　→ aspetto compiuto（完了的アスペクト）
（ピエロは三十分前からもう食べていた）

（168）Piero ha mangiato già da mezzora　　→ aspetto compiuto（完了的アスペクト）
（ピエロは三十分前からもう食べていた）

以上の例（166）においては「未完成相」を代表とする imperfetto progressivo（進行的半過去形）が用いられるのに対して、例（167）においては「完成相」を代表とする piuccheperfetto（大過去形）が用いられる。この例文から明らかであるように、副詞「già」は両者の時制とも共起ができるが、実際に分析してみると解釈に関する制約もあることがわかる。これらの例文においてどのような相違点が存在しているかを見ていく。

まず、例（166）と（167）における相違点として挙げられるのは焦点であると言える。なぜなら、前者の場合、動作の開始点に焦点が定まっているのに対して、後者の場合、焦点が動作の終了点に定まっていると明らかであるからである。すなわち、例（166）における「già」は「食べる」という動作がいつ始まったかという点に焦点を当てるが、例（167）における「già」はそれとは異なり、「食べる」という動作がいつ終わったかという点に焦点を当てる。このように、以上の例文における「già」は同じ副詞であるにも関わらず時制により異なっている解釈を求める例文であることが明らかである。以下のようにまとめることができる。

・**「未完成相」**の文脈における「già」は当該動作の開始点に焦点を当てる[155]。
（166）Piero mangiava già da mezzora　　→　半過去形

・**「完成相」**の文脈における「già」は当該動作の終了点に焦点を当てる。
（167）Piero aveva mangiato già da mezzora　→　大過去形
（168）Piero ha mangiato già da mezzora　　→　近過去形

ただし、Bertinetto（1994）も述べているように、以上のまとめは不十分であるためより詳しい分析が必要である[156]。上記で相違点として挙げたのは「焦点」による相違点であり、それは用いられた時制が「未完成相」を表す時制であるか「完成相」を表す時制であるかによるものである。前者の場合、当該事態が予想より早く開始するという意味である。さらに、話者にとって重要である時点において、例えば「見たとき」にその事態がまだ進行中であるということがこの用法の特徴である。半過去形を用いた例（166）はこの説明にふさわしい例文である。それとは異なり、大過去形と近過去形を用いた例（167）と（168）は以上の説明に従う例文ではない。なぜなら、当該動作はすでに終了し、進行中としての解釈が不可能であるからである。Bertinetto（1986:196）は「完成相」を表す時制と「già」の共起に関して以下のように説明している。

“Non si indica come coi tempi imperfettivi che l’inizio dell’evento si è verificato precocemente rispetto al momento su cui viene fissata l’attenzione, bensì che la fine dell’evento medesimo si è precocemente verificata rispetto al MR prescelto”.

---

[153]「進行的アスペクト」に関しては第七章を参照。
[154]「da（～前から）」の適用に関しては、第一章を参照。
[155] 言うまでもなく、「未完成」の場合には動作が終了していない。そのため、動作の「終了点」には焦点を当てることが不可能である。
[156] Bertinetto（1994）ではアスペクトによる説明がなされているが、動詞の性質によるものであることも考えられる。なぜなら、例（166）において「usciva（出かけていた）」を用いると非文となるが、それに対して例（167）において「aveva mangiato（食べていた）」を用いると非文とならないからである。

当該動作の開始が設定されている時点より早く実現したということに焦点を当てる「未完成相」を表す時制とは異なり、「完成相」を表す時制はその動作の終了が話者が選択した「設定時点」より早く実現したということに焦点を当てる。

上記の説明より「tempi perfettivi」または「tempi imperfettivi」と「già」の共起に関する相違点が明らかになるが、それ以外の区別も必要であると本節において主張する。まず、以下の例（169a, b, c）を参考にしよう。

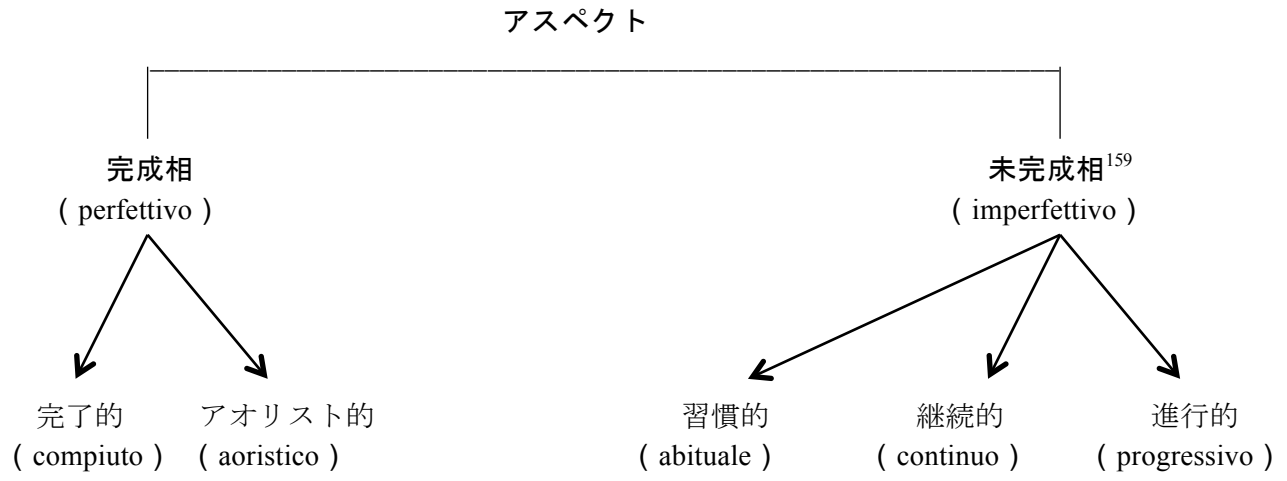
【Tempi Perfettivi（完成相を表す時制）】

（169a）Piero ha già dormito	（ピエロはもう寝た）	→	近過去形
（169b）Piero aveva già dormito	（ピエロはもう寝ていた）	→	大過去形
（169c）Piero dormì già	（ピエロはもう寝た）	→	遠過去形

上記の例文は「完成相」を表す時制を用いている三つの例文であり、それぞれは近過去形、大過去形と遠過去形を用いている。よって、上記の説明に基づくと「già」は動作の終了点に焦点を当てているはずであり、さらにその終了が設定時点よりはやく実現したという解釈になるはずである。しかし、例（a）（b）（c）は同じ解釈を求める例文ではなく、例（169c）における解釈と例（169a）・（169b）における解釈は同じではないことに注意すべきである。例（169a）と（169b）は「動作が設定時点より早く実現した」という解釈を可能とするが、それとは異なり、例（169c）は「経験」の解釈のみを可能とすると言える。つまり、日本語の場合と同様に、この場合の「già」における意味を考え直す必要があり、「以前に少なくとも 1 回～したことがある」という解釈しか可能とならない。ここで、なぜ「完成相」を表す時制であるのに「遠過去形」における解釈が同じではないかという疑問が生じる。[157]

すでに述べたように、時間を表す副詞に関して述べる際にはアスペクトの視点からも述べなくてはならない。このため、以下ではイタリア語のアスペクトに関して簡潔に説明する。その説明からなぜ単純時制と複合時制による解釈が異なるかがわかる。

図 25. イタリア語のアスペクト[158]



---

[157] 以前の章において述べたように、日本語においても「タ形」は「経験」という解釈を求める時制であるが、それは「アオリスト的」用法を表す「タ形」に限る解釈である。
[158] Bertinetto (1986:119)
[159]「未完成相」に関しては第八章を参照。

以上の図からわかるように、イタリア語においても日本語と同様に、「完成相」と「未完成相」の区別がある。「完成相」は「完了的」と「アオリスト的」の二種類に分けられ、前者を表しているのは例（168a）と（168b）において用いられている近過去形と大過去形であるのに対して、後者を表しているのは例（168c）において用いられている遠過去形である。近過去形は二重性をもつ時制であるため「完了的」用法も「アオリスト的」用法も可能とする時制であるが、遠過去形は二重性をもつ時制ではないため「アオリスト的」用法しか認めない時制である。大過去形[160]はアスペクトの視点から見ると特別な時制であるが、一般的には「完成相」を表す時制として認められる。また、すでに述べたように、「完了的」用法を可能とするのは「複合時制」[161]のみであり、複合時制は必ず「設定時点」を求めるということがその特徴である。それとは異なり、「単純時制」である遠過去形は「アオリスト的」用法しか認めない。すなわち、「設定時点（MR[162]）」があるか否かということにより区別ができるわけである。よって、上記の定義に従うと「già+完成相」は「動作の終了が設定時点より早く実現したということに焦点を当てる」ということであるため、この説明は「複合時制」にしか適用ができないということになる。なぜなら、「単純時制」は設定時点を求める時制ではないからである。従って、「tempi perfettivi」の枠内において「複合時制」と「単純時制」の区別が必要となる。以下の図でまとめる。

【Tempi Perfettivi（完成相を表す時制）】

・複合時制　→　動作が設定時点より早く実現した　「予期」
（168a）Piero ha già dormito
（168b）Piero aveva già dormito

・単純時制　→　以前に少なくとも一回～したことがある　「経験」
（168c）Piero dormì già (例：qui due anni fa（ここに二年前に））

以上のように、日本語と同様に、イタリア語の「già」も「基本的解釈」以外に二つの「副次的解釈」を可能とする副詞である。後者の場合、「予期解釈」を可能とするのは複合時制のみであるのに対して、「経験解釈」を可能とするのは単純時制のみである。また、以上のことに関して二点を明確にする必要がある。一つ目は複合時制においても「経験」解釈が可能であるか否かという点であり、二つ目は単純時制の場合にはどの動詞でも適用ができるか否かという点である。まず、複合時制に関する疑問点、つまり単純時制のみではなく「2 anni fa（二年前に）」を追加すると複合時制もその共起を可能とするか否かという点に答えるために以下の例文を参考にしよう。

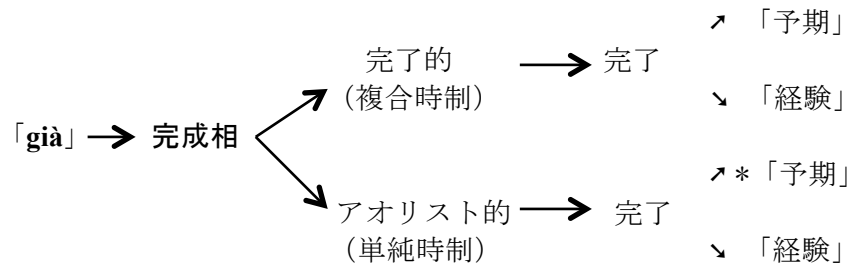
（170）Piero ha già dormito qui due anni fa[163]
（ピエロはもう二年前にここに泊まった）

例（170）からわかるように、複合時制である近過去形を用いても「経験」という解釈が可能である。ただし、これは近過去形がアオリスト的の場合に限っている。従って、複合時制は単純時制とは異なり、二つの解釈を可能とするということが言える。ただし、単純時制の場合、解釈が自動的に「経験」になるわけではなく、その解釈は動詞の性質によるものである。つまり、日本語の場合[164]と同様に、その動詞が反復を認める動詞でないとその文が非文になる。例（168c）において用いられている動詞は反復を可能とする動詞であるため、「già+遠過去形」は「経験」という解釈を可能とし、非文にはならないのである。

---

[160] 大過去形に関しては第七章を参照。
[161] 近過去形と大過去形と前未来形は複合時制である。
[162]「momento di riferimento」と呼ばれ、「MR」はその省略形である。
[163] 前節において挙げた「è già venuto」の適用も可能である。
[164] 前節を参照。

図 26. アスペクトによる「già」の解釈



上記の図からわかるように、「完成相」を表す時制を単純時制と複合時制に分ける必要があり、その区別により「もう」における解釈が異なるからである。日本語に関して述べたように、「もう（già）」には「基本的解釈」と「副次的解釈」があり、さらに後者は二種類に分けられる。ただし、すべての時制は常に両者の「副次的解釈」を可能とするとは限らないことも述べた。イタリア語においてもその区別が必要であるか否かという疑問が生じていたが、以上のことからわかるように、イタリア語においてもその区別が必要であるとわかる。

5.8.2 「ormai」の用法とその解釈について

本節では、イタリア語における時間を表す副詞「ormai」の用法とその解釈に関して述べていくが、まず、この副詞の語源に関する説明もすべきである。「ormai」は「ora」と「mai」[165]の二つの語により形成されている語であり、「mai」はラテン語の「magis」（より多く）に由来している。ラテン語ではこの語により持続と必然性というニュアンスが表現されるようである。

この副詞に相当する表現はすべての言語には存在しておらず、「già」と「ormai」の両者を認める言語は少ない。日本語においても「ormai」に相当する表現は存在していないが、場合により「すでに」で表現するときもある[166]。

周知のように、「ormai」と「già」のあいだには共通点が存在し、同じ用法を認める文脈が多いため対立している副詞として扱う先行研究が少ない。しかし、その類似は表面的なものであり、実際には相違点も多く、どちらかの用法しか認めない文脈もある。一般的には「ormai」における制約が多いため「già」の用法のほうが幅が広いとされているが、「ormai」においても特徴的な用法があるため、「ormai」における用法も幅が広いと言える。まず、「ormai」における定義とそれを表す例文を挙げていく。Serianni(2010：499)では以下のように説明されている。

“ORMAI indica un evento ormai giunto a maturazione (in molti usi è sinonimo di ‘già’)”
「ormai」は成熟した[167]事態を表す（già の類義語としての用法が多い）

（171）Hai 24 anni finiti. E’ormai tempo di lasciare le bizzarrie
（あなたは 24 才だ。もう幼い態度を取る時期ではない）

以上の定義と例文からわかるように、「ormai」は「già」と異なり、単なる完了した事態を表すのではなく、成熟した事態を表す副詞である。また、「ormai」において二つの特徴的な用法もあ

[165]「ora」と「mai」はそれぞれ「今」と「これまで一度も～したことない」または「決して～しない」という意味を表す副詞である。
[166] 本節においても場合により「すでに」で表現することとする。
[167] ここで「成熟した」というのはその事態がすでに完全に終了し、持続が不可能であるという意味である。

り、一つ目は事態に対する不可避性・あきらめのニュアンスを含む用法である。説明として以下の例文が挙げられる。

（172）Ormai è troppo tardi
（もう遅すぎる）

上記の例文において適用ができるのは「ormai」のみであり、「già」に置き換えることが不可能である。なぜなら、不可避性・あきらめのニュアンスを伝えることができるのは「ormai」のみであるからである。また、二つ目の特徴的な用法は事態の実現に対する即時性あるいは事態の実現に対する確信というニュアンスを表す用法である。説明として以下の例文が挙げられる。

（173a）Ormai hai vinto　　→　必ず未来的な用法
（あなたはもう勝つ）[168]

以上の例文は「già」の適用を可能とするが、ニュアンスに関しては相違が生じてくる。すなわち、「ormai」が用いられるとその事態に対する即時性が伝えられるが、それに対して「già」が用いられるとそのニュアンスが弱くなるという相違が生じると言える。さらに、「già」が用いられるとその事態は過去において実現した事態として解釈され得る。それとは異なり、「ormai」を用いると、過去の文脈として解釈されるために回数またはいつのことであるかということを表す表現の追加, 例えば「3 volte（三回）」などの追加が必要となる。

（173b）Hai già vinto　　→　必ずしも未来的な用法ではない
（あなたはもう勝った／勝つ）

また、以下の例文からわかるように、両者の副詞は同じニュアンスを伝えない副詞であり、それぞれに機能があるため同じ文において同時に現れることも可能である。例（173a）に「già」と「ormai」を同時に適用してみよう。

（173c）Ormai hai già vinto
（あなたはもうすでに勝った）

これまでのことからわかるように、本節の対象となっている副詞のあいだには共通点があるため類義語として用いられてもよいが、相違点も多い。例えば、「ormai」は「già」が可能としない用法を認めると明らかになった。そのため、個々に分析すべきである。以下では、共通点をもとにし、副詞の置き換えが可能であるか否か、また制約があるか否かについて説明していく。そのため、節 6. 1 において挙げられた例文を「ormai」に置き換えていく。

【完成相を表す時制】

・ già
（174a）Piero ha **già** dormito　　（近過去形）
（174b）Piero aveva **già** dormito　　（大過去形）
（174c）Piero **già** dormì　　（遠過去形）

・ ormai
（175a）Piero ha **ormai** dormito　　（近過去形）
（175b）Piero aveva **ormai** dormito　　（大過去形）
（175c）*Piero **ormai** dormì　　（遠過去形）

---

[168] この場合、日本語としては、「ほぼ、すでに勝ったに等しい」のような表現なら「タ形」の適用が可能となるが、単文でなくなる。

例（174a, b, c）と例（175a, b, c）を比べると、（c）の用法に関しては相違があることが明らかである。それは、「ormai」はアオリスト的な用法を表す遠過去形との共起を可能としない副詞であるということである。以下の例文からもわかるように動詞の本質・意味も関係なく、アオリスト的な文脈では「ormai」の適用が不可能[169]である。

（175）*Ormai vinse/arrivò/partì/esplose
（もう・すでに勝った／着いた／出発した／爆発した）

よって、「完成相」を表す時制の中で「ormai」と共起ができるのは「完了的」用法を表す時制のみである。すなわち、近過去形と大過去形との共起が可能であり、ormai ha vinto/aveva vinto, è arrivato/era arrivato, è partito/era partito, è esploso/era esploso は非文とならない。

以上、遠過去形の場合、副詞との共起において制約があることがわかり、その制約は二点にまとめることができる。まず、一つ目は「già」との共起に関する制約と、二つ目は「ormai」との共起における制約である。前者の場合、遠過去形は「già」とともに用いられると、「経験」という解釈のみが生じる。次に、後者の場合、遠過去形と「ormai」の共起が常に不可能であるということである。このように、「ormai」は「già」と異なり、「経験」という解釈を認める副詞ではないことも明らかになった。

最後に、「già」と「ormai」の用法における相違に関しては以下のようにまとめることができる。これまで見てきたように、その相違点が二つある。一つ目は、後者における不可避性・あきらめのニュアンスを可能とする点であるのに対して、二つ目はアオリスト的時制との共起が不可能であるという点であると言える。しかし、この二つの相違点以外にも他の相違点が存在しており、それは位置による相違点である。

5.9 副詞の位置について

これまで見てきたように、本章において対象となっている副詞の類似は単なる表面的なものであり、実際には用法に関する相違点が多い。本節では、副詞の位置による相違を対象としていく。後述のように、文の中における副詞の位置を変えてみると「ormai」と「già」のあいだに存在している相違点がより明らかになる。参考のため、以下の例文を挙げていく。

（176a）*Già, Piero mangiava da mezzora
（176b） Ormai, Piero mangiava da mezzora
（もう・すでに、ピエロは 30 分前から食べていた）

（177a）*Già, Piero era uscito da mezzora
（177b） Ormai, Piero era uscito da mezzora
（もう・すでに、ピエロは 30 分前から出かけていた）

上記の例文からわかるように、述語から切り離すことができるのは「ormai」のみであり、「già」は切り離すことができない副詞である。従って、前者は左側においても右側においても位置づけられうる。よって、Piero mangiava da mezzora, ormai と Piero era uscito da mezzora, ormai も認められる文である。言うまでもなく、文の中に位置づけることも可能であり、Piero, ormai, mangiava da mezzora と Piero, ormai, era uscito da mezzora も正しい文として認められる。先行研究では、この用法における「ormai」は「そのときに」という意味として扱われていることから、この副詞は「già」と異なっている副詞であるということが改めて明らかになる。なぜなら、「già」とは異なり、「ormai」はある時点[170]を直接明示することができるからである。よって、次の相違があると言える。「già」はある時間区間を明示する副詞であるのに対して、「ormai」はある時点を

[169] 遠過去形と「ormai」の共起は「ormai vinse così tante volte che non poteva dirne il numero con esattezza（何回優勝したか正確に言えないぐらい優勝の回数が多かった）」のような文ならば可能である。
[170] 過去または未来における時点という二つの可能性がある。

明示する副詞であるという相違がある。この「ormai」が表す時点が Bertinetto(1994:796)と Manzotti, Zampese(2010:8)では「punto prospettico」と呼ばれ、以下のように定義されている。本節では、「punto prospettico」のことを「観察時点」と呼ぶこととする。

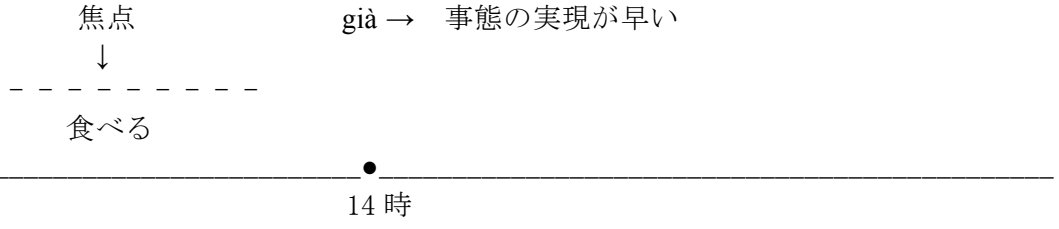
"Con questo termine si designano congiuntamente le nozioni di Istante di Focalizzazione e Momento di Riferimento. Il primo termine individua il Punto Prospettico specificamente implicato nel funzionamento dell'aspetto progressivo: ossia, l'istante da cui si osserva lo svolgersi dell'evento. Il momento di riferimento, invece, è caratteristicamente presupposto dai contesti esprimenti compiutezza, e designa il punto dal quale si osserva come ormai concluso l'evento"
この表現、つまり「観察時点」により「焦点瞬間」[171]と「設定時点」の概念がともに表される。前者は進行的アスペクトに含まれる「観察時点」のことを表し、つまり事態の進行が観察される瞬間のことを表す。それに対し、後者は完了性を表す文脈における特徴的なものであり、事態の完了が観察される時点を表す。

以前の節では、「ormai」は「瞬間副詞」と同じ本質をもっている副詞であると述べたが、それは正確であるか否かという疑問が生じてくる。まず、「観察視点」(「punto prospettico」)の概念を以下の例文に適用していく。下記のすべての例文において用いられている時制は「大過去形」である。

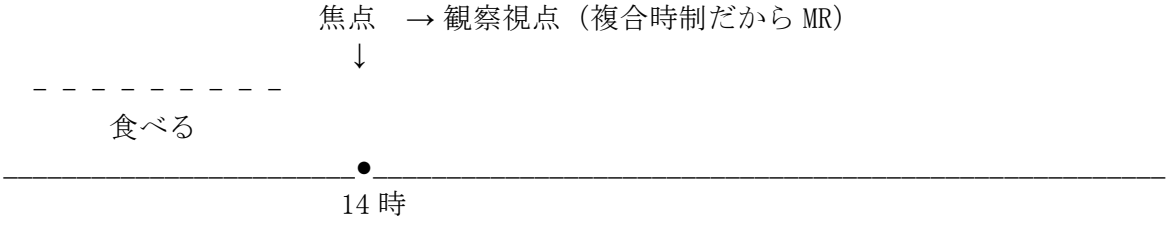
(178a) Erano le 14. Piero aveva già mangiato
(14 時だった。ピエロはもう食べていた)
(178b) Erano le 14. Piero aveva ormai mangiato
(14 時だった。ピエロはすでに食べていた)
(178c) Erano le 14. Ormai, Piero aveva mangiato
(14 時だった。すでに/もう、ピエロは食べていた)
(178d) Ormai, erano le 14. Piero aveva mangiato
(すでに/もう、14 時だった。ピエロは食べていた)

上記の例文は「già」と「ormai」の対立と「ormai」における様々な位置の可能性を表す例文である。以下の図で説明することができる。

【già】(178a)



【ormai】(178b, c, d)



[171] 本論では、「istante di focalizzazione」を「焦点瞬間」と呼ぶこととする。

上記の例（a）と（b）[172]では「già」と「ormai」が置き換えられるが、この類似は表面的なものである。その例文における共通点として挙げられるのは、「食べる」という動作は 14 時以前に起こった動作であるという点であるが、相違点もあり、それは「観察視点」に関する相違点である。以上の図から、「ormai」と「già」は文の時間的な意味に対して異なる観察視点から述べる副詞であることが明らかになる。前者は直接的に「観察視点」を明示するのに対して、後者はそれを明示しないという相違が挙げられる。この二つの副詞は異なる観察視点から事態を描写する副詞であるということが、同じ文において同時に両者の適用が認められることからもわかる。説明として以下の例文が挙げられる。

（179）Erano le 14. Ormai, Piero aveva già mangiato.
（14 時だった。ピエロはもうすでに食べていた）

しかし、以上の説明に対して議論が生じ、「ormai」を「瞬間副詞」として認めない立場もあり、それは Ribotta（1998）の立場である。Ribotta は「ormai」が「いつ」という疑問に対して答えにならないため、瞬間を表す副詞として扱うことができないと主張している。よって、「観察視点」を明示することもできないとしている。また、Ribotta は「ormai」の用法に関して以下の提案もしている。

・否定的な局面の存在
（180）Ormai Giovanna è americana
（ジョヴァンナはもうアメリカ人になったね）

・ある過程への挿入
（181）*Ha solo 10 mesi e sa ormai camminare
（10 ヶ月の子供なのにもう歩けるよ）

前者の場合、Giovanna は以前にアメリカ人ではなかったというのが前提であり、「ormai」はその状況がある過去の時点において変わったということを表している。それに対し、後者における「ormai」は長い過程を前提とし、その中にある事態が挿入されるということを表している。この副詞は短い期間を表す副詞とは対立するため当該例文が非文となる。

また、Ribotta により「ormai」の他の特徴的な用法が明らかになり、それはある事態における実現の可能性が失われるということを表す用法である。説明として以下の例文が挙げられる。

（182）－ Attento a non rompere il vaso
－ Spiacente. Ormai l’ho rotto
（花瓶を割らないように気をつけて）
（ごめんなさい。もう割った）

以上の例文では複合時制が用いられるため、その事態の実現の可能性が失われると Ribotta（1998）は説明している。つまり、花瓶をもう割ったため、これから割らないことができないということである。ただし、複合時制で telic な動詞が用いられると過程的なニュアンスも伝わると言える。例えば、ゲームをしているとき、まだ終了していないのにその流れで誰が勝つかが予想される場合、以下の発言が可能である。

（183）Ormai hai vinto
（あなたはもう勝つ）

この文では、実現可能性が失われるという解釈のみではなく過程的なニュアンスの解釈も可能である。この場合、二つの解釈が可能であるため、判断は文脈によるものである。過程的なニュ

[172] 例（c）と（d）では、「già」の適用が不可能である。なぜなら、述語から切り離せない副詞であるからである。

アンスのみが認められる場合には、用いられている複合時制が未来的な用法、つまり即時的な意味で用いられていると解釈すればよい。

最後に、「ormai」の位置に関しては次のことも言える。すでに見たように、「ormai」は複合時制とともに適用される場合、助動詞の前にあるいは助動詞と過去分詞のあいだに現れることが可能であるが、意味に関しては相違があるか否かという疑問が生じてくる。基本的には、助動詞と過去分詞のあいだに現れた場合、即時性の意味が強いとされている。しかし、同じ位置の場合においても用法に対して制約があるときもある。それは文脈によるものである。この点を明らかにするために以下の例文が挙げられる。

（184a）L'ho ormai finito: **mi mancano poche pagine**
（もう終わっている。残っているページが少ない）

（184b）*L'ho ormai finito: **l'ho spedito stamattina**
（もう終わった。今朝送った）

上記の例（184a）では、「mi mancano poche pagine」があるためその事態が完了していないことが前提となるが、その完了が間近であるというニュアンスで解釈すればよい。それに対して、例（184b）が非文であり、当該事態がすでに完了しているため事態の即時性が伝わらない。これは副詞の位置による制約であることが明らかである。なぜなら、副詞の位置を変えると（184b）も正しい文として認められるからである。

（184c）Ormai, l'ho finito: l'ho spedito stamattina/mi mancano poche pagine

言うまでもなく、以上の例文においては「già」の適用が不可能である。なぜなら、「già」は述語から切り離すことができない副詞であるからである。上記の例（c）における「ormai」の用法は即時性という解釈を求める用法ではない。

5.10 まとめ

本節で明らかになった点は以下の四点である。一つ目は、「già」と「ormai」はそれぞれの機能をもつ副詞であるため類義語として用いられない場合が多いという点である。これは同じ文の中でも両者を同時に用いることができることからもわかる。次に、「già」は完成相を表す時制と未完成相を表す時制との共起を可能とする副詞であるが、用いられた時制により解釈が異なる。そのため、完成相を表す時制を「複合時制」と「単純時制」に分ける必要がある。主な相違点として、後者の場合には「経験」という解釈のみが可能となるという点が挙げられる。三つ目の点は、「ormai」は遠過去形との共起を可能としない副詞であるという点であり、そのため、「経験」の解釈も不可能である。ただし、「ormai」は「già」が可能としない用法を認め、それはあきらめというニュアンスを伝える用法である。また、四つ目は、位置によって「ormai」による解釈が変わるという点である。「ormai」は基本的に述語から切り離すことができる副詞であるということが「già」との一つの相違点であると言える。最後に、「ormai」は、複合時制の場合、助動詞と過去分詞のあいだに位置すると即時のニュアンスが非常に強いことが明らかになった。

5.11 イタリア語と日本語における時間を表す副詞の比較について

本節はこれまで観察してきた日本語の「もう」と「すでに」とそれに対応するイタリア語の「già」と「ormai」における共通点と相違点をまとめて比較することを目的としている。以上の副詞を対立している副詞として扱う先行研究が少なく、実際に対立しているか否か、また文法的な制約があるか否かという疑問点が生じたため、これまでの節において両者の副詞について個々に論じてきた。以下では、「già・もう」と「ormai・すでに」における相違点と共通点をまとめていく。

5.11.1「già／もう」における比較について

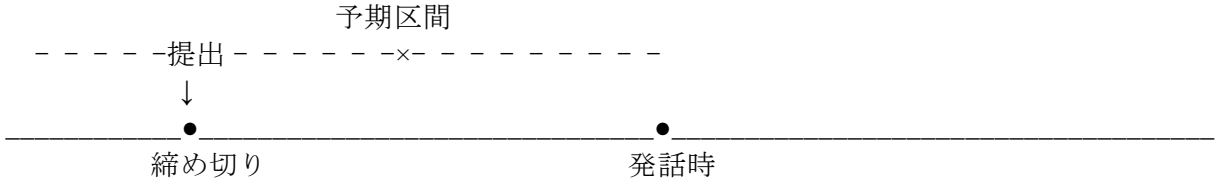
すでに説明したように、副詞「もう」は三つの解釈を可能とし、それは基本的解釈「完了」と副次的解釈「想定より早く」と「経験」である。以下に副次的解釈を中心としてイタリア語の「già」と「もう」の比較に進んで行く。まず、「想定より早く」の意味で「もう」を適用する場合には「予期区間」という概念を導入しなくてはならないことをすでに主張し、それは話者の心理的な判断を示すものであることを明らかにした。再び以下の例文を参考にしよう。

（185a）（昨日はレポートの提出日であった）　「*もう出した」
A さん：昨日、レポートを出した？
B さん：うん、昨日出したよ。

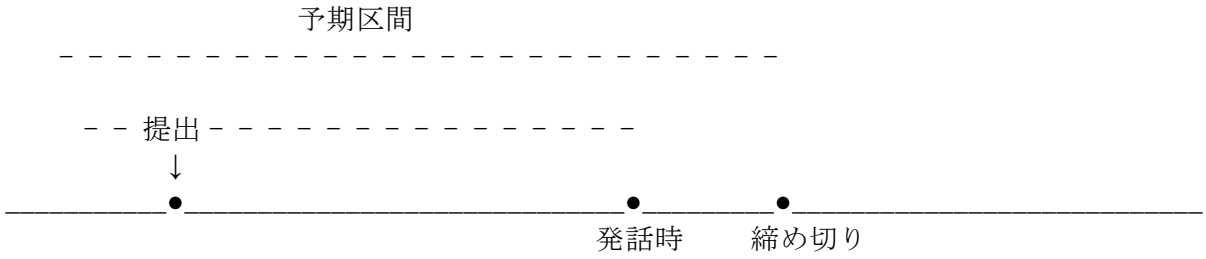
（185b）（A さんと B さんはレポートの提出日期限を翌日にひかえている）
A さん：（もう）レポートを出した？
B さん：うん、（もう）出したよ。

上記の例文のあいだにある相違点は、「事態の実現」がいつ行われたか、つまり一定の区間内かあるいはその外かという区別とそれに関連する「もう」における適用の可能性という相違点である。前者の例文における実現が「予期区間外」に行われたため「もう」の適用が不可能であるのに対し、後者の例文における実現が「予期区間内」に行われたため「もう」の適用が可能であるとされていることを前章で説明した。こういった相違点を以下の図でまとめることができる。

図 27.【（*もう）「タ形」】　（「*」「もう」の適用が不可）



【もう＋タ形】



この時点ではイタリア語と日本語のあいだには相違点が少ないと言える。なぜなら、イタリア語の「già」における用法も以上の図により説明されるからである。ただし、イタリア語の過去を表す時制形式は多く、どの時制を選択すればよいか、またその時制の選択によりどのようなニュアンスが伝わるかなどの疑問が生じる。上記の例文においても近過去形にすればよいかあるいは

遠過去形にすればよいかという疑問が生じるわけである[173]。日本語の場合、「タ形」と「テイル形」が存在しているが、それぞれイタリア語では現在と関係のない過去の出来事を表す遠過去形と現在と関係のある過去の出来事を表す近過去形に相当する時制であるように感じられるが、そうではない。なぜなら、日本語の「タ形」は二重性をもつ時制であるためイタリア語の両方の時制を描写することができ、そしてそれと同様にイタリア語の近過去形も二重性をもつ時制であるからである。上記の例文に関しては、日本語の例（185a）と（185b）は一般的にはそれぞれ「過去の出来事」と「現在実現済み」というニュアンスを伝える例文であるとされている。言い換えると前者は「アオリスト的」用法であるのに対して後者は「完了的」用法であるが、この区別は実際に簡単にできるものではなく文脈や場面や話し手の予期などのような視点を含めて区別しなくてはならないものである。この点は、イタリア語との重要な相違点である。なぜなら、イタリア語はその意味を区別するために二つの時制を適用する言語であるからである。しかし、第一章において主張したように、イタリア語においてもその区別が複雑な場合が多く、それは近過去形の「アオリスト化」という現象によるものである。その言語現象により近過去形は二重性をもつ時制となり、遠過去形のアオリスト的用法も加えて二つの意味を可能とする時制となるのである。このことをもとにし、例（185a）と（185b）の比較を進めていくが、最初に日本語の「タ形」に関して簡潔に説明をした後に当該例文のあいだにどのような相違点があるかを説明していく。

時制形式が同じであることから「過去を表すタ形」であるか「完了を表すタ形」であるかという区別をするためには副詞や前後関係で区別しなくてはならない。まず、例（185a）の場合、「昨日」という時間を明示的に表す副詞が用いられているためこの例文における「タ形」は現在と無関係であると解釈される。それに対し、例（185b）において「もう」が用いられているため現在とのつながりが感じられる。以下ではこのような副詞の用法の視点からイタリア語の応答文と日本語の応答文を比較していく。上記の応答文（185a）をイタリア語に訳すときどの時制を用いることが可能となるか、どのような制約があるかまたその時制の適用によりニュアンスが異なるかという点について観察していく。以下では、どの時制が適切であるか、また「già（もう）」の適用が常に不可能であるかという二点について着目していく。

【過去の出来事を表す時制】

（185a）（昨日はレポートの提出日であった）
A さん：昨日、レポートを出した？
B さん：うん、昨日出したよ。　「*もう出した」

（185c） A: Ieri, hai consegnato la tesina?　（近過去形）
B: Sì, l'ho (già) consegnata.　（近過去形）

上記の例（185c）からわかるように、用いられている時制は疑問文においても応答文においても「過去の出来事」を表す遠過去形ではなく「現在とのつながり」を表す近過去形である。ここで、疑問文に関して言及しなくてはならないことがあり、それは時制の適用のことである。なぜなら、疑問文における近過去形と応答文における近過去形の機能は同じものではないからである。疑問文における近過去形の適用は話者が選択できるものではなく文法的な制約による用法であり、その制約に従うと疑問文では遠過去形の適用が常に不可能であり、近過去形の適用が強制的である。つまり、ieri, consegnasti la tesina?という文は常に非文である[174]。それに反して、ieri consegnai la tesina は言える。これはおそらく近過去形と遠過去形の使い分けに関する用法と近過

[173] この場合、「ieri（昨日）」が用いられているため遠過去の適用が適切ではないと思われるが、この点に関する説明は第一章で述べられている。
[174] 第一章において述べたように、地域により近過去形と遠過去形の使い方が異なり、南部では遠過去形の使用のほうが多い。そのため、「ieri, consegnasti la tesina?」という表現は南部では非文として感じられない。

去形のアオリスト化による用法である。この点に関する説明は第一章においてすでにされているためここでは述べないことにする。

次に、以下では過去時制と副詞「già」との共起に関する制約について簡潔にまとめていく。イタリア語の「già」の用法とその意味に関して説明する場合、すでに言及したように、時制を「完成相」と「未完成相」を表す時制に分ける必要があり、その理由は区別により「già」の解釈が異なるということである。さらに、「完成相」の枠も「単純時制」と「複合時制」にさらに分ける必要があると主張した。それは、遠過去形と「già」の共起の場合には「想定より早く」の解釈が認められないからである。それに対して、「以前に少なくとも一回〜したことがある」の解釈ならば認められるという相違が明らかになった。これに従うと遠過去形を用いた Sì, già la consegnai は「予期区間」あるいは「想定より早く」という解釈とは無関係となり、「過去に一回出したことがある」という意味をもたらす文となる。よって、「già」の意味が異なり、以下の解釈になる。

【完成相を表す時制による解釈】

・複合時制
Sì, l'ho **già** consegnata　→　提出が設定時点より早く実現した

・単純時制
Sì, **già** la consegnai　→　以前に出したことがある

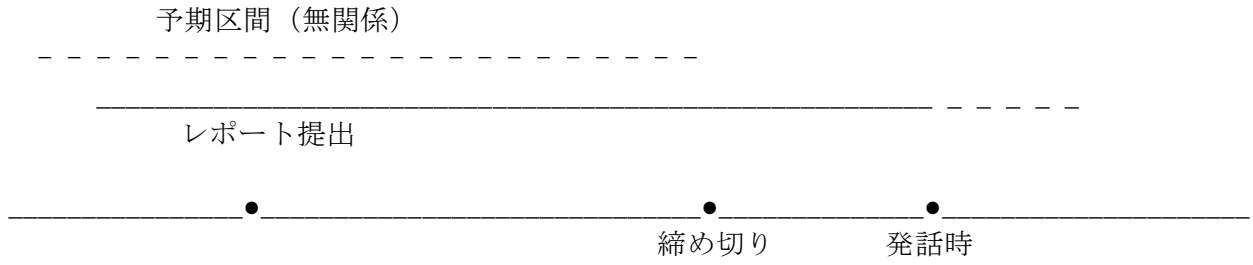
それとは異なり、日本語の場合、「もう」の意味を問わず、先行研究ではその共起が常に不可能であるとされている。なぜなら、「もう」は完了の解釈を求める副詞であるため「過去の出来事」を表す「タ形」とは対立するからである。すなわち、「もう」が明示された時点で用いられた「タ形」は当然「完了的用法」であるということになる。それに反して、イタリア語は「過去を表す」文脈においても「già」の追加を可能とすると言える。以下の例文を参考にしよう。

（185d）A: Ieri, hai consegnato la tesina?
B: Sì, l'ho già consegnata.

なぜ日本語とイタリア語のあいだにはこのような相違があるのか、またなぜ解釈においても相違があるのかという疑問が生じる。ここで考えられる説明は二つであり、それは（185d）における「già」がニュアンス的に日本語の「もう」に相当する副詞ではないという説明と、（185d）における近過去形は「アオリスト的用法」を表す近過去形であるという説明である。

以上の例（185b）における日本語の「もう」は「想定より早く」という解釈を求めるが、イタリア語の「già」はその解釈を必ず認めるわけではない。この場合、「完了」という解釈のみが認められる。つまり、「出す」という動作が発話時以前に完了しているということに焦点が当てられており、その動作の完了がある時間的な枠内において完了したか否かという情報は無関係である。よって、この「già」における解釈は予期区間とはそれほど関係のある用法ではないということになると判断される。おそらく、イタリア語では「完了」の意味を表す役割を果たしているのは過去分詞であるため「già」はその意味を強くするという役割のみを果たしていると考えてもよいだろう。それに対し、日本語においてはその完了を表す過去分詞が存在していないため時制の使い分けでわかるものではない。よって、解釈が完全に副詞「もう」に委ねられていると考えられる。以上のことを図で表すと以下のように表すことができる。

図 28.【過去を表す文脈における「già」の「完了」解釈】



以上の図からわかるように、イタリア語は「過去の出来事」を表す文脈においても「già」の適用を可能とし、それは遠過去形との共起における制約と過去分詞の機能と「アオリスト化」によるものであると考えられる。
次に、日本語の例（185b）もイタリア語に訳すときどのような時制が用いられるかまたどのような制約があるかを観察していく。

【現在実現済みを表す時制】

（185b）（A さんと B さんはレポートの提出日期限を翌日にひかえている）
A さん：（もう）レポートを出した？
B さん：うん、（もう）出したよ。

（186） A: Hai (già) consegnato la tesina?
B: Sì, l'ho (già) consegnata.

上記の表からわかるように、例（185b）の「タ形」も近過去形により表現され、例（185c）・（185d）の「過去の出来事」を表す「タ形」と同じ表現になる。ここで、どのような相違点が存在しているかという疑問が生じてくる。言うまでもなく、これまでの説明に従うと例（186）の「già」は日本語の「もう」と同じ機能をもち、「想定より早く」という解釈を表す用法である。
まとめると、日本語の場合、「タ形」が「過去の出来事」を描写するか「現在実現済み」を描写するかという区別は副詞「もう」との共起の有無により明確にされるのに対して、イタリア語においては文法的な制約があり、近過去形の「アオリスト化」により二つの機能が可能であるため、副詞「già」が過去の文脈においても用いられ、その場合には「経験」解釈が認められる。
これまで比較した例文は「昨日」と「今日」の対立を中心とした例文であったが、以下にすでにこれまでの章において分析した同じ日にちに位置づけられている日本語の例文をイタリア語に訳していく。以下の例文は明示的に「過去の出来事」を表す副詞を用いていない例文である。

【予期区間外】

（187a） A：（午後 6 時頃に）昼ご飯を食べた？
　　B：　はい、*もう食べた。

（187b） A: Hai pranzato?
　　B: Sì, ho (già) pranzato.

【予期区間内】

（188a） A:（午後 1 時頃に）昼ご飯を食べた？
　　B:　はい、もう食べた。

（188b） A: Hai pranzato?
　　B: Sì, ho già pranzato.

上記の例（187a）・（187b）においても例（185a）・（185b）と同様に用いられる時制は近過去形である。この場合においても日本語とイタリア語は「もう」と「già」の用法の点で異なり、イタリア語においては「予期区間外」の場合でも「già」の適用が認められる。言うまでもなく、説明は例（147d）に対する説明と同様であり、発話時以前にその動作が完了しているということのみに焦点が当てられており、動作の実現が想定されたより早く実現したという意味をもたらす用法ではない。

最後に、日本語とイタリア語の時制形式に関して以下のことも言える。日本語における「タ形」もイタリア語における「近過去形」も二重性をもつ時制であり、両方の形式は「完了的用法」と「アオリスト的用法」を可能とする形式であるため機能的には共通点が多い。しかし、イタリア語は「アオリスト的用法」のみを可能とする形式を持つのに対して、日本語にはそれに相当する独立した形式が存在せず、副詞や文脈などの判断で「タ形」の機能を判断することになる。同様に、イタリア語の近過去形における「アオリスト化」のため、近過去形はどちらの機能を果たしているかという判断が複雑な場合もあるが、日本語とは異なり文脈や副詞の適用によりその判断が必ずしもできるとは限らない。

以下では、異なる動詞を用いた例文を介して以上のことをまとめていく。以下に動詞「食べる」と「卒業する」を用いた例文を挙げていくこととする。いずれも本章においてすでに挙げられた例文である。

【食べる・mangiare】

（189） a. 朝食は（もう）食べている　　「完了的テイル形」
　　b. 朝食は（もう）食べた　　「完了的タ形」・「アオリスト的タ形」
　　c. 昨日は朝食を食べた　　「アオリスト的タ形」

（190） a.Ho (già) fatto colazione　　「近過去形」
　　b.Ho (già) fatto colazione　　「近過去形」
　　Feci già colazione　　「遠過去形」
　　c.Ieri ho fatto colazione　　「近過去形」（「アオリスト的近過去形」）
　　Ieri feci colazione　　「遠過去形」

【亡くなる・morire】

（191）a. 彼は（もう）亡くなっている　「完了的テイル形」
b. 彼は（もう）亡くなった　「完了的タ形」・「アオリスト的タ形」
c. 彼は去年亡くなった　「アオリスト的タ形」

（192）a. Lui è (già)morto　「近過去形」
b. Lui è (già)morto　「近過去形」
Lui morì　「遠過去形」
c. Lui è morto l'anno scorso　「近過去形」（「アオリスト的近過去形」）
Lui morì l'anno scorso　「遠過去形」

【卒業する・laurearsi】

（193）a.（もう）卒業している　「完了的テイル形」
b.（もう）卒業した　「完了的タ形」・「アオリスト的タ形」
c.　去年卒業した　「アオリスト的タ形」

（194）a. Sono (già) laureato　「essere+形容詞」[175]
b. Mi sono (già) laureato　「近過去形」
（Già mi laureai）　「遠過去形」
c. Mi sono laureato l'anno scorso　「近過去形」（「アオリスト的近過去形」）
（Mi laureai già l'anno scorso）　「遠過去形」

5.11.2「ormai／すでに」における比較について

すでに述べたように、日本語にはイタリア語の「ormai」に相当する副詞が存在していないが、場合により「すでに」により表現されることもある。この副詞は機能的に共通点をもっているか否か、また用法においてどのような制約があるかを以下に説明していく。

最初に、簡潔にまとめると次の三点が明らかになったと言える。まず、「ormai」は場合により「già」と異なる機能をもつ副詞であるため類義語として用いられない場合が多く、これは同じ文の中においても両者を同時に用いることができることからもわかった。次に、解釈に関しても相違があり、それは二つである。一つ目は、「già」とは異なり「ormai」は「あきらめ・不可避性」というニュアンスを伝える用法を可能とする副詞であることであり、二つ目は「ormai」は基本的に述語から切り離すことができる副詞であるため文の中の位置により解釈が異なるという相違である。日本語の「すでに」の用法も以上の三点を認める副詞であるか否かという疑問が生じるが、すでに説明したように、「すでに」が用いられると単なる過去の出来事として解釈される傾向があるようであるため、話者の設定時間である「予期区間」を必要としない副詞であると主張した。そのため、「もう」が可能とする解釈と「すでに」が可能とする解釈が同じではなく、「すでに」は「想定より早く」という解釈を可能としない。

以下にすでに分析したいくつかの例文を訳しながらイタリア語の「ormai」と日本語の「すでに」を比較していく。まず、「ormai」の特徴的である不可避性・あきらめ、また事態の実現に対する即時性あるいは事態の実現に対する確信のニュアンスが日本語においてどのように表現されるかをみよう。

[175] イタリア語の場合、状態を表す形式は「essere+形容詞」であるため、（a）のみにおいては「laurearsi（卒業する）」動作を表す動詞ではなく、「essere laureato」という形となる。

（195a） Ormai hai vinto
（195b） あなたはもう勝つ　（*すでに）

上記の例文の「ormai」の適用により伝わるニュアンスは「即時性」であるが、その代わりに「già」が用いられるとそのニュアンスが弱くなると言える[176]。また、当該例文において用いられている時制は近過去形であるが、これは近過去形における未来的な用法であり、日本語に訳すと強制的に「非過去形」となる。なぜなら、「タ形」の用法において制約があるからであり、それは「タ形」が単文の場合、必ず過去における出来事を描写する時制であるという制約である。そして、例文からもわかるように、イタリア語の「ormai」は「すでに」ではなく「もう」により表現されている。これはおそらく「すでに」が適用されると過去の出来事として解釈されるからであると考えられる。よって、この時点では日本語の「すでに」はイタリア語の「ormai」と異なり、未来的な用法を認めない副詞であるように感じられるが、実際は未来的な用法も可能である。

次に、時制との共起に関する制約なども見ていく。すでに述べたように、「ormai」は全ての時制との共起が可能となるわけではなく、唯一アオリスト的な時制とは対立する副詞である。つまり、過去を表す遠過去形との共起が不可能であるため以下の例文は非文である。

（196a）*Ormai mangiò/si laureò/vinse/arrivò/partì/esplose[177]
（196b） すでに食べた／卒業した／勝った／着いた／出発した／爆発した

上記の例文からわかるように、この場合においても相違点があり、日本語の場合には過去の出来事を表す「タ形」の適用が認められているという点である。例（196b）における「タ形」が「完了的用法」であるか「過去的用法」であるかという疑問が生じるが、すでに述べたように、「すでに」が用いられると過去の出来事として解釈されるのが一般的である。

以上のことから、時制との共起においてもイタリア語の「ormai」と日本語の「すでに」は同じ機能を持っている副詞であるとは言えない。

これまでの例文の分析結果として日本語の「もう・すでに」とイタリア語の「già・ormai」の用法を以下のようにまとめることができる[178]。イタリア語の場合、「完成相」を表す時制を取り上げ、それを「複合時制」と「単純時制」に分けた。また、その時制のアスペクトによってどのような解釈になるかをまとめた。

図 29. イタリア語と日本語における副詞とその解釈の比較について

【già】

「完成相」

- ↗ **複合時制** → 近過去形
  - ↗ アオリスト的 → 完了 →「経験」
  - ↘ 完了的 → 完了 →「予期」
- ↘ **単純時制** → 遠過去形 → アオリスト的 → 完了 →「経験」

[176] 「già」は即時性のニュアンスをもたらすには助動詞と過去分詞のあいだに位置づけられる必要がある。文頭に用いられると過去における動作としての解釈も可能になる。このように、「già」は必ずしも未来的な用法ではなく過去としての解釈も可能とする副詞である。
[177] この共起が不可能であるのは単文であるためである。
[178] 「ormai」の位置に対する詳しい解釈は明示しないことにする。

【もう】

↗ アオリスト的 → 完了 →「経験」
「タ形」
↗ ↘ 完了的 → 完了 →「予期」

「もう」

↘
「テイル形」 → 完了的 → 完了

【ormai】

↗ アオリスト的→ あきらめ
↗ **複合時制** → 近過去形
↘ 完了的 → あきらめ・即時性
「完成相」

↘ **単純時制** → 遠過去形 → アオリスト的 → 共起不可

【すでに】

↗ アオリスト的 → 完了 → 「経験」
「タ形」
↗ ↘ 完了的 → 完了 → 「経験」

「すでに」

↘**「テイル形」**→ 完了的 →「完了」

上記の図とこれまで比較した例文からわかるように、日本語の「もう」とイタリア語の「già」および日本語の「すでに」とイタリア語の「ormai」の適用範疇が重ならない場合もあり、それに対して「もう」と「ormai」および「すでに」と「già」の適用範疇が重なる場合もあることが明らかになった。よって、結論として本章で対象となっている四つの副詞はそれぞれの本質・意味と機能・解釈をもっている副詞であると言える。

5.12 まとめ

本章では、最初に日本語の副詞「もう」と「すでに」を検討し、次にそれに対応するイタリア語の「già」と「ormai」を検討した。また最後に、その比較も行った。まず、日本語における副詞に関して明らかになったのは、「もう」と「すでに」は完全な類義語ではなく、置き換えられ

る場合と置き換えられない場合があるということである。本章に挙げた定義とその用法から、前者は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという「完了」の基本的な意味を持ち、その状態の移行があるのが前提として認められているということがわかったが、それに加えてもう一つの意識が働いているということもわかった。それは状態の変化が起こるのが早いと感じる心理であり、この解釈を「想定より早い」という言葉で規定することとした。しかし、「もう」はこの二つの解釈のみを可能とする副詞ではなく、もう一つの解釈を可能とし、その解釈を「経験」と呼ぶこととした。この解釈は「もう」の意味の変化から生じたものである。つまり、本章において見たように、「もう」と「タ形」の共起における「タ形」は常に「完了的用法」として解釈されるとは限らず、「アオリスト的用法」として解釈されることも可能である。ただしその場合、副詞の意味が変わり、話者が設定した時間区間内にその出来事が起こったという意味をもたらす「もう」ではなく、「以前に少なくとも一回〜したことがある」という意味をもたらす「もう」である。よって、「タ形」のアオリスト的な用法も可能となる。

このように、「もう」は「完了」という基本的解釈と「想定より早い」「経験」という副次的解釈を可能とする副詞であると本章で主張した。ただし、すべての動詞は経験の解釈を認めるとは限らないことも明らかになった。このことから、副詞の解釈には動詞の性質も関わっていることがわかった。つまり、動詞の性質により可能な解釈と不可能な解釈があるということである。そのため、動詞を「反復可」と「反復不可」と「前提による反復可」という三種類に分ける必要があると主張した。この三つの種類のあいだの相違点として、「前提による反復可」という種類は動詞の性質のみによるものではなく、話者の前提によるものであるということを挙げた。

次に、「すでに」も検討した。この副詞は「もう」とは異なり、単なる過去の出来事として解釈される傾向があるようであるため、可能となる解釈が三つではなく基本的解釈の「完了」と副次的解釈のうちの「経験」のみを可能とする。このように、「すでに」は二つのみの解釈を可能とする副詞であるという結論に至った。このことから、この二つの副詞は類義語として適用ができる副詞ではあるが、異なる機能も持っている副詞であると明らかになった。

次に、イタリア語における「già」と「ormai」もそれぞれの機能を持つ副詞であるため類義語として用いられない場合と用いられる場合があるとわかった。また、「già」は完成相と未完成相を表す時制との共起を両方可能とするが、用いられた時制により解釈の点では相違が生じるため完成相時制を「複合時制」と「単純時制」に分ける必要があると主張した。それに反して、ormaiは動詞の性質や意味を問わず単純時制である遠過去形との共起を常に可能としない副詞である。さらに、この二つの副詞のもたらすニュアンスに関しても相違点があり、用法の幅が完全に同じではないとも言える。例えば、「ormai」は「già」が可能としないあきらめ・不可避性というニュアンスを伝える用法を認める副詞であり、それに加えて、基本的に述語から切り離すことができる副詞であるためその位置により解釈が変わるという相違が明らかになった。イタリア語のormaiに当てはまる副詞は日本語において存在していないが、場合により「すでに」により表現されることもある。しかし表現できない場合もやはり多い。日本語においてもイタリア語においても当該副詞が伝えるニュアンスが同じであるか否かまた両方の言語の時制の本質とその機能も関係しているか否かを検討することが本章の目的であった。

第六章

イタリア語における大過去形について

本章は、大過去形における一般的な用法について説明することと、通常の適用から外れているように感じられる用法について論じることを目的としている。主に、複文における大過去形の用法と、間接話法における大過去形の用法を対象としていく。

周知のように、大過去形は過去のある時点より前に完了していた事柄を表す時制であり、その時点はすべての複合時制が必要とする「設定時点」であるが、後述するように、大過去形の場合には他の概念も導入しなくてはならない。大過去形は他の過去時制、つまり完成相を表す近過去形・遠過去形、また未完成相を表す半過去形[179]といくつかの共通点を持っている時制であるため、大過去形は完成相を表す時制であるのか、あるいは未完成相を表す時制であるのかという疑問点が生じる。ただし、以下で説明するように、近過去形と同様に複合時制であるため、大過去形も完成相を表す時制として認められる場合がより多いようである[180]。他の時制に比べると近過去形との共通点がより多く、その主な共通点として設定時点の存在が挙げられるが、設定時点における位置づけが同じではないため時制の用法も当然異なる。また、大過去形は半過去形の助動詞[181]を用いるため、未完成相を表す半過去形との共通点もあると言える。このことから、大過去形は近過去形と半過去形と共通点をもっている時制であると言えるが、完成相を表す時制であるため遠過去形とも共通した点を持っているはずである。ただし、以降の節からわかるように、近過去形と比べるとその共通点が明らかに少ない。まとめると、大過去形は遠過去形・近過去形・半過去形といくつかの共通点を持ち、その三つの時制と同様に発話時点より前に起こった事態を表す時制であると言えるが、以下で説明するように、それらの過去時制とは異なり、大過去形は必ず「時間的投錨（ancoraggio temporale[182]）」を必要とする時制である。ただし、次節において述べるように、その「時間的投錨」を必要とする時制の点に関して複数の意見がある。

次に、本章では通常の用法から外れている用法に関しても論じていく。その用法として、間接話法における用法を取り上げることとする。なぜなら、大過去形は「過去における過去」を表す時制であるため、間接話法においてもよく使われる時制であるが、その用法に関しては様々な問題点が生じ、時制の一致のルールに従わないように見える用法もいくつかあるからである。以下では、どのような用法が可能であるのか、また不可能であるはずの用法がなぜ認められるのかなどの点に関しても述べていく。

6.1 大過去形の基本的な用法と先行研究について

本節は、主に Bertinetto（1986）、Vanelli&Salvi（2004）、Renzi（1995）、坂本（1979）と長神（2003）による説明や主張を参考にすることとする。以下では、まず Vanelli&Salvi（2004）と坂本（1979）による定義とそれに対応する例文を挙げ、またそれらの視点において相違点があるか否かについても説明していく。Vanelli（2004：115）は大過去形を次のように説明している。

[179] 半過去形については第七章を参照。
[180] 前章では、「già」との共起に関して分析した際に、大過去形を「完成相時制」の枠に属している時制として扱った。
[181] 大過去形は助動詞 essere または avere の半過去形と過去分詞により形成される時制である。
[182] Bertinetto（1986）と Vegnaduzzo（1997）を参照。

“Il piuccheperfetto indica un evento anteriore a un momento di riferimento nel passato, sotto l’aspetto compiuto o inclusivo. Può indicare anche il compimento immediato di un evento che è presentato, per così dire, come compiuto prima del suo svolgimento ”
大過去形は完了的アスペクトまたは継続的アスペクト[183]の視点から過去におけるある設定時点以前に起こった事態を表す時制である。また、ある事態が完了していないにも関わらず、その事態の即時完了を表すことも可能とする時制である。

（a）Alle 5 Piero era già arrivato. (aspetto compiuto)
（ピエロは 5 時にはすでに着いていた）

（b）Quando avete aperto, avevo già bussato più volte. (aspetto inclusivo)
（あなたたちがドアを開けたときには、私はすでに何度もノックしていた）

（c）Il Milan partì all’attacco e il risultato era già capovolto. (aspetto compiuto (immediato))
（A.C ミランは得点を入れようとした。そうすれば、試合の得点は逆転することになる）

次に、以下では坂本（1979:229）による定義とそれに対応する例文を挙げていく。坂本の説明では、「大過去形は過去における過去を表す時制」であり、その時制の用法は以下のように分けられている。

・大過去形はある過去の時点における動作・状態（近過去形・半過去形・遠過去形のいずれで表されてもよい）より以前に完了した動作・状態を表す。

（d）Quando siamo arrivati/arrivammo, il treno era già partito.
（私達が駅に着いたときには、列車はすでに出てしまっていた）

・大過去形は半過去形の助動詞を用いた複合時制であるため、半過去形と共通した、あるいは密接な関係を持つ点が多い。

（e）ある過去の時点より以前の継続的動作・状態を表す。
Prima di decidermi, avevo avuto abbastanza tempo per ripensarci.
（決心をする前に、私にはもう一度考える時間が充分あった）

（f）ある過去の時点より以前の習慣的・反復的な動作・状態を表す。
Ogni sera, quando suo padre aveva terminato il lavoro, andavano insieme in chiesa.
（毎晩、父親が仕事を終えると、彼らは一緒に教会へ行ったものでした）

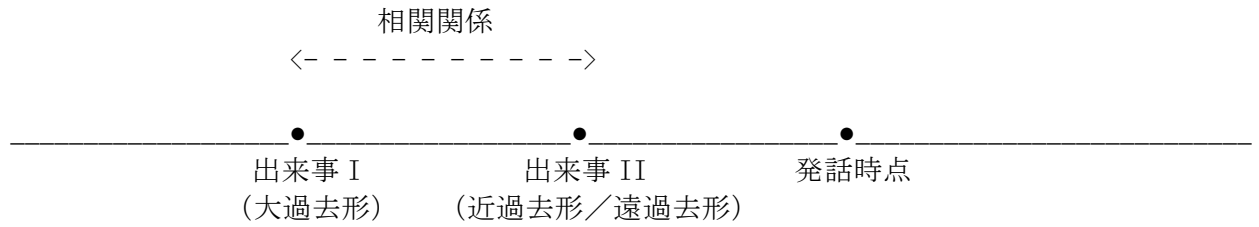
（g）ある動作・状態が継続中に完了してしまった動作を表す。
Mentre meditavo avvolto nel silenzio del bosco, la notte era calata.
（森の中で沈黙に包まれて私が瞑想にふけっているうちに、夜のとばりが降りてしまいました）

（h）小説・物語の中である過去・状態が起こった原因などを表す。
La povera fanciulla emise un grido e cadde. Era svenuta.
（その気の毒な娘は叫び声を上げて倒れた。気絶してしまったのだ）

・間接話法において主文より以前の時制を表す。
（i） Gli ho detto che Anna non l’aveva mai amato.
（私は彼にアンナが彼を愛したことは一度もないと言ってやった）

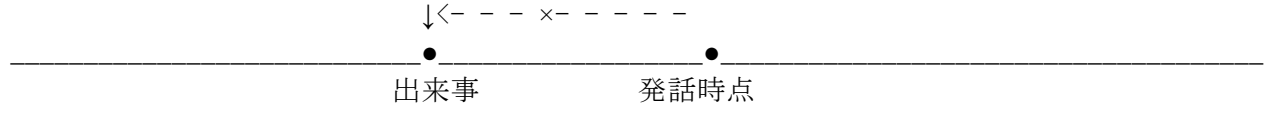
[183] 設定時点も含まれている用法は「inclusivo」と呼ばれている。本論では、それを「継続的」と訳すこととする。

上記の坂本（1979）による大過去形の定義とその用法をまとめて図で表すと以下のようになる。



このように、大過去形は過去における二つの出来事の時間的な関係を表す時制であるとわかるが、以下で主張するように、テンスの視点からのみの説明は不完全である。なぜなら、その視点からの説明はすべての用法には適用できないからである。ここで、どのように説明すればよいか、またどのような図で表せばよいかという疑問点が生じてくる。まず、上記の Vanelli&Salvi（2004）による定義を見ると、「momento di riferimento（設定時点）」という表現が現れ、これは複合時制に関して論じた際に説明した概念[184]である。すでに説明したように、その設定時点の時間軸における位置は時制により変わり、近過去形の場合には発話時点において置かれているのに対して、前未来の場合には発話時点以降に置かれている。それとはまた異なり、大過去形の場合には設定時点は発話時点以前に置かれている。また、大過去形は設定時点以外に他の概念も必ず必要とする時制であると言える。その概念は「ancoraggio temporale（時間的投錨）」である。この以上の二つの概念は密接している概念であるか否か、またどの時制がそれを求めるのかという点に関して複数の見方がある。まず、Bertinetto(1986)はその相違点について、「設定時点」はアスペクト的な機能を果たしている概念であるのに対して、「時間的投錨」はテンス的な機能を果たしている概念であるとしている。このように、この二つの概念をはっきり分けている。さらに、Bertinetto が「時間的投錨」を必ず必要とする時制として挙げているのは半過去形と「futuro nel passato（過去における未来）」であるが、遠過去形にもその概念を認めることができるようである。例えば、「Massimo mangiò il gelato **dieci minuti** prima（マッシモは 10 分前にアイスを食べた）」[185]のような例文の場合、「dieci minuti prima（10 分前に）」を時間的に正確に解釈するために「時間的投錨」は必要な概念である。つまり、どの出来事に対して先行性を表しているかという情報が必要である。Bertinetto とは異なり、Vegnaduzzo（1997）では、「設定時点」と「時間的投錨」が繋がっている概念であるとされているが、時制によってその関係が異なってくる。Bertinetto(1986)も Vegnaduzzo(1997)も指摘しているように、条件法過去形と近過去形の場合、設定時点と時間的投錨は一致しないが、Vegnaduzzo(1997:346)によると大過去形の場合、「時間的投錨」は「設定時点」の機能を果たすことができる。このように、大過去形は他の複合時制と同様に設定時点を必要とする時制であるが、他の過去時制とは異なり、「時間的投錨」も必ず必要とする時制である。従って、以上の二つの概念を常に分ける必要はないということとなる。以下では Vegnaduzzo による主張を基準にして遠過去形・近過去形・大過去形における相違をまとめていく。

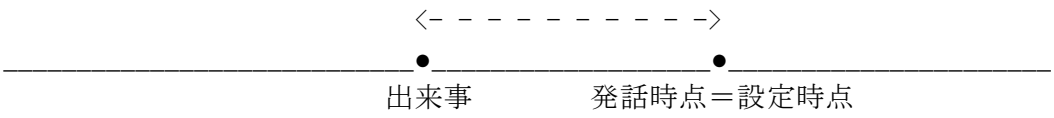
【遠過去形】



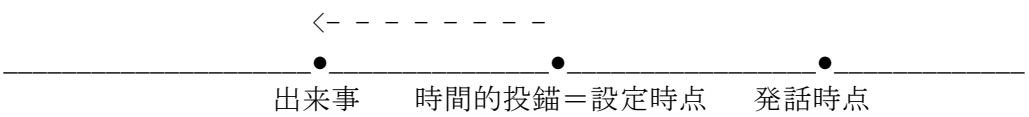
[184] 第一章を参照。

[185] この例文における副詞「prima」は出来事の終了点と他の出来事のあいだにおける区間を表しているが、この例文ではそのほかの出来事は明示されていない。この場合、文脈を考察することとなる。

【近過去形】



【大過去形】



上記のように、遠過去形も近過去形も大過去形も発話時以前に起こった出来事を描写する点で共通している時制であるが、相違点もあるため正確な解釈を得るためにはその相違に注意すべきである。第一章において近過去形と遠過去形の相違点に関してすでに述べたため、ここでは省略するが、まとめると両方の時制と大過去形のあいだの相違として挙げられるのは「時間的投錨」の有無である。次節ではこの概念に関してより詳しく見ていく。

6.2 「時間的位置づけ要素」「時間的投錨」「設定時点」における区別について

前節に挙げた定義と様々な例文は大過去形における主な用法を明らかにするが、この時制の用法に関しては問題点が多い。なぜなら、すでに述べたように、完成相を表す近過去形（または遠過去形）とともに未完成相を表す半過去形のいくつかの特徴を有している時制であるため、その用法の幅が非常に広くなるからである。また、全ての用法が前節に挙げた定義とその図に従うとは限らないことにも注意すべきである。この点に関して述べる前に、正確な分析のために必要である基本的な概念について言及しなくてはならない。その基本的な概念とは「localizzatore temporale（時間的位置づけ要素）」と「ancoraggio temporale（時間的投錨）」と「momento di riferimento（設定時点）」の三つである。以下ではその区別に関して述べていく。

まず、「localizzatore temporale（時間的位置づけ要素）」は Vegnaduzzo（1997：345）により以下のように定義されている。

“Espressione linguistica (avverbiale di tempo o frase temporale) che specifica la posizione sull’asse temporale della situazione descritta dal verbo (quindi la posizione del momento dell’avvenimento)”.
動詞により描写された事態の時間軸における位置づけを特定する言語表現（時間を表す副詞もしくは時間節）である。

次に、「ancoraggio temporale（時間的投錨）」は Vegnaduzzo（1997：345）により以下のように定義されている。

“In alcuni tempi verbali (ma non in tutti) la nozione di “Ancoraggio temporale” si collega strettamente all’accezione aspettuale di compiutezza: l’Ancoraggio temporale costituisce un momento psicologicamente rilevante (assunto come tale dal parlante) rispetto al quale valutare gli effetti o i risultati della situazione descritta dal verbo”.

いくつかの時制に限って、「時間的投錨」は完了性というアスペクト的な概念に密接に繋がっている。なぜなら、その時間的投錨は話者にとって心理的に重要である時点のことを表し、その時点を基準にして動詞により描写された事態の効果または結果が観察される時点であるからである。

上記の二つの概念における相違点が以下の例文[186]により明らかになる。まず、両者の例文における「a mezzogiorno（12 時に）」は同じ機能を果たしている副詞ではなく、前者においては「localizzatore temporale（時間的位置づけ要素）」の機能を果たしているのに対して、後者においては「ancoraggio temporale（時間的投錨）」の機能を果たしている副詞であるという相違に着目しなくてはならない。

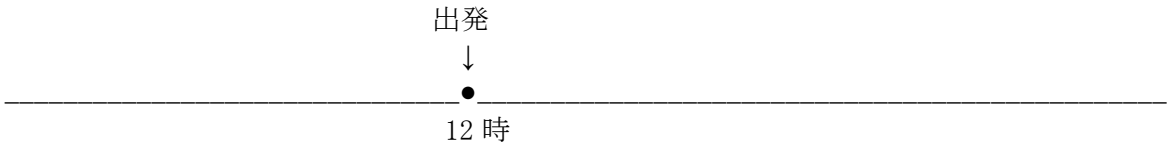
・Piero **è partito** a mezzogiorno　　（近過去形）
（ピエロは 12 時に出発した）

・A mezzogiorno Piero **era partito**　　（大過去形）
（ピエロは 12 時には出発していた）

上記の例文からわかるように、前者の場合においても後者の場合においても、副詞は事態がいつ起こったかという情報を明らかにするが、後者では同じ副詞は事態が起こった時点を明らかにすることもあればもう一つの時点を明らかにすることもあると言える。それはどの時点を基準にして事態における結果を観察するかという時点である。以上の相違を次のように図で表すことができる。

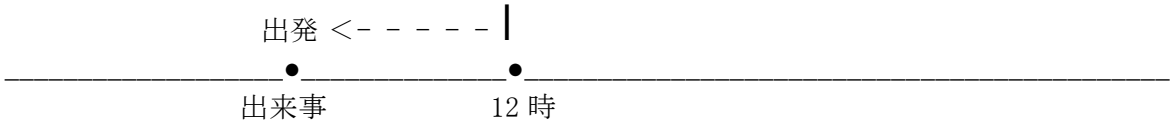
【localizzatore temporale】

・Piero **è partito** a mezzogiorno
（ピエロは 12 時に**出発した**）



【ancoraggio temporale】

・A mezzogiorno Piero **era partito**
（ピエロは 12 時には**出発していた**）



---

[186] Vegnaduzzo（1997：345）から引用したものである。

このように、異なる時制が用いられた場合、同じ副詞は二つ以上の時点を表すことができるということが明らかになった。よって、分析のために以上の概念をはっきりと区別すべきであると言える。さらに、もう一つのことにも注意すべきであり、それは「時間的投錨」を「明示時間的投錨」と「非明示時間的投錨」[187]の二種類に分けていることである。言うまでもなく、上記の例文は「a mezzogiorno」という時間を表す副詞を持つため、「明示時間的投錨」を表す例文であるのが明らかであるが、副詞以外に時間節や主節における動詞などにより描写されることも可能であると言える。

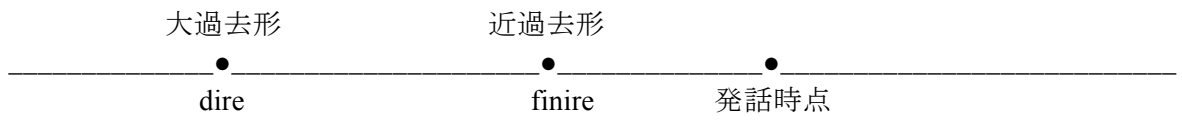
最後に、「momento di riferimento」に関しても述べるべきであるが、この概念に関してはすでに第一章において述べられているため、本章ではその定義またはその特徴に関しては言及しない。ただし、上記の時間的投錨との相違点を明らかにすべきであるため、以下ではその説明を相違点に絞ることとする。

Vegnaduzzo(1997)がすでに指摘したように、大過去形の場合、時間的投錨と設定時点は同じ機能を果たすことができ、つまり設定時点として扱うことができるとしているが、同じものではないことにも注意すべきである。相違として、前者は単なる直示的な概念であるのに対して、後者は完了性のみに関係のある概念であるという相違が挙げられる[188]。ここでは、時間的投錨と設定時点のあいだの相違に関して言及し、大過去形の場合、この二つの概念が一致することができるということを述べたが、なぜこの概念は重要なものであるのかという疑問も生じる。まず、言えるのは大過去形が複合時制であることにより設定時点が必ず存在していることと、その区別を明確にしないと解釈と複文に対する時間的な解釈が曖昧になるということである。

次に、上記の Vanelli&Salvi(2004)と坂本（1979）による定義を比較してみよう。定義からわかるように、前者においても後者においても大過去形は「過去における過去」を表す時制であるとされているが、細かい相違もあることに注意すべきである。それは、前者では「ある設定時点より以前に起こった事態」と説明されているのに対して、後者では「ある過去の時点における動作より以前に完了した動作」と説明されているという相違である。以上の二つの定義は異なる視点から説明しており、Vanelli&Salvi(2004)はアスペクトの視点から説明しているのに対して、坂本（1979）はテンスの視点から説明していると言える。つまり、後者は二つの事態のあいだにおける時間的な関係とその事態の時間軸における位置のみの視点から説明しようとしているのに対して、前者はある事態における完了とそれに対する先行性の視点から説明しようとしているという相違点が挙げられる。定義からもわかるように、後者の場合、大過去形はある事態に対する先行性を表す時制であると説明されているが、前者の場合、大過去形は設定時点に対する先行性を表す時制であると説明されている。この点を含めて本論は前者を認め、後者は不完全な説明であると主張していく。なぜなら、その説明は以下のような例文を説明することができないからである。

（197）Ti avevo detto che il latte è finito. Perché non l'hai comprato?
（牛乳がもうないと言っていたのになぜ買ってきてないの？）

上記の例文における場面に基づいて判断すると例（197）に現れる二つの事態「dire（言う）」と「finire（無くなる）」の論理的な順番は「finire」と「dire」であるのが当然である。しかし、坂本（1979）の説明に従うと「finire」が先に完了した事態であるため、大過去形により表現されるはずであるが、例（197）では大過去形により表現されているのは「dire」となっている。つまり、その説明に従うと、例（197）における事態の時間的な順番は以下のようになる。



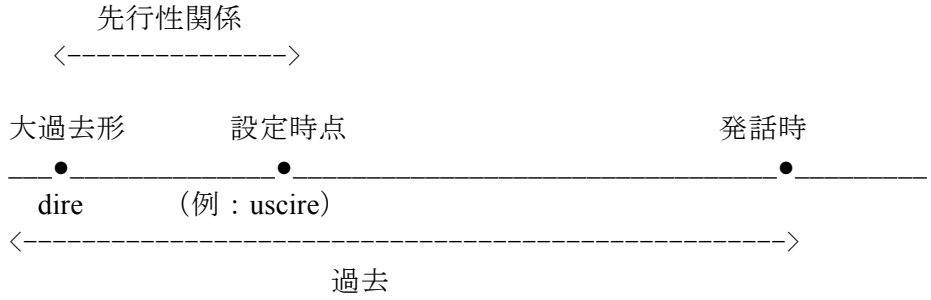
[187] 例（197）を参照。
[188] Vegnaduzzo(1997)を参照。

しかし、すでに述べたように、文脈を考察すると以上の順番は不可能であり、正しい文として感じられるのは以下の例（197a）である。

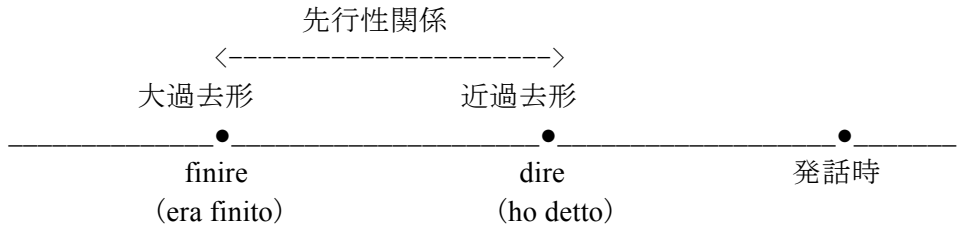
（197a）Ti ho detto che il latte era finito. Perché non l'hai comprato?
（牛乳がもうないと言ったのになぜ買ってきていないの？）

このように、当該事態のあいだの時間的な関係が正確となり、「finire」は「dire」より以前に完了した事態として解釈される。ただし、ここで問題となるのは例（197）における文法性である。説明として以下の二つの図が挙げられる。

【例（197）】



【例（197a）】



このように、大過去形は単なる「過去における過去」を表す時制であるという説明は不完全であることが明らかになる。以上の図に関しては、次のことも明らかになる。まず、例（197）を表す図を考察すると、「finire（なくなる）」という事態が現れていないことと、例（197a）を表す図を考察すると、事態の順番が異なっているという点である。それは、言うまでもなく、どの事態を基準にするかということによるものである。つまり、大過去形はどの事態を基準としてそれに対する先行性を表すかということによるものである。

このように、Vanelli&Salvi(2004)が定義しているように、大過去形の場合、重要であるのは過去における事態ではなく過去における設定時点との相関関係である。本論はその立場を認めることとする。なぜなら、この説明を認めると、なぜ例（197）が正しいかがわかるからである。つまり、大過去形「avevo detto」は必ずその文に現れている他の事態、この場合は近過去形「è finito」、との相関関係を表すとは限らず、ある設定時点との先行性関係を表すものである。後述するように、その時点は明示されていなくても必ず存在しているものであるが、文脈でしか解釈できない場合も多い。当該例文の場合、「avevo detto」は、例を挙げると「prima di uscire（出かける前に）ti avevo detto che il latte è finito」などのような設定時点に対する先行性を表している大過去形であると提案できる。

本章においても単純時制と複合時制における区別が重要な点であり、その区別により各時制の相関関係とその用法における相違の説明ができるため、大過去形に対してもその区別は重要なも

のである。このように、大過去形は複合時制であるため、設定時点が明示されていなくても必ず存在しているため、本章においてもこの概念を除外することはできない。

6.3 大過去形におけるテンス的特徴とアスペクト的特徴について

前節において述べたように、大過去形は他の複合時制と同様に完了性を表す時制であり、過去における設定時点[189]の存在に根拠を置く時制である。その存在は必ずしも明示的であるとは限らず、文脈により非明示的である場合もある。参考のため、以下の例文[190]を見てみよう。

【設定時点が非明示的】

（198a）Guarda! Questa è la città in cui avevo frequentato le elementari.
（見て！ここは私が小学校に通っていた街だ）

【設定時点が明示的】

（198b）Guarda! Questa è la città in cui ho frequentato le medie; e quest'altra è la città in cui, precedentemente, avevo frequentato le elementari.
（見て！ここは私が中学校に通っていた街で、ここはその前に小学校に通っていた街だ）

上記の例文からわかるように、前者では設定時点が明示的に現れていないのに対して、後者ではその設定時点が明示的に現れている。そのため、前者は会話の始まりとして不自然であると言える。なぜなら、どの設定時点に対して先行性を表しているかという情報が抜けているからである。それとは異なり、例（198b）においてはその比較の対象が明示され、それは近過去形（ho frequentato）により描写された出来事である。言うまでもなく、設定時点が明示的に現れていないことにより例（198a）が非文になるということはないが、その場合には会話の流れで設定時点を捉えることとなる。

上記のことをまとめると、明示的であるにしても非明示的であるにしてもある設定時点が話し手に必ず設定されている。ただし、近過去形と前未来形とは異なり、大過去形の場合、その設定時点が必ず過去に位置づけられている。また、大過去形の特徴として挙げられるのは、大過去形は必ず他の過去時制に対する先行性を表す際に、その過去時制に関しては制約がなく近過去形・遠過去形・半過去形・歴史的現在形・大過去形のどれも可能であるという点である。このことから、なぜ大過去形が時間節や関係節や補足節などにおいてもよく用いられるかがわかる。

上記のように、大過去形は過去の領域にしか適用できない時制であることがわかる。このことにより、この時制は当然発話時以前に起こった事態を描写する時制であるとわかるが、他の過去時制（近過去形と遠過去形）もその役割を果たしているため、その時制との相違が曖昧になる。その相違を明らかにするためには以下の例文[191]を参考にすればよい。

【過去時制における相違について】

（199a）Resta ben poco di ciò che facemmo insieme.　（遠過去形）
（199b）Resta ben poco di ciò che abbiamo fatto insieme.　（近過去形）
（199c）Resta ben poco di ciò che avevamo fatto insieme.　（大過去形）
（一緒にやったことがほんの少ししか残っていない）

上記の例文（199a）（199b）（199c）における相違は次の通りである。例（199c）における大過去形は現在形である「resta」に対する先行性を表すように感じられるが、大過去形は近過去形と遠過去形とは異なり、発話時または場合により文の中にある他の動詞との関係を問題としない

[189] 大過去形の場合、設定時点と時間的投錨は一致している。後者も前者と同様に「momento psicologicamente rilevante rispetto al quale valutare gli effetti o i risultati della situazione descritta dal verbo」である。Vegnaduzzo（1997：345）を参照。
[190] Bertinetto（1986：49）から引用したものである。
[191] Bertinetto（1986：452）から引用したものである。

場合もある。つまり、この場合の大過去形は「resta」ではなく、他の設定時点を設定し、それに対して先行性を表していると言える。それとは異なり、近過去形または遠過去形を用いた例文の場合、それらの時制と「resta」の相関関係が問題になってくる。ここで、大過去形と近過去形・遠過去形の相関関係に対する問題点がいくつか生じる。例えば、なぜ例文（199a）（199b）（199c）の場合には三つの時制の適用が可能であるのに対して、以下の例（200）の場合には全ての時制の適用が可能ではないのか、また副詞との組み合わせには制約があるか否かなどという疑問点も生じる。まず、例（200）を参考にしよう。

（200）Alle 3 venne/è venuto il momento di lasciarci. Gli altri erano partiti (*partirono/*sono partiti) in precedenza.（遠過去形／近過去形＋大過去形 *遠過去形／*近過去形）
（3 時に別れた。他の人は事前に出発していた）

上記の例文では先行性の関係を示す設定時点が現れているため、大過去形「erano partiti（出発していた）」の適用が強制的となり、この場合には近過去形と遠過去形の適用は不可能[192]である。まとめると、過去における設定時点が明示されると近過去形と遠過去形の適用は不可能になることが明らかになった。このように、近過去形・遠過去形と大過去形の使用領域は完全に異なるものであると言えるが、大過去形は近過去形と同様に複合時制であるため、ある共通した点を持っているはずである。その共通点は完了性を表すことと設定時点に基づくことである。ただし、以上に述べたように、近過去形とは異なり、大過去形は発話時とは全く無関係な時制である。それにも関わらず、Bertinetto（1986）が指摘するように、同じ用法も可能であるときもある[193]。

このような共通点が存在しているため、また半過去形とは異なり過去における事態が進行中を表すのではなく、完了した事態を表すため、大過去形も完成相を表す時制であると言ってもよいが、反復的な用法も可能であるため、未完成相を表す時制の特徴ももっていると言える。これは、おそらく助動詞の時制が半過去形であるからである。反復的な用法を表す例文として「dopo che avevo finito di giocare a pallavolo, mio padre veniva a prendermi in palestra（バレーボールの練習を終えた後に、父は体育館に迎えに来ていた） 」が挙げられる。この場合、大過去形により描写されているのは「終える」に対応する動詞である。以下では、間接話法における大過去形の様々な用法に関して述べていく。

6.4 間接話法における大過去形の用法について

本節は、間接話法における大過去形の用法に関して説明することを目的としている。周知のように、直接話法の文を間接話法に換えると従属節の主語の人称、所有形容詞、動詞の法また副詞が変化するが、それ以外に時制も変化し、その変化を固定するルールが存在している。一般的に、イタリア語は主節の動詞が過去の場合、それに対する先行性を表す時制として認められるのは大過去形のみであるため、間接話法においてより多く使用される時制は大過去形である。しかし、本節において述べるように、この変化に対して例外や制約もあることに注意すべきである。まず、直接話法と間接話法はどのようなものであるのか、またどのルールに従うのかなどに関して簡潔に以下で説明していく。

直接話法[194]とは、人の言葉や思想を語られたり考えられたりした形でそのまま伝える話法である。それに対して、間接話法とは、人の言葉や思想を語られたり考えられたりした形でそのまま伝えるのではなく、その内容を従属節に置き換えて伝える話法である。つまり、前者は当人がその場で直接話したり考えたりしているような形で伝える話法であるが、後者はその内容を話し手または書き手の視点から表現し直して伝える話法である。一般的に、間接話法の従属節は主節の

[192] 近過去形における適用は必ずしも不可能ではないが、解釈が異なってくるため注意すべきである。
[193] Bertinetto（1986：457）を参照。
[194] 坂本（1979：353）による定義である。

動詞 affermare(断言する)、dire(言う)、domandare(尋ねる)などにより導かれるとされている。坂本（1979:353）は以下の例文を挙げている。

（201a） Luigi dice: “Io sono malato” （直接話法）
（ルイージは「ぼくは病気だ」と言う）

（201b）Luigi dice che lui è malato （間接話法）
（ルイージは（彼自身が）病気であると言う）

上記の例文からわかるように、従属節における人称代名詞は変化するが、時制は変化しない。それは、主節の時制が現在形[195]であるからである。同じ例文を過去形にすると以下のようになる。

（202a） Luigi ha detto（近過去形）: “Io sono malato”（現在形）
（202b） Luigi ha detto（近過去形）che lui è malato （現在形）／era malato（半過去形） 「同時」
era stato malato （大過去形） 「以前」
sarebbe stato malato （条件法過去） 「以後」

上記の例文からわかるように、主節の時制は従属節[196]の時制を支配し、近過去形の場合、従属節において可能となる時制は現在形、半過去形、大過去形と条件法過去形である。言うまでもなく、以上のいくつかの可能である時制は時間軸における位置づけにより使い分けている。つまり、発話時との同時性を表すなら現在形または半過去形、発話時以前であることを表すなら大過去形、また発話時以降であることを表すなら条件法過去形により描写しなくてはならない。本章は主節の動詞が過去時制で、従属節の動詞はそれ「以前であること（先行性）」を表すというパターンを対象としている。まとめとして坂本（1979:354）が挙げている表[197]を参考にしよう。

図 30. 直接話法と間接話法における時制の変化

導入動詞[198]	**直接話法**	**間接話法**
現在形・未来形	時制の変化なし	時制の変化なし
過去時制	現在形	半過去形
	半過去形	半過去形
	近過去形・遠過去形・大過去形	**大過去形**

本章では、過去時制の枠に属している直接話法の「近過去形・遠過去形・大過去形」とそれに対応する間接話法の時制のみに関して言及することとする。まず、以下ではその変化を表す例文を挙げ、またそれに関してどのような問題点が生じるかについても述べていく。まず、一般的な変化を表す例文[199]を挙げる。

[195] 未来形の場合においても時制は変化しない。
[196] 本論は直説法のみを対象としている。
[197] 坂本（1979）では直説法と接続法に分けて時制の一致のルールが説明されているが、本稿では前者のみに関して説明するため、接続法に関する表の部分を省略することとする。また、未来形と先立未来に関する説明も省略する。
[198] 主節のことである。
[199] Vegnaduzzo(1997:349)から引用したものである。

（203a） Piero ha comprato una casa　　（近過去形）
（ピエロは家を買った）

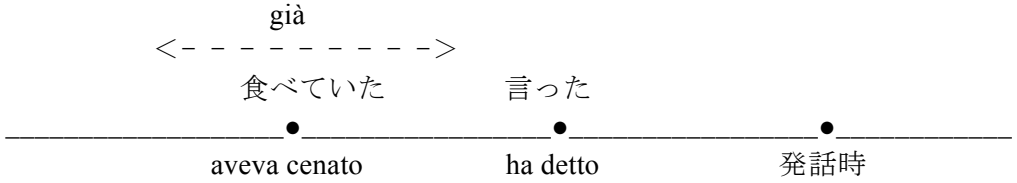
（203b）Piero comprò una casa　　（遠過去形）
（ピエロは家を買った）

（203c）Lucio disse che Piero aveva comprato una casa　（遠過去形と大過去形）　「間接話法」
（ルチオはピエロが家を買ったと言った）

上記の例文からわかるように、間接話法の場合、大過去形の時間的投錨になっているのは過去形により描写された主節の伝達動詞「disse（言った）」である。つまり、大過去形はそれに対して先行性を表すはずである。ただし、ここでは例（203a）の「ha comprato」も間接話法において用いられるか否かという疑問が生じる。この点に関して述べる前に、時間を表す副詞を用いた例文も参考にすべきである。まず、「già（もう・すでに）」を用いた例文を挙げていく。

（204a） Gino ha detto: “Ho già cenato”.　「直接話法」　（近過去形）
（ジーノは「ぼくはもう食べた」と言った）
（204b） Gino ha detto che lui aveva già cenato.　「間接話法」　（大過去形）
（ジーノは（彼自身が）もう食べたと言った）
（204c） Gino ha detto che lui ha già cenato　「間接話法」　（近過去形）
（ジーノは（彼自身が）もうご飯を食べたと言った）

（204b）



以上の図からもわかるように、例（204b）は図 30 に対応できる例文である。定義通り、その大過去形は「過去のある時点における事態以前に起こった事態を描写するために用いられる時制」の基本的な意味を表している大過去形であると言える。つまり、ご飯を食べたか否かを尋ねられる前にはジーノはすでにご飯を食べていたという解釈となる。
次に、以下では「già」の代わりに「fa（前に）」を用いた例文[200]も参考にしよう。

（205a） Gino ha detto: “Ho cenato un’ora fa”　（直接話法）
（205b） Gino ha detto che aveva cenato un’ora prima　（間接話法）

上記の例文は、例（204a）とは異なり、特定の時間を表す「fa（前に）」を適用する例文である。この適用により解釈や間接話法への変化において影響が与えられているか否かという疑問が生じるため、以下ではこの点について考察していく。上記の例（204a）・（204b）と（205a）・（205b）を比較すると、前者の場合、「già」が用いられているため動作は発話時以前にその動作が起こったが、いつ起こったかという情報が明らかではないと言える。つまり、発話時より以前に起こった事態であるという情報しか挙げられていない。それに対して、例（205a）の場合、「fa」が用いられているためその動作は発話時点より一時間前に起こったという情報が挙げられている。また、前者の場合、「un’ora fa」という情報を追加してもよいと言える。このため、

[200] 長神（2003:223）から引用したものである。

「già」と「un'ora fa」は同じ機能を果たしているものではなく、それぞれ独立しているものとして扱うべきである。

次に、間接話法への変化の場合、どのような変化があるかを見ていく。すでに述べたように、時制と人称代名詞のみではなく、時間を表す副詞も変わるということが一般的である。よって、例（205b）の場合においても直接話法における「fa」はそのまま適用されず、強制的に「prima」に変化することとなる。このように、例（205a）と（205b）も一般的なルールに従う例文であるとわかったが、以下の例（205c）も参考にすべきである。

（205c）Gino ha detto che ha cenato un'ora fa　（話し言葉のみ）

上記の例（205c）はそのルールに従わない例文であるように感じられるが、本章では非文として扱わないこととする。なぜ非文のように感じられるかというと、従属節において大過去形が適用されるはずであるのに適用されているのは近過去形であるからである。近過去形の適用により、その事態の時間的な位置付けがわからなくなるということになる。さらに、副詞「fa」がそのまま残っているということは例（205b）と異なっている点である。ここで、なぜ例（204b）と例（205b）とは異なり、間接話法のルールに従わないにも関わらず、例（205c）は従属節において近過去形の適用を可能とする例文であるのかという疑問が生じてくるわけである。また、なぜ例（205c）と同様に、「già」を用いた例（204c）も近過去形を適用しても非文とならないかという疑問も生じてくる。この点について Vegnaduzzo(1997)も述べており、間接話法において「fa」の適用は不可能であると主張している。なぜなら、直接話法における「fa」のように直示的である副詞は強制的に直接話法において「prima」に変化しなくてはならないからである。この点を明らかにするため、以下の例文を挙げている。

（206a） Piero è andato a Roma tre anni fa
（ピエロは三年前にローマに行った）

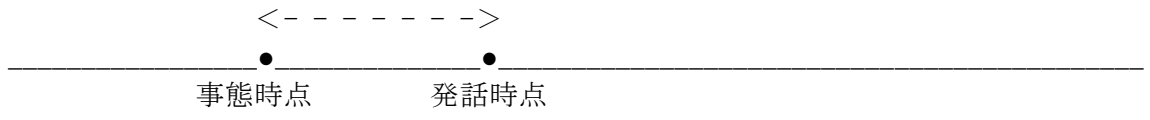
（206b） Lucio disse che Piero era andato a Roma tre anni prima
（ルチオはピエロが三年前にローマに行ったと言った）

上記のように、直示的副詞「fa」に対応する照応的副詞「prima」の変化が強制的であるとされている。もし「fa」をそのまま用いるとすると例（206a）との解釈が異なってくることも指摘されている。つまり、以下の例（207）と例（206a）の時間的な解釈が同じではないようである。

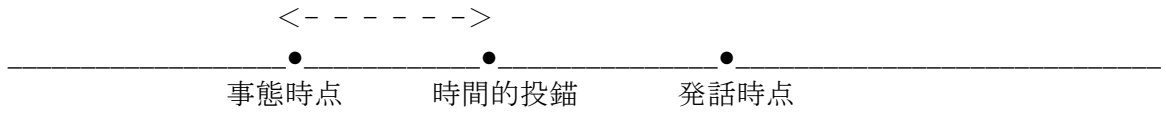
（207）Lucio disse che Piero era andato a Roma tre anni fa
（ルチオはピエロが三年前にローマに行っていたと言った）

上記の例（207）は例（206a）に対する適切な間接話法への変化として認められていない。なぜなら、「3 anni fa（三年前）」は事態の起こった時点と大過去形の時間的投錨の区間を表すものではなく、事態が起こった時点と発話時点の区間を表すものであるからである。

【3 anni fa】



【3 anni prima】



ただし、Vegnaduzzo(1997)は副詞の変化のみを対象とし、大過去形は近過去形のままに残るということについては言及していない。本章では、近過去形を用いても非文とならないという視点から述べていくため、例（205c）も間接話法として認められるが、制約があると考える。例（205c）に関して次のことが言える。まず、この例文は話し言葉においてのみ可能であることと、その発言が可能である場面が限られていることである。どのような制約があるかを確認するために、次の場面を考察しよう。例（205a）が午後 8 時に発話されることとし、ジーノがご飯を食べたのは 7 時であるとしよう。この場合、（205c）が可能であり、通常間接話法として認められると言える。ただし、これは近過去形の適用によるものであり、遠過去形が用いられると非文となってくる。

（205c）Gino ha detto (poco fa) che ha cenato un'ora fa
（ジーノは一時間前にご飯を食べたと（先程）言った）

（205d）*Gino disse che ha cenato un'ora fa
（ジーノは一時間前にご飯を食べたと言った）

このように、従属節における可能な時制は主節において用いられた時制によって異なり、それに合わせて副詞の選択も異なると言える。更に、以上のことから、特定の場面において通常間接話法として認められない文が認められる場合もあることがわかった。

また、これまで直接話法と間接話法に関して説明していたが、もう一つの話法が存在している。それは「自由間接話法」[201]と呼ばれる。Serianni(2011)と Mortara Garavelli(1985)では、自由間接話法の特徴[202]として挙げられるのは時制の適用であるとされている。なぜなら、自由間接話法において適用される時制は通常の間接話法のルールから外れるからである。つまり、その適用は引用をする話し手の視点に合わせているものではなく本人の視点に合わせているものなのである。したがって、その時制の適用を考えると例（204c）と（205c）のような例文は容認される文になるはずである。

（204c）Gino ha detto che lui ha già cenato
（205c）Gino ha detto che lui ha cenato un'ora fa

ただし、上記の例文は自由間接話法として認めにくい。なぜなら、自由間接話法は「dire che（～と言う）」のような表現を求める話法ではないからである。よって、上記の例文は自由間接話法であるため可能であるという説明が不可能となる。

[201] 自由関接話法は直接話法と間接話法の中間的性格をもった話法である。この話法は小説などの文章で、作中人物の言葉や考えを表すのにしばしば用いられる。長神（2003）を参照。
[202] 自由間接話法においてより適用される時制は半過去形と条件法過去形であるとされている。

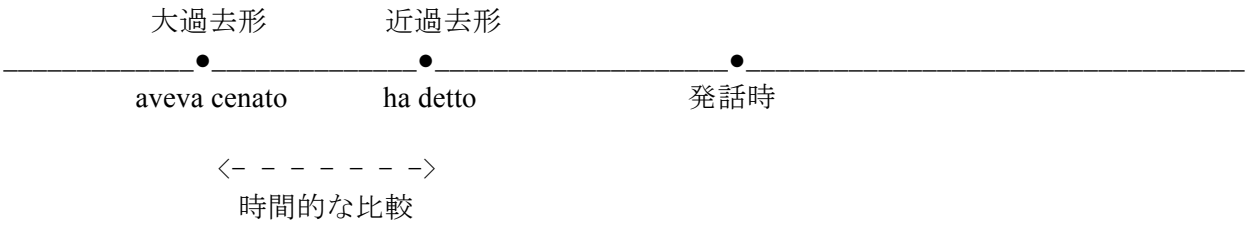
6.5 時制と副詞の共起について

これまで考察したように、副詞の用法に関しても時制の共起に関しても相違が存在していると言える。以下の例文からもわかるように、「già」を用いた例文の場合、大過去形の適用も近過去形の適用も可能であるのに対して、「fa」を用いた例文の場合、大過去形の適用が不可能である。この場合、「prima」の適用が強制的である。言うまでもなく、それは「fa」が発話時点を基準としているため、それと無関係である大過去形とは対立するからである。同様に、近過去形と「prima」は対立している。「prima」も過去における他の時点に対する先行関係を表す副詞であるため、発話時と繋がっている近過去形とは対立する。以下のようにまとめることができる。

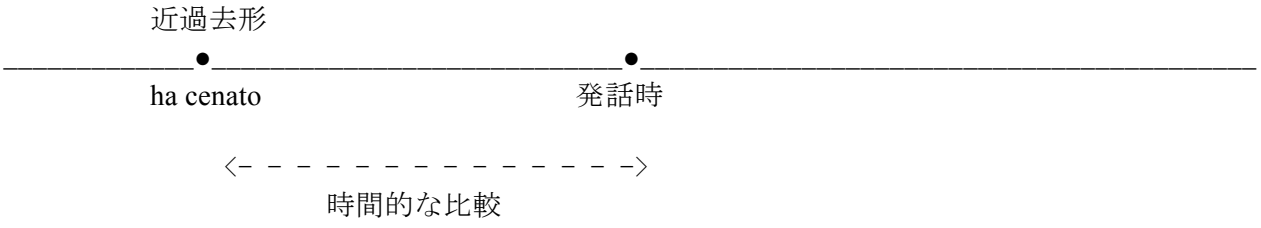
（205b）Gino ha detto che aveva cenato un'ora prima
（205c）Gino ha detto che ha cenato un'ora fa
（205d）*Gino ha detto che aveva cenato un'ora fa
（205e）*Gino ha detto che ha cenato un'ora prima[203]

ここで、なぜ上記の例（205d）と（205e）は非文であるのに例（205b）と（205c）は非文ではないのかという点について述べていく。まず、例（205b）と（205c）を比較する際、二つの点を考察すべきである。一つ目は、副詞の用法が異なることと、二つ目は近過去形を用いた例（205c）は例（205b）とは異なり、物語または文章における用法として認められない例文であるという二つの点である。一つ目の点に関してすでに簡潔に述べたように、近過去形を用いると、「fa」の適用が可能であるのに対して、「prima」の適用は不可能である。なぜなら、「prima」は過去における二つの出来事に時間的に順番を付ける副詞であり、それを可能とする時制は大過去形のみだからである。つまり、以下のようになる。

【205b】



【205a・205c】



---

[203] この場合、「prima」は「いつもよりはやい」という意味なら「prima」の適用が認められるが、この用法は本論の対象から外れるため、例（250e）を非文として扱うこととする。

このように、例（205b）と例（205a）・（205c）は異なるレベルに属しているものであると言える。直接話法を表す例（205a）は本人の視点を基準にして発言されているものであるのに対して間接話法を表す例（205b）は本人の発言を伝える話し手の視点を基準にして発言されているものである。それとは異なり、例（205c）は間接話法であるのに本人の視点を基準にして発言されているものである。文脈を挙げるとその相違がよりわかりやすくなるため、以下のことを考察しよう。例（205a）が発話されるのは午後 8 時だとすれば、ジーノはご飯を食べたのは午後 7 時になるという解釈となる。同様に、例（205c）の場合においてもご飯を食べたのは午後 7 時であるという解釈となるが、例（205b）はそれとは異なり、ご飯を食べたのは午後 7 時であるとは限らない。もし例（205b）が文語であるなら、その解釈は可能であると言えるが、もし二人のあいだの会話におけるものであるなら、その解釈は不可能となると言えるだろう。このように、基準となっているレベルが異なっているため、時制の適用も解釈もそれに合わせて異なることに注意すべきである。ただし、Vegnaduzzo(1997)が指摘しているように、大過去形と「fa」が常に対立するとは限らず、場合によりその共起が可能である。Vegnaduzzo(1997:362)は以下の例文を挙げている。

（208）Avevo incontrato Piero tre giorni fa. Oggi ho saputo che è morto ieri.
（3 日前にピエロに会っていた。今日、彼が昨日亡くなったのを知った）

Vegnaduzzo(1997)が説明しているように、「3 giorni fa（3 日前）」は設定時点ではなく単なる“localizzatore temporale（時間的位置づけ要素）”である。そのため、例（208）は非文ではない。つまり、大過去形は「3 日前」ではなく「昨日亡くなった」という事態を基準にしてそれに対する先行性を表しているとされている。このように、大過去形を適用する場合、どの事態に対して先行性を表すかという情報をはっきりさせないと当文における文法性の判断ができないことが明らかになった。ただし、Vegnaduzzo(1997:380)も指摘しているように、自由間接話法の場合、大過去形と「fa」の共起が可能である。なぜなら、その場合、語り手は自分の視点からではなく主人公の視点から語っているため、「poco fa（先程・少し前に）」などのような副詞が用いられるとしても、それは発話時点とは無関係であるからである。その場合、その副詞は単なる「時間的投錨である」とされている。

最後に、この用法は通常間接話法とはもう一つの点で異なっていると考えられる。すでに簡潔に言及したように、会話における用法と文章における用法の区別もしなくてはならないと本章では考える。なぜなら、例（205c）は常に用いられるとは限らず、文脈においてその適用が限られているからである。

（205b）Gino ha detto/disse che aveva cenato un’ora prima
（205c）Gino ha detto(poco fa)/*disse che lui ha cenato un’ora fa

上記の例（205b）は引用する話し手の視点を基準としているものであるため、会話においても文章においても用いられるものであると言える。しかし、例（205c）は物語または文章において認められるものではなく、会話のみに認められるものであるということに注意しなくてはならない。このように、主節における時制が変わることにより、文における他の時制と副詞もその影響を受けることが明らかになった。この点について次節において論じていく。

6.6 主節の時制の影響について

本節では、主節における動詞の時制の影響に関して説明していく。上記の例（205b）からわかるように、遠過去形が用いられても近過去形が用いられても非文とならないと説明されるが、本論における主な論点は遠過去形と近過去形の区別と、近過去形の二重性であるため、その視点から見れば例（205b）のような表記は曖昧であるように思われる。本論の流れに従うと、当然その置き換えが認められるのは近過去形がアオリスト的用法の場合に限られる。よって、その近過去

形が完了的用法である場合、解釈に対してどのような影響があるかという疑問点が生じてくるわけである

以下では、主節における動詞が近過去形であるか、遠過去形であるかということにより間接話法における時制の転換もその影響を受けるか否かという点に関して述べていく。これまで挙げられた例文の多くは引用したものであるため、そのまま引用したが、詳しく分析してみると主節における時制の選択は重要な点であることがわかる。そのため、本章ではその選択によって間接話法への時制転換が異なってくると主張していく。さらに、副詞との組み合わせにおいても制約が存在しているということにも注意していく。まず、以下の例文[204]を再び参考にしよう。

（203c）Lucio disse che Piero aveva comprato una casa
（ルチオはピエロが家を買ったと言った）

以上の例文は通常の転換のルールに従うものであるため、「aveva comprato」は「disse」より前に起こった出来事であると解釈できるが、主節において遠過去形の代わりに近過去形を用いた際に解釈や文法に対して相違が出てくるか否かを見てみよう。

（203d）Lucio ha detto che Piero aveva comprato una casa
（ルチオはピエロが家を買ったと言った）

この場合においても「aveva comprato」は「ha detto」より前に起こった出来事であると解釈ができるため、例（203c）と同じものとして感じられる。それは、この近過去形はアオリスト的であるからという結論に至るが、文脈によって限られている用法もあるため、例文を個々に分析すべきである。まず、以下では例文（203d）の主節における近過去形と例文（203d）における遠過去形はどの点で共通しているか、またどの点で異なっているかということに関して考察していく。

最初に、すでに第一章において述べたように、イタリア語の近過去形は二重性をもつ時制であるため二種類に分けられるべきであり、一つ目は「完了的近過去形」であるのに対して、二つ目は「アオリスト的近過去形」であると主張した。ここで、（203d）における近過去形はどちらに相当する近過去形であるかということをはっきりさせなくてはならない。その前に、まず従属節の大過去形におけるもとの文から間接話法を表す文への転換の流れを考察する。

（206）Lucio ha comprato una casa　（近過去形）
（207）Lucio comprò una casa　（遠過去形）
（ルチオは家を買った）

例（206）と（207）における動詞は間接話法になると例（203c）と（203d）のように大過去形に変化するため、そのもとの時制の機能の区別が失われると言える。つまり、近過去形により描写された出来事も遠過去形により描写された出来事も大過去形により描写されることとなるため、近過去形と遠過去形における本質が失われる。以下のように表される。

【206】

近過去形　（ha comprato）

↘

Disse che　大過去形　（aveva comprato）

【207】

遠過去形　（comprò）

↘

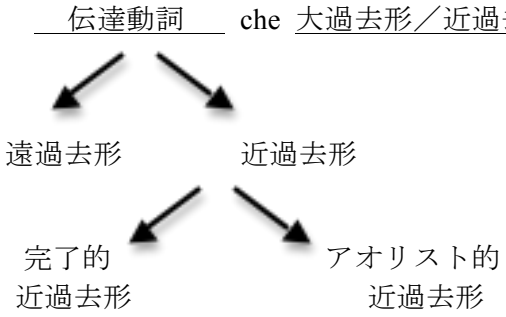
Disse che　大過去形　(aveva comprato)

---

[204] 引用したものである。

上記の例文は引用したものであり、遠過去形が用いられているためその時制のまま取り上げたが、実際には近過去形の適用も可能である。ただし、同じ解釈にするためにその近過去形はアオリスト的として解釈しなくてはならない。なぜなら、完了的近過去形ならば主節と従属節の時間的な関係が異なってくるからである。従属節の場合、出来事はどちらの場合においても大過去形に転換し、もとの時制の機能がなくなることがわかったが、本節は間接話法における伝達動詞の時制を問題としているため、以下では主節における時制の適用について考察していく。

図 31. 主節と従属節における時制と副詞の適用



以下のような例文で説明することができる。

（205b）Gino disse/ha detto che aveva cenato un’ora prima　　（ha detto = アオリスト的）

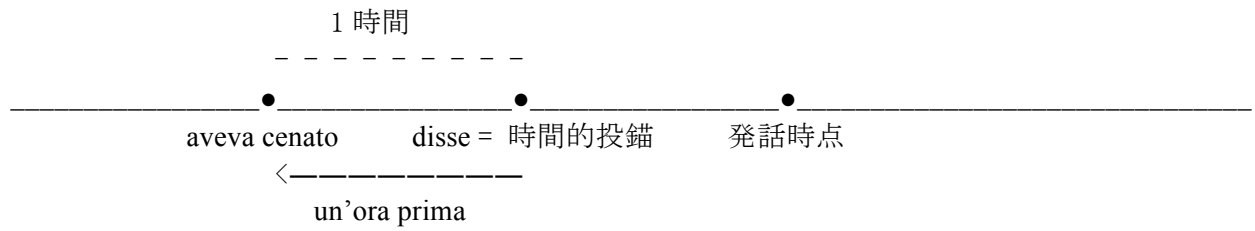
（205c）Gino ha detto(poco fa)/*disse che lui ha cenato un’ora fa　（ha detto = 完了的）

なぜこの点を明らかにすべきであるかというと、主節における時制により従属節における時制が影響を受けるからである。前節においてすでに述べたように、場合により従属節においては大過去形のみではなく近過去形の適用も可能であり、また大過去形の適用に制約があるということに注意しなくてはならない。以下では主節の時制を区別してみよう。

（205b）　①　Gino ha detto che aveva cenato un’ora prima

（205b）　②　Gino disse che aveva cenato un’ora prima

伝統的な説明に従うと、上記の例文は両方同じ解釈を可能とする例文である。当然、これは①における近過去形がアオリスト的であるからである。すでに述べたように、間接話法の場合、大過去形は伝達動詞より以前に起こった出来事のことを描写する時制であり、通常の解釈に基づくと以下のように説明できる。



[205] 例（205a）を参照。

次に、例（205c）における時制も区別してみよう。この場合、前節ですでに述べられているように、従属節において近過去形の適用が認められる。この場合、主節において完了的近過去形が用いられていることが明らかである。まず、「prima」のような副詞は発話時とは無関係であるため、完了的近過去形との共起は不可能であり、「fa」に変化することとなる。よって、発話時を基準としている副詞に変化すると完了的近過去形の適用も可能となる。このように、主節における近過去形の本質とその機能を区別すべきであり、それによると副詞も変化し、文全体の時間的な解釈に対しても影響があると言える。

（205c）① Gino ha detto(poco fa) che lui ha cenato un'ora fa.
（205c）② Gino *disse che lui ha cenato un'ora fa

最後に、以上の例文に対して従属節において大過去形を適用し、これまで挙げられた例文と相違点があるか否かについて考察していく。

（208a）Gino ha detto che lui aveva cenato un'ora fa[206]
（208b）Gino *disse che lui aveva cenato un'ora fa

以上の例文に関しては次のことが言える。まず、後者は当然非文であるということと、前者は非文ではないが、適用が認められるのはある特定の場面に限っているということである。この場合の大過去形は他の時制との時間的な関係を表す機能を失い、主節における先行性を表さない大過去形である。例（208a）が発話されるとしてもそれだけで容認可能な文であるように感じられず、発話の続きを求める例文であるように感じられる。つまり、以下のような例文になればよいのである。

（208c）Gino ha detto che lui aveva cenato un'ora fa, ma non è vero
（ジーノは 1 時間前にご飯を食べたと言っていたが、それは真実じゃない）

正確に言うと、「aveva cenato」の代わりに近過去形の「ha cenato」も許されるが、解釈のニュアンスが異なるため、この場合話者の意図により時制が選択されると言ってよい。

これまでのことを次のようにまとめることができる。まず、近過去形も遠過去形も従属節において用いられると大過去形になるため、それぞれの機能がなくなることがわかった。また、主節において遠過去形の適用も近過去形の適用も認められる場合、その近過去形はアオリスト的であるため、「prima」との共起が可能であるが、「fa」との共起が不可能である。それとは異なり、完了的近過去形は「prima」との共起を可能としないため、「fa」への転換は強制的である。そして、従属節において大過去形のみではなく、近過去形の適用も可能であり、それは直接話法と間接話法のあいだの時間的な距離によるものである。最後に、以下のことも言える。通常、間接話法は大過去形と「fa」の共起を認めないが、場合によりその適用が認められる。その場合、大過去形は他の時制との相関関係を表す時制としての機能をなくすと言える。前節において述べられているように、自由間接話法ならば大過去形と「fa」の適用が可能であるが、（208c）は自由間接話法ではない。

最後に、次節では大過去形における完了性に関して論じていく。なぜなら、以前の章において見たように、イタリア語の複合時制は異なる完了性を表すことができるからである。以前の章では、近過去形は設定時点の位置により二種類の完了性を可能とすると述べたが、大過去形はどのような種類を可能とするかという疑問が生じる。すでに第四章において言及したように、大過去形が表す完了を本論では「compiutezza antecedente（過去完了）」と呼ぶこととする。

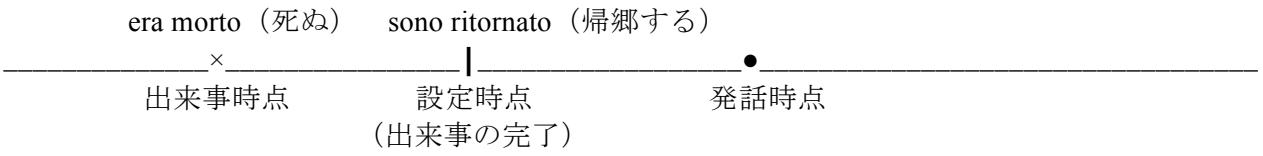
[206] Gino ha detto un'ora fa che aveva cenato なら異なる意味になるため、語順に注意すべきである。

6.7 大過去形における完了性

本節では、大過去形における完了性に関して論じていく。第四章において論じたように、近過去形は二種類の完了性を表すことができ、一つ目は「compiutezza provvisoria（一時的完了）」であるのに対して、二つ目は「compiutezza immaginaria（想像上の完了）」である。これと同様に、大過去形も複合時制であるため、当然「完了性」を表す時制であるが、近過去形が表す完了性とは同じものではない。なぜなら、大過去形は「過去のある時点において完了した出来事」を表す時制であるため、未来的な用法または発話時を基準とする用法を可能としないからである。このため、近過去形と大過去形の表す完了をはっきりと区別しなくてはならない。以下の例文[207]とそれに対応する図を介して「compiutezza antecedente（過去完了）」はどのようなものであるかを説明していく。

【過去完了】

（209）Quando sono ritornato a casa, mio padre era già morto da 3 ore.
（私が帰郷したときには、父は既に三時間前に死んでいた）



上記の図からわかるように、「era morto（死んでいた）」は「sono ritornato（帰郷した）」より以前に起こった事態であり、その事態は設定時点の役割を果たしている。このように、「era morto」は「sono ritornato」において完了している事態である。両者の事態は発話時とは無関係であるため、近過去形と同じ完了を表すことが不可能であり、大過去形が適用できる領域は過去に限られていることが明らかである。

まとめると、イタリア語の過去を表す複合時制は「完了」を表すという点で共通していると言えるが、その完了には三種類があると提案できる。ただし、すべての時制は同じ完了を表すわけではないため、どの完了を表すかという点では共通していない。なぜなら、近過去形と大過去形が可能とする完了は重なるものではないからである。さらに、近過去形は大過去形と異なり二種類の完了を可能とする時制であるからである。以上の例文からわかるように、イタリア語の大過去形は「テイタ形」により訳されているが、この対応に対しては制約がある場合も多い。イタリア語の大過去形と日本語の「テイタ形」における対比に関しては第八章において論じることとする。

6.8 まとめ

本章では、大過去形における一般的な用法に加えて通常の適用から外れているように感じられる用法について論じてきた。主に、複文と間接話法における用法に関して論じてきた。先行研究では、大過去形は異なる二つの視点から定義されており、一つ目はテンスの視点からであるのに対して,二つ目はアスペクトの視点からである。本論は後者を認めることとした。なぜなら、テンスの視点からの説明は二つの事態のあいだにおける時間的な関係とその事態の時間軸における位

[207] 第四章においてすでに述べた例文である。

置のみの視点から説明しようとしているからである。それに対して、アスペクトの視点からの説明はある事態における完了とそれに対する先行性の視点から説明しようとしている。後者を認めると非文であるはずの例文がなぜ非文ではないかが明らかになる。まず、重要な点として挙げられるのは次のことである。複文の場合、主節における時制と従属節における時制は関連している場合もあるが、関連していない場合もあることに注意すべきである。一般的に、大過去形により描写された事態は複文に現れている他の時制より前に起こった事態として解釈されるが、常にそうであるとは限らないことに着目した。なぜなら、大過去形の場合、重要であるのは過去における事態ではなく、過去における設定時点との相関関係だからである。その時点は明示されていなくても必ず存在しているものであるが、文脈でしか解釈できない場合も多い。

また、本章では複文として補足節を取り上げ、その場合大過去形の時間的投錨となっているのは過去形により描写された主節の動詞であることを確認した。つまり、従属節の大過去形はそれに対して先行性を表していると述べた。ただし、本論における主な論点は遠過去形と近過去形の区別と、近過去形の二重性であるため、主節における時制も区別すべきであると本章で主張した。なぜなら、いくつかの例文から明らかになったように、主節における時制により従属節における時制が決まるからである。

最後に、大過去形は複合時制であるため、当然「完了性」を表す時制であると言えるが、これまで挙げてきた二つの種類とは異なり、大過去形は「compiutezza antecedente（過去完了）」という完了を表す時制であると言える。近過去形と同じ完了性を表さないのは、まず大過去形は発話時以後に実現する事態を表すことができないからである。また、近過去形と同様に発話時以前に実現した事態のことを表すことはできるが、近過去形とは異なり大過去形は発話時と無関係である時制であるからである。このように、近過去形と同じ完了性を表すことが不可能である。このことから、大過去形が適用できる領域は過去に限られていることが明らかである。まとめると、イタリア語の近過去形と大過去形は複合時制であるため、必ず「完了性」を表す時制であるが、その時制が必要とする設定時点の位置により完了性の種類が決まる。近過去形の場合、設定時点は発話時に置かれうるが、それ以後においても置かれるため、それぞれ「一時的な完了」と「想像上の完了」を表すことができる。それとは異なり、大過去形は発話時における完了ではなくそれ以前にある時点に対する先行性を表すため、「過去完了」を表す時制であると言える。

第七章

イタリア語における半過去形について

本章は、イタリア語における半過去形の様々な特徴に関して述べることとそれに対する疑問点を明らかにして解決することを目的としている。これまでの章では、過去時制として近過去形・遠過去形・大過去形を挙げ、近過去形と遠過去形は「完成時制（tempi perfettivi）」、大過去形は「過去完了時制（tempi piucheperfetti）」という枠に属していると述べた[208]が、半過去形はそれらとは異なり「未完成時制（tempi imperfettivi）」の枠に属している時制である。そのため、これまで述べてきた時制とは対立する時制であるのが当然である。以下では、この対立に関して述べる前に、まず完成時制との相違点、また半過去形における様々な用法・解釈をまとめていく。次に、半過去形における用法を単文と複文に分けて論じることとするが、複文をさらに二種類（補足節と関係節）に分けるべきであると本章で主張する。なぜなら、その区別により事態の時間的な解釈が異なってくるからである。この際に、半過去形における機能や解釈を明らかにするために従属節において半過去形のみではなく他の過去時制も適用することとする。

7.1 半過去形における基本的な用法について

半過去形は、イタリア語の過去時制の中で、より多様な特性と用法を備えている時制であり、その時制の正確な解釈が文脈によって決定される場合も多いと言える。このため、主な用法を挙げることはできるが、半過去形を用いた文の分析は個々にすべきであることに注意しなくてはならない。この点に関して述べる前に半過去形における基本的な用法を以下でまとめていく。本節では、Vanelli&Salvi(2004)、坂本（1979）と長神（2003）の定義や例文を引用し、それに対する主張も参考にしていく。まず、Vanelli&Salvi(2004:113)における定義を挙げていく。

“L’imperfetto presenta un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto imperfettivo. Diversamente dal perfetto semplice e dal perfetto composto, che considerano l’evento dal punto di vista del presente e come concluso, l’imperfetto presenta l’evento dal punto di vista del passato e come un evento in corso in un dato momento di riferimento nel passato. Serve quindi per fare da sfondo a eventi presentati perfettivamente, nella descrizione di eventi abituali, stati, qualità o per attualizzare eventi passati”.
半過去形は未完成的アスペクト[209]の視点から発話時以前の出来事を描写する時制である。過去における出来事を現在の視点から描写し、さらに完了した出来事として描写する単純完成時制（遠過去形）と複合完成時制（近過去形）とは異なり、半過去形はその出来事を過去の視点から描写し、ある設定時点においてまだ進行中であることを表す時制である。従って、半過去形は習慣的な出来事、状態、性質の描写または過去における出来事を現在と関係づけることによって完了的な出来事の背景を表すのに適切な時制である。

[208] 第六章では、大過去形を完了時制の枠に属している時制であると述べていた。
[209] Vanelli&Salvi(2004)が指摘するように、半過去形は他の時制と共通点を持ち、完了的アスペクトを表す用法も可能とする時制である。例えば、現在形と同様に完了したばかりの出来事または設定時点以後の出来事を表すこともできる時制であると述べている。また、条件法過去とも共通点を持っているとされているが、この用法は主に口語に限られている用法である。

Vanelli&Salvi(2004:113)は説明として以下の例文を挙げている。

(210) Mentre leggevo, Paolo mi sottrasse il portafogli (進行的アスペクト)
(読んでいるときに、パオロは私の財布を抜き取った)

(211) Piero veniva tutte le domeniche (習慣的アスペクト)
(ピエロは毎週の日曜日に来ていた)

(212) Piero era ubriaco/testardo (継続的アスペクト)
(ピエロは酔っぱらっていた／頑固だった)

(213) Il pubblico si commosse: anche gli ufficiali piangevano (継続的アスペクト)
(観客は感動していた。士官も泣いていた)

前章で指摘したように、Vanelli&Salvi(2004)は大過去形の定義においてはテンスよりもアスペクトに焦点を当てている。それと同様に、以上の定義からわかるように、半過去形の場合においても焦点が主にアスペクトに当てられていると言える。また、以上のそれぞれの例文はアスペクトの様々な種類を表しているものであり、一つ目は「進行的アスペクト」、二つ目は「習慣的アスペクト」、その次は「継続的アスペクト」を表している例文である。以上のアスペクトの種類の説明とその区別に関しては節 7.3 において述べるため、ここではこれ以上述べないこととする。

次に、坂本（1979:220）では「半過去形は、表現力及び感情の陰影を表す力に極めて富む時制であるが、その主要な機能は継続を表すことにある。つまり、半過去形は動作の開始と終止の時期は考慮に入れられず、ある動作・状態が続いていた事実を表すのが主な働き」とされている。坂本（1979）は細かい分析を行っているため、そのまま引用していく。用法の説明として以下の例文を挙げている。

① 過去における習慣的・反復的な動作・状態を示す。
(214) Ogni mattina mi alzavo alle 8.
(私は毎朝 8 時に起きていた)

② 過去においてある不特定な期間（いつ始まっていつ終わったか明白でないような期間）継続した動作・状態を示す。
(215) Quando ero ragazzo, andavo spesso a quel fiume a pescare.
(私は子供の頃、あの川によく魚釣りに行った)

③ 過去の特定時点における人や物などの状態を示す。このため、小説・物語などの中で風景、描~~写~~登場人物の性格・状態、事件の背景・状況などを描写するのに用いられる。これは叙述的半過去形（imperfetto descrittivo または imperfetto narrativo）と呼ばれることがある。
(216) Questa mattina, quando mi sono alzato, il cielo era nuvoloso.
(今朝、私が起きたときは、空は曇っていた)

④ 過去において並行していた二つ以上の動作・状態を示す。
(217) Mentre studiavo, i miei amici giocavano a carte.
(私が勉強しているあいだ、友人たちはトランプをしていた)

⑤ 意識的または無意識的にした動作が未完に終わったことを示す。これは、半過去形の示す特性である〈継続しつつある動作〉が未完のまま続いているものであることから当然といえよう。
(218) Quando il professore è entrato nell'aula, per poco non cadeva.
(先生は教室に入ったとき、あやうく転ぶところだった（転ばなかった）)

⑥ 半過去形が遠過去形の代わりに用いられることがある。これは歴史的現在と同じように、過去の一時点に起こった動作の前に読者を引き戻し、立ち合わせるようなニュアンスを持つ。つまり、歴史的半過去形（imperfetto storico）とも呼べるものである。このため、ある叙事的な事柄を述べるようなときに用いられることが多い。

（219）Nel 1265 a Firenze nasceva (= nacque) Dante.
（ダンテは 1265 年にフィレンツェで生まれた）

⑦ 過去に起こった連続的な動作を述べるのに、遠過去形に代わって用いられる。これは、遠過去形を用いるとそれぞれの動作がその瞬間で修了してしまうニュアンスを表すのに対して、半過去形を用いることにより連続性を与え、描写に生彩を与えることができるためであって、記事的半過去とも呼ばれる。

（220）I giocatori cadevano (=caddero), si rialzavano (=si rialzarono) in un secondo, ricominciavano (=ricominciarono) a correre e cercavano (=cercarono) di strapparsi il pallone.
（選手たちは倒れ、すぐまた立ち上がり、再び走り出してお互いにボールを奪い合おうとした）

⑧ 少し前に一度中断した話を再び始めるとき、近過去形の代わりに半過去形を用いることがある。これは、半過去形を用いることによって、先ほどまで話していた話題がまだ未完成のままであったようなニュアンスを与えるためである。

（221）Quella decisione, come dicevo (=ho detto) poco prima, fu fatale per l’ulteriore sviluppo dell’economia italiana.
（少し前にお話したように、その決定はイタリア経済のその後の発展にとって致命的なものでした）

坂本（1979）は他の用法[210]に関しても述べているが、本章の対象と外れているものであるため、ここでは省略する。

最後に、長神（2003）による定義も参考にしよう。長神（2003）では、「直説法半過去は、ある動作・状態が過去のある時点において継続中であり、完了していなかった（いわば「半ば」の段階にあった）ことを示す時制です。過去における継続・反復・習慣などを表す用法がそこから生まれます」とされている。長神（2003:152）も様々な例文を挙げ、主要な用法として挙げているのは継続中であった出来事と習慣的・反復的な行為を表す用法である。以下の例文[211]を挙げている。

① 過去のある時点において、継続中であった動作・状態を表す。

（222）Ieri sono andato in piscina perché faceva caldo
（昨日は暑かったので、ぼくはプールに行きました）

（223）Mentre tornavo da scuola, ho incontrato tua sorella
（学校から帰ってくる途中、君の妹に会った）

② 過去における習慣的・反復的な行為を表す。

（224）Quando frequentavo la scuola, mi alzavo alle sette
（学校に通っていた頃、私は 7 時に起きていた）

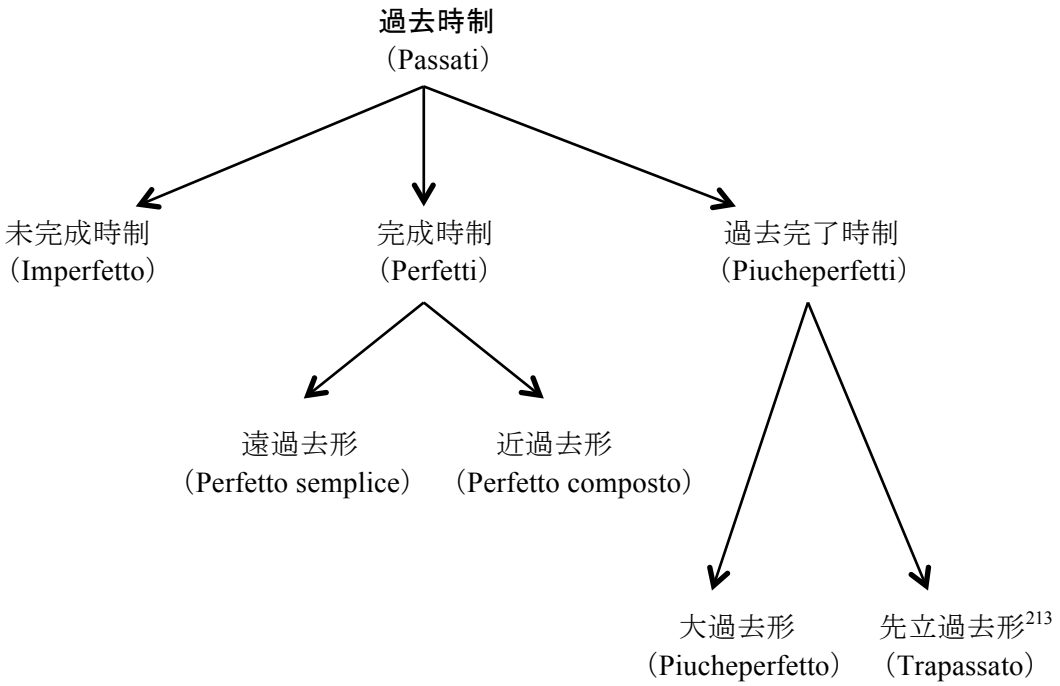
以上のことをまとめると、半過去形に対する定義に共通しているのは「未完成性」を表す時制であることと、持続・継続性、同時・背景性、習慣・反復性などの特性を帯びた用法が基本となることであるとわかる。以下では「未完成性」と「完成性」の対立に関して簡潔に説明していく。

[210] モーダルな用法と仮定法における用法に関しても述べられている。
[211] すべての例文ではなく、代表的な例文のみを引用することとする。

7.2 完成時制と未完成時制の対立について

すでに言及したように、半過去形は「未完成時制（tempi imperfettivi）」を代表する時制であり、この点では「完成時制（tempi perfettivi）」である近過去形・遠過去形と「過去完了時制（tempi piuccheperfetti）」である大過去形と先立過去形と対立する。このため、半過去形の分析の際、テンスの視点のみではなく必ずアスペクトの視点から進めなくてはならない。以下では、なぜアスペクトの視点から進めるべきか、また半過去形は完成時制と過去完了時制に比べるとどのような点で異なっているかという疑問点に答えていく。まず、過去時制を以下の図でまとめよう。

図 32.【過去時制】[212]



本章において主な対立として扱うのは「未完成性」を表す半過去形と「完成性」を表す近過去形・遠過去形の対立であるが、場合により大過去形との対立も対象にする。すでに前章において述べたように、完成時制については「単純時制」と「複合時制」の区別をする必要があり、前者は遠過去形のことを表しているのに対して後者は近過去形のことを表している。近過去形と同様に大過去形も複合時制であるが、図 32 からわかるように、近過去形と同じ枠ではなく過去完了の枠に属していることに注意すべきである。前章では、大過去形を「完成時制」として扱うことにしていたが、実際、この時制は「過去完了時制」である。大過去形により描写される事態は完了している事態であり、「未完成時制」との区別を表すために「完成時制」として扱うことにした。ただし、前章においても述べたように、大過去形はアスペクトの視点からみると二重性をもつ時制であり、完成性を表す時制としても未完成性を表す時制としても捉えられる[214]時制であるため、どちらの枠にも属さず異なる枠に属していることになっている。完成時制との対立に関しては、半過去形は発話時以前に位置する出来事を表すという点では共通しているが、事象に対する視点に関しては相違点が存在しているとまとめることができる。なぜなら、完成時制はある出

[212] Bertinetto（1986:19)から引用したものである。
[213] 先立過去形の使用は文語に限られているため、本論はその時制について述べないこととする。
[214] 詳しくは第六章を参照。

来事を現在の視点から、完了した出来事として眺めているのに対して、半過去形はある出来事を過去の視点から、その出来事が過去のある時点においてまだ完了していない出来事として眺めているという相違が存在しているからである。要するに、半過去形により描写される出来事を線で表すと、その出来事の終結点は視界に入らないということになるため、「未完成」と呼ばれるのである。このため、半過去形はある発話または文章において適切に用いられないとその意味が不完全のように感じられる。例として以下のものが挙げられる。

（225）*Ieri giocavo a carte
（昨日私はトランプをしていた）

（226）*Gigi andava al mare
（ジージは映画館に行っていた）

（227）*Filippo telefonava a sua madre
（フィリッポはお母さんに電話していた）

以上の例（225）（226）（227）はどれも不完全のように感じられ、正確な文として成り立たないことが明らかである。なぜなら、大過去形と同様に、半過去形も「時間的投錨」を必要とする時制であり、それを表す副詞や節などがないとその文が不完全のように感じられるからである。以上の例文を細かく考察すると、例（225）は正確な文として認められるために「mentre guardavo la TV（テレビを見ている間に）」などのような同時性を感じさせる続きを補足する必要がある。同様に、例（226）においても補足が必要であるが、反復のニュアンスを伝えることができない例（225）とは異なり、この例文は反復・習慣の解釈を可能とする例文である。よって、補足として考えられるのは、「ogni estate quando era piccolo（子供の頃、毎年の夏）」などのような補足である。最後に、例（227）も補足を求める例文であるが、この場合においても「同時性」を表す「mentre camminava（歩いているあいだに）」または「反復」を表す「quando si svegliava（起きてから）」などのような様々な補足[215]が可能である。以上のことから、その補足により例文の解釈が異なり、つまり同時性を表すか反復性を表すかなどの補足によってその解釈が変わることがわかったが、動詞自体における意味または性質によっても解釈が異なってくることもあるためそれにも注意すべきである。

以上のように、半過去形の用法は複雑であり、文脈も大きな役割を果たしていることがわかった。半過去形とは異なり、同じ例文において完了時制[216]を適用するとすべての例文が補足をせずに成り立つ例文となってくる。

（225a）Ieri giocai/ho giocato a carte　（遠過去形／近過去形）
（私は昨日トランプをした）

（226a）Gigi andò/è andato al mare　（遠過去形／近過去形）
（ジージは海に行った）

（227a）Filippo telefonò/ha telefonato a sua madre　（遠過去形／近過去形）
（フィリッポはお母さんに電話した）

このように、完成時制は半過去形とは異なり、時間的投錨を必要としない時制であるため、以上の形で成立する例文であることが明らかであるが、一つの疑問点が生じてくる。それは副詞の使用に関する疑問点である。例（225）と（226）を比較すると、前者と後者における相違は「ieri（昨日）」の有無である。このような特定の時間区間を表す副詞が用いられているため、半過去

[215]「si svegliava（起きる）」も「camminava（歩く）」も半過去形により描写されている。
[216] 遠過去形と近過去形の用法とその置き換えの可能性については第一章を参照。

形の伝えるアスペクト的なニュアンスが異なってくると言えるが、その対立をよりわかりやすく説明するために「ieri（昨日）」を用いた同じ例文において半過去形も完成時制も適用してみる。

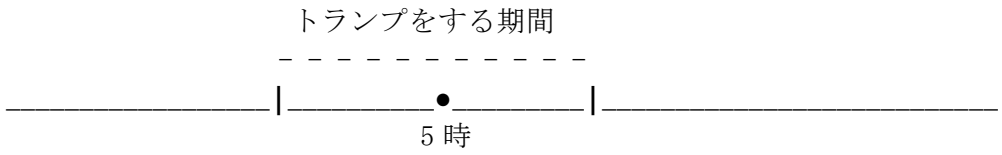
（225b）Ieri, verso le 5, giocavo a carte　　（半過去形）
（昨日、5 時頃に、トランプしていた）

（225c）Ieri, verso le 5, ho giocato a carte　　（近過去形）
（昨日、5 時頃に、トランプをした）

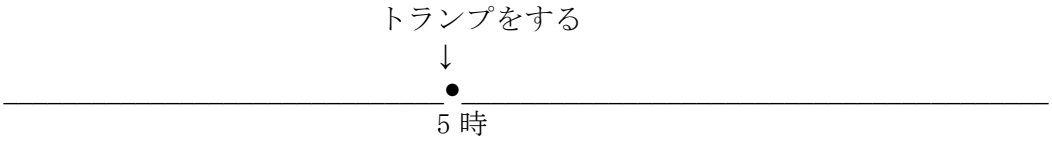
まず、例（225b）は例（225）とは異なり、非文ではなく半過去形の使用を可能とする例文である。これは、言うまでもなく、時間的投錨「verso le 5（5 時頃）」が明示されているからである。また、半過去形を用いる例（225b）も近過去形を用いる（225c）も発話時以前に起こった出来事を表している例文であるためテンスの視点では異ならないが、アスペクトの視点では異なる例文である。それらの例文のあいだにある相違として、前者では当該出来事は 5 時頃という時点においてまだ進行中であるという解釈となるのに対して、後者ではその出来事は進行中ではなくその時点において完了している[217]という解釈となるという相違が挙げられる。このような相違を図で表すと以下のようになる。

図 33.【未完成時制と完成時制における解釈】

（225b）Ieri, verso le 5, giocavo a carte（半過去形）



（225c）Ieri (verso le 5) ho giocato a carte（近過去形）



上記の図からわかるように、前者の場合、ある時間区間が設定され、その中にある焦点において当該出来事が進行中であるのに対して、後者の場合、描写されるのはある時間区間ではなく、過去における一つの時点のみである。さらに、後者の場合、「alle 5」のような表現が現れていなくても例文が成り立つということも一つの相違である。それも、つまり副詞が不要であることも半過去形と近過去形・遠過去形との間の相違によるものである。なぜなら、後者は発話時点以外

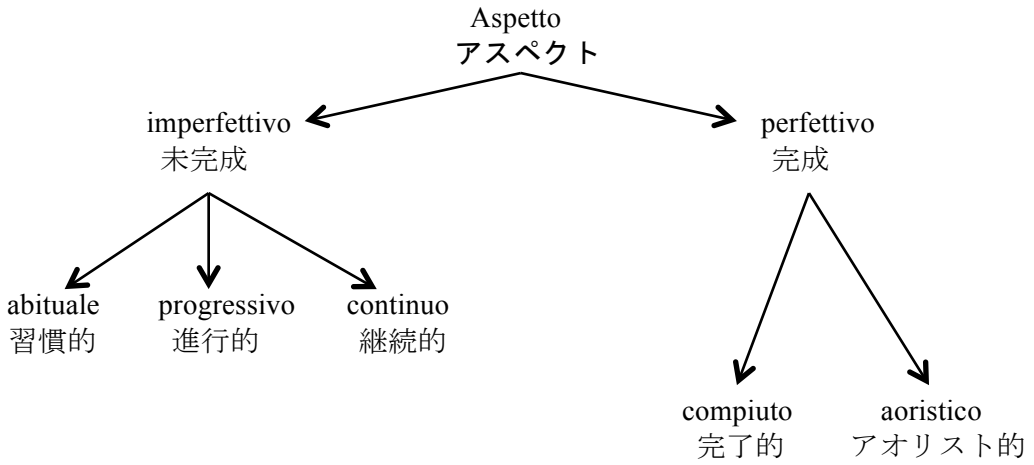
[217] 近過去形は迂言的表現であり、「～し始めた」「～し終えた」という解釈も可能とする。

の明示的時点を必要としない時制であるからである。それとは異なり、半過去形は他の時点、つまり時間軸における位置を明示する時点[218]を必要とする時制である。以上、未完成時制と完成時制における相違を例（225b）と（225c）を介して明らかにした。

7.3 未完成性におけるアスペクトの分類について

本論は、これまで論じてきたように、完成時制に属する近過去形と遠過去形における相違をテンスの視点よりもアスペクトの視点から説明すべきであると主張し、その区別を基準にして様々な現象について説明している。それと同様に、本章では未完成時制におけるアスペクトの区別に関して説明していく。前節において完成時制と未完成時制の対立における様々な特性について簡潔に論じたが、本節では未完成時制におけるアスペクトを対象としていく。節 7.1 において例文を挙げながら、半過去形は進行的アスペクト・習慣的アスペクト・継続的アスペクトを表すことができる時制であることを見たが、第一章においては近過去形と遠過去形が表す完了的アスペクトとアオリスト的アスペクトに関しても述べたため、それも合わせてイタリア語におけるアスペクト体系を以下のようにまとめることとする。

図 34. アスペクト体系について



これまで述べてきたことと上記の図からわかるように、未完成相を表す時制（tempi imperfettivi）と完成相を表す時制（tempi perfettivi）に分け、それぞれの枠にはいくつかのアスペクトのタイプが存在している。第一章における分析は「perfettivo」のみを対象にしていたが、本章は「imperfettivo」を対象としていくため、以上の図の「習慣的」「進行的」「継続的」に関して詳しく述べていく。

7.3.1 進行的アスペクト

本節では、「進行的アスペクト」に関して説明していく。まず、Bertinetto(1986:120)は以下のように定義している。

“l’aspetto progressivo viene attivato ogniqualvolta il verbo indica un processo colto in un singolo istante del suo svolgimento”
進行的アスペクトは、動詞がその展開の一つの瞬間において捉えられた過程を表すものである。

[218] Localizzatore temporale のことである。第六章を参照。

このアスペクトの主な特徴として挙げられるのは、当該の動作が「stare+gerundio（進行形）」と入れ替え可能なことである。以下の例文を参考にしよう。

（226）In quel momento, Enrico dormiva profondamente　　（半過去形）
（そのとき、エンリコはぐっすりと眠っていた）

（227）In quel momento, Enrico stava dormendo profondamente　　（進行形）
（そのとき、エンリコはぐっすりと眠っていた）

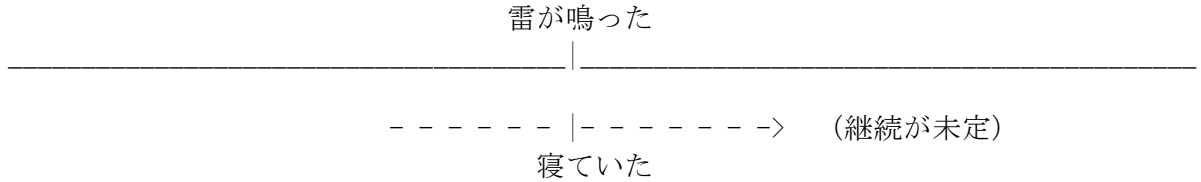
日本語の訳をみると、両方とも同じく訳されているが、イタリア語においては意味が同じであるのにも関わらず表現が区別されている。イタリア語には、「stare+gerundio（ジェルンディオ）」という時制形式が存在し、それは事態が進行中、つまり「〜している最中である」という意味を表す形式である。同様に、半過去形も事態の進行を表す時制であるため、その二つの時制が置き換えられる時制であると上記の例文からわかる。しかし、その入れ替えは常に可能であるわけではなく制約もあるため不可能な場合もある。よって、どの場面においてその入れ替えが不可能であるかという疑問が生じ、それを説明するために以下の例文を挙げる。

（228）Mentre sua sorella dava l'esame, Gigi fumava(*stava fumando) nervosamente
（妹が試験を受けているあいだ、ジージはいらいらして煙草を吸っていた）

以上の例文は、時間的な長さのある二つの動作における同時性を述べている例文であり、主節においても従属節においても半過去形が許されるが、従属節における半過去形は進行形に置き換えることができない。なぜなら、この形式は基本的に進行的アスペクトを表すものであるため、継続的アスペクト[219]を表す以上の例文のような文において適用してもその文が非文になるからである。そのため、当該例文においてはその置き換えが不可能である。

また、進行的アスペクトにおける主な二つの特徴として①「焦点時点」の存在と②発話時点以降における出来事の継続の未定という二つの特徴が挙げられる。以上の焦点時点の存在は半過去形における主な特徴である。それは、未完了時制が必要とする時点であり、その時点から当該出来事の過程における展開が観察される時点である。Bertinetto（1986：78）はその時点を「istante di focalizzazione」と呼び、「un singolo istante entro un intervallo di tempo, corrispondente ad un evento che potrebbe anche essersi bruscamente interrotto nell'istante immediatamente successivo a quello focalizzato」[220]と定義している。

（229）Luigi dormiva nel suo letto, quando all'improvviso scoppiò un tuono formidabile
（ルイージは、恐ろしいほど強い雷が鳴ったとき、ベッドで寝ていた）



[219] 継続的アスペクトについては節 7. 3. 3 を参照。
[220] 焦点時点とは、「ある時間区間内における一つの瞬間を表している。その瞬間はある事態と一致し、その事態が焦点化された直後に中断され得る可能性もある」とされている。Bertinetto（1986：78）を参照。

上記の例文では、従属文が一点のみ（焦点時点）を取り出しているためその時点以前にその過程がすでに始まっていたということがわかる。また、焦点時点以降の出来事の継続に関しては、雷が鳴った後でもルイージが寝ていたか否かは未定であると言える。この継続が未定であるため、半過去形により描写された出来事を図で表すと点線部分で表されることが多い。実際、この点は話者のその出来事に関する知識とは無関係である。なぜなら、話者はその事象の継続に関する情報を持っているか否かということよりも、話者はどのようにその事象を描写するかということが重要であるからである。これは、言うまでもなく、アスペクトによるものである。

7.3.2 習慣的アスペクト

次に、**「習慣的アスペクト」**に関して説明していく。Bertinetto（1986：139）では以下のように定義されている。

“L’aspetto abituale riguarda il ripresentarsi più o meno regolare di un certo processo, in relazione per esempio, a talune condizioni ambientali ben definite e ricorrenti”
習慣的アスペクトはある特定の繰り返される条件が現れるとある過程が通常通りに繰り返されることに関して述べるものである。

以下のような例文が説明として挙げられる。

（230）In quel periodo, Marco si alzava alle 6
（あの頃、マルコは 6 時に起きていた）

（231）Marco prende[221] sempre il rapido delle 7 e 15.
（マルコはいつも 7 時 15 分の特急に乗る）

このような場合には、正確な解釈を得るために繰り返しや期間などを表す副詞が重要なものとなる。なぜなら、その副詞がないと文に対する解釈が異なり、習慣的な意味が完全になくなる場合と、その出来事が一回のみの出来事のように解釈される[222]場合があるからである。このように、反復や期間を表す副詞は重要な役割を果たしているものであると明らかになったが、その反復の回数などが不特定でなければならないという必要性もあることに注意すべきである。例えば、上記の例文において「sempre」の代わりに 3 volte（3 回）のような回数を表す副詞に変更するとその文は非文となり、その文法性を保つために完成時制を適用しなくてはならない。このように、習慣的アスペクトは時間を限定する表現とは両立することができないことが明らかになる。ただし、東（1999）が指摘しているように、習慣的アスペクトに関して注目すべきこともある。次の例文を参考にしよう。

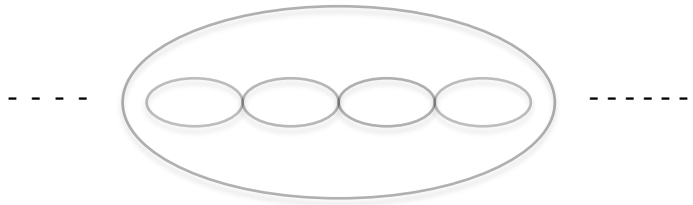
（232）Nell’agosto dell’anno scorso, Michele mi veniva/venne/è venuto a trovare ogni domenica
（去年の 8 月、ミケーレは毎週の日曜日に私に会いに来ていた／来た）

上記の例文では、三つの時制が用いられ、veniva が半過去形、venne が遠過去形、è venuto が近過去形であるが、どれを用いてもその例文は非文とならない。この場合には、日曜日の回数は計算可能であり、その意味では不定ではないが、その限定のされ方が直接ではないため半過去形の使用が可能となる。

[221] この例文においては半過去形ではなく現在形が用いられている。現在形も未完了を表す時制であるからである。
[222] 副詞を削除すると Marco si alzava alle 6 になるが、習慣としての意味が完全になくなる上に、文として成り立たないことも言える。後者においてもその繰り返しを表す副詞を削除すると Marco prende il rapido delle 7 e 15 になるが、一回のみの動作として解釈される。

これまで述べてきたように、習慣的アスペクトと進行的アスペクトのあいだには共通点も相違点も存在している。まとめると、まず「不定」の概念が共通点であるということが明らかである。そのため、習慣的アスペクトにおいても進行的アスペクトにおいても現在形と半過去形の適用ができる。相違点として挙げられるのは、進行的アスペクトの場合、描写された出来事は一回のみ起こった出来事であり、時間の基準点が常に決定されていることである。さらに、描写されている時点以降の出来事における継続は不定であるということも挙げられる。それに対して、習慣的アスペクトの場合、その出来事の回数が不定であり、時間の基準点として副詞が必要となると言える。習慣的アスペクトはその三つのうち、つまり「進行的アスペクト」「継続的アスペクト」「習慣的アスペクト」のうち、より複雑なものであるため、以下では図で説明することとする。

図 35. 習慣的アスペクト



以上の図は、一つの出来事の中に複数の動作があるということを表そうとしている。要するに、その出来事はある時間区間以降においても継続することができるため点線で描写したが、その出来事は基本的に複数の動作により成り立っているものであり、それらの動作は完了しているため丸の形になっている。このように、大きな出来事とその中にある小さな動作の区別をする必要があると言える。この区別により本節が対象としている三つのアスペクトの特徴が明らかになる。

7.3.3　継続的アスペクト

最後に、**「継続的アスペクト」**を表す例文を以下に挙げていく。Bertinetto（1986；162）では次のように定義されている。

“L’aspetto continuo rappresenta la terza e ultima accezione imperfettiva. Di essa esistono due varianti, l’una ‘durativa’ e l’altra ‘iterativa’”
継続的アスペクトは未完成的アスペクトにおける三つ目のタイプであり、二種類に分けられている。一つ目は「持続的」であるのに対して、二つ目は「反復的」である。

以上の区別、つまり持続的であるか反復的であるかというのは動詞の性質によるものである。この区別に関しては後述するため、以下では基本的な継続的アスペクトを表す例文を挙げる。

（233）Durante la conferenza, Luigi chiedeva ad Anna di tradurgli ciò che diceva l’oratore
（会議のあいだに、ルイージはアンナに演説者が言っていることを訳すように頼んでいた）

上記の例文において用いられている半過去形は習慣的あるいは進行的アスペクトを表す半過去形であるように感じられるが、その出来事は一つの場面において起こる出来事であるため、習慣的アスペクトとして認めることができない。さらに、stare＋ジェルンディオの迂言的表現の適用ができないため進行的アスペクトを表す半過去形でもないということがわかる。詳しく言うと、stare + gerundio の適用が可能ではあるが、この例文に現れている「durante la conferenza（会議のあ

いだ）」により表される時間的な長さと両立することはできない。以下の例文を再び参考にしよう。

（234）＝（228）Mentre sua sorella dava l’esame, Gigi fumava(*stava fumando) nervosamente
（妹が試験を受けているあいだ、ジージはいらいらして煙草を吸っていた）

以上の例文においても可能となる時制は半過去形のみである。なぜ進行形が不可能であるのかという疑問が生じるが、Bertinetto がすでに指摘したように、継続的アスペクトを可能とするのは「mentre（〜しているあいだに） + imperfetto di verbo durativo（継続動詞半過去形）, perfetto di verbo durativo（継続動詞完了時制） 」「mentre（〜しているあいだに） + imperfetto di verbo durativo（継続動詞半過去形）, imperfetto di verbo durativo（継続動詞半過去形）」という組み合わせのみである。さらに、以上の例文に関しては次のことも述べなくてはならない。文脈を少し変えるとその時制の適用も不可能となってくる。例えば、「10 sigarette（10 本）」などのように限定する表現を補足すると半過去形が不自然になり、その例文の文法性を保つために完成時制を適用しなくてはならないこととなる。そのような補足をすると半過去形の使用が不可能になる理由として、半過去形は基本的に数を表す表現や時間を限定する表現などと対立することが挙げられる。続いて、継続的アスペクトにおける二つのバリアントの区別に関して説明し、それに適する例文を挙げていく。

【持続的バリアント】
（235）Mentre sua moglie partoriva, Gigi fumava nervosamente
（奥さんが出産しているあいだに、ジージは落ち着かずに煙草を吸っていた）

【反復的バリアント】
（236）I fatti si svolsero in questo modo:io lo guardavo e lui mi faceva le boccacce; di nuovo lo guardavo, e lui mi faceva le boccacce. Alla fine gli dissi: “Tu non sai chi sono io”
（あのことは以下のように進んだ。私は彼を見て、彼は私に向けて口をゆがめていた。私が再び彼を見たら彼は口をゆがめていた。結局、私はこう言った。「私は誰だと思う？」）

この場合も一点を取り出す場合ではないため進行的アスペクトとして捉えることができない。しかも、この場面は何度も起こった出来事ではなく一回限りの出来事であるため、習慣的アスペクトとして捉えることも不可能である。従って、これは継続的アスペクトの「反復的」バリアントであると言える。

まとめると、継続的アスペクトは、描写されている出来事の以降の継続に関しても、その出来事の繰り返しの回数に関しても不定であるという結論に至る。また、進行的アスペクトと習慣的アスペクトの関係に関しては、後者の場合、その事態が起こる場面がただ一つではないという相違が存在している。これらの三つのタイプはいくつかの特徴を共有しているが、文脈によりその区別をすることができると言え、様々な要素の影響によりその区別が複雑である場合も多い。このことより、半過去形も近過去形と同様に二つ以上のアスペクトのタイプをもっている時制であるとわかる。

7.4 半過去形の未完成性について

以下では、なぜ半過去形により伝わる情報が不完全に感じられる場合があるのかという点に関して説明していく。まず、半過去形により描写された出来事の過程が不定であることがこの時制の基本にある概念である。これは、Bertinetto（1986）が指摘しているように、以下の三点に対して明らかになるものである。

（a）ある特定の時点または区間における過程の継続の不定性
Prosecuzione indeterminata del processo oltre l’istante o intervallo considerato

（b）過程の継続における不定性
Durata indeterminata del processo

（c）過程の反復回数の不定性
Numero indeterminato delle iterazioni del processo

まず、（a）はどのようなものであるかを説明していく。この過程の継続における不定性は主に進行的アスペクトにおいて明らかになるものであるが、習慣的アスペクトと継続的アスペクトの表出においても見られる。以下の例文を参考にしよう。

（237a）Quando arrivò la notizia, Andrea faceva tranquillamente colazione come ogni mattina.
（あの情報が届いた時に、アンドレアはいつもの朝と同じようにゆっくり朝食をとっていた）

例（237a）の場合、「朝食をとる」動作の継続が問題となっている。なぜなら、半過去形により描写されているからその動作は終了しているか否かという情報が明らかではないからである。つまり、例（237a）を読むとアンドレアは朝食を最後まで食べたかどうかの情報は得られないが、その動作の開始に関する情報は得られる。それは、その動作はある「焦点時点」においてすでに始まっていた[223]ということである。この例文は二つの解釈を可能とし、一つ目はアンドレアは朝食を途中でやめたという解釈であるのに対して、二つ目はアンドレアは朝食を最後まで食べたという解釈である。前者の場合、あの情報が届いたためアンドレアは朝食の最中に出かけたなどのような続きも可能であるのに対して後者の場合、アンドレアは情報が届いた直後に朝食を最後まで食べたというような続きも可能であると言える。
以上、半過去形の使用により、解釈に関して様々な問題が生じることがわかったが、半過去形以外の時制の使用により同じ問題が生じるか否かを見てみよう。以下の例（237b）から明らかになるように、半過去形の代わりに完成時制を用いるとその解釈が代わり、アンドレアは朝食を最後まで食べたという解釈になる。つまり、例（237a）とは異なり、その動作は丸ごと終了している動作として解釈される。

（237b）Quando arrivò la notizia, Andrea fece tranquillamente colazione come ogni mattina.
（あの情報が届いた時に、アンドレアはいつもの朝と同じようにゆっくり朝食をとった）

上記の例（237b）において完成時制を用いることも可能であると述べたが、場合により許される時制は近過去形のみあるいは遠過去形のみであり、例（237b）においては遠過去形「fece colazione」の使用のみ許される。なぜなら、「arrivò（届いた）」も遠過去形であるからである。また、例（237b）の場合、「朝食をとる」動作はいつ始まったかという情報が明らかであり、それは従属節が表す時点であると言える。伝統的な説明では、半過去形により描写された出来事は、継続性あるいは連続性をもっているとされているが、詳しく説明すると、重要なのはその出来事の時間的な長さまたは継続性[224]ではなく、その出来事がどの視点から眺められているかということである。このことを Bertinetto（1986：347）は以下のように述べている。

“Quel che conta, insomma, in merito all’indeterminatezza di un processo concepito progressivamente, non è il fatto che la situazione descritta si protragga per un lasso di tempo più o meno lungo, ma semplicemente che vi sia la possibilità di isolare almeno un singolo istante, nel quale il processo medesimo possa essere colto nel suo (sia pure istantaneo) svolgersi. Più esattamente, possiamo dire che la fase focalizzata del processo viene bloccata, cioè sottratta al fluire del tempo fisico, e mantenuta al centro dell’attenzione per una durata potenzialmente indefinita”.
進行的に把握される過程に関して重要なのは、その長さではなく描写された出来事の過程の流れの中に少なくとも一つの瞬間を切り離すことが可能である上にその瞬間においては過程自体が過程進行中であるものとして把握することができるということである。詳しく言うと、焦点の当て

[223] その動作が進行中であるため、進行形「stava facendo colazione」により描写することも可能である。
[224] 言うまでもなく、出来事の継続は Aktionsart によるものであるため、半過去形により描写されても継続を表すことが常に可能であるとは限らない。

られた過程の段階が固定されると言ってよい。つまり、その段階が中心となり、物理的時間の流れから引き出される。

次に、（b）はどのようなものであるかを説明していく。以上の例（237a）からもわかったように、半過去形はその出来事の過程における継続・時間的長さまたは終了に関する情報を提供しない時制である。すでに述べたように、このような解釈に関する問題が生じるため、半過去形を用いた文または発話が場合により不完全であるように感じられる。そのとき、副詞やその時間区間を表す表現などの追加が必要となる。ただし、以下の例文からわかるように、半過去形は「per（〜間）」などのように特定の継続を表す時間副詞とは対立する。

（238a）*Gino mangiava per due ore
（ジーノは 2 時間食べていた）

例（238a）が非文であるのは、半過去形は「per（〜間）」と対立する上に、時間的な位置が明らかではないからである。つまり、解釈するために時間的投錨が必要となり、それがないとこの例文は不完全であるように感じられる。例（238a）に特定の時間区間を設けてみよう。

（238b）Gino mangiava per due ore ininterrottamente quando era nervoso
（ジーノは緊張していたときに、間断なく 2 時間食べていた）

このように、特定の文脈を追加すると半過去形における解釈は不完全ではなく文法的な例文となってくる。また、上記の例文においては「mangiare（食べる）」のような telic な動詞が用いられているが、atelic な動詞の場合も同じであるか否かという疑問が生じてくる。以下では atelic な動詞を用い、この場合においてもある特定の時間区間を設けると正確な文として認められることを確認する。当然、この場合でも時間区間が挙げられないと非文となる。

（239a）*Gino andava in biblioteca per due ore
（ジーノは 2 時間図書館に行っていた）

（239b）Gino andava in biblioteca per due ore tutti i giorni prima dell’esame
（ジーノは試験の前に毎日 2 時間図書館に行っていた）

例（238a）と同様に、例（239a）も時間区間を必要とする例文であり、その時間区間が挙げられた場合、半過去形の使用に対して問題が生じない。ただし、例（238b）と例（239b）における半過去形は進行的アスペクトを表す用法ではなく、「quando era nervoso（緊張しているとき）」と「tutti i giorni（毎日）」のような反復を表す表現が明示されているため、習慣的アスペクトを表す半過去形であることに注意すべきである。この場合、半過去形の適用は問題なく可能であるが、分析のためにそれは進行を表す用法ではないことをはっきりさせなくてはならない。習慣的アスペクトを表す半過去形の場合、動作における継続の境界はその出来事の全体的な継続ではなく、その出来事が成り立っている個々の動作における継続を対象としている。なぜなら、その出来事は毎日の出来事であるとしてもいつからいつまでの出来事であるのか、という情報はその文脈からは判断できないからである。また、以下の例文も参考にする。

（240）Per tutta l’estate, la signora Elvira ci lasciava ogni sera un litro di latte sulla porta
（夏中に、エルヴィラさんは毎晩ドアの前に牛乳 1 リットルを置いていた）

これまで述べてきたように、例文（240）も「per tutta l’estate（夏中に）」のような時間区間を表す副詞を用いているため、文法的な例文であると言える。ただし、この例文の解釈において疑問点が生まれる。それはその夏の回数に関する問題点である。つまり、「per tutta l’estate」における 夏（estate）というのは毎年の夏であるのか、あるいは一度の夏であるのかという情報は不明であるため、二つの解釈が可能となる。一つ目の解釈、つまり毎年の夏であるという解釈のほうが自然であると Bertinetto（1986：349）は述べているが、「estate」が単数形になっているため、本論で

は二つ目の解釈、つまり一度の夏であるという解釈を認めることとする。もし複数形「estati」であるなら一つ目の解釈を認める。ただし、一つ目の解釈が必ずしも不可能だとは限らないため、その解釈も参考にしなくてはならない。「毎年の夏」だとすると、しかしその夏の回数が明示されていないため、出来事の全体的な継続区間も不明であり、過程の継続における不定性が問題になってくる。ただし、文脈は過程の継続に関する様々な情報を細かく提供することもできるため、アスペクトの特性から厳密に考慮すべきではなく、話者が選択した視点から考慮すべきであると言える。

最後に、（c）はどのようなものであるかに関して説明していく。これは反復回数に関するものであるため当然習慣的アスペクトに繋がるものである。説明として以下の例文が挙げられる。

（245） Gigi andava al cinema tutte le sere
（ジージは毎晩映画館に行っていた）

（246） Gigi andava spesso al cinema
（ジージは映画館に頻繁に行っていた）

（247）*Gigi andava al cinema cinque volte
（ジージは映画館に 5 回行っていた）

上記の例文の連鎖では、非文として認められるのは三つ目の例文のみである。なぜなら、その例文においてはその事象の回数が明示されているからである。それに反して、例（245）と例（246）が文法的な例文であるのは、事象の回数が不明であるためである。従って、半過去形は回数を表す副詞とともに適用することができないという結果に至る。これらの例文において半過去形の代わりに完成時制の適用も可能であり、その場合においても文法的な文として認められる。なぜなら、完成時制は半過去形とは異なり、時間を表す副詞の様々な使用を認める[225]からである。また、完成時制は反復や回数などのニュアンス・情報をそのまま伝える時制ではなく、必ずそれを副詞などを介して表現することを求める時制であるからである。要するに、半過去形を用いた文においては反復という概念がすでに含まれているのに対して、完成時制を用いた文においてはその概念が含まれていないということが明らかである。以下の例文も参考にしよう。

【未完成時制（半過去形）】
（248） Quando mio padre partiva,io andavo con lui in aeroporto
（お父さんの出発のとき、私は一緒に空港まで行っていた）

【完成時制（遠過去形／近過去形）】
（249）Quando mio padre partì/è partito,io andai/sono andato con lui in aeroporto
（お父さんの出発のとき、私は一緒に空港まで行った）

以上の例文は解釈に関する半過去形と遠過去形・近過去形の対立を明らかにする例文である。前者において、その動作における反復・習慣が表されるのに対して、後者において、そのニュアンスが現れず、当該動作の回数が一回に限られていると解釈される。これは、完成時制は反復性を表すことができないということではなく、その時制自体にはそのニュアンスが含まれていないためである。その動作における回数を明示すると完成時制を用いても反復性のニュアンスが伝わる。それと同様に、完成時制自体には同時性のニュアンスも含まれていないため、それを表す適切な副詞などの追加によりそのニュアンスを伝えることができるようになる。

以上のように、完成時制とは異なり、半過去形はその出来事の確定の回数を明示する文脈においては用いられないことがわかった。

[225]「andò al cinema 5 volte（映画館に 5 回行った）」が可能である。

7.5　半過去形における時間的特性

半過去形は、周知のように、「過去における同時性を表す時制」である上に、独立できない時制である。なぜなら、すでに述べたように、文の中に同時性を表す表示がないとその文の意味が不完全のように感じられるからである。過去時制の中で同時性を表すことを可能とする時制は半過去形のみであることにも注目しなくてはならない。こういった過去における同時性は半過去形における三つの特性のうちの一つである。すべての特性を以下に並べていく。

（a）過去における同時性
（b）過去における現在
（c）過去における未来

まず、（a）について考察しよう。半過去形は過去における同時性を表す時制であるが、それはその同時性を表す表示の有無によるものである。その表示がある場合、半過去形の適用に対する違和感がないのに対してその表示がない場合、半過去形の適用に対する違和感が生じると言える。

（250）*Ieri dormivo (tutto il pomeriggio/per un'ora)[226]
（昨日寝ていた（午後いっぱい／一時間））

以上の例文は明らかに非文であり、なぜ非文として認められるかというと、どの事態との同時性を表すかを伝える表示がないからである。また、この例文から半過去形により描写された動作の時間的な長さは無関係であることもわかる。つまり、「寝る」という動作は 10 分の動作であっても何時間の動作であっても、半過去形の適用は不可能である。例（250）を以下のように変えてみると半過去形の適用に対する問題がなくなる。

（250a）Ieri, a quest'ora dormivo
（昨日、今の時間に私は寝ていた）

（250b）Ieri, mentre mia madre faceva le pulizie, io dormivo　　（同時性）
（昨日、お母さんが掃除しているあいだに、私は寝ていた）

以上の例文からわかるように、特定の時間区間を適用するとその半過去形の適用が可能な適用になり、これは完了時制との主な相違である。なぜなら、例（250）において遠過去形あるいは近過去形を適用すると非文とならないからである。ただし、近過去形・遠過去形にすると意味が異なってくるため注意すべきである。例（250b）の時制を変えてみると以下のようになる。

（250c）Ieri mia madre ha fatto le pulizie e io ho dormito
（昨日、お母さんは掃除して、私は寝た）

言うまでもなく、例（250b）と（250c）に対する解釈は異なるものである。後者の場合、その二つの動作における相関関係が曖昧であり、単なる複数の動作の時間的な連鎖として解釈される。さらに、動作の時間的な順番は必ず「掃除する」「寝る」となるのではなく、「寝る」「掃除する」の順番も可能である。もし例（250c）に「nello stesso tempo（同時に）」などのような副詞を補足するならば例（250b）と同様に同時性を表す例文となってくる。

また、半過去形を用いた例文に関しては次のことも言える。上記の例文（250a）と（250b）は両方半過去形を用いている例文であるが、その半過去形は同じ機能を果たしている半過去形ではない。前者は進行的アスペクトを表す半過去形であるのに対して、後者は継続的アスペクトを表す半過去形である。これまで、半過去形は時間区間の表示、つまり投錨ができる時間を必要とする時制であると述べたが、場合によりその時間的投錨は明白でなくてもよい。なぜなら、前章に

[226] 近過去形の「ho dormito（寝た）」なら可能である。

おいても論じたように、大過去形はある設定時点を必要とする時制であるが、その時点は常に明示されるとは限らないのと同様に、半過去形の場合においても場合によりその時間的投錨が常に明示されるとは限らないからである。重要なのは、動作の過程の展開において一つの焦点時点を観念的に切り離すことができることである。半過去形の適用に当たっては、アスペクトの視点のみではなく文脈の役割も重要であり、ある文において用いられた半過去形の正確性の度合いは文脈でしか判断できないときが多いと言える。

次に、（b）の「過去における現在」の特性に関して説明していく。Bertinetto（1986：360）は以下のように説明している。

“Tale tempo trasferisce nel passato tutte le informazioni che sarebbero veicolate, al ME, attraverso l’uso del presente”
この時制は発話時点において現在形により描写されるはずのすべての情報を過去に移す。

上記の説明からもわかるように、半過去形と現在形は共通している時制であると言える。その共通性を説明するために以下の不変の状況の描写を表す例文が挙げられる。

（251）Il tizio con cui hai parlato ieri era di Messina
（昨日あなたが喋っていた人はメッシナ出身だ）

次の例文も参考にしよう。

（252）Gigi ieri mi ha detto che Adriana era malata
（昨日ジージはアドリアナが病気だと言った）

上記の両者の例文において半過去形が用いられているが、その時制により描写されている動作は過去におけるものではなく、現在においても事実であると言える。つまり、例（251）において半過去形が用いられていることにより、その人はもうメッシナ出身ではないという解釈が可能であると考えられるが、実際に発話時点においてその人はまだメッシナ出身であるという解釈が正しいのである。同様に、例（252）におけるアドリアナの病気は発話時以前のことではなく発話時においてまだ続いている状態[227]である。つまり、アドリアナはまだ病気であるという解釈が正しいということである[228]。なぜこの置き換えが可能であるかというと、Sot (Sequence of Tense)または時制の一致のルールが存在し、それに従わなくてはならないからである。この時制の一致のルールは「牽引ルール（Regola di attrazione）」と呼ばれ、そのルールによると主節における動詞が過去形により描写されると、従属節の動詞もその影響を受けて過去形により描写されることになる。このように、例（251）においても例（252）においても従属節の時制は発話時においても事実であるのにも関わらず半過去形となっているのは主節における時制は過去形であるからであると説明できる。

また、例（252）は間接話法を代表する例文であり、簡潔にこの用法に関して説明していく。前章において間接話法と直接話法における大過去形の使用について論じたように、直接話法の文が間接話法になると副詞のみではなく時制も変更することとなっている。例（252）を直接話法に変えると以下のような文になる。

（253）Gigi ieri mi ha detto:“Adriana è malata”
（ジージは昨日アドリアナが病気だと言った）

以上のことからわかるように、直接話法における現在形は間接話法に変えると半過去形になるが、時間的な意味に関しては変更がない。このことからも、半過去形はなぜ「過去における現在」と呼ばれるかが明らかになる。

[227] 第一章を参照。
[228] アドリアナはもう病気じゃないという解釈をもたらす時制は必ず近過去形である。

最後に、（c）に関して説明していく。半過去形は過去時制であるため直示的な時制として用いられると過去の出来事を描写するが、半過去形は時間的投錨を必要とする時制であるため、その時間的投錨がないと文は不完全であるように感じられるということをこれまで述べてきた。また、これまで挙げてきた例文はすべて「出来事時点」「発話時点」の順番に従うものであるが、それは言うまでもなく半過去形は過去時制に属している時制であるためである。その出来事時点と発話時点のあいだの距離が無関係であり、昔の出来事も最近のことも描写できる[229]ため、半過去形は非常に柔軟性をもっている時制であると言える。また、過去における現在を表す時制のみではなく「過去における未来」も表す時制であり、それは “uso prospettivo” と呼ばれ、過去における未来の用法を表している。この用法はその柔軟性をより明らかにする用法である。以下の例文からわかるように、この用法の場合、条件法過去形との置き換えも可能である。

（254）Non sapevo che Gianni veniva/sarebbe venuto a trovarvi domani
（ジャンニが明日来ると私は知らなかった）

例（254）における半過去形は発話時以前に起こった出来事のことを表す例文ではなく、この半過去形による用法は “uso prospettivo”と呼ばれ、「過去における未来」の機能を示している。このように、半過去形は過去における未来も過去における現在も表すことができる時制であるため、柔軟性をもつまたは多様性をもつ時制であると言ってよい。

まとめると、半過去形における主な時間的特性は「過去における同時性」「過去における現在」「過去における未来」の三つである。このことから、なぜ半過去形は柔軟性・多様性をもつ時制としてよく定義されるかということが明らかになった。

7.6 複文における半過去形の用法について － 補足節と関係節を中心に －

前節では、単文における半過去形の用法を主に対象にしていたが、本節では複文における用法について述べていく。対象とするのは主節における用法ではなく、従属節における半過去形の用法のみである。特に、場合によりどのような解釈が生まれるのか、どのような用法が認められるのかまたは認められないのかなどという点に着目していく。すでに言及したように、半過去形はイタリア語の過去時制の中で、より多様性を備えている時制であり、その解釈が文脈によって決定される場合が多い。このため、半過去形を正確に解釈するために、いくつかの要素を考察しなくてはならないと言え、これまで考察すべきものとして挙げたのは副詞などであったが、本節では他の要素も考察すべきであることを主張する。それは節の種類の区別である。なぜなら、節の種類により複文における半過去形の用法が異なってくるからである。以下では、補足節[230]と関係節における用法の相違に関して述べていく。まず補足節[231]における時制の用法について述べ、その次に関係節における時制の用法について述べていく。ただし、本章は半過去形を中心としているが、他の時制との比較から生じる情報も重要であるため、従属節における近過去形と現在形の適用に関しても言及していく。このように、本節では半過去形、近過去形と現在形を用いた補足節と関係節を挙げながらその相違点を明らかにしていく。以下の例文を分析の対象にすることとする。

【補足節】

（255a） Gigi ha detto che Adriana era malata （半過去形）
（255b） Gigi ha detto che Adriana è stata malata （近過去形）
（255c） Gigi ha detto che Adriana è malata （現在形）

[229] 近過去形と遠過去形との相違点に関しては第一章と第二章を参照。
[230] 間接疑問節も同じ用法を可能とする。Renzi, Salvi, Cardinaletti（1995）を参照。補足節を表す例文は Giorgi（2002, 2009, 2010）から引用したものであるが、関係節を表す例文は Renzi,Salvi, Cardinaletti（1995）から引用したものである。
[231] 従属節における時制の適用に関しては第一章を参照。

【関係節】

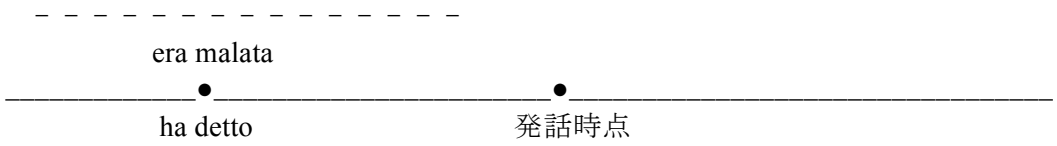
（256a）I ladri sono entrati nell’appartamento di una ragazza che abitava vicino a me　（半過去形）
（256b）I ladri sono entrati nell’appartamento di una ragazza che ha abitato vicino a me　（近過去形）
（256c）I ladri sono entrati nell’appartamento di una ragazza che abita vicino a me　（現在形）

7.6.1 補足節

本節では、補足節における半過去形の使用について論じるが、その前にまず半過去形の一般的な適用による解釈に関して簡潔に述べるべきである。周知のように、従属節において用いられると半過去形は主節の過去時制との同時性を表す時制であるため、「presente nel passato（過去における現在）」と呼ばれることもある。この代表的な用法が以下のような例文により明らかになる。

（255a）Gigi ha detto che Adriana era malata
（ジージはアドリアナが病気だと言った）

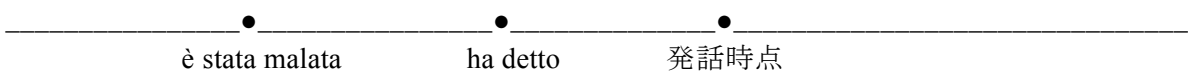
例（255a）における解釈は一つのみであり、それはアドリアナの病気はジージの発言と同時であるという解釈である。つまり、従属節において用いられた半過去形は主節における時制を時間的投錨として扱っているということになる。それは、すでに前章において述べたように、時間副詞のみではなく、主節もその機能を果たすことができるからである。例（255a）を以下のように表すことができる。



以上の図からわかるように、従属節において描写された状態は発話時点とは無関係であり、重要なのは主節において描写された事態との同時性のみである。ただし、前節で説明したように、半過去形の特徴はその事態の持続に対する不定性であり、その不定性は例（255a）においても現れる。なぜなら、「forse lo è ancora（今もそうかもしれません）」のような補足も可能であるからである。以下の例文からわかるように、これは従属節における近過去形の適用との主な相違点である。

（255b） Gigi ha detto che Adriana è stata malata　（近過去形）
（ジージはアドリアナが病気だったと言った）

この場合、アドリアナの病気は過去における出来事であり、「ha detto」との同時性を表すことができず、その前に起こった出来事として解釈すればよい。つまり、「essere malata（病気である）」という事態は主節の「dire（言う）」より以前に起こったものであり、「言う」「病気である」という二つの事態が同時であるという解釈が不可能である。以下の図で表すことができる。



以上のことから、病気であることと伝達の動作は重ならない事態であり、前者は必ず後者より後に起こった事態として解釈しなくてはならない。また、例（255a）とは他の点に関しても異なっていると言え、それは発話時点までの持続の可能性の有無である。なぜなら、例（255a）の場合、適切な補足を加えるとその病気は発話時点においても持続する可能性があると述べたが、それに反して、例（255b）の場合にはその可能性がないからである。このことに関しては後述するためここではこれ以上述べないこととする。

以下では、参考のため、動作を表す例文も挙げていく。例（255a）と同様に、従属節において描写された事態は主節の事態と同時であるという解釈が生じる。

（257a）Gigi ha detto che Adriana dormiva[232]
（ジージはアドリアナが寝ていると言った）

このように、「寝る」動作と「言う」動作は同時であり、「ha detto」は「dormiva」の時間的投錨という働きを果たしていると言える。前節においてすでに述べたように、SoT (Sequence of Tense) または時制の一致というルールが存在し、それに従わなくてはならないため同時性を表すためには半過去形の適用が強制的である。この時制の一致のルールによると主節における動詞が過去形により描写されると、従属節の動詞もその影響を受けて過去形により描写されることになる。しかし、「過去形」という言い方が曖昧であり、イタリア語は過去時制が豊かな言語であるため、その「過去形」をはっきりと区別しなくてはならない。なぜなら、主節においても従属節においても過去時制に属している近過去形・遠過去形・半過去形・大過去形のどれが用いられているかということにより時制の一致のルールが変わるからである。以下では、例（257b）においても近過去形を適用するが、この場合においても二つの事態の時間的な相関関係が変わり、半過去形を用いた例文がもたらした同時性がなくなると言える。

（257b）Gigi ha detto che Adriana ha dormito
（ジージはアドリアナが寝たと言った）

本論は主節における近過去形・遠過去形のみを対象とするため、半過去形と大過去形を用いた場合に関して述べないが、主節における時制の区別に関してはすでに第一章において述べた。本章は従属節における過去時制の適用を対象とし、特に半過去形の適用について述べることを目的としているため、本章では従属節における半過去形と近過去形の適用の相違点について論じていく。また、半過去形は「過去における現在」と呼ばれているため、現在形を用いた従属節とも比較していく。なぜなら、以下のような例文が SoT のルールに従わないため非文であるように感じられるが、実際はそうではないからである。例（255c）も可能であるが、解釈に関しては様々な問題点が生じる。ここでは簡潔に言及するだけにとどめ、この点に関しては次節において詳しく説明していく。

（255c）Gigi ha detto che Adriana è malata
（ジージはアドリアナが病気だと言った）

このように、従属節において認められる時制は半過去形のみではなく現在形の適用も認められる。

以上のように、時制の一致のルールが存在しているが、以下で説明するように、このルールはすべての節において適用することができるわけではなく、その種類によって異なるものである。これまで挙げてきたすべての例文は**補足節**であるため以上のルールが有効である。補足節の場合、最有力な視点は主節であり、発話時に対する直示的な先行関係を表す情報は二次的なものである。そのため、半過去形の適用が強制的であり、主節における動詞と従属節における動詞はお互いに繋がっていると言える。それに反して、**関係節**の場合、発話時の時間的な視点が最有力になる可能性があるため、半過去形以外の時制の適用も可能になる。それらの時制は直示的に解釈

[232] この例文では進行形「stava dormendo」の適用も認められる。進行形を表す「stare + gerundio」の特徴とその用法に関して前節を参照。

され、主節の時制との同時性が文脈上でわかる。よって、関係節の場合、従属節の時制は主節の時制により決まるものではなく主節の動詞と従属節の動詞は独立しているものであると言える。

7.6.2 関係節

前節において言及したように、関係節における時制の適用は補足節とは異なるものである。本節では、どのような時制の適用が可能であるのか、なぜ可能であるのかなどという疑問点に答えていく。まず、以下の例文を参考にしよう。

（256a）I ladri sono entrati nell'appartamento di una ragazza che abitava vicino a me
（空き巣は私の近くに住んでいた人の部屋に入った）

例（255a）と同様に例（256a）においても半過去形を適用すると同じ解釈が生まれるはずであるが、そうではない。上記の例（256a）における二つの事態がお互いに繋がっているものではなく、従属節の半過去形は主節における近過去形との同時性を表さず、発話時点との先行性のみを表している。つまり、当該例文における「abitava（住んでいた）」は発話時以前に起こった出来事として解釈すればよいため、その人はもう近くに住んでいないという意味となる。次に、現在形も適用し、半過去形を用いた例文と比較してみよう。

（256c）I ladri sono entrati nell'appartamento di una ragazza che abita vicino a me
（空き巣は私の近くに住んでいる人の部屋に入った）

上記の例（256a）と（256c）を考察すると、関係節の場合には主節の時制が無関係であることがわかり、その事実性は発話時点の事実性にのみ繋がっていると言える。よって、例（256c）において現在形が用いられているのは、その人は発話時点においてまだ近くに住んでいるからである。従って、もしその人が発話時点においてもう近くに住んでいないならば半過去形によりその事態が描写されることとなる。また、補足節に関して述べた際に、近過去形を用いた例文も挙げたため、関係節の場合においても近過去形を用いる例文を挙げ、その適用によりどのような解釈になるかを見ていく。

（256b）I ladri sono entrati nell'appartamento di una ragazza che ha abitato vicino a me
（空き巣は私の近くに住んでいた[233]人の部屋に入った）

この場合においても、「sono entrati（入った）」と「ha abitato（住んでいた）」は時間的に繋がっているものではなく、独立しているものであるため「ha abitato」は必ず「sono entrati」より以前に起こった出来事を表すとは限らない。よって、この場合においても「ha abitato」は発話時点に対する先行性のみを表すものである。しかし、この例文は Giorgi（2002）では非文[234]として扱われているが、本論では非文として扱わないこととするため、近過去形を用いた例文と半過去形を用いた例文はどのような点において異なるかという疑問点が生じてくる。関係節の場合、主節と従属節が繋がっているのではなく独立している節として扱うべきであると述べたため、近過去形を用いた例文と半過去形を用いた例文はアスペクトのみの視点で異なると本論で主張する。つまり、当該の例文の従属節を単文として考えればよいということである。

以上のすべてのこと、つまり補足節と関係節における主節と従属節の様々な時制の組み合わせのメカニズムとそれに対する解釈を以下のようにまとめることができる。

[233] ここでは「住んでいた」に訳したが、この例文における近過去形は経験のニュアンスが強いため、「住んだことがある」に訳してもよい。
[234] Giorgi（2002）では近過去形のみではなく遠過去形の適用も不可能であるとされている。本論においても遠過去形の適用は不可能であるとするが、近過去形の適用は可能であるとする。

【補足節】

主節	従属節	主節との関係
・ 近過去形／遠過去形	半過去形	同時性
・ 近過去形／*遠過去形	現在形	同時性 + 発話時との同時性
・ 近過去形／遠過去形	近過去形	先行性

【関係節】

主節	従属節	発話時点との関係
・ 近過去形／遠過去形	半過去形	先行性
・ 近過去形／遠過去形	現在形	同時性
・ 近過去形／遠過去形	近過去形	先行性

上記の図から二つのことがわかる。まず、節の種類により基準となる時点が異なることと、主節において二つの時制の適用が可能であるということである。これまで参考にしてきた例文を考察すると、すべての例文において近過去形のみが用いられていることがわかるが、上記の図においても示されているように、遠過去形の適用も可能である。ただし、本論が主張しているように、この二つの時制の機能とそれに対する解釈が異なるため、主節において遠過去形を適用すると従属節における時制もその影響を受ける。まず、補足節における遠過去形の用法をみよう。

（258）Gigi disse che Adriana era malata
（ジージはアドリアナが病気だと言った）

上記の例文では、近過去形の「ha detto」の代わりに遠過去形の「disse」が適用され、従属節において用いられる時制の点では変更がなく、牽引ルールに従って半過去形が適用される。よって、例（255a）における解釈と例（258）における解釈は同じであると言える。ただし、遠過去形を用いると、従属節において半過去形の適用のみが可能であり、例（255c）とは異なり現在形の適用が不可能となる。以下の例文を参考にしよう。

（259）*Gigi disse che Adriana è malata[235]
（ジージはアドリアナが病気だと言った）

[235] 南部地方では、非文と判断されない。

以上の例（259）が非文であるのは、言うまでもなく主節における発話時と関係のない遠過去形は従属節における現在形と対立するからである。しかし、本章は従属節における半過去形を対象としているため、主節において遠過去形を用いた例文[236]に関してはこれ以上述べないこととする。以下では本章が対象としている半過去形を用いた例文をより詳しく分析していく。再び例（255a）を参考にし、それを例（255c）と比較しながらその解釈の問題点について説明していく。

（255a）Gigi ha detto che Adriana era malata
（255c）Gigi ha detto che Adriana è malata

上記のまとめの図をみると、半過去形も現在形も主節の時制との同時性を表しているが、相違点も存在している。それは、現在形の場合、もう一つの点が基準となっているという相違であり、これは DAR という現象によるものである。

日本語とは異なり、イタリア語や英語のような言語の場合、現在形を用いた例（255c）の時間的な解釈は、従属節において描写された出来事・状態は話し手の発話においても、ジージの発話においても事実でなければならないということとなる。つまり、アドリアナはその発言がされたときにも、ジージの発言のときにも、病気であるということである。この現象は DAR (Double Access Reading) と呼ばれるが、この現象はすべての言語において存在しているわけではない[237]。以下では、この現象はどのようなものであるかを説明していく。まず、この現象は現在形の適用のみに関するものであるため、現在形のみの特性であるという説明[238]がなされている。しかし、Giorgi（2002）では現在形のみの特性ではなく従属節の時制が挿入された文脈の「morphosyntactic characteristics（形態統語的特徴）」によるものであると指摘されている。よって、現在形自体によるものではなく、各言語における文法によるものであると提案している。

7.7 DAR (Double Access Reading)

DAR という現象は、以上に言及したように、すべての言語に存在している現象ではなく、それが存在しているか否かということにより言語を二種類に分けることができる。この点に関してはイタリア語と日本語が異なり、前者においてはその現象が存在しているのに対して、後者においては存在していないと言える[239]。この現象が現れるのは従属節の時制が現在形である場合のみであり、それを表す例（255c）を再び以下に挙げる。

（255c）Gigi ha detto che Adriana è malata
（ジージはアドリアナが病気だと言った）

上記の例文の場合、従属節において描写された状態、つまりアドリアナの病気は、話者がその発言をするときにも、ジージがそれについて話すときにも事実であるという時間的な解釈となる。このように、アドリアナの病気は発話時点においても事実であるということになり、これは現在形と半過去形の用法による重要な相違点である。なぜなら、すでに説明したように、半過去形の場合、時間的投錨となる時点がただ一つであり、それは主節の動詞であるからである。このように、基準となる時点が同じではないことが明らかになり、半過去形の場合にはその点がただ一つであるのに対して、現在形の場合には二つである。

イタリア語における DAR に関してより詳しく分析しているのは Giorgi（2002）であるため、本節では Giorgi による主張を参考にすることとする。まず、Giorgi（2002：157）による説明を以下に挙げ、そしてどのような用法が可能であるかまたはどのような用法が不可能であるかを見ていく。

---

[236] 第一章を参照。
[237] Giorgi（2002）では、DAR を認める言語としてイタリア語と英語、それを認めない言語として日本語とロシア語が挙げられている。
[238] Abusch（1997），Higginbotham（1993）と Ogihara（1996）を参照。
[239] 日本語に関しては Ogihara（1996）を参照。

“This phenomenon has been dubbed in the literature on the topic as Double Access Reading, because the embedded verbal form, in the language exhibiting this property, must access two different temporal points to be interpreted: the time of the event of the main clause and the utterance time”
この現象は「Double Access Reading」と呼ばれる。なぜなら、従属節における時制が正確に解釈されるために、二つの時点を基準にして解釈されるからである。その基準時点となるのは主節における出来事時点と発話時点である。

Giorgi(2002)が述べていることは、次の例文[240]でよりわかりやすくなる。この場合、例（255c）を基準にして「due anni fa(2 年前に)」を追加するとどのような影響があるかを見ていく。

（260）*Due anni fa Gigi ha detto che Adriana è malata
（2 年前にジージはアドリアナが病気だと言った）

例（255c）は非文ではないのに「due anni fa（2 年前に）」を追加することにより非文となってくることが明らかである。例（255c）における説明を述べた際に、従属節において描写された状態は発話時においても、主節の時制においても事実でなければならないと述べたが、以上の例（260）はこの条件に従わない例文であるため、逸脱した解釈になる。言うまでもなく、2 年前の発言であることにより、従属節における現在形の適用は不可能となるが、もし現在形の代わりに半過去形「era malata（病気である）」を用いると非文として判断されない例文になる。また、例（260）に戻ると、次のことも言える。近過去形（ha detto）は通常その事態における効果の持続を発話時点まで認める時制であるため、例（260）においてもその効果が発話時まで持続し、現在形との共起が可能であるはずであるが、この場合においては持続性が問題にならず、時間を表す表現が伝える意味の影響のほうが強いと言える。つまり、「2 年前に」は必ず過去時制を必要とし、現在形の「è malata」と対立するため、現在形の適用が認められない。このように、その時間を表す表現（2 年前）が必要とする時制（過去時制）が優先されると言える。これに反して、日本語訳を見てみると現在形の適用が矛盾として捉えられていないことがわかるが、それは日本語のような言語では過去時制によって支配された現在形は DAR の現象を伴わないからである。イタリア語とは異なり、日本語ではアドリアナの病気の事実は発話時とは無関係であり、ジージの発言のみと同時であるという解釈になってくる。つまり、日本語ではアドリアナの病気はジージの発言とは同時であるが、発話時点とは同時ではないということになる。このような日本語の解釈はイタリア語においても可能であり、そのときには言うまでもなく半過去形の適用が必要となってくる。よって、半過去形は DAR に従わない時制であるということも言ってよい。
以上のことからわかるように、ある文を正確に解釈するためには DAR の現象の存在が決定的なものであり、その現象を認めるイタリア語のような言語と、それを認めない日本語のような言語を二種類にわける必要があることが明らかになった。後者の場合、時間的基準点となるのは主節の主語により決定された時間的な視点のみであるのに対して、前者の場合、時間的基準点は二つであるが、半過去形はその条件に従わない時制であることを述べた。前節においても述べたように、半過去形の特徴として挙げられるのは時間的投錨を必ず求めることである。なぜなら、その投錨がないと文が不完全のように感じられることになるからである。参考のため再び例文（225）～（227）を挙げていく。

（261）＝（225）*Ieri giocavo a carte
（昨日私はトランプをしていた）

（262）＝（226）*Gigi andava al mare
（ジージは映画館に行っていた）

[240] Giorgi(2002：157)では「due anni fa Gianni ha detto che Maria è incinta（2 年前にジャンニはマリアが妊娠していると言った）」となっている。妊娠期間が 9 ヶ月であり、「2 年前」から持続することができる事態ではないため、現在形により描写されている「妊娠している」と対立するものである。このため、非文となる。

（263）＝（227）*Filippo telefonava a sua madre
（フィリッポはお母さんに電話していた）

上記の例文に「alle 5（5 時に）」のような時間的投錨として働く表現を追加すると非文のように感じられることはないと前節においてすでに説明した。

（261b）＝（225b）Ieri, alle 5, giocavo a carte[241]
（昨日、5 時頃に、トランプしていた）

（262b）＝（226b）Gigi, alle 5, andava al mare
（ジージは 5 時に海に行っていた）

（263b）＝（227b）Filippo, alle 5, telefonava a sua madre
（フィリッポは 5 時にお母さんに電話していた）

このように、半過去形は投錨する時点を必要とする時制であることが再び明らかになった。上記の例文における「giocavo」「andava」「telefonava」は「alle 5」という時間を表す副詞との同時性を表しており、「alle 5」は半過去形が必要とする時間的投錨となってくる。また、副詞のみではなく、主節における動詞もその働きを果たすということは以下の例文から明らかになる。

（261）Gianni ha detto che Gigi andava al mare
（ジャンニはジージが海に行っていると言った）

例（261）の場合、半過去形（andava）は主節の事象と同時に起こっているように解釈されるが、例（261）〜（263）と同様に副詞「alle 5」を追加すると半過去形と主節の動詞の相関関係が変わり、その同時性がなくなるということに注意すべきである。以下の例（262）が説明として挙げられる。

（262a）Gianni ha detto che alle 5 Gigi andava al mare
（ジャンニはジージが 5 時に海に行くと言った）

（262b）Gianni ha detto che alle 5 Gigi andava al mare
（ジャンニはジーノが 5 時に海に行っていたと言った）

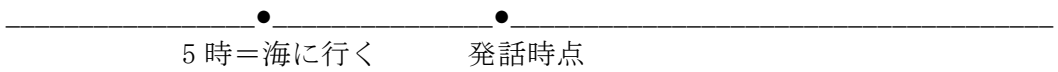
この場合には、従属節の事象が時間副詞によって明示された時点において位置づけられ、そしてその副詞が主節の事象を基準にして位置づけられるということになる。上記の例（262a）では、「海に行く」事態は 5 時に起こり、それはジャンニの発言、つまり「言う」動作より前に位置づけられている出来事であると言える。ただし、半過去形はモーダルな用法[242]も認める時制であるため、以上の例文は二通りの解釈を可能とする例文であると言える。もし当該の半過去形がモーダルな用法なら「海に行く」という動作は「言う」より以前ではなく、それ以降の動作として解釈することとなるということに注意すべきである。

---

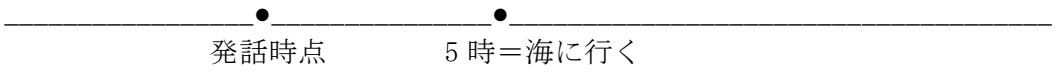
[241] 前節において挙げられているのは「verso le 5」であるが、ここでは「alle 5」にした。解釈などに関してはこの変更は影響を与えない。

[242] 本章では半過去形におけるモーダルな用法に関して述べないこととするが、ここではその用法を簡潔に例文を挙げながら説明していく。詳しくは Bertinetto（1986）と Salvi&Vanelli（2004）を参照。
・Due giorni fa Gianni ha detto che Gigi ieri andava al mare
・Due giorni fa Gianni ha detto che Gigi oggi andava al mare
・Due giorni fa Gianni ha detto che Gigi domani andava al mare
上記の三つの例文が「2 日前にジャンニは昨日／今日／明日ジージが海に行くと言った」と訳せる。このように、半過去形は過去における事象・現在における事象・未来における事象を表すことが出来ると言える。また、半過去形は「過去における未来」と呼ばれる条件法過去形とも共通点を持っているため、半過去形の代わりに「sarebbe andato」を用いても意味が変わらない。

【半過去形が副詞を基準とする場合】



【半過去形がモーダルな用法の場合】



以上のように、半過去形は二つの解釈を可能とし、その一つはモーダル用法である。その場合、半過去形は未来において実現する事態を描写することができる。

これまでのことをまとめると、次のことが言える。半過去形は単文において用いられても複文において用いられても必ず時間的投錨を必要とする時制であり、その機能を果たすことができるのは時間を表す副詞や節である。本節において挙げられている例文はすべて補足節である。そのため、時間的投錨として主節を扱うのが強制的なものであると言え、発話時点を基準にする必要がない。

続いて、以下ではより詳しく**関係節**についても述べていく。以下で関係節における半過去形の適用のみではなく、半過去形の機能もより深く理解するためには他の時制の適用も参考にすべきである。すでに言及したように、補足節と関係節の時間的な解釈はかなり異なり、関係節における主節と従属節の動詞は独立していると言ってよい。その相違点を以下の二つの例文[243]を介して説明することができる。前者は関係節であるのに対して、後者は補足節である。

（263）Gianni ha invitato la donna che ha comprato il vestito rosso （関係節）
（ジャンニは赤い服を購入した女性を招待した）

（257b）Gianni ha detto che Adriana ha dormito （補足節）
（ジャンニはアドリアナが寝たと言った）

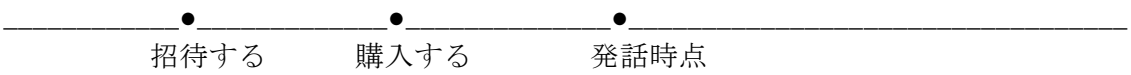
両者の主節においても従属節においても近過去形が用いられているため、それに対する解釈が変わらないはずであるが、それに対する解釈は次のようである。まず、後者の場合には従属節における出来事は主節以前に起こった出来事であり、逆の解釈が不可能である。つまり、「寝る」「言う」「発話時点」という順番が正確であるのに対して、「言う」「寝る」「発話時点」という順番は必ず不可能であるということになる。それとは異なり、例（263）の場合には二つの事態における順番が可能であると言える。それらは、まず、「購入する」「招待する」「発話時点」という順番であり、二つ目は「招待する」「購入する」「発話時点」という順番である。このように、「購入する」は発話時点以前に起こった事象ではあるが、主節と従属節の時間的な関係ははっきり決まってはいないとも言える。なぜなら、関係節の場合、主節の時制と従属節の時制はお互いに無関係であり、独立しているものとして考えてもよいからである。この相違を以下の図で表すことができる。

[243] Giorgi（2009：147）から引用したものである。

【従属節における近過去形（関係節の場合）】

①

②



【従属節における近過去形（補足節の場合）】

次に、従属節における現在形の適用はどのような解釈を可能とするかを見ていく。次の例文[244]を参考にしよう。

（264a）Gianni ha invitato la donna che mangia un gelato
（ジャンニはアイスを食べている女の人を招待した）

上記の例（264a）における現在形は発話時点と同時に起こっているように解釈することができる。つまり、話し手の視点からその事態が位置づけられているが、ジャンニの招待とは無関係である。ジャンニの招待と時間的関係を持つような意味を表現するには、半過去形の適用が必要となると Giorgi(2002)で述べられている。

（264b）Gianni ha invitato la donna che mangiava un gelato
（ジャンニはアイスを食べている女の人を招待した）

このように、「食べる」はジャンニの時間的な位置と同時であるという解釈になる。さらに、この例文に補足節と同様に副詞を追加するとどのような変化があるかを見てみよう。この場合、「alle 5」ではなく「un momento fa（先程）」という副詞を適用していく。

（265）Gianni ha invitato la donna che mangiava un gelato un momento fa
（ジャンニは先程アイスを食べていた女の人を招待した）

[244] Giorgi(2002)から引用したものであるが、「アイスを食べる」の代わりに「comprare un vestito（服を購入する）」にしてもよい。

この場合、半過去形により描写された事象はジャンニの視点からではなく、話し手の視点からの描写である[245]。ここで「un momento fa」は直示的な時間副詞として解釈され、話し手の時間的な視点により支配されているため、「食べる」という事象もそれに合わせて位置づけられている。これは、言うまでもなく、半過去形が時間的投錨を必要とする時制であるからである。その投錨を通して話し手の時間的な視点との繋がりをつくるということも言える。

まとめると、関係節は従属節の事象を強制的に話し手の時間的な視点において位置づけるが、半過去形の場合には適切な時間的投錨があるときにのみ話し手の視点において位置づけることが可能であることが明らかになった。よって、その事象が現在形または近過去形であるならば関係節における時制が独立していると言えるが、半過去形であるならば独立していないということが言える。ただし、ここで疑問が生じてくる。半過去形ならば独立していないと述べたが、これはこれまでの主張と矛盾しているものである。なぜなら、関係節は用いられる時制に関わらず主節と従属節は繋がっているものではなく独立しているものであると述べてきたからである。つまり、例（265a）における「abitare（住む）」の半過去形に対する解釈と「mangiare un gelato（アイスを食べる）」の半過去形に対する解釈が同じではないように感じられる。なぜなら、前者とは異なり、後者の場合には従属節の動詞と主節の動詞が独立していないからである。なぜこの相違が生じるかというと、二つの説明が可能である。一つ目は、動詞の性質における相違であるのに対して、二つ目は話し手の視点における相違であると考えられる。一つ目に関しては、「abitare」は「verbo continuativo（持続動詞）」であるのに対して、「mangiare un gelato」は「verbo risultativo（結果動詞）」[246]であることが解釈に影響を与えると提案できる。持続動詞も結果動詞も継続動詞という分類に属している動詞であるが、目的があるか否かの点で異なっている。つまり、結果動詞の場合、「un gelato（アイス）」のような目的語が現れているのに対して、「abitare」のような動詞は目的語を求めない動詞である。また、目的語があるため結果動詞は telic 動詞という下位分類に属している動詞であるが、非継続動詞である「変化動詞」も同じ分類に俗している。ただし、変化動詞は常に目的語を必要とする動詞ではない。このように、目的語があるためその出来事が時間的に限られる出来事であると言える。それとは異なり、「abitare（住む）」のような持続動詞の場合、その出来事が時間的に限られない出来事である。このため、解釈に対しても以上のような相違が生じる。第八章において述べられているように、日本語においても同じような相違が現れるため、日本語においてもこの動詞の分類に基づいて論じていく。

次に、二つ目の説明に関しては、話し手の視点が異なるというのは、後者の場合、話し手はその動作をある時点において把握できるのに対して、前者の場合、その動作をある時点において把握することができないという相違である。これはおそらくその動詞の telicity に関連するものである。また、進行形にしてみるとそれを認めるのは「mangiare un gelato」のみであり、「abitare」はその形式を可能としない動詞である。以下のようになる。

（266）*I ladri sono entrati nell'appartamento di una ragazza che stava abitando vicino a me
（277） Gianni ha invitato la donna che stava mangiando un gelato/stava comprando il vestito rosso

Giorgi（2002）は関係節の分析において「mangiare」のみを取り上げているため、このような相違が Giorgi（2002）では言及されていないが、動詞の性質により関係節における半過去形の解釈が異なるという点が重要な点である。

7.8 まとめ

本章では、過去時制の中で、より多様性を備えている時制である半過去形について述べた。具体的に、どのような特徴を持っているか、どのような用法を可能とするか、どのような用法を可能としないか、またその場合、なぜ不可能であるかなどに関して論じてきた。まず、重要な点として挙げたのは、半過去形は時間的投錨（副詞や節など）を必要とする時制であるということ

[245] 「fa」は必ず発話時点を基準とする副詞であるから当然話し手の視点からの描写となる。
[246] 「mangiare」のみならば、つまり目的語を削除すると「abitare」と同様に持続動詞となる。

と、半過去形により描写された事態の過程が不定であるということである。さらに、半過去形は独立できない時制であるということにも着目した。

また、半過去形が表す意味を理解するためにこの時制が表すアスペクトの種類、つまり「進行的アスペクト」「習慣的アスペクト」「継続的アスペクト」とそのあいだに存在している相違点を詳しく分析する必要があるとわかった。その分析から、進行的アスペクトの場合、描写された出来事は一回のみ起こった出来事であり、時間の基準点が常に設定されているのに対して、習慣的アスペクトの場合、その出来事の回数が不定であり、時間の基準として副詞が必要となるということが明らかになった。また、習慣的アスペクトに関しては、次のこともわかった。当該の出来事は基本的に複数の動作により成り立っているものであり、それらの動作は完了している動作である。このように、一つの出来事の中でいくつかの小さな動作の区別をする必要がある。それとは異なり、継続アスペクトは一回限りの出来事を表すが、一回限りの出来事を表す進行的アスペクトと違って一つの瞬間を取り出すことができないと言える。

また、半過去形の性質をより詳しく理解するために他の過去時制および現在形との共通点と相違点をはっきりさせる必要があることから、それらの時制との比較も行った。その際、単文における用法と複文における用法を両方対象としたが、複文の場合、補足節と関係節を取り上げた。いくつかの例文を挙げながら主節における時制と従属節における時制の相関関係に焦点を当てたが、その際重要な相違点として挙げられるのは基準時点における相違である。なぜなら、前者の場合には基準となるのは主節の時制であるのに対して、後者の場合には発話時となるからである。このことにより、従属節において用いられる半過去形の解釈も異なってくると言える。補足節の場合、従属節において用いられた半過去形は主節における時制を時間的投錨として扱っているということとなるため、その場合の半過去形はそれとの同時性を表す時制であることが明らかである。それとは異なり、関係節の場合、半過去形は発話時以前に起こった事態のことを表していると説明することができるが、本章において見たように、その説明から外れる場合もある。それは、関係節であるにも関わらず、従属節における動詞と主節の動詞が独立していないという場合である。その場合、従属節において用いられた半過去形は発話時を基準としないことが明らかになった。この現象は、例文に異なる動詞を用いることにより明らかになったものであるため、動詞の性質によるものであると本章では考えるが、日本語においてもこの現象が現れることもわかった。この点に関しては第八章において論じられる。

また、本章では半過去形以外に近過去形と現在形も取り上げ、その二つの時制を従属節において用いる際の解釈に関してどのような相違点が生まれるかを見た。挙げた例文に基づくと時間的な関係が重要な点として挙げられる。なぜなら、補足節において用いた近過去形は主節の動詞との同時性を表すのではなく、その前に起こった出来事として解釈すればよいからである。つまり、近過去形を用いることにより半過去形が表していた同時性がなくなるということになる。これは、過去における同時性を表す機能をもっている時制は半過去形のみであるからである。また、現在形に関して検討した際に、DAR という現象にも言及した。この現象があるため、現在形が用いられると基準となる時点がただ一つではなく、二つとなる（主節の動詞と発話時点）。それに反して、日本語にはこの現象が存在していないため、基準となる時点は主節の動詞のみであり、発話時点との同時性が不可能である。

第八章

日本語の「テイタ形」について

本章は、日本語における「テイタ形」について論じるものであり、この時制形式はどのようなアスペクト・テンス的な意味を表している時制であるかを説明することを目的としている。従来、様々な研究が行われているが、「テイタ形」は「テイル形」を過去にしたもの、または「タ形」を継続にしたものと捉えられ、「ル形 – テイル形」の対立、「ル形 – タ形」の対立に比べてあまり焦点が当てられていないようである。このため、本章では「テイタ形」の機能または使用条件について論じていく。

周知のように、「テイタ形」には二つの用法があり、一つ目は「進行」を表す用法であるのに対して、二つ目は「以前完成」を表す用法である。この二つの用法を表す例文を挙げながら事態の時間的な位置とその捉え方に関して述べるが、単文のみを対象とすると「テイタ形」の様々な用法が明らかにならないため、複文における「テイタ形」の用法に関しても論じることとなる。特に従属節において用いられる「テイタ形」に着目していく。なぜなら、以降の節において論じるように、「テイタ形」は節の種類と動詞の性質によりその適用と解釈が異なるからである。最初に、次節では「テイタ形」における用法とそれに対する問題点または先行研究をまとめていく。次に、「タ形」との対立と以上の二つの用法に関して述べていく。また、日本語の「テイタ形」における用法も節の種類によってどのような適用また解釈を可能とするのか、という点に関しても触れていく。最後に、前章において挙げられている例文を参考にしながらイタリア語との比較にも進んでいく。一般的に、日本語の「テイタ形」はイタリア語の大過去形、半過去形、進行形[247]により訳されるが、その使い分けは複雑なものであり、本章ではその使い分けについても論じていく。これまでの章では、イタリア語における大過去形と半過去形を詳しく分析し、それらの時制は文脈に合わせてどのような用法を可能とするか、適用においてどのような制約があるか、またどのような解釈を可能とするかという点について論じてきたため、それを参考にしていく。

8.1「テイタ形」に関する先行研究とその用法について

本節では、「テイタ形」の先行研究をまとめ、そして「テイタ形」における代表的な用法に関しても簡潔に述べていくが、その前に他の時制形式との相関関係についても言及すべきである。そのため、以下では、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」における基本的アスペクト・テンス体系についても簡潔にまとめていく。

従来、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」を対象とした研究が多いが、本節では主に奥田（1977）、鈴木（1979）、寺村（1984）、高橋（1985）、工藤（1995）と江田（2013）による研究を参考にすることとする。まず、「テイル形」と「テイタ形」の意味については金田一（1950）が「継続動詞」「瞬間動詞」「状態動詞」「第四種類」という分類を立てて以来、盛んに研究が行われ、奥田（1979）でそれが一つの節目を迎えた。奥田（1979）は「テイル形」「テイタ形」が進行中を表すか結果残存を表すかは動詞が「変化」を持つか否かに依存するということを指摘した。「テイタ形」の表す進行中と結果残存に関しては後述し、その二つの解釈を可能とする例文も挙げるが、以下では先行研究をまとめていく。

[247] 「stare の半過去形+ジェルンディオ」のことである。

すべての四つの時制形式におけるパラダイムは庵（2001）、工藤（1995）により以下のようにまとめられている。

図 36. アスペクト・テンス体系

アスペクト テンス	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

周知のように、「完成相」のテンスが運動の時間を示すのに対して、「継続相」のテンスが静止の時間を示すということは両者の重要な対立点である。「完成相」が開始から終了までを含めて丸ごとの姿で動作を差し出すということは、事象の推移の視点から述べるなら、一定の時間位置において運動が始発から終了まで一過程分進むということである。それに対して、「継続相」は、その時間において、過程が存在することを表すだけであって、過程が進むことを表さない。以上の図からわかるように、「テイタ形」は「継続相を表す過去」として扱われている。以下では、「テイタ形」に関する扱いをまとめていく。

寺村（1984）では、「テイタ形」は二つの機能を果たしているとされている。一つ目は「ある事態の継続のあいだに何かが起こったこと」と、二つ目は「過去の出来事よりさらに前のことを表す」とされている。

高橋（1985:219）は、継続相については、「テイル形」「テイタ形」が本来の継続相の意味ではなく完成相、つまり「その一定の局面がまるごとのすがたで完成した」という意味を表すことがあると指摘している。そのような使い方を意味的にテンス形式に準ずるものとし、具体的には前非過去形と前過去形に相当する「テイル形」と「テイタ形」、そして経験・記録、次に現在以前の動作や出来事の質化、最後に発見・確認・思い出しという 4 点を挙げている。一つ目に関しては、「テイル形」は現在・未来の一定時を基準とし、それ以前に完成した事項は「テイル形」で、過去の一定時より前に完成した事柄は「テイタ形」で示されるとし、以下のような例文[248]を挙げている。

（268）息子はすでに大学を卒業している。
「現在以前に完成」
（269）わたしが定年になる前に息子は大学を卒業している。
「未来のあるとき以前に完成」
（270）わたしが定年になる前に息子は大学を卒業していた。
「過去のあるとき以前に完成」

次に、経験・記録は、過去の動作が現在と何らかの繋がりがあるものとしている。そして、3 点目の現在以前の動作や出来事の質化とは、「事実上、過去に完成した動作と同じこと」（1985:222）と述べ、以下の例文を挙げている。

（271）昨年の夏の大会は、A 校が優勝している。
（272）昨年の夏の大会は、A 校が優勝した。

「質化」とは、高橋（1985）によれば、例えば、例（272）の文に見られるように、「出来事と過程から、特徴的な側面をひっぱりだして述べていて、質を表すものに移行しているということである。これは、また、現在以前または過去以前に動作が完成したことを表すものであり、動作

[248] 高橋（1985:220）から引用したものである。

がまるごとのすがたで以前に完成したことを述べているだけであって、局面に分析していない」とされている。その一方で、高橋（1985）は、これとは別に、「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」という意味を挙げている。以下の例文を挙げている。

（273）研究会はとじていた。雑談がはじまっていた。

この意味を、「経験・記録」から区別するために、高橋（1985）は次のような二つの例文を挙げている。後者が、この意味を表すものであり、前者が「経験・記録」を表すものである。

（274） 島崎藤村は 1872 年に長野県で生まれている。
（275） 私が産院についたときには、あかんぼうはもう生まれていた。

これらの例文に関して、「あとの例では、基準時間[249]が示されていて、基準時間の前に、さきだつ局面、つまり〈生まれる〉という変化の局面がまるごと完成し、基準時間には、その結果の局面、つまり、〈母体のそとに存在している〉という状態のなかにあったことをしめしている。それに対して、前の例では、結果の局面は問題にならず、その動作が以前に完成したことだけを述べている」と説明している。
最後に、発見・確認・思い出しは「普通の継続相と同様、過去形にして発見、確認、思い出しを表すことができる」（1985:222）としている。

（276）あいつ、三年まえに離婚してたよ。

高橋（1985）の「発見・確認・思い出し」以外の点は工藤（1995）の「パーフェクト」、江田（2013）の「効力持続」と重なり、前非過去形と前過去形は寺村（1984）の「ひとつ前の事態」、庵（2001）の「完了」と重なっていると言える。
工藤（1989）は、高橋（1985）の取り出した意味をひとまとめにして、「パーフェクト」と呼び、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」という一般的な規定[250]を与えている。つまり、工藤（1995）は「完成性」と「継続性」に「パーフェクト性」を加え、その「パーフェクト」を三つに分けている。工藤（1995）は説明として以下の例文を挙げている。

（277）その本なら、一度読んでるよ。
（278）病院に駆けつけたとき、父は既に 30 分前に死んでいた。

第四章においてすでに述べたように、工藤は前者を「現在パーフェクト」、後者を「過去パーフェクト」と呼んでいる。しかし、岩崎（2000）と庵（2001）が指摘しているように、「テイタ形」は常に「パーフェクト」として扱うことができるわけではないという反論もある。なぜなら、「パーフェクト」の場合、必ず「効力」が存在しているように思われるが、実際はその効力が残存していない場合もある[251]からである。また、工藤（1995）は「パーフェクト」を表す「テイタ形」と「結果継続」を表す「テイタ形」をはっきり区別し、それぞれの場合において時間副詞は異なる時点を表すと述べている。以下の例文[252]を挙げている。

（279）**2 時間程前に**、ここに犬が死んでいたんだよ。　「結果継続」
（280）私はあわてて帰郷した。しかし父は **2 時間前に**死んでいた。　「パーフェクト」

工藤（1995）は「2 時間程前に」は異なる二つの時点を示しているとしている。結果継続の場合は、つまり例（279）の場合、時間副詞は結果継続点を示すため、犬が死んだのはもっと前のこと

[249] 高橋が述べている「基準時間」は本論で述べている「設定時点」のことを表している。
[250] 詳しくは第四章を参照。
[251] 第四章を参照。
[252] 工藤（1995:101）から引用したものである。

である。それに対して、パーフェクトの場合、「2 時間前」は父が死んだ時点そのものを示していると述べられている。このように、同じ副詞が用いられていてもそれに対する解釈が異なると言える。工藤は、また、物語を対象にして「テイル形」の表すパーフェクトのテクスト的機能を、「タ形」の表す〈継起・前進性〉や「テイタ形」の表す〈同時性〉に対して、〈一時的後退性〉〈時間的後退性〉と規定している。すなわち、「タ形の連続は基本的に、時間の流れに沿って運動＝出来事が次々に展開していくままに提示しながら、物語の筋を前進させていく。一方、テイタ形〈持続〉は、物語の筋を中断させて、しばしばそこに留まり、同時的な＝共存している出来事を導入する。そして、テイタ形〈パーフェクト〉は、同じく筋を中断するが、同時的な出来事ではなく、先行する出来事を導入する」のである。

庵（2001）は、すでに第四章において言及したように、工藤（1995）の「パーフェクト」の概念を評価しつつも、「テイ」には「継続」と「以前」という意味が含まれ、以前が表面化すると「完了」の用法になるとしている。つまり、工藤（1995）の「パーフェクト」を「効力」のある用法とない用法に分け、「効力」のない用法を「完了」としているのである。庵（2001）の完了も、基準時の違いにおいて「現在完了」「未来完了」「過去完了」に分けられている。このうち、過去完了が「テイタ形」で表され、以下の例文が挙げられる。

（281）彼は締め切りまでに論文を提出していた。

ただし、すでに言及したように、庵（2001）では「テイタ形」は常に「完了」を表すとは限らないとされている。この点については第四章において述べた。

江田（2013）では、寺村（1984）の「ひとつ前の事態」、高橋（1985）の「前過去形に相当する「テイタ形」」、工藤（1995）の「過去パーフェクト」に相当するものとして、庵（2001）の考え方を採用し、「完了」という考え方でまとめることが提案されている。

これまで挙げてきた「テイタ形」を用いた例文のすべては単文であるが、以下では複文における適用も対象としていく。まず、「テイタ形」はどのような用法を可能とするかという点について述べよう。一般的な「テイタ形」における用法は以下のようであると江田（2013:139）で述べられている。

① 過去の動作の継続（継続過去）
② 過去の結果状態（状態過去）
③ 繰り返し（繰り返し過去）
④ 性状（性状過去）
⑤ 同時
⑥ 完了

以上の区別がどのようなものであるかを見ていく。まず、江田（2013）は「「継続過去」「状態過去」「繰り返し過去」[253]「性状過去」は動作が過去に継続すること、結果状態が過去にあったこと、繰り返しが過去にあったこと、性状を過去で述べており、他の節と時間的な関係が読めないものとした」としている。次に、「同時」は「継続過去」「状態過去」と別の事態が時間的に重なる場合であり、比較的同じような時間の長さで重なっている場合と「テイタ形」節の期間のあいだに一部別の事態が重なっている場合があるとされている。最後に、「完了」については「テイタ形」節が「タ形」節より以前を表すものであるとされている。以下では、それぞれの用法に相当する例文を挙げていく。

【継続過去】
（282）イギリスの場合も、日本では福祉国家の典型のように思っている人もあるようだが、この二十数年間に死んでいった老人の三分の一以上が生活苦にあえいでいたという悲惨な事実がある。

[253] 江田（2013:139）は「繰り返し過去」に当てはまる例文を挙げていない。

【状態過去】
(283) のぞいてみたら、床の上に空気が沈んでたまっていた、なんてことはない。これでは、部屋の中でじっと立っていたら、酸欠におちいってしまう。

【性状過去】
(284) 当時は老年問題への対応はずいぶん遅れていたし、慢性の疾患に対する施設も未整備だった。最近では、だいぶ改善されているようだ。

【同時】
(285) ヨーロッパの人々はこれを事実として信じていた。しかし、時の流れはダーウイン側に有利であった。
(286) あの、旅行に行ったんですがー、そのときに、なんか、あの、散歩していたときに、あの青蛇っていうんですかねー。青大将を目撃してー。

【完了】
(287) 彼の論文は日本語で出版されたまま、七〇年あまり埋もれていたが、数年前私が国際学会で紹介して 以来、ひろく欧米の学者も引用するようになった。

簡潔に説明すると、以下のことが言える。例（282）（283）（284）に関して、それぞれ動作継続、結果状態、性状を表しているが、他の節と時間的な関係はないと言える。また、例（285）に関しては、人々が「信じていた」とき、時の流れはダーウインに有利だったという二つの事態が同時に起こっていたということが言える。例（286）は同時を表す例文であるが、例（285）とは異なり、「テイタ形」節の期間のあいだに一部別の事態が重なっていたという解釈ができる。最後に、例（287）に関しては、埋もれていた論文を、後に多くの人が引用するようになったため、時間的前後関係があると言える。

8.2 「テイタ形」における用法

本節では、「テイタ形」における様々な用法とそれに関する問題点に関して論じていくが、そのためには他の時制形式との相関関係に関しても言及すべきである。そのため、それらの機能についても簡潔に触れていく。従来、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」を対象とした研究が多く、これらの研究により、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」の機能などが明らかになったと言えるが、「テイタ形」に関してはまだいくつかの問題点が残っているとも言える。例えば、「テイタ形」は単なる「テイル形」の過去形であるか否か、いつ「以前完成」あるいは「継続性」を表すか、また工藤（1982、1995）が導入した「パーフェクト性」はその解釈に対して影響を与えているのかなどという疑問点が残っているわけである。最後に、イタリア語との比較をすることも本章の目的であるため、以降の節では以上の問題点を基準にしてすでに分析した「以前完成」を表す大過去形を用いた例文と「進行性・同時性」を表す半過去形を用いた例文をいくつか再び取り上げ、日本語とイタリア語を比較していく。例文を挙げながら、イタリア語の時制と日本語の時制を比較してどのような共通点または相違点が存在しているか、またどのように区別すればよいかという点を明らかにしていく。その前に、「テイタ形」と「タ形」における基本的な区別と「テイタ形」による機能に関して簡潔に述べていく。

8.2.1 「タ形」と「テイタ形」の区別について

本節では、最初に「テイタ形」が従来どのように扱われてきたかについてまとめていく。前節における図 36 を再び考察すると、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」は「完成相」と「継続相」に分けられ、「テイタ形」は後者に属しているとされている。また、図 36 からもわかるように、「完成相」と「継続相」以外にすべての形式は「非過去」と「過去」にも分けられ、

「テイタ形」は「テイル形」の「過去」であるようである。言うまでもなく、その場合は考えられるが、「テイタ形」は常に「テイル形」の過去を表す形式であるとは限らない。まず、以下では図 36 にまとめられている四つの形式における定義[254]を挙げていく。

最初に、**「完成相非過去形」**、つまり「スル形」は基本的なテンス的意味は未来において運動が成立することであると定義されている。次に、**「完成相過去形」**、つまり「シタ形」の基本的なテンス的意味は、過去に運動が完成したことを表すことである。過去というのは発話時より前に完成した運動のことを表す。続いて、**「継続相非過去形」**、つまり「シテイル形」は、発話時において、動作の表す運動が持続過程の中にあることを表す。継続相の非過去が現在を表すというのは、その持続過程が発話時をまたいで存在していることをしめすだけであって、その持続過程がいつからいつまで続くのかということについて無関心である。最後に、**「継続相過去形」**、つまり「テイタ形」は、過去の特定の時間が持続過程をなす運動や結果の局面の中にあることを表すことができる。本節は「継続相過去形」のみを対象としているが、その特徴と用法をより詳しく説明するために他の時制形式との比較も行っていく。

まず、以上に述べたように、「継続相」のテンスには「非過去」と「過去」があり、非過去形が現在を、過去形が過去を表すことを基本とする。高橋（1985:108）は以下のような例文とそれに対する説明を挙げている。

【継続相非過去形】
（288）ね、みて。汽車が走っている。
（289）おお、アミダさまのお像が壊れている。

【継続相過去形】
（290）有楽町の東口に降りたときには、他人のことはどうでもいい人たちが、ゾロゾロ歩いていた。
（291）私は二幕目からおちつきをなくしていた。

継続相は、基本となる時間をまたいで、持続過程をなす運動または結果の局面が存在することを表す。このため、発話時の中に全過程がおさまらなくてもよい。そのため、非過去形が現在のアクチュアルな持続過程を表すことができるのであると高橋（1985）は説明している。

すでに第四章において述べたように、継続相である「テイル形」は二つの用法を認め、一つ目は「以前」であり、二つ目は「継続」である。庵（2001）の提案を採用すると、それは「テイ」による機能であると言える。よって、「テイタ形」もその二つの機能を表すことができるか否かという疑問が生じるが、言うまでもなく「テイタ形」も「以前」と「継続」を表す用法を認める形式であるが、過去における「以前」と「継続」を表すという点で「テイル形」とは異なる。つまり、一つ目の用法に関しては、「テイル形」は発話時以前のことを表すのに対して、「テイタ形」は過去の一定時以前に運動が完成したことを表すと言える。以上の例（289）と（291）はそれぞれ前者と後者を表している例文である。これらは「テイル形」と「テイタ形」になることが、持続の中にあることを表しているのではなく、一定時以前に成立したことを表している。要するに、その運動が現在または過去の一定時以前という時間位置に局在することを表しているため、テンス的な意味をもち、アスペクト的な意味に関しては、その運動が丸ごと成立したことを表しているため、「完成相」相当であると高橋（1985）は述べている。また、例（289）と（291）とは異なり、例（288）と（290）は以前に完成した事態のことを表す例文ではなく、それぞれ現在における進行と過去における進行を表す例文である。この「テイタ形」における用法に関してもいくつかの問題点が生じるため、以降の節の対象にすることとする。

また、「テイタ形」は完成相を表す「タ形」を継続にしたものであると述べたが、これはどのようなものであるかを簡潔に説明すべきである。「完成相」と「継続相」を比較して「ル形」と「テイル形」は、運動をどのように表すかという視点からアスペクト対立をなす。過去の場合、一般的に、一定の時間位置において運動がまるごとの姿で成立することを表す場合は「タ形」、

[254] 高橋（1985）による定義である。

持続過程をなす運動の一定の局面の中にあることを表す場合は「テイタ形」が選択される。以下のような代表的な例文[255]が挙げられる。

（292）a. 太郎は**さっき**運動場で走った　　「達成時点」
　　b. 太郎は**さっき**運動場で走っていた　「継続時点」

町田（1989:76）も同じような例文を挙げているが、「さっき」の代わりに「3 時 1 分」という時間を表す表現を用いている。継続動詞の「タ形」も「テイタ形」も過去において成立した事象を示すと述べ、その事象と時間的な区間との関係について、「タ形」はその区間全体において事柄が真であるときに使われ、「テイタ形」は事象の一部が真であるときに使われるとしている。以下の例文を挙げている。

（293）a. ?太郎は **3 時 1 分**に走った
　　b.　太郎は **3 時 1 分**に走っていた

つまり、「タ形」を用いた場合は、3 時 1 分という時間の長さ全体の中で「走る」という動作が真でなくてはならないのに対し、「テイタ形」を用いた場合はその時間の中で当該の動作の一部が真であればよいと述べている。すなわち、太郎は 3 時から「走る」動作をはじめ、3 時 10 分まで走っていても、3 時 1 分 02 秒には走り終わっていても「テイタ形」が用いられるということである。以下の例文も同じく「タ形」と「テイタ形」における対立を明らかにする例文である。

（294）a. さっき死んだ　　「達成時点」
　　b. さっき死んでいた　「継続時点」

言うまでもなく、例（294a）は達成時点を表すのに対して（294b）は継続時点を表す例文である。このように、「タ形」も「テイタ形」も発話時以前に起こった出来事を表す点で共通している時制形式であるが、その出来事の捉え方の点で対立している時制形式であることが明らかである[256]。この場合、動詞の性質による制限もあるため、継続を表す形式の適用は不可能である。

工藤（1995:126）は、「ル形」「テイル形」「タ形」「テイタ形」について、「〈終止〉の位置にあるときには、発話時を基準軸として、運動自体を直接的に、未来、現在、過去に位置づける」と指摘し、運動自体が発話時点以前にあれば「タ形」「テイタ形」、発話時点以後にあれば「ル形」「テイル形」が選択されると理解している。これはつまり、「ル形」「テイル形」と「タ形」「テイタ形」の選択を決定付けているのは、発話時点と出来事時点の前後関係であるということである。しかし、様々な要素が影響しているため、時制形式の選択は簡単なものではない。

---

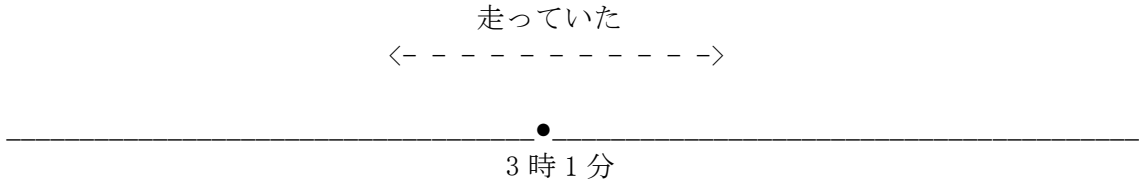
[255] 例（292）も例（294）も高橋（1985）から引用したものである。

[256] 例（294b）をイタリア語に訳すと、日本語とは異なり継続を表す時制形式の適用は不可能である。なぜなら、「poco fa（さっき）」と時制の共起が限られているからである。つまり、「死んでいた」を動作動詞「morire」あるいは状態を表す「essere（です）＋形容詞」により描写することが可能である。前者を半過去形または進行形にすると「moriva」と「stava morendo」になるのに対して、後者は一つのみの形を可能とし、「era morto」となる。このように、「poco fa moriva」「stava morendo poco fa」「era morto poco fa」となるが、どれに対しても違和感がある。例えば、最後に述べた「era morto poco fa」における意味は、その人はさっき死んだはずであるが、今は生きているという解釈になる。もし「さっき」を「poco fa」ではなく、「poco prima（ある時点の前）」にすると、その共起が認められる。ただし、日本語の例（294b）における「さっき」はある過去における時点ではなく発話時点を基準としている副詞である。また、半過去形ではなく、大過去形を適用してみると「era morto」となる。この場合も、「era morto poco fa」は不適切であると言える。この場合「era già morto poco fa（もう）」にすることが可能であるが、この場合、完了を表す副詞が現れるため、「以前完成」の意味が強くなる。また、この場合、動詞の性質による制限もあると考えてもよい。なぜなら、他の動詞、例えば「venire（来る）」にすると半過去形・進行形・大過去形の適用ができるからである。第六章と第七章において論じたように、イタリア語では「未完成相（または継続相）」を表す時制は半過去形のみであり、大過去形は「過去完了」を表す時制である。このため、どちらかの時制を適用することにより、当該事態に対する捉え方がかなり異なることに注意すべきである。

8.2.2 「完了」を表す「テイタ形」と「進行」を表す「テイタ形」における区別

前節において、「タ形」と「テイタ形」の区別に関する重要な点を述べたが、もう一つの区別に関しても述べるべきである。それは、「テイタ形」が可能とする二つの用法における区別である。「テイタ形」には「進行・同時」以外に「完了（以前）」を表す用法もあり、その場合は「テイタ形」を用いる節は「タ形」を用いる節より以前であることを表すものである。ここで、どのように「進行」を表す「タ形」と「完了」を表す「タ形」を区別[257]すればよいかという疑問点が生じてくる。以下では、その用法を表す例文を挙げ、それに対応する図もあげることとする。また、その区別に関する問題を明らかにするために、参考として言語習得の視点からの説明を述べるが、挙げられている例文は「テイタ形」における用法のみではなく「タ形」との対立も表す例文である。最初に、「進行」を表す例文を再び挙げていく。

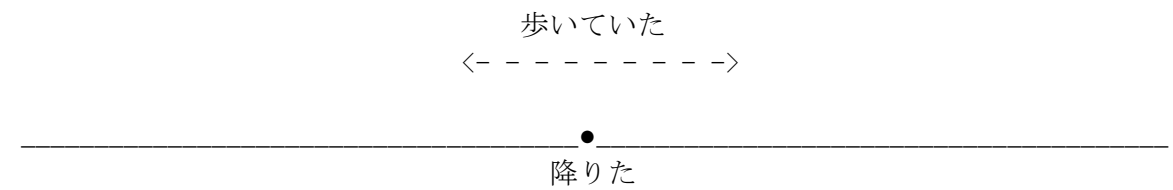
（293b）太郎は 3 時 1 分に走っていた



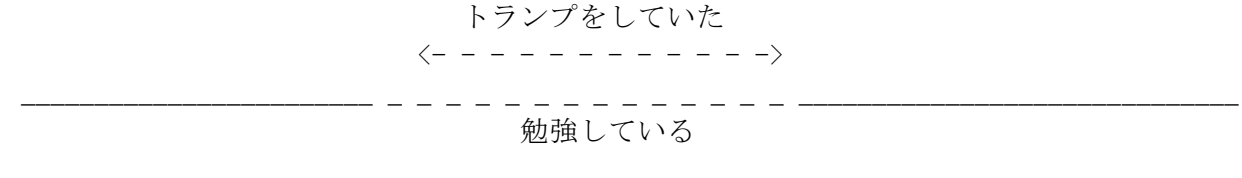
上記の図からわかるように、「走る」という動作は 3 時 1 分に開始した動作ではなく、その時間に終了した動作でもなく、その時点において進行中であると解釈すればよい。このように、当該例文の「走っていた」は「進行」[258]を表す形式であることが明らかである。

次に、「同時」を表す例文を挙げていく。以上の「進行」とは異なり、「同時」は別の事態が時間的に重なる場合である。このため、複文によく現れる用法である。例（295）と（296）とそれにおける事態の関係を表す図を挙げていく。

（295）＝（290）有楽町の東口に降りたときには、他人のことはどうでもいい人たちが、ゾロゾロ歩いていた。



（296）私が勉強しているあいだ、友達はトランプをしていた。

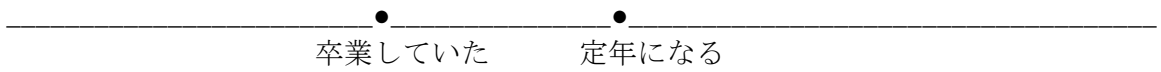


[257] 第六章と第七章より明らかになったように、イタリア語の場合、その区別は時制によるものであり、「完了」を表すのは大過去形であるのに対して、「継続」を表すのは半過去形である。

[258] イタリア語では、この場合の「テイタ形」は半過去形または進行形により描写される。

上記の二つの例文は「同時」を表す例文であるが、二つに分けたのは、前者はある過去における時点（降りた）との同時性を表すのに対して、後者は過去において並行していた二つの動作・状態（勉強していた・トランプをしていた）を表す例文であるからである。以下では、「完了」を表す例文を挙げていく。

（297）私が定年になる前に息子はすでに卒業していた。



このように、「テイタ形」は進行以外にある過去の時点における動作・状態より以前に完了した動作・状態を表すことができる時制である。すでにさきの章において言及したように、工藤（1995）と高橋（1985）はこの用法をそれぞれ「過去パーフェクト」[259]と「以前完成」と呼び、事態が表す先行性に焦点を当てている。第四章では、「テイタ形」における「完了性」について簡潔に言及し、「過去完了」を表す形式であると述べたが、この点に関しては後述するため以下ではその用法を表す例文とそれに関する問題点に関して述べていく。

言語習得の視点からの用法を説明すると、寺村（1984）は、「テイル形」と「テイタ形」を比較した場合、「テイル形」は継続相現在、「テイタ形」は継続相過去であり、「テイル形」を過去にすれば「テイタ形」は使えると母語話者は考えるかもしれないが、「テイタ形」は学習者の目から見ると使いやすい表現ではないと述べている。江田（2013）も同様に、その適用が複雑であると指摘し、説明として以下の例文[260]を挙げている。

（298）*旅行中京都の街で優雅できれいな芸者に会っているし、写真をとっていました。
（299）*曲がりくねった道に沿って、面白い話をしながらおりてきた。ふもとに戻って時計を見ると、二十分しかかからなかった。実は走っておりたのだった。その夜、山ノ上旅館で泊まっていた。翌日の朝早く起きて、山に登った。

前者の例文に関しては、江田（2013:130）も説明しているように、学習者はおそらく写真をとったのは一定の時間がかかったため、継続相が適用されたのであろうと推測ができる。このことに関して、許（2005:145）は学習者が「テイタ形がテイル形の過去であることを確認できたとしても、テイタ形を正しく使用できない原因として、教室内の指導不足が考えられる」としている。後者の例文は寺村（1984:144）が挙げている例文であり、それに関しては次のように述べている。日本語の母語話者ならば「かかっていなかった」と「泊まった」にするだろうと説明している。継続相と完成相については、日本語のテンスとアスペクトの表現は実際にかかった時間の長さではなく、個々の事柄をひとまとまりのものと捉えた場合には「タ形」を使うというように、話者の捉え方によると述べている。工藤（1995）も、例（298）に関しては、「泊まった」と「泊まっていた」の対立は〈とらえかた〉の違いであると述べている。どちらにしても客観的事実としては同じく 7,8 時間継続したが、「タ形」では継続性が無視され、いわば点的に、時間的に限界づけられて捉えられる。一方、「テイタ形」の用法に関しては、「テイタ形」では時間的に限界づけられないで、継続的に捉えられると述べている。寺村（1984）は、「テイタ形」の用法について上記の例文を挙げ、「時計を見た」のが過去のことであり、「二十分かからなかった」のは、その時点より前のことであるため、「二十分かかっていなかった」とすべきであると述べている。しかし、江田（2013）も指摘しているように、過去より以前のことであればどの場合においても「テイタ形」により表現できるか否かという疑問が生じる。同じような疑問点はイタリ

[259] 第四章において述べたが、工藤はパーフェクトを「ある設定された時点において、それより前に実在した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること」と定義している。また、その設定時点の位置に応じて三つの種類を提案し、設定時点が過去において位置付けられているなら「過去パーフェクト」となる。この用法の場合、設定時点が常に存在しているのに対して、「継続」を表す「テイタ形」には存在していない。
[260] 江田（2013:129）から引用したものであるが、工藤（1995:62）も同じ例文を挙げている。

ア語の大過去形に関して論じたときにも生じた。大過去形はその文において現れている動詞との先行関係を表す時制であるとは限らないことを様々な例文を介して明らかにした。つまり、二つの事態が連続した場合、大過去形により描写された事態が近過去形・遠過去形により描写された事態以前に起こったものとして解釈できない場合も多いということである。日本語では、二つの事態が連続した場合、「テイタ形」により描写された事態は常に先行性を表すか否か、また用法において条件があるか否かという疑問が生じる。このことに関しては町田（1989）も述べている。

町田（1989）によれば、非状態性述語を用いた二つの文が連続して述べられる場合、通常は第一の文が先、第二の文がその後で起こったと理解され、そして状態述語と非状態述語の組み合わせの場合、二つの事象が真である区間が重なり合い、一般的には状態述語の文が示す事態が真である区間内に非状態述語の事象が成立したことを表す。二つの事態・状態が重ならずに成立することを表すには、状態述語同士の場合、非状態述語同士の場合は接続詞によって示すことができると述べている。状態述語と非状態述語の場合も副詞や接続詞により示すことができる。以下の例文[261]が挙げられている。

（300）花子は走った。それから花子の妹も走った。

上記の例文では二つの事態が重なり合わず、はじめの事態が先にあり、次の事態が続いて起こった事が示される。もしその関係が逆であり、第二の文によって示される事態が先に起こった事を表すには、非状態述語を用いた文は第二文に非状態述語を用いて「テイタ形」とすることにより示すことができるとしている。つまり、以下のような例文になる。

（301）花子は走った。花子の妹は走っていた。

以上の例文では、花子が走ったとき、その妹はすでに走っていたことが表されると言える。町田（1989:98）では、成立した時間の順に並べればすむところを、わざわざ時間を逆転させて述べているのは、「花子が走った」が何らかの意味で談話的には重要な情報をもたらし、「花子の妹が走った」はそれに付随する情報を与えるに過ぎないからであるとされている。つまり、焦点が「テイタ形」を用いた節ではなく「タ形」を用いた節にあるという結論に至る。江田（2013:190）はそれに関して以下の例文を挙げ、重要なのは「タ形」を用いた節であり、「テイタ形」を用いた節はその背景を示すとしている。

（302）「歩いておりましょうか」と于栄勝が提案した。「よし、その方がいい」とまず私が手をあげて賛成した。皆の意見が一致して歩いておりることになった。「どれぐらいの時間がかかるか」ときくと、四十分ぐらいという。

江田（2013）は、なぜ以上の例文の順番が変わり、「タ形」により描写された事態が「テイタ形」に変わるとその文がおかしくなるかという疑問に対して以下のように説明している。さらに、なぜ以下の（303c）においては問題がないかということに関しても説明している。

（303a） 皆が賛成した。歩いておりることになった。
（303b）?歩いておりることになった。皆が賛成していた。
（303c） 歩いておりることになった。**おりる前には**皆が賛成していた。

例（303b）を容認される文にするには、「おりる前には」のように、とりたてて過去を振り返る文脈が必要となると言える。つまり、まず「歩いておりることになった」ことを述べ、その背景の状況が「テイタ形」により描写されるような文脈である。「タ形」を用いた節が重要であり、「テイタ形」を用いた節はその背景を示すと説明している。

すでに述べたように、「テイタ形」は「完了」のみではなく「同時」を表すこともできる。この場合、「テイタ形」は他の節と時間的に繋がっているという用法である。つまり、「同時」と

[261] 町田（1989:97）から引用したものである。

は、「テイタ形」により描写される事態と別の事態が時間的に重なるという用法である。これは、接続助詞が受ける節の接続期間のあいだにその後に続く節の別の事態が重なる場合と、その後に続く節が一定の状態を示す場合がある。ただし、次のことに注意すべきである。多くの場合、「テイタ形」を用いた節と「タ形」を用いた節のあいだに時間的な切れ目が必要である。これは「テイタ形」が「完了」を表す場合に関する制約である。なぜなら、もし時間的な切れ目がない場合は「同時」または一定の期間のあいだに起こる別の事態の意味となるからである。切れ目というのは時間副詞のことでもある。説明として江田（2013:195）は以下の例文を挙げている。

（304）**昨日は**一日中家で本を読んでいたから、**今日は**出かけました。

上記の例文において、「昨日は」と「今日は」を削除するとその例文は非文となる。そのため、完了を表す文の場合、切れ目が必要であると言える。また、同時性を表す文では、「タ形」を表す節が状態性である必要があることにも注意すべきである。期間中の出来事の文では「テイタ形」を用いた節の期間に別の事態が起こったことが述べられる。この場合は二つの節の時間には切れ目がなくてもよい。なぜなら、「タ形」を用いた節は「テイタ形」を用いた節とは別の事態であるという点では「完了」と共通していると言えるからである。なぜなら、「完了」の「テイタ形」は、過去は一定の状態であったが、その後状況が変わったと述べる文で用いられるからである。

このように、「完了」の「テイタ形」は「タ形」により描写された事態より前の状態を表現し、状態性述語の場合は、「テイタ形」を用いた節と「タ形」を用いた節が同時の場合もあるとわかった。また、「完了」では、焦点は「タ形」を含む節に当てられているのに対して「テイタ形」を含む節はそれ以前の状況を示すことも明らかになった。また、時間的な切れ目か状態の変化により「テイタ形」の解釈が完了になるということが言える。この点ではイタリア語と日本語はかなり異なるため、以降の節において再び言及することとする。イタリア語に関して論じた際に、主節と従属節における時制の用法を説明するために節を補足節と関係節に分けたが、日本語においても節を分類する必要があるか否かを以下で見ていく。

8.3 従属節における時制について

これまで分析してきた「テイタ形」を用いた例文を考察すると、主に対象となっていたのは単文あるいは単文の連続[262]であるということがわかる。先行研究においても単文の数が多いのに対して、複文（補足節など）の数が非常に少ないと言える。さらに、複文における分析は節の種類に基づく分析ではないことも明らかである。このため、本節では節の種類に基づく分析に進み、どのような場面・文脈において「テイタ形」が用いられるのか、どのような場面・文脈において用いられないのか、また適用において制約があるか否かなどという点に関して論じていく。本節では、「テイタ形」の適用とその解釈は節の種類によって異なるという視点から述べていく。

主節の時制と従属節の時制の相関関係に関してより細かい分析を行っているのは工藤（1985）であるが、その例文を考察すると様々なパターンが対象となっているが、節の種類に基づいた分析ではなく、「～とき節」のみが特殊の複文として扱われている。それ以外に、主節の動詞が伝達動詞、つまり引用節が取り上げられている。この場合には、次節の図からわかるように、「テイタ形」の適用は「主節出来事時以前」の用法に限られているとされている。節による分析は以上のことに留まっているため、ここでは、それ以外の節の場合、時制の適用はどのようになっているのかという疑問が生じてくる。

[262] 「花子は走った。花子の妹は走っていた」や「歩いて降りることになった。降りる前には皆が賛成していた」のようなこれまで挙げてきた例文を単文の連続として挙げることができる。

8.3.1 日本語における従属節の時制について － イタリア語との比較 －

本節の目的は日本語とイタリア語を比較することであるため、本節ではさきの章に挙げた「テイタ形」に対応する大過去形と半過去形を用いたいくつかの例文を参考にしていくが、その前に、半過去形を用いた例文（補足節と関係節）を取り上げる。複文の場合、従属節における時制は主節の時制を基準にするか否かという点で複文を分けるべきであるとさきの章において述べた。その際、半過去形が従属節において用いられた場合には主節における事態との同時性を表すと述べたが、必ずしもそうではないことが明らかになった。なぜなら、関係節の場合、半過去形は発話時点に対する先行性を表すからである。よって、節により基準となる時点が異なるため、イタリア語の場合、時制の適用の点に関しては補足節[263]と関係節の区別をすべきである。挙げた例文から明らかになったように、それぞれの節は異なる時制のルールに従う節である。さらに、関係節の中でも、動詞の性質による区別もすべきであると明らかになった。例えば以下の例（308）と（309）における解釈は両者が関係節であるにも関わらず同じではない。簡潔にまとめると、補足節の場合、従属節の時制は主節の時制を基準にしているため、この二つの時制が繋がっているが、それとは異なり関係節の場合、従属節の時制と主節の時制は独立している文であるため、その二つの時制は繋がっていないということが明らかになった。参考のため、再び以前の章に挙げた例文[264]を挙げる。

（307） Gigi ha detto che Adriana era malata
（308） I ladri sono entrati nell'appartamento di una ragazza che abitava vicino a me
（309） Gianni ha invitato la donna che mangiava un gelato

（307a）ジージはアドリアナが病気であると言った
（308a）空き巣は私の近くに住んでいた人の部屋に入った
（309a）ジャンニはアイスを食べている女の人を招待した

以上の例（307）は補足節であるため、従属節の半過去形「era malata」は主節の近過去形「ha detto」との同時性を表していると言える。それとは異なり、例（308）と（309）が関係節であるため、主節と従属節における事態が繋がっていないと述べてきた。つまり、例（308）の場合、従属節における半過去形「abitava」は主節における近過去形「sono entrati」との同時性を表す半過去形ではないということとなる。このように、関係節における従属節と主節の時制は繋がっていないため、「abitava」と「sono entrati」は繋がっていない事象であると解釈すればよいと論じてきた。同様に、例（309）も関係節であるため、その解釈を可能とするはずであり、つまり「mangiava」は「ha invitato」との同時性を表す半過去形ではないはずであるが、そうではない。例（308）における説明は例（309）において適切ではなく、関係節であるにも関わらず、「mangiava」と「ha invitato」は繋がっており、半過去形は主節の事態との同時性を表す半過去形となる。よって、補足節と同じ解釈となると言える。このことから、関係節において用いられている半過去形が果たしている機能は常に同じ機能ではなく場合により異なるとわかる。これは、動詞の性質によるものであるか否か、という疑問が生じるが、以下ではまず日本語訳に注目していく。

日本語訳を考察すると、用いられた時制の点では相違が現れていることがわかる。例（307a）と（309a）では非過去形が用いられているのに対して、例（308a）では「テイタ形」が用いられているという相違が現れている。後述するように、日本語の場合、主節の時制が過去時制であるとしても、従属節はその影響を受けず、非過去形の適用が認められる。このため、以下の例（310）を参考にすると、過去における同時性を表す時制として「テイル形」の適用が認められている。ただし、例（308a）と（309a）からわかるように、どちらも関係節であるのにも関わらず、非過去形の適用を認めるのは後者のみである。ここでは、なぜ「住んでいる」が用いられて

[263] 補足節は、引用節、疑問節と名詞節に分けられる。日本語記述文法研究会（2003）を参照。
[264] 例（307）～（309）では、主節における事態が近過去形により描写され、従属節における事態が半過去形により描写されている。

いないかという疑問が生じてくる。また、例（309a）と同様に例（308a）においても非過去形（テイル形）を適用すると、あるいは例（309a）において「テイタ形」を適用すると、解釈において影響があるのかという疑問も生じてくる。要するに、イタリア語と同じ現象が生じるか否かという疑問である。まず、例（307）～（309）において用いられた時制を考察すると、日本語においても補足節と関係節の区別を基準にして分析すべきであると考えてよい。

上記の例文において問題となっているのは「同時性」の現れ方であり、従属節に関しては以下のことも言える。一般的に、日本語では、同時性を表す時制形式として用いられるのは「テイル形」であるため、同時性を表す「テイタ形」を用いた例文が少ない。以下の例文からもわかるように、従属節における出来事が過去のことであるとしても、その同時性は非過去形により描写されることになり、それは発話時ではなく、主節の出来事を基準にしているからである。従って、以下の例文における「テイル形」は主節の事態との同時性を表しているため、イタリア語の半過去形に対応する時制であるということとなる。

（310）僕、確かに昨日、お姉ちゃんがこっそりケーキを食べているのを見たよ。

例（310）は、発話時からみれば過去のことであるが、主節の出来事時を基準にすれば、それと同時であるため、「テイル形」が用いられるのが一般的である。ここでは、過去における同時性を表す形式として「テイル形」のみが用いられるのか、あるいは「テイタ形」もその機能を果たすことができるのかという疑問が生じる。つまり、「お姉ちゃんがこっそりケーキを食べていたのを見た」という文が可能であるか否か、また可能であるなら「テイタ形」はどのような場面において用いられるのか、また「テイル形」との区別はどの要素によるものであるのかという疑問も生じてくるわけである。

工藤（1995）では、「テイタ形」はテンスの視点から見ると「発話時点以前」、アスペクトの視点から見ると「持続性」[265]を表しているとされている。そして、主節の出来事時から見ると「以前」を表しているとされている。すでに言及したように、工藤（1992:5）は複文に関して述べる際に、主節動詞の性質に焦点を当て、次のように指摘している「主節における動詞が「思う、考える」のような知的認識か、「言う、話す、知らせる」のような伝達活動を表す動詞である場合、「ル」「タ」「テイル」「テイタ」は次のような対立をもつといえよう。伝達活動の本質が、感性的認識ではなく、知的認識を変えることにあるとすれば、これらはすべて、人間の知的認識に関わる動詞であるといっていいだろう。なお、「知る、わかる、気づく」のような動詞は、感性的認識（知覚）も表すことがあるが、基本的にはこのグループに属している」。この場合、基本となる時点は発話時点ではなく主節の出来事時であり、それに合わせて「以後」「同時」「以前」を表す時制が以下のように決まっていると述べている。

図 37. 主節の出来事時に合わせた伝達と知的認識動詞の場合の時制

主節の出来事より	完成性	持続性	パーフェクト性
以後	スル	（シテイル）	（シテイル）／
同時	／	シテイル	シテイル　シタ
以前	シタ	シテイタ	（シテイタ）／

以上のように、「テイタ形」は「同時」ではなく、「以前」のみを表していると説明されているため、上記の例（310）においては「食べていた」という形式の適用は不可能であるということとなる。なぜなら、工藤では、「テイタ形」は主節の出来事における先行性のみを表すとされているからである。また、工藤は主節における動詞が伝達動詞または知的認識動詞であるか否かと

[265] 工藤の言う「持続性」は本論で呼んでいる「未完成性」のことである。

いう区別をしているが、節の種類に基づいた分析に関しては言及されていない。言うまでもなく、伝達動詞が用いられることより、その例文は補足節の一種である「引用節」とわかるが、説明はこれに留まっている。また、挙げられている例文を考察すると、「テイタ形」が適用された例文は名詞節に絞られているということにも注意すべきである。このため、以下では節の種類に基づく分析とそれによる時制の適用を区別すべきであるか否かについて述べていく。

8.3.2 従属節の種類と時制形式の関係について

テンスもアスペクトもある出来事を時間のながれの中において捉える点で共通しているが、「未来」「現在」「過去」というテンス的意味の体系は、話し手の発話時を基準点として成立するカテゴリーであり、「完成相」「持続性」「パーフェクト性」というアスペクト的意味の体系は出来事の時間的展開の立場から話し手が時間を認識する仕方の対立である。そして、以前の節においても述べたように、日本語のテンス体系とアスペクト体系は動詞の形態論的な側面上からも相関している。工藤（1995）は発話時を基準にした時制の適用を以下のようにまとめている。

図 38.　テンス・アスペクト体系

アスペクト テンス	完成性	持続性	パーフェクト性
発話時以後＝未来	スル	シテイル	シテイル　／
発話時同時＝現在	／	シテイル	シテイル　シタ
発話時以前＝過去	シタ	シテイタ	シテイタ　／

以上の図は日本語におけるテンスとアスペクトをまとめたものであるが、複文の場合、従属節の種類により以上の用法に対して制約があるか否かという疑問が生じる。すでに明らかになったように、複文が補足節であるかあるいは関係節であるかにより従属節における時制が異なる場合がある。そのため、以下では従属節を分類してどのような時制の適用が可能であるかを見ていく。日本語のテンス・アスペクトに関する幅広い考察を行っているのは寺村（1984）であり、テンス観察の枠組みとして以下のように記述している。まず、「述語の種類」、「現れる位置」、「実と想」を設定するが、述語は「状態的述語」と「動的述語」の二大別に分け、そして位置は「文末」と「従属節内」、最後に実と想は文末の場合にだけ「叙実的」と「叙想的」に分けて記述している。本節は「従属節内」のみを対象とすることとする。

まず、寺村（1984:186）は従属節のテンス・アスペクトの現れ方を一般化するために、従属節の形を以下のように整理している。述語の種類も、文末の場合と同様に、状態的述語と動的述語の二種類であるとしている。

従属節：引用節　――――「・・・と言う」「・・・と思う」の「・・・と」
　　接続節　――――「が、から、のでなどで後の節と意味的関係を結ぶ形式」
　　連体修飾節 ――――「名詞を修飾する形式（ため、とき、ところ、ことなど）」
　　名詞節　――――「こと、の、などで全体が名詞として働く場合」

述語：状態的述語　――――　a. 名詞＋ダ（の類）
　　b. 名詞（動的形容詞）＋ダ（の類）
　　c. 形容詞
　　d. 状態を表す動詞
　　動的述語　――――　動き、行為、物事の変化、出来事

以上、寺村（1984:120, 192, 195）は、従属節を引用節、接続節、連体修飾節と名詞節に分けている。その中で、「引用節」のテンス・アスペクトは、独立の文の述語における場合と同じ決まりに従うため従属節であるゆえの特別の決まりを考える必要はないとしている。また、「接続節」については、「状態性の述語の場合、「基本形と過去形」の使い分けはテンス的であるから、「従属節」の従属の度合いの高さ低さによって、主節のテンスに同化したりしなかったりということが起こる」としている。次に、連体修飾節についても、動的述語・状態性述語に分けて観察している他の場合と同様に、動的述語の基本形と過去形の対立では、テンス的側面は主節のテンスに包み込まれ、アスペクト的側面のみが表面に現れることが多いとしている。

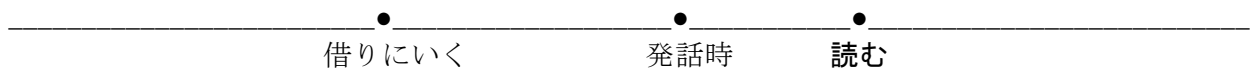
次節では、節を種類に分けて「テイタ形」における用法を中心として分析することが目的となるが、そのために他の時制における一般的な用法に関しても言及していく。このように、以下では従属節の時制は何を基準とするかという点に関して論じていく。

一般的に、主節の時制は発話時を基準として事態を時間軸に位置づけ、つまりその事態をそれ以前に位置づけるか、それ以後に位置づけるか、あるいは同時と位置づけるかということを表すが、それとは異なり従属節の時制は、主節の事態の成立を基準とする場合と発話時を基準とする場合があることを見てきた。基本的には、非過去形や過去形が、どの時点に事態を位置づけるかは述語の性質により決まるが、場合により時制の時間軸における位置づけが曖昧であるときもある。説明として以下の名詞修飾節[266]が挙げられる。

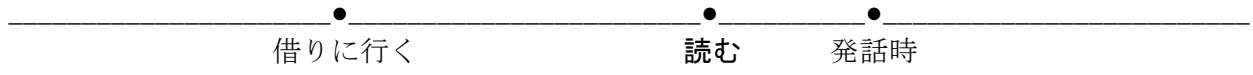
（311）本を 1 冊読み終わったので、次に読む本を図書館に借りに行った。

上記の例文は名詞修飾節内の述語が非過去形をとる例文であり、主節の事態を基準として従属節の事態を時間軸に位置づける例文である。この場合、非過去形「読む」はどのように解釈すればよいかという疑問点が生じる。つまり、「読む」という事態は時間軸において発話時以前に位置づければよいか、あるいは発話時以後に位置付ければよいか、という情報がこの例文でははっきりしていないわけである。図で表すと以下のようになる。

(a)



(b)



上記の（a）は新しく借りてきた本をまだ読んでいないという意味であるのに対して（b）は新しく借りてきた本をすでに読み終わっているという意味である。結果として、前者では従属節の事態が未来を表しているのに対して後者では過去を表している。

このように、主節における事態の成立時を基準とする時制の意味解釈が曖昧である場合もあることがわかったが、この点ではイタリア語と日本語は異なるため、後述することとする。以下では、従属節の種類と時制の関係について論じていくが、とりわけ寺村の分類における引用節と名詞節[267]に関して述べていく。

[266] 日本語記述文法研究会（2003:154）から引用したものである。
[267] イタリア語の「関係節」に対応している表現である。

8.4 補足節

述語に対して主語や補語の関係にある節は補足節と呼ばれる。基本的には、述語によって時制形式の適用に制限があるものもあるが、補足節内には非過去形と過去形がどちらも用いられる。以下のような例文[268]が挙げられる。

（312）テレビで台風が上陸する／上陸したのを知った。　「名詞節」
（313）鈴木さんは大阪に住んでいる／住んでいたと思う。　「引用節」

補足節として認められるものとして「名詞節」と「引用節」が挙げられる。まず、「～と」をとる**「引用節」**における時制の適用に関して述べ、次に「～の」をとる**「名詞節」**に関して述べていく。以前の節においてすでに述べたように、「～と」節は発言内容や思考内容の引用の形式「と」によって導かれるものであり、引用節内の非過去形または過去形は、基本的に、主節の事態の成立時を基準として事態を基準軸に位置づけるものである。以下では、状態性述語と動作動詞を区別し、それに相当する例文を挙げながらどのような共通点と相違点が存在しているかを見ていく。まず、状態性述語の場合を見ていく。

「状態性述語」の場合、基本的には「と」節の事態を主節の事態と同時に位置づけるが、非過去形が主節の事態以後の事態を表すこともある。以下の例文[269]が挙げられる。

（314）田中さんは次の週はずっと家にいると言った。

上記の例文の解釈に関しては、主節の表す過去のある時点において、未来の予定について述べる文であるが、実際の「家にいる」という事態はすでに過去のことである可能性もある。つまり、「家にいる」という事態は二つの解釈を可能とするものである。これは、おそらく「次の週」というのはいつのことであるのかという情報、つまり発話時を基準にしているかあるいは過去における時点を基準にしているかということと文脈によるものである。

次に、「動作動詞」の場合には、状態性述語とは異なり、非過去形は「と」節の事態を主節の事態と同時ではなく、事態以後に位置づけると言える。ただし、上記の例（314）と同様に、解釈が二通りになる場合もある。

（315）佐藤は私に三月いっぱいで退職すると告げた。

この場合、「と」節の非過去形は「告げた」という主節の事態以後に「退職する」という事態が起きることを表しているが、この例文においても二つの解釈の可能性がある。つまり、発話時点においてまだ「退職する」事態が起きていない可能性もあり、すでに起きたという可能性もあるということが言える。なぜ動作動詞と状態述語における非過去形の解釈が異なるかを以下で述べていく。

補足節の場合、基準となる時点は主節の事態成立時であるが、述語の種類により従属節の事態の時間軸における位置が異なる。再び以上の例文を参考にしよう。前者は「状態性述語」であるのに対して後者は「動作動詞」である。

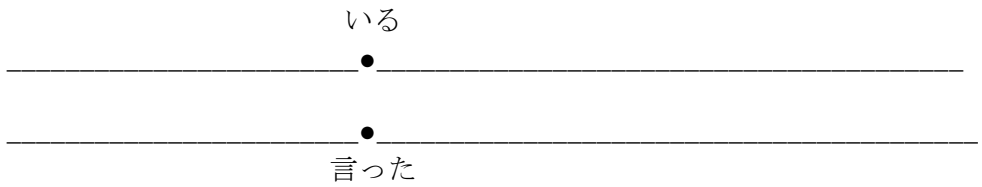
（314）田中さんは次の週はずっと家にいると言った。
（315）佐藤さんは私に三月いっぱいで退職すると告げた。

基本的に、すでに言及したように、状態性述語の場合、非過去形は「～と」節の事態を主節の事態と同時に位置付けるが、それ以後に位置付ける場合もある。以上の例文の前者における「いる」は主節の事態以後の事態を表している非過去形であると言える。以下のように表すことができるが、その次に他の可能な解釈を表す図も挙げる。

[268] 日本語記述文法研究会（2003:156）から引用したものである。
[269] 日本語記述文法研究会（2003:164）から引用したものである。

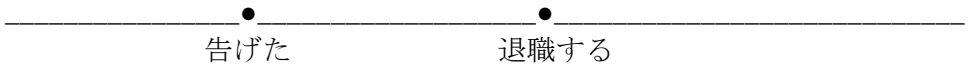
（314a）田中さんは**次の週**はずっと家にいると言った　【後続関係】

（314b）田中さんは家にいると言った　【同時性】



この場合、「次の週」という時間を表す副詞が現れているため、従属節の「ル形」は後続関係を表していると言えるが、その副詞を削除すると同時関係を表すこととなる。なぜなら、基準となるのは主節の「タ形」であるが、補足節の場合、「タ形」との同時性を表すのは非過去形であるからである。当該例文において用いられているのは「テイル形」をとらない「いる」であるため、「ル形」によりその同時性が表されている。それとは異なり、「テイル形」をとることができる動作動詞の場合、主節の「タ形」との同時性を表す形式は「テイル形」となる。つまり、従属節における「テイル形」は主節における「タ形」との同時性を表すということとなる。従って、以上の例（315）における「ル形」は同時性を表すのではなく、未来を表す形式である。例（315）は動作動詞を用いた例文であり、従属節における「退職する」という事態は主節の「タ形」より後に実現する事態である。図で表すと以下のようになる。

（315）佐藤さんは私に**三月いっぱいで**退職すると告げた

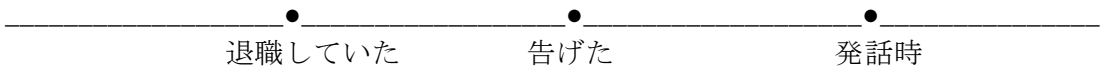


以上、例（315）における「ル形」は「告げた」より後に実現する事態のことを表している。すでに述べたように、この「ル形」が同時性を表していないのは、その機能を担っている「テイル形」の適用を可能とする動詞だからである。このように、述語の種類により、従属節において用いられている動詞が基準となる主節動詞とどのような時間的な関係にあるか、つまり時間軸のどの時点において位置付けられているかがわかると言える。ただし、例（314）からも明らかになったように、時間を表す副詞の役割も大きく、その表出により事態の時間的な位置が変わる場合もあるため文脈で判断するときが多い。

以上、従属節における事態が非過去形により描写される例文を挙げたが、過去形により描写される例文も挙げていく。そのために、例（315）を過去形にし、どのような解釈が可能となるかを見ていく。

（315）a. 佐藤は私に三月いっぱいで退職したと告げた。
（315）b. 佐藤は私に三月いっぱいで退職していたと告げた。

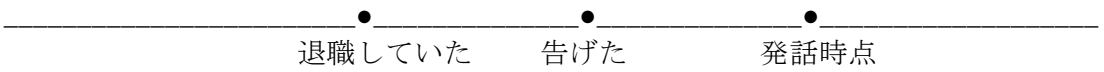
前者の場合においても、後者の場合においても「退職」という事態は未来における事態を表す例文ではなく、過去のみを表している例文である。ここで、問題となっているのは二つの事態の相関関係、つまりその時間的な順番である。なぜなら、「テイタ形」はテンスの視点から見ると、過去において起こった事態の前に起こった事態、つまり「主節出来事時以前」を表す時制であることにより、後者の「退職していた」は「告げた」より前に起こった出来事であるはずだからである。つまり、この説明によるとこれは「テイタ形」における「完了（以前完成）」の用法である。このように、「退職する」−「告げる」という順番として解釈すればよいが、それは正確であるか否かという疑問が生じる。以下の図でその順番を表すことができる。



節 8.3.2 に挙げた図 37 からもわかるように、「タ形」も「発話時以前」を表しているが、周知のように、アスペクトの視点から見ると「タ形」と「テイタ形」は異なっている時制である。従って、以上の「退職した」と「退職していた」はその点で異なるが、さらに前節において述べたように「テイタ形」は二つの機能を果たしている。図 37 に従うとその時制形式は「持続性」あるいは「パーフェクト性」を表すことを可能とする。前者の場合、「退職する」という出来事は持続している[270]のに対して、後者の場合、その出来事はある時点において完了しているという相違が存在していると言える。従って、相違点として挙げられるのは「設定時点」の有無である。このような相違を以下の図で表すことができる。

【持続の「退職していた」】

【パーフェクト（完了・以前完成）の「退職していた」】



このように、「テイタ形」の機能により例（315）において二通りの解釈が可能である。この例文に関してネイティブスピーカーに聞いた結果、「退職していた」は「すでに退職者の状態だった」という解釈が一般的であるようであるため、二番目の図に当てはまる解釈であると言える。

[270] ここで、「持続している」というのは、退職の手続きをしているということである。

この場合、設定時点が必ず存在していると繰り返し述べたが、設定時点がなくても[271]「テイタ形」が用いられるか否かという疑問も生じる。

以上のように、引用節の場合、「テイタ形」は従属節において用いられると、主節の時制に対する先行性を認めることがわかった。ここで、従属節において「同時性」の適用が常に不可能であるか、また可能であればどのような場合において可能であるかという疑問点が生じてくるわけである。以下の例文から明らかになるように、「テイタ形」は「同時性」を表す場合もあるが、引用節の場合ではないことに注意すべきである。参考のため、従属節において「テイタ形」を含む工藤（1985）が挙げている例文も以下で挙げる。工藤では以下の例文は「以前＝持続性」を表している例文である。つまり、主節の出来事時より前に起こった事態である上に「持続性」を表す「テイ形」であるとしている。

（316）太郎が自分の絵を見せたいとか何とか**話していた**のを昨日あたり聞きましたよ。
（317）おそらくマリ・テレーズは話題を変えようと思ったためであろう。私が学生でパリに**住んでいた**こと、思想史の**勉強をしていた**ことなどを話した。
（318）重松はシゲ子が手を放してから、自分が手を**引かれていた**ことに気付いた。

上記の例文からわかるように、工藤（1985）が挙げている例文における「テイタ形」は先行性を表す「テイタ形」であるが、「完了」を表す用法ではなく「持続性」を表す用法である。例えば、最初の例文における二つの事態の相関関係を考えると、「聞く」という動作が起こっているときに「話す」という動作も同時に起こっているという解釈になると言える。このように、「話していた」「引かれていた」「住んでいた」「勉強していた」は「タ形」との同時性を表している時制であるが、例（317）に関しては疑問が生まれる。なぜなら、「住んでいた」と「勉強していた」は完了の意味も可能とすると考えられるからである。ただし、例（316）においても同じような疑問点が生まれる。なぜなら、おそらく場面から判断ができるが、「話していた」は「聞きました」を基準にしているか否かというのが曖昧であるからである。もし話し手が過去における他の事態または設定時点を基準にしてその発言をするなら「話していた」における「テイタ形」は「完了」を表す形式として捉えてもよい。つまり、「話す」という動作は「聞く」と無関係であり、過去における明示されていない時点において「話す」という動作が起こったという解釈も可能である。

また、工藤（1995）では「テイタ形」の完了用法は「～とき」節にしか現れないが、その用法を可能とする補足節は挙げられていない。さらに、「テイタ形」における用法を問わずその形式を用いた引用節の例文が挙げられていないため、補足節における「テイタ形」の適用には制限があるように感じられる。さきの節においても、イタリア語[272]に関して論じた際に、同じような現象が現れていた。参考のため、以下では再び例（203）と（205）を挙げていく。

（319）＝（203） a. ルチオはピエロが家を買ったと言った。
b. ルチオはピエロが家を**買っていた**と言った

（320）＝（205） a. ジーノは（彼自身が）もう食べたと言った。
b. ジーノは（彼自身が）もう**食べていた**と言った。

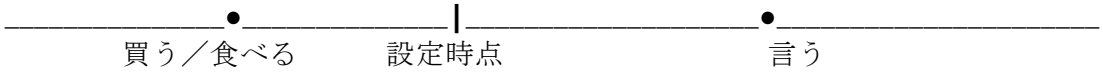
まず、以上の例文（319b）と（320b）における「テイタ形」はどのような機能を果たしているかという疑問が生じる。これまで述べてきたように、引用節の場合、「テイタ形」は先行性を表

[271] イタリア語の場合、「完了」の「テイタ形」に対応する時制は大過去形である。大過去形は複合時制であるため、設定時点が必ず存在している。第七章において論じたように、その設定時点は文内にある他の事態であることが可能であるが、常にそうではなく、明示されていない設定時点も可能である。

[272] イタリア語では以下のような例文となっている。
・Lucio ha detto che Piero ha comprato una casa（近過去形）
・Lucio ha detto che Piero aveva comprato una casa（大過去形）
・Gino ha detto che lui ha già mangiato（近過去形）
・Gino ha detto che lui aveva già mangiato（大過去形）

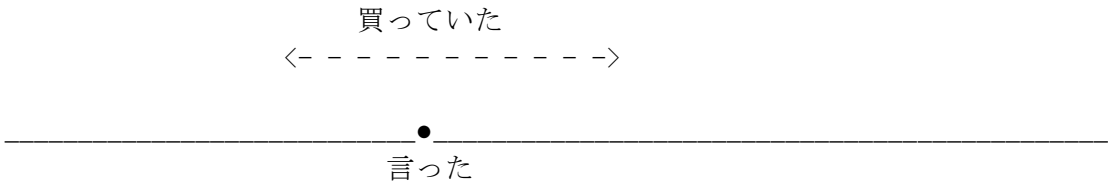
していると述べたが、場合により「持続性」の解釈も可能であるか否かという疑問も生じる。工藤の説明に従うと、その解釈を可能とするのは「テイル形」であるため、上記の「テイタ形」は「持続性」を表すことができないという結論に至る。もし可能であるとすれば、どのように区別すればよいかということを考えなくてはならない。それは、言うまでもなく、設定時点の有無による相違である。「パーフェクト」の場合、過去におけるある時点が必要となり、それにおける先行性を表すという用法となるため、以下のような図で表すことができる。その図に従うと例（319b）における「テイタ形」は「完了」用法を認めると言ってよい。同様に、例（320b）における「テイタ形」も同じ解釈を可能とすると言える。ただし、例（319b）と例（320b）のあいだに相違点が存在し、それは「もう」の適用である。この副詞が適用されているため、「完了」の意味は強まり、持続している事態または進行している事態[273]としての解釈が弱まってくる。当然、例（319b）においても「すでに」の補足があればその解釈がわかりやすくなる。

【買っていた／もう食べていた】



以上、「完了」の意味が認められると述べたが、例（319b）における「テイタ形」は進行中である動作として解釈することも可能であると言える。その場合、ピエロは家を買う手続きなどをしている最中という意味で解釈すればよい。以下の図で説明ができる。

【買っていた／*もう食べていた】



以上の図からわかるように、設定時点が求められる用法ではなく、主節の事態が基準となる時点となる。このように、「買っていた」は二つの解釈を認めると言えるが、「食べていた」を用いた例文には完了を表す「もう」が表されているため、その解釈は不可能である。

これまで考察してきた例文を基準にすると簡潔に次のようにまとめることができる。まず、「テイタ形」の用法に関しては補足節の場合、引用節と名詞節を区別すべきであり、それはその節の種類により「テイタ形」の適用が異なるからである。引用節の場合、従属節において用いられている「テイタ形」は完了のみではなく同時の意味も可能とするが、「もう・すでに」が現れると完了の意味がより強まる。また、「もう・すでに」が現れると同時の意味が不可能となるということも見た。名詞節の場合、同時性の解釈が強いという相違が存在していることがわかった。次節では名詞修飾節における「テイタ形」の適用を詳しく見ていく。

[273] イタリア語の場合、進行性を表すために進行形（stare の半過去形＋ジェルンディオ）を適用しなくてはならない。つまり、「stava mangiando」になるが、日本語では非過去形の「食べている」を適用することとなる。半過去形の適用も可能であるが、その場合、時間的投錨が必要となる。第七章を参照。「aveva mangiato」と「stava mangiando」の相違として挙げられるのは、前者の場合、その動作がすでに完了しているのに対して後者の場合、まだ進行中であるという点である。いうまでもなく、これは大過去形と進行形がそれぞれ「過去完了」と「未完成」を表す時制であるからである。ちなみに、イタリア語の場合、「già（もう）」を追加すると、進行を表す場合においても適用が可能である。その場合、その動作の開始がすでに始まっているという意味となる。それとは異なり、日本語の場合、「もう食べている」となり、過去形の適用が不可能である。

8.5 名詞修飾節

文中の名詞の指示対象を限定したり情報を付け加えたりするために名詞の前に置かれた節を名詞修飾節という。名詞修飾節には、基本的に、非過去形と過去形がどちらも用いられるが、節のタイプによって非過去形と過去形の適用が異なることに注意すべきである。基本的に、四種類に分けられ、それらは「格成分名詞修飾節」「内容補充名詞修飾節」「相対名詞修飾節」「付随名詞修飾節」である。これらの最初の二つのタイプの場合、非過去形も過去形も用いられる[274]が、それ以外のタイプの場合、非過去形のみか過去形のみかが用いられる。以下のような例文[275]が挙げられる。

（321）私が買う／買った本は値段が高い。　「格成分名詞修飾節」
（322）佐藤さんと会う／会った（という）話を聞いた。　「内容補充名詞修飾節」
（323）母親が本を読んでいる／*読んでいたそばで子供が遊んでいた。[276]　「相対名詞修飾節」
（324）もう一度詳細に*調査する／調査した結果を、早急に報告します。　「付随名詞修飾節」

例（321）の場合、主節における事態の成立時を基準にして事態を時間軸に位置づけることを表す例文であるのに対して例（323）の場合はそれを可能とする例文ではない。後者では、二つの事態は時間的に同時に起きているため、認められる時制は非過去形のみである。このように、この場合においても過去における同時性は「テイタ形」により描写することが不可能であることがわかる。

以下では、格成分名詞修飾節を取り上げてその解釈に関して論じていく。状態性述語をとる格成分名詞修飾節において、非過去形は発話時を基準とする場合と主節事態の成立時を基準とする場合とがある。以下の例文は主節が過去形の場合であり、主節事態の成立時を基準として事態を位置づけている例文である。

【非過去形】
（325）テレビを見ている妹が話しかけてきた。

この場合では、「見ている」は非過去形であるが、発話時から見ると過去の事態を表している。これは、すでに言及したように、非過去形が発話時ではなく主節事態の成立時を基準として同時の事態を表しているからである。この場合、非過去形の同時性を表す形式が用いられるのが一般的である。ただし、同じ例文における動詞を変えると相違点が現れることに注意すべきである。例えば、以上の例文における「見る」を「住む」に変えると意味が異なることがわかる。以下ではどのような現象が生じるかを見ていく。

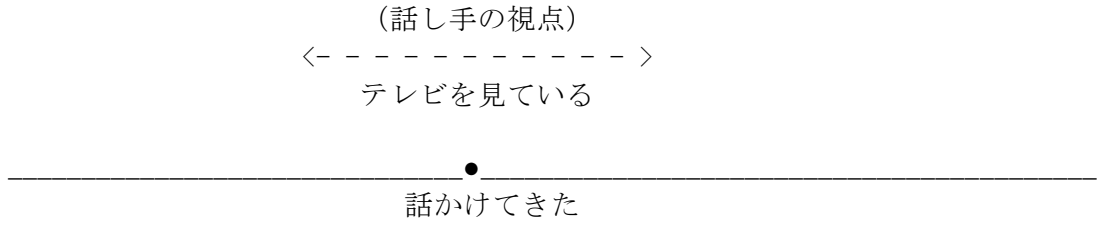
（325）a.テレビを**見ている／見ていた**妹が話しかけてきた。
（325）b.札幌に**住んでいる／住んでいた**妹が話しかけてきた。

以上の例文を考察すると、同じ節であるにも関わらず（a）と（b）のあいだには何らかの相違点が存在しているように感じられる。それは、用いられた動詞の性質による相違である。この相違が存在しているため、「テレビを見る」／「住む」と「話しかける」の繋がりは同じものであるとは言いにくい。なぜなら、（a）の場合、従属節は主節の時制に直接繋がっているものであるのに対して、（b）の場合、主節と従属節は独立している文であるように感じられるからである。要するに、（b）の場合、妹が話しかけたという事象と妹の札幌での暮らしは無関係なものである。それとは異なり、妹のテレビを見るという事象と妹の話しかけるという事象は直接繋がり、過去における時点において同時的に起こった事態である。言い換えると、基準となる時点が異な

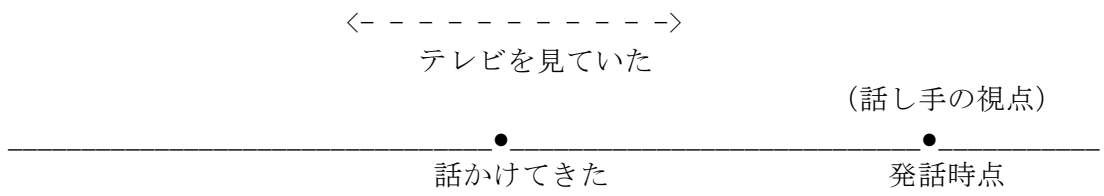
[274] 内容補充名詞修飾節のテンス形式の現れ方は、主名詞の性質によるところが大きい。例えば、「命令」や「誘い」のような名詞の内容を補充する名詞修飾節には非過去形・過去形といったテンス形式は現れない。この点に関しては、日本語記述文法研究会（2003:174）を参照。
[275] 日本語記述文法研究会（2003:169）から引用したものである。
[276]「読んでいた」の適用も可能であると判断するネーティブスピーカーもいる。

り、「住んでいる」は「話しかける」と同時に起こった事態ではなく、その発言のときの事実である。つまり、発言のときに、妹は札幌に住んでいるという解釈となる。この点では例（325a）と例（325b）が異なると言える。また、もう一つの問題点が生じてくる。上記に述べたように、過去における同時性を描写する時制は「テイル形」であるのに、なぜ例（325b）では「見ていた」も可能であるのか、またどのような相違があるのかという疑問が生じてくるわけである。ネイティブスピーカーに確認したところ、「見ていた」も可能であり、「見ている」と同じ解釈になるという結果が出たが、これはおそらく事態に対する時間的なものではなく、話し手の視点によるものである。つまり、どちらも進行中であるという解釈を可能とするが、話し手はどの時点を基準としてそれを描写するかということによって時制形式が選択される。もし話し手が過去のその時点に自分の視点を置くとすれば「見ている」にするのに対して、話し手が現在（発話時点）に自分の視点を置くとすれば「見ていた」にするという説明が考えられる。ただし、これは例（325a）に限っているものであり、例（325b）の場合「住んでいる」と「住んでいた」はそれぞれの時間的な意味をもつ時制形式である。以上の相違点を図で表すと以下のようになる。

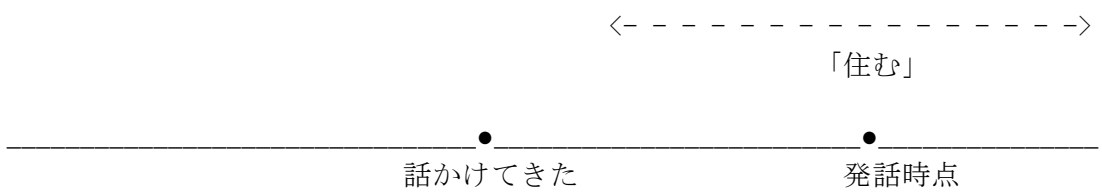
【（325a）見ている】



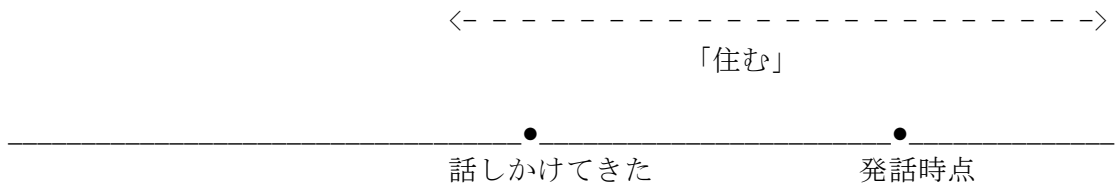
【（325a）見ていた】



【(325b)住んでいる】



【（325b）住んでいた】



例（325b）の場合、「テイタ形」を用いた例文は二つの解釈を可能とすると言える。それは、「今札幌に住んでいる」と「前にも住んでいた」という二つの解釈である。このため、上記の図において点線が長いのである。

以上のことから明らかになったように、節の種類が同じであるにも関わらず、事象の時間的な解釈が異なってくる場合もある。これは、おそらく、動詞の性質によるものであると考えられる。このように、従属節における時制の適用はまず、節の種類によるものであるが、同じ節の場合でも動詞の性質によってその適用が異なってくると明らかになった。なぜこのような現象が現れてくるかに関して以下で論じていく。

従属節における時制の適用は、節の種類によるものであるが、同じ節の場合においても動詞の性質によりその適用が異なってくるといくつかの例文を通してわかった。本節では、主に補足節（引用節と名詞節）と関係節（名詞修飾節）を対象とし、それを表す例文を介して補足節と関係節における時制の適用とその解釈が同じではないことを見たが、関係節の場合、さらに動詞によってもその適用が異なってくることも明らかになった。分析の対象として扱った動詞は「住む」「食べる」「見る」であり、「住む」と「食べる」の対立に関してはイタリア語の分析の際に論じたが、「住む」と「見る」の対立に関しては日本語の分析の際に論じた。この二つの対立における共通点は関係節（名詞修飾節）における動詞の解釈である。なぜなら、同じ節であるにも関わらず、「住む」と「見る」あるいは「食べる」における解釈が異なるからである。従属節において「住む」が用いられた場合、主節とのつながりが感じられないのに対して、「見る」あるいは「食べる」が用いられた場合、主節とのつながりが感じられるようである。よって、後者の場合、二つの事態が時間的につながっているように感じられるため、補足節と同じようなメカニズムになると言ってよい。このことから、なぜこの相違が存在しているかという疑問が生じてくる。まず、節が同じであるため、影響を与えているものとして考えられるのは動詞の性質である。よって、以下ではそれに関して述べていく。

動作動詞は動きと主体との関わり方という観点から、主体動作動詞と、主体変化動詞に分けられる。また、動きの時間的な性質という観点からは、継続動詞と非継続動詞に分けられる。本節において取り上げられている「住む」「食べる」「見る」はどれも継続動詞の枠に属している動詞であるが、挙げられた例文を考察すると、「食べる」と「見る」を用いた例文には目的語もあることに注意すべきである。目的語があるため、この動詞は持続動詞ではなく結果動詞の分類に属することとなる。つまり、イタリア語の動詞の分類[277]に従うと目的語がない「食べる」は持続動詞であるのに対して、目的語を用いている「アイスを食べる」結果動詞であるということとなる。また、目的語があることにより telic 動詞の枠に属することとなるとも言える。このような動詞の使い分けに基づいて他の動詞を適用してみよう。以下では「働く」という持続動詞を用いた例文を挙げていく。

（326）銀行で働いている／働いていた妹が話しかけてきた。

[277] 継続動詞として認められているのは結果動詞と持続動詞である。非継続動詞として認められているのは変化動詞と瞬間動詞である。結果動詞と持続動詞の相違として、「mangiare（食べる）」が持続動詞であるのに対して、「mangiare una mela（リンゴを食べる）」が結果動詞であるという例が挙げられる。

以上の例文における解釈は「住んでいる／住んでいた」を用いた例文と同じ解釈を可能とするはずである。この場合、妹が話しかけたという事態と妹が銀行で働いているという事態はつながっていないと言える。つまり、「テイル形」を用いた場合、妹が銀行で働いているのは発話時と同時であり、話かけるという事態とは無関係であるため、主節と従属節は独立している文であると言ってよい。ただし、同じ枠に属しているもう一つの動詞を適用するとこのような解釈が曖昧になることに注意すべきである。以下では持続動詞である「泣く」を適用してみる。

(327) 泣いている／泣いていた妹が話しかけてきた。

以上の例（327）は例（326）とは異なり、妹が泣いているという事態は同時であるという解釈も可能である。言うまでもなく、独立した文としても捉えられるが、この場合には曖昧さが現れるため、正しい解釈のために副詞などのような表現または文脈が必要であると言える。なぜこのふた通りの解釈が可能であるかというと、「泣く」という動作は時間的に限られる事態であるため他の動作との継続性が捉えられるからである。それとは異なり、「働く」というのは時間的に限られる事態ではなく反復または持続のように捉えられる事態であるためその長い過程のあいだにおける一点・一瞬を捉えることは不可能である。つまり、「働く」あるいは「住む」という事態はずっと継続する事態であるため、主節の事態はそれとの同時性を表すことができない。それに対して、「見る」「食べる」「泣く」のような事態は継続性を伴うが、その事態を一点として捉えることができる。このため、不可能であるはずだが、関係節において用いられても主節における事態との同時性を表すことができると説明できる。
次に、動作動詞を用いた例文を挙げ、状態性述語とはどのように異なるかを見ていく。

(328) 昨日は早朝からコンサートのチケットを買う人が長い列を作っていた。

上記の例文では、「買う」は非過去形であるが、発話時から見ると過去の事態である。この例文は、時間的に「長い列を作った」あとで「チケットを買う」という順番を表している例文である。このように、動作動詞の場合、基本的に、主節事態の成立時を基準として事態を時間軸に位置づける。また、非過去形は事態を主節事態以後に位置づけ、名詞修飾節の動作や事態が起きるのに先立って、主節の動作や事態が起きているということを表している。次に、過去形が用いられる場合について見ていく。

【過去形】

(329) 試合に出た選手がマッサージを受けている。

上記の例文では、「出た」は発話時から見て過去の事態を表していると言える。これは、格成分名詞修飾節内の述語が過去形である場合には、主節事態の成立時を基準として以前のことを表すからである。
以上、従属節における「テイタ形」の適用が限られていることが明らかになり、「完了」の用法と「同時」の用法は常に可能であるとは限らないことも明らかになった。通常、「テイタ形」は「テイル形」を過去にしたもの、また「タ形」を継続にしたものとして説明されているが、この説明は不十分である。また、節の種類により異なることも明らかになり、補足節の中でも「テイタ形」の用法が統一しているとは言えない。

8.6 まとめ

本章では、「テイタ形」における二つの用法、つまり「継続」と「以前完成」を検討した。最初に単文における用法を対象とし、どのような用法があるか、またどのような制約があるかを見たが、「テイタ形」の性質をより詳しく理解するためには複文における用法を考察すべきであるということもわかった。さらに、「テイタ形」の適用とその解釈は節の種類と動詞の性質により変わることが明らかになった。

まず、本章では「テイタ形」が表す「進行」と「同時」を区別し、さらに後者も二種類に分けることとした。つまり、「進行」とは異なり「同時」は別の事態が時間的に重なる場合であり、それをさらに「過去のある区間における時点」との同時性を表す「同時」と「過去において並行していた二つの動作・状態」を表す「同時」に分けるべきであると主張した。また、「テイタ形」が表す「以前完成」に関して、設定時点の存在が必要であると述べた。なぜなら、それに対する先行性を表すからであり、それの有無により同時という解釈との区別がつくこととなる。ただし、以上の「テイタ形」の用法は複文に適用すると変わるとわかった。本章においても複文を補足節と名詞修飾節の区別に基づいて分析し、「テイタ形」の用法に関して次のことが明らかになった。まず、補足節の場合、引用節と名詞節を区別すべきであり、その節の種類により「テイタ形」の適用が異なる。前者の場合、従属節において用いられている「テイタ形」は完了のみではなく、同時の意味も可能とするのに対して、後者の場合、同時性を表す用法が完了の意味より強いとわかった。

次に、名詞修飾節に関して明らかになったのは、動詞の性質により「テイタ形」の解釈が変わるということである。つまり、挙げられた例文から、用いられた動詞により基準となる時点がときには発話時であるのに対して、ときには主節の動詞であるという相違があると明らかになった。

本章では、この相違が動詞の性質によるものであるという視点から論じた。そのため、継続動詞を結果動詞と持続動詞に分けることとした。その相違として挙げられるのは目的語の有無であり、その相違があるため解釈も異なってくると言える。解釈に対する相違点として挙げられるのはその事態が時間的に限られるか否かということである。つまり、telic動詞は時間的に限られる事態を表す動詞であるため、その過程の中における一点または一瞬を捉えることが可能である。その一点が基準時点となり、主節の事態はそれとの同時性を表すことができる。このため、この場合には従属節と主節は関連していることとなる。それとは異なり、持続動詞の場合、時間的に限られ事態を表さないため、その過程の中における一点を捉えることが不可能である。よって、主節における事態はどの時点に基づいて同時性を表せばよいかが曖昧である。このため、主節と従属節が関連していないと提案できる。

結論

本論は、イタリア語と日本語における過去時制に関して論じるものであり、この二つの言語の時制のあいだにどのような相違点または共通点が存在しているかを明らかにし、伝統的な説明と先行研究が説明していないいくつかの用法も明らかにしていると言える。本論はこの比較を基準にして日本語とイタリア語の過去を表す時制における特徴に関して論じることを目的とした。
以下では各章において明らかになった現象をまとめながらその特徴に関して述べていく。過去を表す時制における用法とその解釈を明らかにすることが一つの目的であるため、それぞれの言語における時制形式を個々に分析したが、複文の場合には文を種類に分けて個々に検討してきた。この分析における重要な点は、時制形式をテンスの視点のみではなく、アスペクトの視点からも分析をすることである。なぜなら、イタリア語の場合においても日本語の場合においてもテンスのみの視点から分析すると、同じ過去を表す複数の時制のあいだの相違点が明らかにならないからである。さらに、イタリア語の場合、「複合時制」と「単純時制」の区別を明確にすべきであると主張した。なぜなら、その区別によってある事態に対する解釈が変わるときもあるからである。単純時制と複合時制における相違点として「完了性」の有無が挙げられ、これは後者のみが求める概念である。この概念はテンス的な概念ではなく、アスペクト的な概念であるため、話し手の主観性を表すものである。つまり、「完了」を表す複合時制は時間軸における当該事態の位置付けよりは話し手のその事態に対する視点を表すものである。このことがあるため、同じ過去を表す時制が二つ以上認められるが、用いられた時制により話し手はその事態に対する視点を明確に伝えることができる。したがって、単純時制は主に当該事態に対する客観的な情報、つまり時間軸における位置付けを伝える時制である。それに対して、複合時制は主観的な情報、つまり時間軸における位置付けのみではなく話し手の視点も伝える時制であるという相違点が本論の主な論点である。ただし、日本語においては複合時制に対応する時制形式が存在していないため日本語との対照は簡単ではない。本論において述べられているように、工藤は「パーフェクト性」というアスペクトのカテゴリーを提案したが、これはイタリア語の複合時制（近過去形、大過去形、前未来形）を表すことができるものであると言える。なぜなら、パーフェクト性も複合時制も必ずある時点における「完了」を求めているからである。この点を基準として二つの言語における過去を表す時制を対照することとした。以下では、まず本論における構成についてまとめていく。

第一章と第二章はイタリア語を対象とし、第三章と第四章は日本語を対象とし、取り上げられた時制は遠過去形・近過去形・過去を表す現在形と「タ形」「テイル形」「歴史的現在形」である。次に、第五章は時間を表す副詞「もう」「すでに」と「già」「ormai」を対象としている。第六章と第七章は大過去形と半過去形を対象とし、第八章はその二つの時制に対応する「テイタ形」を対象としている。以下では、各章において明らかになったことをまとめていく。

第一章と第二章は近過去形・遠過去形・現在形を個々に分析し、それらがどのような場面において用いられる時制であるかを説明する章であるが、要点として論じられているのは近過去形と遠過去形における「置き換え」の可能性である。本論では、二つの伝統的な説明、つまり「置き換え」が話し手の判断によるものであるという説明が不適切であると主張した。なぜなら、その置き換えが不可能である場合も存在し、その際にみられるのは話し手による判断とは関係のない制約であるからである。その制約は時制形式自体によるものであると第一章において主張した。なぜ時制形式による制約であるかというと、その置き換えは近過去形における「アオリスト的」用法に限っている現象であるからである。

本論は、イタリア語の近過去形も日本語の「タ形」も二重性をもつ時制であるという視点から述べるため、両方の時制には「アオリスト的用法」と「完了的用法」という二つの用法があると認める。よって、遠過去形との置き換えもこの視点から考察し、可能であるのは「アオリスト的近過去形」の場合のみであるといくつかの例文を通して明らかにした。それに反して、「完了的近過去形」の場合、遠過去形との置き換えが不可能であることを明らかにしたが、それは複合時制と単純時制による制約である。なぜなら、単純時制である遠過去形は発話時点以前に起こった

事態の描写を可能とするのに対して、複合時制である近過去形は発話時点以前に起こった事態のみではなく、それ以降に起こった事態の描写も可能とする時制であるからである。つまり、遠過去形とは異なり、近過去形は未来的な用法も可能とするということとなり、これは「完了性」に関わるものである。

第一章において提案したように、近過去形と遠過去形のあいだに存在する主な相違点として挙げたのは前者における「完了（compiutezza）」と後者における「完結（conclusione）」である。さらに、本論では近過去形における「完了」を二種類に分けることとし、一つ目は「compiutezza provvisoria（一時的な完了）」であるのに対して、二つ目は「compiutezza immaginaria（想像上の完了）」である。前者は一般的な用法、つまり発話時点以前に起こった事態による完了を表すが、後者は発話時点においてまだ実現していない事態による完了を表すものである。よって、遠過去形との置き換えを可能とするのは前者のみであるということとなる。このように、なぜ場合によりその置き換えが可能であるか、場合により不可能であるかという相違を説明することができた。また、この二つの時制の区別とそれぞれの機能が重要な点であり、この区別に基づいて時制の一致のルールを見直すことができた。本論において中心となっているのは主節の近過去形における区別であり、それは「現在と切り離されている近過去形（アオリスト的）」と「現在と切り離されていない近過去形（完了的）」の区別である。前者は遠過去形と同じ働きを果たしているのに対して、後者は現在形と同じ働きを果たしており、これにより従属節における時制が決まると述べた。

このように、近過去形と現在形のあいだの置き換えも可能であると提案したが、それは完了的近過去形の場合に限っているものである。ただし、制限もあるため、常に可能であるとは限らないということに注意すべきであると述べたが、場合により不可能であるはずにも関わらず近過去形の代わりに現在形の適用が認められる場合もある。その場合、第二章において論じたように、話し手が何を伝えようとするか、またどのように伝えようとするかということにより「昨日」のように過去時が現れる文脈においても現在形の適用が認められる。その用法を本論では**物語化**と呼ぶことにし、話し手の意図によるものであると論じた。この「物語化」が可能であるため、話し手はその出来事を現在形で描写するか、近過去形で描写するかということ自由に選択することができると言える。このように、完了的近過去形と現在形は同じ枠に属しているためその置き換えが可能である。第二章ではもう一つの説明に関して述べ、それは単純時制と複合時制のあいだに起こる「中立化」という現象に基づいた説明である。この説明によると、変化動詞の場合、現在形・近過去形と半過去形・大過去形という時制のペアのあいだの相違点が無くなるため置き換えることができる。ただし、本論では変化動詞以外に瞬間動詞、結果動詞、持続動詞を用いたいくつかの例文を挙げた結果、その現象は変化動詞に限っている現象ではないと主張した。

次に、第三章と第四章では日本語における過去を表す時制について論じ、その際に「タ形」と「テイル形」を取り上げた。イタリア語の近過去形と同様に、日本語の「タ形」も二重性をもつ時制であるという視点から論じたため、「タ形」を「完了的タ形」と「アオリスト的タ形」という二つの用法に分けた。この二重性は一般的に応答文と時間を表す副詞の適用において現れるとされているため、それに関しても述べたが、本論は「もう」における機能と「すでに」との対立を中心とした。この副詞に関しては第五章において詳しく述べられている。第四章は過去を表す非過去形を対象とし、特に歴史的現在を取り上げたが、この点に関しては興味深い現象が見られた。それは日本語とイタリア語の時制の用法における相違である。いくつかの例文を挙げ確認したように、同じ文脈においてもイタリア語と日本語の現在形の用法が異なっている。つまりイタリア語の現在形を用いた例文を日本語に訳すと過去を表す現在形の適用が場合により不可能であるという相違が現れた。イタリア語の場合、その適用は話者の意図によるものであるが、日本語においては制約があるとわかった。この点に関して本章において明らかになったのは次のことである。まず、歴史的現在形を「伝記的用法」と「会話的用法」に分ける必要があるということである。なぜなら、イタリア語とは異なり、日本語では「会話的用法」の場合に認められるのは過去形のみだからである。さらに、「ル形」のみではなく、「テイル形」も「会話的用法」における適用を可能としない。なぜ不可能であるかという疑問に対して本章は次のように提案した。まず、その出来事は「経験」であるか否か、そして話者はその描写に対して背景を設定しているか否かという二つの点が挙げられる。一つ目の点に関して、その出来事は経験として捉えられえな

いため、その適用は不可能となると言える。次に、二つ目の点に関して、つまり話し手が過去にある区間を設定してその中から聞き手に描写しようとする場合、非過去形の適用が不可能となると言える。このように、イタリア語との比較により、日本語の場合、過去において起こった出来事を表す現在形において制約があるとわかるが、この制約は会話的用法に限られるものであると言える。つまり、イタリア語とは異なり、日本語では話者が現在形で過去の出来事を描写できる場面が限られており、話者が現在からではなく事態が実現した時点での視点から語ると、つまり時間的な区間を設定してその中から語ると「テイル形」の適用が認められない。なぜなら、経験として認められないからである。

次に、第五章では、「もう」と「すでに」における対立について論じた。この二つの副詞は同じ機能を果たす用法と果たさない用法を可能とするが、主な相違点として挙げたのは「副次的意味」における相違である。前者も後者も「基本的解釈」として認めるのは「完了」であるが、それ以外に別の解釈があり、それは「副次的意味」である。この二つの意味を認めるという点では「もう」と「すでに」は共通している時制であるが、「副次的解釈」は一つだけではなく、二つある。一つ目は「想定より早く」であるのに対して、二つ目は「経験」であるが、「もう」は両方の意味を可能とするのに対して、「すでに」は「経験」のみを可能とすることを主張した。なぜなら、「すでに」は発話時または話し手が設定する時間的な区間とは無関係であるからである. こういった話し手が設定する時間的な区間を本論では「予期区間」と呼ぶこととした。この区間内に事態が実現するなら「もう」の適用が可能であるのに対して、区間外なら「もう」の適用が不可能となるということを例文を介して説明した。先行研究によると、「もう」が現れると、その事態が完了的な時制により描写されると説明されているため、アオリスト的な「タ形」との共起が不可能である。しかし、本論ではその共起を認めることとした。ただし、イタリア語の分析（遠過去形と「già」の共起）からわかったように、副詞の意味が異なるため、それにより解釈も異なり、上記の「経験」という解釈が生じる。このように、「完了的タ形」も「アオリスト的タ形」も「もう」と共起できるが、同じ解釈は生じないという相違が存在している。「アオリスト的タ形」と「もう」の共起が可能であるということは「すでに」との共起からも確認できた。まとめると、「もう」は客観的な解釈と主観的な解釈を可能とする副詞であるが、「すでに」はその客観的な解釈を可能とすると言える。また、その解釈は動詞自体の性質によるものでもあると主張した。なぜなら、「反復可能動詞」と「反復不可能動詞」が可能とする解釈は同じではないからである。主に例として取り上げたのは「来る」「亡くなる」「卒業する」という三つの動詞であり、一つ目は「反復可能動詞」、二つ目は「反復不可能動詞」、三つ目は「前提による反復可能動詞」という枠に属している代表的な動詞である。この区別により、副詞との共起から生じる副次的な解釈が明らかになる。まとめると、一つ目の場合、両方の解釈が可能であるのに対して、二つ目の場合、「経験」の解釈は不可能である。それとはまた異なり、三つ目の場合、両方の解釈を可能とするが、それは話し手がどの前提に基づいて話しているかによるものである。ただし、この基本的な解釈と副次的な解釈は「もう」のみにおける解釈ではなく、「すでに」もそれを表すが、「すでに」は「副次的解釈」として「経験」のみを可能とする。そのため、「すでに」が用いられると生じる解釈が異なってくる。

第五章においてはイタリア語における時制と時間を表す副詞の共起に関しても述べ、日本語の「もう」と「すでに」に対応する「già」と「ormai」を取り上げたが、これらはどの場面においても対応する副詞であるとは言えない。特に、「すでに」と「ormai」は異なる用法を認める副詞であると明らかになった。また、イタリア語の場合、副詞との共起における解釈という点に関しても複合時制と単純時制の区別が重要な点であるとわかった。なぜなら、一般的には「完成相」と「未完成相」を表す時制によってその解釈が異なるとされているが、「完成相」に属している「近過去形」「大過去形」「遠過去形」による解釈を考察すると、「遠過去形」が可能とする解釈は異なると言えるからである。というのも、遠過去形は他の時制とは異なり、「経験」という解釈のみを可能とするからである。このように、「完成相」に属している時制を「複合時制」と「単純時制」に分けるべきであると本論で主張した。なぜなら、副詞との共起の点に関しては相違が現れるからである。この点に関しては、つまり副詞との共起による解釈、イタリア語の遠過去形は日本語の「アオリスト的タ形」と共通点を持っていると言える。ただし、本論はアオリスト的な時制よりは完了的な時制に着目したため、イタリア語における完了的近過去形と日本語に

おける完了的タ形はどのような共通点または相違点をもっているかという疑問に焦点を当てた。

この対比から、両者の時制は発話時より前に起こった事態のことを表すことができるため、一時的な完了を表す時制であるが、イタリア語の近過去形とは異なり、「タ形」は未来的な用法、つまり「想像上の完了」を表す時制ではないことがわかった。よって、「タ形」は完了時制ではあるが、その完了は発話時と発話時以前における完了に限っていると言える。それとは異なり、「テイル形」は両方の完了を表すことを可能とする時制である。つまり、過去を表す時制として用いられるのみではなく、いくつかの例文から明らかになったように、発話時以降における完了も表すことができる。これは、第四章において述べたように、「テイ」は「以前」を表すためである。この点に関しては、「テイル形」と「テイタ形」は共通している時制であると言えるが、相違点として挙げられるのは「設定時点」の位置付けである。前者の場合、発話時において位置付けられているのに対して、後者の場合、それ以前に位置付けられているという相違が挙げられる。このように、「テイタ形」も完了を表す時制であるとわかり、イタリア語では複合時制である「大過去形」に相当する時制である。ただし、イタリア語の大過去形は単なる複合時制であるのではなく、「過去完了」を表す時制であるが、「完成相」と「未完成相」を表す時制といくつかの点で共通していると第六章において述べた。

第六章では、大過去形における代表的な用法を表す例文に加えて非文であるように感じられるものも挙げた。その際、なぜ認められる場合もあるかということに関して論じた。重要な点として取り上げたのは「時間的位置付け要素」「時間的投錨」「設定時点」の有無であり、どのように区別すればよいかについても述べたが、主に対象としたのは設定時点が「非明示的」である場合である。なぜなら、大過去形は基本的に他の過去における時点に対する先行性を表す機能を果たしている時制であるが、その先行性は常に明示されている時点に対する先行性を表すとは限らないことがわかったからである。このように、大過去形により描写された事態は何を基準にしているかという情報が明らかでない場合もある。これは、大過去形が複合時制であるということによるものである。なぜなら、複合時制は当該事態を時間軸においてどこに位置付けるかという情報よりは話し手の視点を示す時制であるからである。大過去形も複合時制であるため、近過去形と同様にどのような「完了性」を表すかという点に関して述べた。言うまでもなく、大過去形と近過去形が表す完了性は同じものではなく、大過去形が表すのは「compiutezza antecedente（過去完了）」と本論で呼ぶところのものである。この場合、先行性は当然過去において位置付けられている設定時点に対する先行性を表す。同様に、日本語における「テイタ形」も同じ機能を果たしている時制であるが、「テイタ形」は「完了」以外に「継続」または「同時」を表す機能ももっている時制である。どのようにその二つの機能を区別すればよいかという点を第八章において検討した。単文ではなく、複文における「テイタ形」の用法はより複雑であり、特に従属節における用法は特徴的であると言える。

本論では、単文だけでなく、複文も対象となっているため、主節と従属節における時制の相関関係に関しても論じてきた。様々な例文を挙げた結果、節を種類に分けるべきであるということがわかり、本論は補足節と関係節（名詞修飾節）を主に対象とすることとした。前者の場合、従属節と主節における時制が関連しているのに対して後者の場合、独立している文として解釈すればよいということがわかったが、いくつかの例文を介して明らかになったように、その動詞の性質による制限もあり、解釈が異なる場合も存在している。特に、「テイタ形」は二つの異なる用法を可能とするため、節の種類によって従属節における「テイタ形」の解釈が異なることが明らかになった。また、副詞の有無も解釈をするのに重要な点であることがわかった。このため、節を種類に分けるべきであると本論で主張したが、同じ節であるにも関わらず解釈が異なる場合もあるため、動詞の性質による分析もすべきであると考える。日本語の「テイタ形」は完了のみではなく、進行も表す時制であると述べたが、この用法はイタリア語の「半過去形」が可能とする用法である。ただし、「テイタ形」と「半過去形」は常に同じ文脈において適用することができるわけではなく、ある点において異なっていると言える。まず、半過去形は必ず「時間的投錨」として捉えられる時点を必要とする時制であり、それがないと文・発言は不完全であるように感じられる。このことは「完成相」との主な相違点であるとも言える。第七章では、半過去形におけるアスペクト的な三つの種類、つまり「進行的」「習慣的」「継続的」に関する相違点に関しても例文を挙げながら述べたが、要点として挙げたのは半過去形による「不定性」と複文におけ

る半過去形の適用である。この際にも、補足節と関係節を明確に分けるべきであると主張した。なぜなら、それにより時制の適用とその解釈が異なるからである。

最後に、イタリア語の半過去形と「テイタ形」を比較すると、以下のことが明らかになった。半過去形は過去における同時性を表す時制であるが、「テイタ形」は常にその用法を可能とするとは限らない。なぜなら、日本語の場合、その機能を果たしているのは「テイル形」だからである。このため、過去における事態であるにも関わらず非過去形の適用が認められる。よって、基準となる時点が同じではないと言える。本論は、「テイタ形」を検討する際に、名詞修飾節における用法を主に対象とした。この分析から、例文において用いられた動詞によって基準となる時点がときには発話時であるのに対して、ときには主節の動詞であるという相違が明らかになったためこの相違が動詞の性質によるものであるということについて論じた。ただし、取り上げられた動詞がすべて継続動詞であるため、別の区別が必要であるとわかった。その区別は、イタリア語の分析から明らかになったように、「結果動詞」と「持続動詞」の区別である。それに加えて、前者は目的語があるためtelic動詞という下位分類に属していると述べた。

以上、イタリア語においても日本語においても動詞を結果動詞（telic動詞）と持続動詞に分けるとその相違が明確になると言える。この点に関して主な相違点として挙げているのは、その事態が時間的に限られるか否かということである。つまり、telic動詞は時間的に限られる事態を表す動詞であるため、その過程の中における一点または一瞬を捉えることが可能であり、その一点が基準となって主節の事態はそれとの同時性を表すことができる。このため、この場合には従属節と主節は関連していることとなる。それとは異なり、持続動詞の場合、時間的に限られる事態を表さないため、その過程の中における一点を捉えることが不可能である。よって、主節における事態はどの時点に基づいて同時性を表せばよいかが曖昧である。このため、主節と従属節が関連していないと提案できる。

今後の課題

本論ではイタリア語と日本語における過去を表す時制の特徴に関して論じた。比較をすることによってこの時制のあいだにどのような共通点または相違点が存在しているかが明らかになった。イタリア語の場合においても日本語の場合においても完成相と未完成相を表す時制に関して論じたが、主に完成相を表す時制に着目した。この対比の結果をもとにして今後の課題として挙げられるのは次の二つの課題である。一つ目は、未完成相を表す時制と時間を表す副詞の共起である。本論は近過去形・遠過去形と「タ形」・「テイル形」の相関関係とその様々な用法を明らかにしたが、本論は時制のみではなく副詞も対象とした。具体的に、時間を表す副詞とその時制の共起に関して論じたが、扱われた時制は主に完成相を表す時制である。つまり、本論では半過去形と副詞の共起はどのような解釈を可能とするか、またどのような制約があるかということに関して触れていない。大過去形との共起を表す例文は挙げられているが、単なる引用であり、その説明は不十分である。さらに、日本語の「テイタ形」との共起に関しても触れていない。そのため、今後の課題として挙げられるのは未完成相を表す時制とその副詞の共起である。また、もう一つの課題は複文における「テイタ形」の用法である。なぜなら、本論ではイタリア語の半過去形と大過去形とそれに対応する「テイタ形」に関して論じたが、まだ触れていない用法があるからである。そのため、この分析も今後の課題とする。本論は単文も複文も扱ったが、複文に関してはより詳しい分析が必要であり、特に複文における「テイタ形」の用法はより詳しく分析すべきである。さらに、「テイタ形」の場合、用いられた動詞の性質が解釈において大きな影響を与えているようであるため、本論において触れていない節の種類と動詞の分類に関しても論じるべきである。このように、「テイタ形」の用法に対する分析を広げるのが今後の目的であるが、それに加えて日本語の「テイタ形」とイタリア語の半過去形と大過去形の相関関係もより詳しく分析することも今後の目的である。以上、今後の課題が二つであり、両方とも未完成相を表す時制を中心としているものである。

参考文献

アッター―ニーポン・馬（2002）「北海道大学大学院国際公報メディア研究科修士課程」、比較日本語論演習期末レポート
庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』第4号
井上優（2001）「現代日本語の「た」」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房
岩崎卓（2000）「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19巻5号
奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって（上）」『教育国語』53巻
奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（下）」『教育国語』54巻
金水敏（1998）「いわゆる‘ムードの「タ」’について―状態性との関連から―」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」「金田一晴彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
金田一晴彦（1955）「日本語のテンスとアスペクト」「金田一晴彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』」むぎ書房
金水敏、工藤真由美、沼田善子（2000）「時·否定と取り立て」岩波書店
工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻第4号
工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学学会編『ことばの科学3』むぎ書房
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
江田すみれ（2011）「「ている」の論理的な文章中での使われ方―「効力持続」「長期的な動作継続」を重点にして―」『国立国語研究所論集』第2号
江田すみれ（2013）『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』くろしお出版
坂本鉄男（1979,2009）『現代イタリア文法』白水社
ザトラウスキー、ポリー（1983）「プラグマティックから見た日本語の動詞のアスペクト―特に否定形の場合において―」『言語学論叢』筑波大学
鈴木重幸（1979）「現代日本語動詞のテンス―終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい―」言語学研究会編1979『言語の研究』むぎ書房
須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」「金田一晴彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房」
高橋太郎（国立国語研究所）（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
谷口秀治（1997）「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92号
田村早苗（2013）『認識視点と因果』くろしお出版
寺村秀夫（1971）「‘タ’の意味と機能」『言語学と日本語問題』くろしお出版（寺村1984）に再録）
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版
長神悟（2003）『イタリア語のABC』白水社
仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
仁田義雄（2009）『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房

藤井正 （1966） 「「動詞＋ている」の意味」「金田一晴彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房」
町田健（1989）『日本語の時制とアスペクト』アルク
三原健一（1992）『時制解釈と統語現』 くろしお出版
三原健一（1997）「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『ウォイスとアスペクト』研究社
山村ひろみ（2003）「日本語の「タ」とスペイン語におけるその対応形式について：日本語の名詞述語文における「タ」とスペイン語におけるその対応形式を中心として」『九州大学言語文文化究』第18号
山村ひろみ（2012）「現代日本語のテンス・アスペクトと否定：過去の「―シタ？」と「―シナカッタ」／「―シテイナイ」／「―シナイ」」『九州大学言語科学』第47号
山本雅子（2007）「副詞表現の認知的意味機能「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」」『愛知大学言語と文化』第16号
吉川武時（1973）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」「金田一晴彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房」

Abusch D. (1997), *Sequence of Tense and Temporal De Re* – Linguistics and Philosophy 20, 1-50
Arosio F. (2004), *Temporal Homogeneity and the Italian Perfect*. In A. Alexiadou, M. Rathert, & A. Von Stechow (a cura di), Perfect Explorations (pp. 37-66). Berlin, New York : Mouton de Gruyter.
Barense D. D. (1980), *Tense Structure and Reference: a First-order Non-modal Analysis* – Indiana Univ. Linguistics Club.
Bertinetto P. M. (1986), *Tempo, Aspetto e Azione nel verbo italiano: l'indicativo* - Accademia della Crusca, Firenze
Bertinetto P.M. (1982), *Intrinsic and extrinsic temporal references. On restricting the notion of 'reference time'* - Journal of Italian Linguistics 71 - 108
Bertinetto P.M., Bianchi V. (1996), *Temporal adverbs and the notion of perspective point* - Semantyka a konfrontacja jezykowa, 1 - SOW, Warszawa
Bertinetto P.M. (1997), *Il dominio tempo-aspettuale : demarcazioni, intersezioni, contrasti* - Rosenberg&Sellier linguistica, Torino
Bonomi A., Zucchi A. (2001), *Tempo e Linguaggio : introduzione alla semantica del tempo e dell'aspetto verbale* - Bruno Mondadori, Milano
Borgato et al.(1976), *Aspetto verbale e Aktionsart in italiano e tedesco* – Lingua e contesto, 2:65-197
Castelnovo W. (1993), *Piani temporali e slittamenti di prospettiva* – Lingua e Stile 3, 321-347
Comrie B. (1976), *Aspect An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems* – Cambridge University Press
Comrie B. (1985), *Tense* - Cambridge University Press
Dardano M., Trifone P. (1985), *La Lingua Italiana* - Zanichelli, Bologna
Fornaciari R. (1974), *Sintassi italiana dell'uso moderno* - Sansoni, Firenze
Giorgi A. (2002), *Per una teoria dell'interpretazione temporale delle frasi subordinate* - Università degli Studi di Venezia
Giorgi A. (2008), *Crosslinguistic variation and syntax of tense* - University of Venice - Working Papers in Linguistics Vol. 18
Giorgi A. (2009), *A Grammar of Italian Sequence of Tense* - University of Venice - Working Papers in Linguistics Vol. 19
Giorgi A. (2010), *About the Speaker : Towards a Syntax of Indexicality* - Oxford Studies in Theoretical Linguistics
Giorgi A., Pianesi F. (2002), *Sequence of Tense and Speaker's Point of View : Evidence from the Imperfect* - University of Venice Vol. 12
Higginbotham J. (1993), *Why is Sequence of Tense obligatory?* - University of Oxford
Klum A.(1961), *Verbe et adverbe. Etude sur le systèm verbal indicatif et sur le système de certains adverbes de temps à la lumière des relations verbo-adverbiales dans la prose du francais contemporain*, Stockholm
Leech G.N. (1987), *Towards a Semantic Description of English,* London
Leone A. (1986), *Complementi di grammatica italiana* - Sansoni, Firenze
Mellet S. (1980), *Le Présent <historique> ou <de narration>* - L'information grammaticale, 4
Monaco, De Bernardinis, Sorci (1993) *Lingua latina*、Palumbo editore
Mortara Garavelli B. (1985), *La parola d'altri* – Sellerio, Palermo
Ogihara T. (1995), *Double-Access Sentences and Reference to States* – Natural Language Sematics 3, 177-210

Ogihara T. (1996), *Tense, Attitude and Scope* – Dordrecht: Kluwer Academic Press
Quirk et al. (1985), *A comprehensive grammar of the English language* – Longman, London
Reichenbach H. (1966), *Elements of symbolic logic* - Free Press, New York
Renzi L., Salvi g. Cardinaletti A. (1991), *Grande grammatica italiana di consultazione* - Il Mulino, Bologna
Ribotta P. (1998), *Ormai ed espressioni di tempo affini: considerazioni sintattiche e semantiche* – Studi di grammatica italiana, 17 (1998)
Serianni L. (2010), *Grammatica italiana*, UTET Università
Squartini M., Bertinetto P.M. (1996), *La distribuzione del Perfetto Semplice e del Perfetto Composto nelle diverse varietà di italiano* - Romance Philology, Volume XLIX, No.4
Vanelli L., Salvi G. (2004), *Nuova grammatica italiana* - il Mulino, Bologna
Vegnaduzzo S. (1997), *Il piuccheperfetto, discorso indiretto e presupposizione* – Rivista di linguistica vol.9
Weinrich H. (1964, 1973), *Le Temps* - Seuil - 'Tempus'
Wolfson N. (1979), *The conversational historical present alternation*, Language, 55:168-82
Zampese E. (2010), *Un avverbio (a suo modo) scalare? Sulla semantica di it. or(a)mai*, in Approches de la scalarité